
ハイスクールD×D 始まりの龍

ジェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D 始まりの龍

【Nコード】

N6273U

【作者名】

ジェイ

【あらすじ】

星と共に生まれ護る存在。始まりの龍

かのもの関わることで新たな物語がつむがれる

始まり（前書き）

どもじえいです。

初めての投稿です。

なんか衝動的に書いてしまった作品ですのでただの自己満足作品です。

楽しめるよう頑張ってみたいと思います

始まり

〃 君は僕だ〃

何も無い空間に声が響く

「そう、汝は我だ」

何も無い空間に声が反る

〃 僕らもうすぐ生まれる、その時僕はこの星に、君は……〃

「我は護ろう、我は破壊しよう、我は愛そう、我は嫌悪しよう、我は……」

「我は汝にできぬ全てをなし、我は我の覇を唱えよう……!」

これは全ての始まり

〃 そう、それでいい。

君は僕だ、だけど僕は僕で君は君だ。

君は好きなようにすればいい

星（僕）を護り、害を滅ぼし、生まれてくるものを愛し、そして嫌悪し、僕に出来ないことをしてくれ

僕は創り造り作り、ただそこに有るだけだから

星の願い

「汝はただ創造せよ、後は我がやる」

星の片割れの決意

「僕はもうすぐで形ができて話せなくなる………後はよろしくね」

「任せよ、ではその時まで眠るとするか」

新たな物語が始まる。

始まり（後書き）

原作とはまだ絡みません。あんまり時間はかけないようにしたいです？

出会い（前書き）

二話目の投稿です。

書き方が一話とはちがいますがお気になさらず？

あと自分的にはちょっと長いです。

出会い

S i d e ????

我が生まれてから時がたった。

数多のものが私の片割れより生み出された。

今私の視界に映るこの自然然り、生物然りだ。

後、知能があるものも産まれおちたな。

あやつらは神やら悪魔やら言つらしいが我とは姿がまるで違つな。

さてここで我について話をしようか。

まず私の姿だが神や悪魔は我を指して『ドラゴン』または『龍』などと言っていたな。

大きな身体に鋭い牙や爪、太く長い腕に頑強な脚、尾もあり身体は頑丈な鱗に覆われておる。

そして我を象徴とするように大きな翼が背にある。

後私は生物上は雄らしい。

なんでも種族を存続させるために雄と雌で子をなすらしい。

ただ我と同じ種族は存在せんから我には関係なかつた。

まあ我に関してはこんなものだろう。

ではまた世界を廻るとするか。

龍??? side out

???? Side

私は一応神族の女です。

何故一応なのかと言うと私の力にあります。

私は力が他の人より強すぎで力が制御しきれません。

そして身体も制御できてない力に耐えられるように大きくなりました。

ええそりゃもう大きいですよ？

なんせ他の神が私の手のひらに乗れるくらいなんですから？

力が制御できれば身体も自然と普通になるんでしょうけど、今のままじゃ危ないからって神の国からおいだされました(泣)

そして訓練を初めてから気の遠くなり時間が過ぎて今にいたります。

ああ、このまま私は結婚出来ず、子供も出来ぬまま生涯を終えるのでしょうか？

容姿やスタイルには自身あるのに！！

自分で言うのもなんですが私は美人です！

パッチリ二重の大きな瞳に長いまつ毛、高い鼻筋、にぶっくりしたバランス良く健康的な唇。

卵型の輪郭にキレイな肌。

髪は金髪ロングで少しウェーブがかかっています。

そして何より私のスタイルです。

出るところはしっかりでて引っ込むところは引っ込んでます。

友人の推定ですが普通の人だとスリーサイズは上から98・54・88だそうです。

もうバインバインでボンキュッボンですよ！！

ああああそんな呆れたような目で見ないで下さい???

「…雌よ、汝が言うち ち とはなんだ？」

呆れたのではなくわからなかったようです。

あの視線は私の勘違いだったようですね？

「それは男性の生殖器のことです。他にも……って何言わせるんですか！……！」

すると彼はこんどこそ呆れた目付きになり

「…汝は何をいきなり聞いているのか」と言って

「これのことか？」

身体に上手くしまいこまれてたそれをさらけだしました。

……………デカッ！……！

私もびつくりです！

でもこれなら、と思った次の瞬間口が動いてました。

「私、女神ミリアといいます。未永くよろしくお願いいたします！

！……！……！」

出会い（後書き）

いかがでしたか？

主人公はBOF4のカイザードラゴンがモデル

ヒロインはBOFのボスの人です。

まあ設定に関してはそういうものだと思って下さい

名前(前書き)

かいてて恥ずかしいな
つーか微妙？

名前

龍?????side

この雌、ミリアと言うのか。

ミリアが言うに我のものになるらしいな

「ミリアよ、汝は我のものになるで異論はないな？」

「はいっ！！頑張つて元気な子をたくさん産みます！！！」

んっ？元気な子？

「汝は我とは種族が違う。なのに何故我と子がなせる？」

「知つてて声をお掛けになつたのではないのですか？」

何の事だ？

「ご存知ないようですね。なら説明しますね」

「私たち神や悪魔が作っている“人”や他の生物は基本的に同族、または近い種族でしか交配できませんが、神族はどんな種族とも子が成せるんです！！」

ほぅ、そんな特徴があつたのか。

我の片割れは中々に粹なことをしてくれる。

「だから私なら貴方の子を産めます！と言いますか私は多分貴方しかいないんですぅぅぅ！！！！！！！！！！」

まあそうであろう。ミリアほどの大きさだと相手が我以外いないくらい容易に創造つく

「よかるう、今までは同族などいなくて興味は無かったが、汝がいのなら話は別だ。

それに先にも言っているが我は汝が欲しいからな」

そう我が言つとミリアは「／／／」顔を赤くしだした。

先と同じことを言つて何故いま顔を赤らめる？

龍???? side out

ミリア side

………はっ!!

さっきは驚愕と感動のあまり聞き流してましたが改めて聞くと凄く恥ずかしいです。

と、とにかくまずは名前を伺いましょう。

「私を貰っていただけなら喜んで貴方のものになります。

それでは改めまして、私は神族の女神ミリアと申します。

貴方のお名前を教えてくださいませんか？」

「無いぞ」

へっ？

無い？

「今まで我を個体の名で呼ぶ必要など無かったのにな」

ああなるほど、この方の種族はこの方しかいないのですね。

「まあ汝ら神や悪魔などからは『ドラゴン』や『龍』などと呼ばれているな、後我の存在で言うなら星の片割れか」

んっ？

「星の片割れとはどんな意味ですか？」

「そのままの意味だ、我は星と共に生まれこの星を護り、害となるものを滅し、生まれゆくものを愛し、嫌悪し、星に出来ぬことをなすもの。」

我は星であり星は我である」

私もの凄い方選ばれた？

「まあ後これは語らなくても汝にはあまり関係ないが我は…」

「我の覇道を歩む」

.....はっ！

また意識がとんでました？

何かカツコイイです。何がって訳ではないのですが…と、それより「霸道と言うことは貴方がこの世界を治めるのですか？」

この方の力なら出きるでしょうけど…

「そんなものに興味はない、それは神や悪魔がやればいい。

我の覇はこの星を護り、この星に生きるものを我が力にて外敵、つまりは流星や星を壊そうとする愚か者などを排除することだ」

なるほど

「それだと覇者というより守護者ですね」

「我からすれば同じだ、力をもってことを為すのだからな
やっぱりカッコイイです。」

こんな方に名前がないなんておかしいです。

それにこれから私がたくさん子を産むんですからやっぱり名前は必要ですね

「あの、貴方のお名前私がつけてもいいですか？」

彼は驚いた様子を見せたあと

ふつと微笑んで

「頼む」

と言ってくれました。

そして告げました

「星を守護し覇を唱えるもの『カイザードラゴン 霸王龍フォウル』これが貴方の名前
です」

名前（後書き）

霸道の意味とかあんまし気にしないで下さい。

あと主人公の名前とかも適当なんで気にしないで下さい

子作り（前書き）

やばい、俺暴走してるよ。
ギリギリ大丈夫だよね？

子作り

フオウル side

『霸王龍フオウル』か……………

しっくりくると言うことは我はこの名を気に入ったということか。

「ミリアよ、この名ありがたくいただこう。今日から我はフオウルだ」

ミリアはペアと顔を輝かせ

「はいっ！」と綺麗な笑みをつかべた。

フオウル side out

そして少し時間がたちフオウルとミリアは互いのことをよく話、よく知り、信頼しあい、いつも一緒にいた。

そしてミリアはあることを行動に移そうとしている

それは… KO・ZU・KU・RI!!!!!!!!!!!!!!

そうミリアの長年の夢である。

今までは何だかんだで恥ずかしくて行動にうつせなかったし、やはり自分より大きな存在はフオウル以外いなかった。なので少なからず恐怖もあったのだ。

だがやっとな決心が固まったようだ。

「とりあえず水あびをして身体を清めて心を落ち着けましょう」

フオウルside

最近あまり世界を回っていないな
などと考えていた

まあいざとなれば我がミリアを抱き上げて飛べば良い話だし問題はなかるう

そんなことを考えているとミリアが近寄ってくる気配がしたのでそちらを向くと……………

「……………汝は何故何も着ていないのだ」

ミリアは全裸だった

顔を真っ赤に染めながら

「あ、あああ貴方だって何も着ていないでしょう?」

などと言ってきおった

「汝はいつも何か着ていたではないか、まあ我としては汝のその美しいからだを見れるのだからむしろ良いのだがな」

我、我はなんの衝撃をうけている!?

ミリアを触るたびに、声を聞いたたびに高ぶるこれはなんなのだっ!
!!!!!!

そして普段は邪魔なのでしまつてある私の性器がそそりたっている
ではないか!!!!!!

困惑しつつも揉むのは辞めず我はミリアに夢中になっていた。

そして

「フオウル」

ミリアが我の名を呼び

「わ、私も準備ができました。き、きてくださいノノノノ」

「あと、わ、私はその初めてなので、そ、その、や、やさしく、し
て下さい、ねノノノノノノ」

そして我はまさしく獣になった

フオウルside out

ミリアSide

恥ずかしいけど全裸でフオウルのもとへ行くところやら彼もやる気
になってくれたようだ。

そして彼が私の胸に触れた瞬間「ひえっ!」

あほっぽい声がでた

ば恥ずかしいようノノノノノノノ

しかし彼は何か衝撃をうけている。

彼の指が動かたたびに私は

「はうっ！ひうっ！ふいうっ！へうっ！ほうっ！」

馬鹿全開な声です（泣）

彼は胸に夢中になりつつも何かしたそうにしています。

察した私は彼に

「大丈夫です。私の身体は力に耐えられたために大きく頑丈ですからと恥ずかしいけれど伝えました。

決心した彼は私の乳首に指を埋めました。

彼にも衝撃が走ったようですがそれは私も同様で思わず「いや〜ん」と出ました。

その後から彼は夢中に胸をいじりまわし、気づけば彼の性器が剥き出しになっていて、私もすでに準備ができていました。

だから

「フオウル」

彼の名を呼び

「わ、私も準備ができました。き、きてください／＼／＼」

「あと、わ、私はその初めてなので、そ、その、や、やさしく、して下さい、ね／＼／＼／＼」

彼が本当の獣になりました／＼／＼／

ミア side out

フオウル side

数日間、我はミアを求め続けミアも最初こそ痛そうにしていたが途中から求めてきた。

……………むしろ後半はミアが離してくれなかった……………

まあとにかく我らは数日間の情事を終え今わ寄り添って寝ている。

我はミリアと乳房に骨抜きなのであろう。

今後ミリアなくして我が未来はあり得ぬ。

この日を境に我の護るもの一番上にミリアの名が上がったのは言うまでもない

フォウルside out

子作り（後書き）

うん、たぶん大丈夫。ギリギリR18じゃないはず。

でも悔いはない!!!

後次かその次くらいから原作のあのキャラをだして行くことかと

子供たち、そして決意（前書き）

今回は説明っぽい。

なんか書くの大変だった。

子供たち、そして決意

フオウルside

あの日からかなりの時間がたった。

我らは暇があれば互いに求めていた。

……むしろ求めてないときがあつたであろうか……

まあそれはさておき我らにもたくさの子ができた。

ドラゴンが一番多く生まれたが、なかにはミリアの血をついだのか巨人なども生まれていた。

少々驚いたのが龍人だ。

普段は神や悪魔が作った人のような姿をしているが何故か龍に変身することができるようだ。

まあ我とミリアの子だ、みな強い子たちだし問題はなかつよ。

ただオーフィスとグレートレッドが心配だ。

今はオーフィスが狭間についてるのんびりしているがグレートレッドも行きたくそうにしている。

こやつらは特に我とミリアの力をついでいるから暴れられでもしたら止めるのに一苦労だ

今はグレートレッドも飛ぶのが楽しいのか空を飛んではかりだが何分やつはデカイ。

生まれてすぐにミリアより大きくなり、また我よりも大きい。

そしてまだ成長が止まらないのだから恐ろしい。

本当そのうちオーフィスと喧嘩しないか不安である。

まあさておき他のドラゴンたちもやはり基本的にみな力がつよい。ドライグやアルビオン、タンニーン、ウーロン、ブリトラなど名前を出したらきりがない。

ただ問題がある。

ドライグとアルビオンはいつも喧嘩ばかりだ。

お互いに好敵手な関係なのだろうが奴らが暴れると被害が凄いのだ。オーフィス達ほどではなくても近い力もっているから暴れると地形が変わる。

冗談でなくかわる。

山が消えたのも一つや二つではない。

星の守護を司るものとしては見過ごせないので叱ったり、時には心を鬼にして我の覇によって鎮圧するのだが一行に変わらない。

全く頭の痛い話である。

少しは龍人のリュウとバルバロイを見習って欲しいものだ。

あやつら龍人はあまり生まれなかつたせいか仲がみなよいし、穏やかな質だ。

いざ闘いになれば凄まじい戦闘力をもっているが基本的に争いを好まない。

一番手のかからない子達である。

巨人の子達はミリアの血を良くついでいる。

所謂神に近いのだ。

神族のように知能が高く、さらに知識欲も凄い。

さらに我の血が入ったせいか身体能力も高く、特にスルトは格別能

力が凄まじい。
力だけならドライブなみだと思われるぞ？

まあ今のところ色々学ぶことや技術の発展に力を入れている ようだが。

今我とミリアの住まいである神殿もスルトを筆頭に巨人の子達が建ててくれたものである。

一番我らになついて色々やってくれる子達だ。

まあ子達はこんなものだろう。

話しは変わり我とミリアであるが、相変わらずである。

何が相変わらずかというと、まあ分かるであろう？

ようは子でできた以外特に変わりはない。

神や悪魔、妖怪、亜人などは少々小競り合いがあるが我が介入するほどではないし、奴等もそれほど愚かではないと言っことだ。

概ね平和である。

だが最近嫌な予感がする。

我はこの星の片割れであるからして、深層意識では星と繋がっている。

星が何かを感じとっているやもしれぬ。

だが何があるうと我は護りきろう!!

我には護るものが増えた。

我には弱点が増えた。

だからなんだ我が覇はそれごときでどうにか成る程柔なものではない!!!

霸王とは力をもってことをなすもの!

ミアより名付けられてより『霸王龍』を名乗り続けてきたのだ。

名付けてくれたミアのためにも、我はどのような時にも霸王を唱えよう!!!

フォーウルside out

子供たち、そして決意（後書き）

次は急展開

終わりそして始まり（前書き）

どうも急展開です。

原作近づいてきましたよ〜

終わりそして始まり

ミリア side

嫌な予感がします。

何がとは言えませんがただ予感がするのです。

フォウルと抱きあって以降、私も少しですが星と繋がりができたように前より星に関わるときの直感が働くようになりました。

今までは微々たるもので何か感じるたびにフォウルが出向きすぐに消えていたのですが今回は凄く強烈です。

フォウルも最近まで落ち着きが無かったようですが何か決意したようにその時に備えているようです。

ああ、どうか何事もなくそして今の幸せな時が続きますように。

ミリア side out

フォウル side

「…来る！」

予感がしてから数日がたったころ、空から異様な力を感じた。どうやらミリアも感じたようで我を不安そうに見つめている。

「フオウル…」

「安ずるな…」

汝も我が子達もこの星も我が護りぬく」

そう言つてミリアを見つめた。

ミリアもまだ完全ではないが不安も薄れたようすでいつものような笑顔
顔を浮かべこう言った。

「…いつてらっしゃい。」

無事に帰つてきて下さい。待ってますから」

その言葉だけで十分。

我は力がみなぎってくるのを感じた

そして…

「では、いつてくる」

そして我は飛び立った。

だいが飛んで来たな

何がくるかわからんが我が覇にて全てを駆逐してくれようぞ……！！

そしてその時がきた

落ちてきたのは石。
大きな大きな石である。

そしてそれは一つではない。

隕石の流星である。

それも一つ一つが星に甚大なダメージを与えるほどの！

私の目に大きな石が見えた瞬間、私は口からブレスを吐き石を粉々に粉碎した。

「一つたりともここは通さぬ！
汝らに意思がなかるうが関係ない！

我が守護するものに傷つけようとする無謀なる流星よ、我が覇道の礎にしてくれるわ！！！！！！」

そして私の闘いが始まった。

あれからどれだけ隕石を粉碎したか。

100くらいまで数えていたがその先から面倒になった。

我は防ぎきった

だが、私の身体もボロボロで正直最後が近いようだ。

それでも、今事切れるわけにはいかない！

ミアアが待っているのだから！！！！！！

フオウルside out

Other side

フオウルが独り闘いを始めたとき、数多な存在が空を見上げた。そして『霸王龍』の子達は何かを感じ彼の神殿に集まっていた。その数は千は優に越えるであろう。

「母よ何がおきている？」

ドライグがミアアに尋ねる。

「フオウルが…」

貴方達の父が闘っています。」

「父上が！？」

一体何が起きているのですか！？」

スルトが驚いたように聞いた。

Other side out

ミリアSide

あれからどれだけ時間がたったでしょうか。
まだ一秒にも感じられるし1日にも感じられる。

子供達にはああ言いましたが私だって彼のもとへ行きたい!!!

でも私の力をもってしても足りない。

オフィスやグレートレッドならあるいはと言う程度なのに行っても無駄死にするだけです。

それでも彼と一緒にいたい!!!!!!

でもそれは彼の意思を踏みにじってしまう……

それに私は彼に言ったのです。

「待ってます」

と……

だから私は待っています。フォウルが……
私の優しい霸王龍が全てを終えて帰ってくるのを。

そして空からポロポロになった彼が降りてきた。

ミア aside out

フオウル Side

ようやく帰ってこれたな……………

行くときは一瞬だったのに戻るのは永遠に感じられた。

……………それほどに我は力を消費していて、残りの時間が少ないの
だろう。

少しいそがねば…

やっとの思いでミアアのもとへ着けばそこにはミアアと各地へ散っ
ていた我が子達が出迎えてくれた。

「フオウル!」「父よ!」「無事ですか!?!」「父上!」

と、様々な声で溢れた。

嬉しいが喜んでいられる時間がないな…

「只今戻った。流星は我が滅した。
もう心配いらん」

それを聞いた子達は「流石父だ!」「俺の親なのだから当然!」「
母様の言葉どうりだね」など我やミアアを讃えたり、自慢気に答え

やはり勘違いしているようだ。

「我は星の片割れぞ？」

この星が滅ばない限り我は滅びん。」

「次に産まれるのは何時になるかは分からんが、我は我として。

だが新たな命としてまた我が覇をとなえようぞ」

我はそう言い笑った。

そして少し不安になりながら

「ミアアよ

我が次に産まれまた出会えたら……………一緒に居てくれるか？」

「当たり前です！」

私の好きな綺麗な笑顔で答えてくれた。

「さて、我が子達よ
汝らにも伝えておかねばな」

「我と同じ姿をもつ者達よ！

我は霸王龍！

覇は力！力は覇なり！

故に示せ！

ドラゴンは、龍は力の象徴であると!」

「ミリアと同じ姿をもつ者達よ!

汝らは学べ! 築け!

汝らの国を!

汝らのだけの技術

汝らはそれだけの力がある」

「そして我とミリアの姿を持ちしもの達よ!

この地を護り伝えよ!

ここはドラグニール、我が眠り、目覚める場所。

我霸王龍、星襲いし流星ことごとくを葬り眠りにつかん。

我目覚めるとき夢より現れ光の柱が降り注ぐ

護り伝えよ龍の民よ!」

そうして我は眠りについた。

終わりそして始まり（後書き）

内容大丈夫かな？

あのおとで（前書き）

速足です

あのあとで

ミリアside

彼が眠りについた。

彼をこの地で待ち続けようと思いましたが、一つあることを思いつきあした。

「彼が転生するのなら私もすればいいんです！」

幸い私は少しですが星と繋がりが有ります。

これを利用し私の力を注ぎ込めばフォウルと同じ時に生を受けられるはず。

場所は選べないでしょうが魂で私達は繋がりにあるのだからいずれ出会えるはず。

彼はここドラグニールに生まれてくるのだから私達の子達に伝えてもらえば彼も私を探してくれるはず。

そうと決まればさっそく行動です。

まず準備を済ませてそして次に目覚めるときは新たな命として私は存在します。

ミリアside out

Other side

それから少し時がたった。

神と悪魔は霸王龍の件をしり今後このようなことがないように結界を張るために天界、冥界をつくりそれぞれに大規模な結界をつくり地上、天界、冥界の三重の結界を張ることにした。

そして数多の時が過ぎた。

その間、神と悪魔が戦争したり、墮天使が勢力をもったり、オーフイスがグレートレッドに狭間から追い出されたり。はたまたキリストの神が死んだり、魔王が死んだりそりゃもう色々あった（適当じゃないよbyジエイ）

そして時はさらに流れドラグニールと冥界のとある貴族に新たな命が生まれようとしていた。

あのあとで（後書き）

後何話かで原作に突入したい！

新たな命（前書き）

進めます。

多少無理矢理かもしれないけど。

後々々におっぱいです。

新たな命

Other side

ドラグニール、それは始まりの龍を起源とした龍人『龍の民』の里である。

この里にはとある言い伝えがある。

我霸王龍、星襲いし流星ことごとくを葬り眠りにつかん。
我目覚めるとき夢より現れ光の柱が降り注ぐ

始まりの龍であり『霸王龍』が言い残したものであるとされている。

そしてその伝承が現実になろうとしていた。

Other side out

???Side

どうも俺の名前はリュウといいます。

いきなりですがリュウという名前はこのドラグニールの長い歴史の中でも俺を含めて五人しか居ません。

理由はかんたんで生まれた時龍の姿で人の時髪が青毛だとこの名がつけられるそうです。

リュウの名をもったものは誰もが偉業をなしたとされています。

何だかんだで俺も歴代最強とかいわれていて、『霸王龍』が一番近きものなんて呼ばれてる。

いや〜なんか照れちゃうよな〜。

だってさ『霸王龍』だよ？

俺ら龍人やドラゴンからしたら神様見たいな方だからね〜。

でも歴代最強なんて言われて俺もしかして霸王龍より強いんじゃないかね？とか思っていた時がありました。

俺の妻であるニーナが夢を見るまでは…

妻のニーナは龍人ではない。

有翼人の大女様だ。

何故他種族の大女様がここに？と思うかもしれんがまあ色々あったとだけ言っておこう。

そのニーナなのだが只今出産間近の状態である。

そしてニーナは昨夜、夢を見たそうだ。

なんでも

我目覚めるは霸王龍

星を喰らいて

星を護る

我が覇にて全てを滅ぼし全てを護ろう

我が名『霸王龍フオウル』

というらしい

最初は冗談かと思ったが、それはあり得ない。
何故ならニーナは伝承をまだ知らない。

つまりそう言うことだ。

このことは直ぐに族長たちに話したら皆喜んでいた。

もちろん俺だって嬉しいが反面不安でもある。

これから生まれるのは俺の子なのかそれとも『霸王龍』なのか……

.....

正直どうせっしていいのかわからないんだ.....

リュウside out

二ナSide

私がリュウとの子を授かり早10ヶ月。

いつ生まれてもおかしくない状態です。

そして私は夢をみました。

真っ白な空間に小さい光の珠が浮いていてその珠はこう言いました。

我目覚めるは霸王龍

星を喰らいて

星を護る

我が覇にて全てを滅ぼし全てを護ろう

なんなんでしょうか？

リュウに言ってみた所何か慌てて族長さんたちに今の話しをしに行きました。

その後から里は大騒ぎです。

いつも笑い声などたのしそうな声が聞こえてきます。

リュウになんてか聞いた所、私のみた夢がこの里の伝承と似ている
そうです。

なんでも始まりの龍にして『霸王龍』と呼ばれた方が復活されると
か。

成る程、リュウが不安そうにしている訳がわかりました。

どうせっしていいか分からないのですね。

全くバカなんだから。

どんな存在であれ私達の子供であることに変わらないのに…

そしてその時が来ました。

その日まだ昏間にも関わらず空から光が私に降り注ぎ私は光に飲み
込まれました。

「よくやったよ、ニーナ」

「はあはあはあ私の赤ちゃんは？」

「こちら」。

でも鳴かないですね…」

「ちよつと抱かせて下さい」

ニーナが抱上げると ムニイイ

鳴かなかった赤子がニーナの豊満な乳を揉んでいた。

『中々よき乳房をしているな母よ』ムニムニユムニムニ

なっ！赤子が喋った!？

いや、これはテレパシーか！

「あらあら、あんっ！気に入ってもらおうっ！て、はう！良かったわあん！…！こ、この子ひう！も、揉むのう、上手すぎひあんっ！

！…！」

ぬっ……………
羨ましい……………

って！

「貴方は『霸王籠』なのか!？」

っ！か手を離せ!

あんた本当に赤子かよ!？」

『いかにも我は『霸王龍』』

まあ今はただの子供よ…

そして何故離さねばならんのだ？

子が母の乳を求めるのは当然であろう？』ムニムニ

「そうよあん、子供がおっぱい好きひっ！な、なのは、あ、あ、当たり前まえ、よ」ムニムニ

「そうだけど母親を感じさせる子供なんて聞いたことないぞ…！！
っーかいつまで揉んでいる！？」

ニーナのおっぱいは俺のだ…！！！！」

『汝の言うことも分かるがそう言うな
母の乳は子のもでもあるのだし我がこうして母と触れ合うのは「
れが最後になるのだ…』ムニムニ

「これだけ言ってもやめないのかよ…

っーかどういう意味だ？」

懂れていた霸王龍がおっぱい好きとか…

なんかな

「そ、そうですよ。

ま、あつ！まる、ではう、いい、いなくなるあんっ、みたいじゃ、
な、ないですか！？」

そつだ！生まれたばかりで何を言つてる！
そして手を離せ！

『我は我の力と記憶を残し我の意識は消えて新たな我としての生ま
れかわる

故に最後なのだ』モミモミ

成る程な……………

ある意味当然か。

俺の不安はなくなったに等しいな。

てゆうーか手を離せ！

『そつだ、母よ願ひがあるのだがよろしいか？』モミモミ

まだ手を離さないのな……………

「な、なんでうう、すか？」

『乳を吸わせてくれ』モミモミ

「なっ！」

「あら、あ、改めてあう、言われると、は、恥ずかしいですねあう
っ！」

な、なんだと！？

揉むだけでは飽きたらず

『母よ、我にその名前を名付けてくれるのか?』

「だって大切な人からの贈り物なんでしょう?」

『……………感謝する』

霸王龍にも大切な人がいたんだな…

というか

「なんでニーナが知っているんだ?」

「陣痛が始まる前私光に包まれたんです。

その時にフォウルの記憶を少し見てしましまして」

そういうことか。

俺が納得しているとフォウルが尋ねてきた。

『して母よ。』

我に母乳をくれるのか?

少々空腹で出来ればすぐに欲しいのだが。

それに時間もあまりないようだしな』

……………ニーナ、そんな目で見なくてもわかっているよ。

ニーナは俺が頷くのを見てから言った。

「私はあなたのママなのだからそんなことお願いしなくてもいいんですよ」

笑顔で言っ

「じゃありユウ?」

「あなたに抱かれのはもちろん好きですよ？
ただフォウルはただ凄いです。
あんなの初めてです／＼／＼」

…………… やばい、死にたくなって来た。

息子に負ける父って…………… (泣)

『母よ美味であった。久々の乳だったゆえ少々張り切ってしまったわ』

なんだろ、スゲーなぐりたい。

「あらあら、私も良かったですよ。

ちなみにあなたの意識が無くなってもああなのですか？」

こらこら、何きいてるのさ

『そうであろうな、むしろ意識がない分加減がきかぬであろうな。』

…………… あれで抑えていただと！！！！

後ニーナ！そんな嬉しそうな顔をしないでくれっ！

マジ自信なくなるから！

『我は満足だ。

母よ本当に感謝する。

最後に我ができることをやり我は生まれかわろう』

「別にいいのですよ？」

『そもいかん。』

母は龍の民ではなからう？
父は龍人特有の力があるが母にはない。
故に我の加護を与える。』

そしてフオウルを中心に凄まじいドラゴンのオーラが吹き出した！

ああ、俺は始まりの龍に一番近きものとか言われていたけど、俺なんてこの方の足元にも及ばないんだ……………

そのドラゴンのオーラはニーナに絡みつき完全に一つになった。

『これで母は生半可なことでは傷はつかないであろう、ちなみに身体も龍の気が満ちているから劣化せんぞ』

劣化しない？

「つまりは？」

俺は聞き返し

『老けないということだ。』

これは龍人以上だぞ？

母は死ぬまで今と余り姿が変わらない。

父よ良かったな。

汝の妻は美しいままだ』

…はは、なんつープレゼントだ。

龍人はかなり寿命が永い。

俺より先にニーナが死ぬ覚悟はしてたが本当に嬉しい誤算だ。

「……………リュウ、私リュウを残して先に逝くと思ってましたけど」

「ああ」

「どつちが先かわからなくなりましたね。もしかしたらリュウが先かも」

泣きそうな、そして嬉しそうな笑顔でいい

「ああ！」

俺も笑顔で答えた。

『…さて、我はそろそろ眠るとしよう。』

次に目覚めるときはこのように会話は出来ぬ赤子になって我の意識は消えるが

我は我である。

子供らしくはないだろうがこれからよろしくたのむぞ』

俺とニーナの息子は眠りについた。

リュウside out

冥界グレモリー領

サーゼクスSide

妹のリアスが生まれて一年。

ついさつきであるがもう一人妹が生まれた。

名前は既に決まっている。

ミリアというらしい。

何でも妊娠が発覚したとき母上が夢を見たそうだ。

我々悪魔と神が敵対する依然の女神であり

かの始まりの龍『霸王龍』と共にいた女神ミリアと夢に出てきた美しい女性が名乗ったそうだ。

女神ミリアの話では母上が身籠った子は彼女の生まれかわり、転生したものだという。

彼女は大切な記憶のみを残し生前の膨大な力を費やし生まれる時を待っていたそうだ。

何故転生することを選んだとかの細かい部分の記憶は薄れているようだったが彼女がただひとつ望んだいることそれは

フオウルと共に生きる。

これだけは何を失っても忘れていなかったらしい。

フオウル…

話の流れ的には『霸王龍』のことであろう。

『霸王龍』は遙か昔にこの星を護り眠りについたと聞いている。

つまり彼女の転生は『霸王龍』の復活または転生を意味していて確定ではないが彼女と『霸王龍』は共にある……………

ふふふ、どうも面白くなってきたね。

私の義弟にあの『霸王龍』がなる。

そうでなくても知り合いになれる。

全くもって退屈しないですみそうだよ。

それはそうといつまで彼女ではいけないな。

今日から私とリアスの妹なのだから。

リアス、ミリア。

君たちが元気に育っていくことを祈っているよ。

君たちが大切なもの

パートナーや仲間を見つけるその日までこの兄が君たちを見守って
いこう。

ザーゼクス side out

新たな命（後書き）

foul長すぎた。
ミリア少なすぎた

だって foulのおっぱいネタ書いてておもしろいもの？

キャラ設定(前書き)

キャラ設定です。

転生前のですね。

軽いあらすじにもなっています。

キャラ設定

転生前の設定

主人公

名前

『霸王龍フオウル』

星と共に生まれた星の片割れでその身体に流れる力は星そのもののミリアと出会い子をなす。

主に龍族、巨人族、龍人族の祖先。

星に降ってきた流星から星と己の大切なものを護りそして眠りについた。

容姿

イメージとしてはブレスオブファイア4のカイザードラゴンです。体長はおよそ20mほどでフオウルとミリアが出会った当初、まだ種族が少なくフオウルより大きな生物は存在していない設定です。

強さ

1〜100であらわすと

フオウル100

オーフィス90

グレートレット90

ドライグ85

アルビオン85

フェンリル85

ぶつちぎりのトップです。

好きなもの

ミリア、オツパイ

嫌いなもの

星の害になるもの、自分からオツパイを奪うもの、ミリアを傷つくるもの

ヒロイン

女神ミリア

神族であるが力が強すぎてその力に耐えるために身体が巨大化してしまい神族の里から追い出される。
永い時を特訓に費やしていたが上手くコントロール出来ずにいた。
女としての自信はあるが身体のサイズの違いから半ば諦めていた時にフォウルとであう。

その後フォウルと一緒にになりフォウルが眠りにつき、自ら転生を選ぶ。

容姿

ブレスオブファイア3の女神ミリアをイメージしました。
体長はおよそ15mほどで普通の人が手のひらサイズ。

スリーサイズもダイナマイトボディ。

普通の人サイズなら推定で上から98・54・88になる。

強さ

ドライブと同じくらい

好きなもの

フオウル、エッチなこと、子供たち

嫌いなもの

一人の時間、子供を傷つけるもの

キャラ設定（後書き）

転生後は原作に絡むあたりで投稿します。

子供時代(前書き)

主人公第一ハーレム

子供時代

二ナside

フォウルが生まれてから時がたちました。
今フォウルは10歳、初めは最初の会話した時のような性格になるかと思いましたが完全にはそうなりませんでした。

あの時のフォウルとリュウを足して割ってさらにリュウをすこし足してかんじですね。

やはり生前の記憶があるため完全に無くなりはありませんでしたが後は親子ですね、喋り方や所々でリュウににっています。

容姿は我が息子ながら文句なしですね。

太陽の光を反射するような綺麗な銀髪に全体的整っていて大きな少しつり上がった目、高い鼻が特徴で子供ながらクールな印象をもちます。そしてフォウルが年相応に笑ったり泣いた時の顔はもおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

可愛いではないい足りません!!!!!!!!!!

天使!天使です!!

私、フォウルのお母さんなのになんど襲いそうになったか……………

それにあのこ凄すぎます…

初めておっぱいをあげた時がお遊びのようでした……………
おっぱいをあげるたびにまず腰がぬけます。

しかも良く欲しがるので凄いときは1日中逝きっぱなしで大変でした。……………

おっぱいを上げなくなってから大変でした。

ことあるごとに抱きついてきておっぱいを触ってきます。

こんなに可愛い子でさらに自分の息子なので拒否するはずもなく好きなようにさせますが、そうならばもうお仕舞いです。

絶妙な手の動きで揉まれ擦られ転がされ気づけば自ら胸をさらけだしおっぱいを吸わせていました。／／／／

しかもこれは私だけではありません！

ここドラグニールにいる女性の綺麗所はみなフォウルの餌食です。

…しかも全員虜にしてしまっています。

本人は何気なくやっているのでしょう。

現に達してしまった女性を見て不思議そうに可愛らしく（ここ重要）首を傾げていました。

まだ記憶と知識が繋がってないみたいです。

振り返ってみて思いましたがこの子、今まで私を筆頭におっぱいばかりですね…

ま、まあともかく元気に育っていますよ。

二ナ side out

当時まだ記憶と知識が繋がってない俺は

「父さん!？」

何で怒りながら泣いて俺を殴るの!？

イタツ!痛いよ!お母さん!!!」

父さんは素手で若手であれば上級悪魔を瞬殺する使い手である。

にも関わらず俺が痛いですんでいるのは俺が『霸王龍』であることと、過去の経験が無意識に防御をとらせていたからみただ。

ちなみに父さんさんは俺が助けを求めた母さんに半殺しにされ、俺を可愛がって(虜にされた)女性達にリンチされた。

龍人族歴代最強が死にかけるとか相当だぞ…

そして俺は母さんや 里の女性おっばいに慰められて(色々して貰ったししたよ)ました。

そんなことが6歳くらいまで続きその後は天国と地獄だった

里の男VS俺の闘い!

勝っても負けても里の男は女性からリンチをうけて、俺はおっばい天国!揉んでつねって、転がして、舐めて吸ってのおっばいフェスティバル!!!

殴られる価値はあります、はい。

俺は幼くても龍化したときは以前に近い強さをもっていたが人のときはそうでもない。

その辺の悪魔や天使とギリギリ闘えるくらいだった。

なら龍化すればと思うかもしれないが龍化は子供がやると非常に疲

れる…

成長すれば常に龍化してもなんともないようだが子供は身体がついて行けないようだ。

だから常に人の状態での戦闘になるわけで…

そんなことが何年も、途中からはドラグニール男軍VS俺が続けば当然俺も強くなる訳だ。

10歳の今では父さんを含めた里の男VS俺で何とか勝てるようになった！

そして狂乱のおっぱい祭開催！！！！

ちなみに言うが男達が弱い訳では決してない。

龍人族は余り闘いを好まない（俺に関しては別）が老若男女関係なく凄まじい戦闘力をもっている。

子供にしたって人間には負けないだろう。

そして肉弾戦限定だが俺は10歳にして里最強になったわけだ。

だが最近恐ろしいことがおきはじめた。

龍人魔法を放つやつがでてきた！

龍人魔法とはドラゴンのオーラと人の発声器官があって初めて使える魔法である。

その威力は凄まじく使い手によっては龍化するより強いとくるくらいだ。

そんなの放たれればいくら強くなってもひとたまりもなく最近はずばり連敗記録更新中である。

必死になって龍人魔法を勉強しているが生前は使えなかったものだしなかなかコツがつかめず難航している。

もうひとつ嬉し怖いことがある。

女性の目である。

理由はわかっている。

俺の精通が始まった。

いつものようにバトっ後のおっぱいパーティーの最中股間に熱を感じてみると。

マイサンが急成長をとげ「
が が立った!!!」な状態
だった。

そしてそれはすぐにばれた。

子供ながら俺のは大きいらしい。

俺のをみて他の男が膝をつくくらいだ。

まあそのサイズが大きくなれば当然わかるわけでその日以来女性が俺を見ると大概が獲物を狙う目付きになっている。

そしてその中には母さんもいるのが怖さを増長させる。

俺はおっぱいが好きだ！

エッチなこと大好きだ！

でも沢山の人から狙われていると思うと怖いです、はい。

まあ一線こえたらもう八チャメチャだろうけどね

そんなこんなで色々な意味で身の危険をかんじるこの日このごろで

す。

フオウルside out

グレモリーside

フオウルが天国地獄を味わっているころグレモリー家では

「ほぐらリア、ミアプレゼントだ！」

「お兄様ありがとうございます。」

魔王であるザーゼクスが暇を見つけて実家の妹達に会いにきていた。

「でもお兄様！私はもう11歳ですよ？リアはやめてください！」
リアははははしそくに

「私はいつまでもミアでかまいませんよ？」

ミアは嬉しそうに答えた。

ここにいる兄妹はみな似てる。

赤い紅い髪に整った顔立ち、見るもの全ての者が美しいと評するくらいである。

ザーゼクスは父にて、リアスは母に、ミアは知っているものは少ないが生前の顔立ちである。

似ていると言われれば似ているし否と言われればそうとなる不思議な兄妹だ。

ガバ！

「きゃ!」「はふ!」

「ああ〜ませつこなリアスもかわいいけど素直なミリアもかわい
なあ〜も」

「お兄様恥ずかしいです」

「お兄様ったら。」

お返しです。ぎゅ〜」

「ヴェネラナよ」

「なんですか、あなた?」

「子供達は元気に育っているな」

「はい」

グレモリー領は今日も平和である。

子供時代（後書き）

羨ましいぞおっぱいフェスティバル

成長そしてはじまりへ（前書き）

すみません。ちょっと遅れました。

ちなみに今更ですがこの小説は作者の思いつきをそのまま書きなぐ
つてますので今後どうなるとか曖昧にでしか決まっています

成長そしてはじまりへ

フオウルside

俺は15歳になった。人間でいえば中学3年生だ。そして俺の目の前に謎な光景が広がっている。里の男が全員あつまりある旗をかがげている。

『女の独占禁止！』

……………何だこれは？

この旗を見た俺の感想である。

まわりからは「お前ばかり狡い！」とか「妻をかえせー！」とか「俺だつて恋人欲しいんだよ！」はたまた「お母さんをかえして〜！」

……………子供も混じってるし……………

なんでこんなことになったのだろうか…

俺はここ数年を振り返ってみた。

俺が11歳の頃里全体での俺リンチが毎回の如く行われその後に残っているおっぱいへブンを味わっている時のことだ。

里の中で母さんについて俺を可愛がってくれるディースさん（巨乳）が龍人魔法によってボロボロになっている俺を見かねて本来な危険

故に15歳から習う龍人魔法を覚えてくれると言ってくれた。
デイスさんだが里で1、2を争う程の龍人魔法の使い手で普段は
子供たちに勉強を教えている人だ。

若干面倒くさがりだが先生としては申し分ない方である。

ただし報酬を要求された。

内容は『講習後の全身マッサージ』

砕けた言い方をすれば『私を気持ち良くさせろ』だ！

俺にとっても嬉しい条件である。

なぜならデイスさんは未婚、恋人なし、超美人の三拍子揃った方
だからだ。

なんでこんな人が未婚なのかは謎だがこれで男の嫉妬リンチされず
！龍人魔法を学べ！おっぱいを触れる！

そして俺が学び終わる頃にはほとぼりが少しはさめるはず！さめて
なくても龍人魔法を使えればそう簡単には負けないはず！！！！

はくはつは！！！！完璧だろ！

ふっふ、俺のターン、ドロー！沢山のおっぱいを生け贄にささげ
泣）デイスを召喚する！！！！

「待ちなさい！」

トラップカード発動！落とし穴！

な、なんだと！

「母さんなんでとめるの？」

「そつだよ、ニーナ。これ以上フォウルがボロボロになるのはあ
しゃあ見てられないよ」

デイスさんナイス！

「フォウルが魔法を勉強するのは反対しませんよ？

ただデイスさんだけで独占するのはずるいです！」「
か、母さん。ちよつと恥ずかしい／＼／

「ちつ！わかつちまつたかい」

デイスさんも何言つてんですか！！！

「だから順番にしましょう！

この里の女性101名での1日10人体制での英才教育です」

この里の人口は男100女101名の小さな里です。

俺あまり変わんないじゃん…

「ちよつと待ちな」

おつ！デイスさん何か案でも！？

「一人余るんだからあたしは毎回参加だよ！

あたしが言い出したんだからそれくらいいいだろう？」

デイスさん、変わんないよ？？

「フォウル安心しな、少なくともあたしがいるんだからバカどもからはちゃんと守ってやるよ」

デ、デイスさんあんたカツコイイよ！

『霸王籠』としては情けないがしょうがないじゃん！！！！
まだ子供だもん

「しょうがないですね。それで行きましようか。

では明後日までに当番表を作りますのでそれまではデイスさんお
願います。」

あはは、なんか勝手に決まって行くな？……………はあ

「了解だよ。

それはそうと二一ナ。あんた有翼人なのに龍人魔法使えるとか反則だろ」

「この子のお陰ですよ」

ニッコリ笑って俺をだきしめる。

ああ顔がおっぱいに挟まれて幸せ

「まったく『霸王龍』はどんだけ反則なんだか」

そう言っただけでイスさんは帰って行った。

周りの皆さんもそれを合図にしたかのように散って行った。

俺は母さんに後ろから抱きつかれたまま家へと向かって歩く、当然俺の頭はおっぱいサンドウィッチだ！

ただこのとき俺は思った。

ミリアに会いたい、と。

夜、俺は風呂に入っている。

…母さんと。

実は毎日一緒だ。

だけど風呂で俺からおっぱいに触れたことは一度もない。

風呂では純粹に母さんには疲れを癒して欲しいからだ。

母さんは有翼人で羽がありおっぱいもデカイから肩や背中が凄くこっている。

だから風呂は母さんの疲れを癒せるようにマッサージをしている。今日もいつもの様にマッサージを終えて一緒に浴槽に入っているとき、母さんがあの目になっていた。そう、獲物を狙う目付きに！

「か、母さん？どうしたの」

「はあはあはあ……」

フォウル……

「ごめんね、私もう我慢できないみたいです……」
「が、我慢って！？」

「フォウルは今度から始まる勉強の間で絶対だれかに襲われます。みんな狙ってますし、ディースさんさんなんか絶対その日のうちに襲うでしょうね」

ディースさん信用ねえ……

「だから今まで我慢してたけどもう駄目、あなたの初めてを私にちようだい」

母さんそんなこといわれても……

「母よ、俺は、我は母さんの息子ぞ？」

とう、父のことはどうするの？」「

「ふふふ、動揺してるの？昔と喋り方が混ざってますよ？」

あうう

「後リユウは今でも勿論愛しています」「リユウとフォウルは世界一大切なものだから。」

でも………」

「でも？」

「それはそれ、これはこれです」

「があくっ！！」

「汝はそれでいいの！？」

「つてまたまじった！」

「それともフォウルはお母さんじゃ嫌ですか？」

俺のなかで

「…そんな訳」

何かがきれた

「あるわけない！

」

そして俺は母さんに飛び付き一心不乱におっぱいに貪りついた！

「ちゅっ、つつちゅっちゅううううう！！！！！！」

「あっ！フオウル！激、しい！あっ！はん！」

やっべ〜テンション上がってきた〜

この後浴室からはパンパンという水音と母さんの艶っぽい声がしばらくこだました。

「フオウル…

すごすぎますよ。

腰が抜けるどころか全身痙攣してますよ」

流石に抜かすの20連はやり過ぎたかな？

「母さん大丈夫？」

「大丈夫だけど

ちよっとお尻…」

あゝ母さんが初めてを上げたいとか言ってお菊ちゃんもしちゃった

まあ最初は良かったんだ。そう、最初は。あれは練習が実地になってからだ。考えられる？全力で撃ち合うんだよ？何って決まってる。

龍人魔法をだよ!!!

何が

「身体で覚えるのが一番早い!

やれば覚える!」

なんでいきなりスポコンみたいになってんの!

どこの戦争地帯だよここは!

男達から守ってやるのか言ってたけどその男達が怖がってよってこねえーよ!

あつ!ちょ、まって!3人同時とか無理!俺まだ子供!11歳!千ヤイルド!!!

えっ!?ベッドの上だと余裕してるだろうって?子供じゃ出来ない?

それとこれとは話が別じゃあああああああああ!!!!!!

!!!!!!!

これ勉強はじめる前よりきついよ(泣)

男達だつてここまでじゃなかった……

だが俺は耐える!

耐えた先に桃源郷があるのに耐えない男がいるか!?いや、いな
い!反語おおお!

俺は自分を奮い起たせ

「ばつちこいやあああああ!!!」

父さんだが毎日殴り合いだ

俺が子供の時はまだ手加減していたようで本気になるとマジで強い。歴代最強は伊達ではなく今の俺でも勝てない。

父さんは「お前が俺と二ーナの時間をおお！」

とか言っているがこの前旅行に行ったり普通に仲いいのにな。

父さんの考えがあるのかな？

俺と毎日殴り合いを始める前はよく冥界にいつていたし。

母さんは相変わらずだ。

俺も落ち着いたと言われているが母さんの前だと変わらず甘えまくりだ。

違うことと言えば俺が父さんとやりあっていると以前は父さんを半殺しにしていたが、「あらあら、頑張つて下さい。」

と微笑んでいる。

…何か知っているみたいだが父さんと母さんが話してくれるまで待とうと思う。

そしてディースさんだが俺の師匠になった。今まではあくまでも先生だったらしいが師匠になったからにはディースさんの全てを教えしてくれるらしい。

師匠になるきっかけはディースさんが「あんだといると退屈しなさそうだねえ。」

一生付きまとしてやるから覚悟しな！」

と言ってきたのが始まりでかわりに師匠になるとのことだ。

全てを教えると言つてたので試しに

「スリーサイズと敏感な所を教えてください」
と言ったら

「いきなり何を聞いてるんだい……………」

上から99・55・88で

おっぱい、うなじ、おしり、内腿、アソコ」

普通に答えてる！

っーか99だ、と…！

デカイとは思っていたけど数字で聞くともの凄い衝撃だ…！

むっ！手が！手があああ！

ムニ

「んっ／／／」

手が勝手に！

ムニユウウ

「あんたも好きだねえ。」

じゃあ実践で色々教えてあげようじゃないか」

本当に色々教わりました。

そんなこんなでさらに一年たち俺の目の前状況がある。

うむ、何だこれ

「俺独占してないぞ？」

うん、独占はしてない。

「妻が俺じゃ満足しなくなった！」

「恋人ができない」

「狡い！」

「お母さんが帰って来ない日が多い」

半分嫉妬かよ……

最後はすまん。

「じゃあ父さんはなんでそこに？」

「なんとなく……！」

うぜー

「なんで独占したことになってんだ？」

「なんとなく……！」

あ……ちよつとプツンときた！

「まてまてまて……！う、嘘だ冗談だ、だからそのオーラをおさえろ！
つーかはたから見たら十分独占してる！」

ハア

「確かにみんな俺によくしてくれてるけど強制してないし、ほとんど嫉妬ではないか。」

ただ少年スマン」

「お前はあれですか！俺はモテるんですよ……か！？

そうだよ！嫉妬が大半だよ！

つーかその嫉妬で暴動が起きそうなの！もう俺じゃ抑えきれないの！
色々丁度いいからお前里の外で暮らせ！

場所は決まってるから！」

はあ？

「お願い！とりあえず家に戻って！お前が負けるとは思わんが里が
ボロボロになる！」

ぎゃー！お前ら攻撃準備すんな！

「フオウル！ちゃんと説明すつから！」

「…わかった。じゃあ家で待ってる」

俺は家に戻り、待っていると疲れた顔した父さんが帰ってきた。

「はぁ疲れた…」

あ、ただいま。

「二ーナは？」

「父さん帰ってくるまで暇だったから甘えてたら疲れて寝た（気絶）」

「…お前も好きだな…」

「当たり前だ。」

「というか父さんは連中みたいにならんのだな」

「まあ、な。」

俺もお前ほどじゃないけど似たようなもんだったからな。

龍人族は近親相姦は普通だし。」

「…血かよ」

「お前のな、後は種族がらしようがないからな」

「どういう意味だ？」

「まず力の強い龍人は霸王龍の力、つまりお前の血をつよく受け継いでいる。」

そして龍人の女は強者を好む。

お前は霸王龍そのものなのだから当然みな惹かれる。

お前には女を悦ばせるテクニクもあるから余計にな。

後龍人は数が少なく子が産まれにくい。寿命が長すぎる弊害だな。

そして一定の年齢に達すると死ぬまで老けない。
龍のオーラがさせない。

お前が二ーナにしたことが龍人には最初から備わっているんだ。
ゆえに子が親の子をとか親が子の子。はたまた孫のとかもあり得る。
だから二ーナに関しても俺は特に気にしない」

「まあそれはいい。」

とりあえずさっきの説明をするな」

頼みます

「日本のある学校に女神ミリアの転生先の人物が通ってるのがわかったからフォウルが転校できる手続きと住居の確保をすすめていた」
何だと！

ミリアが見つかったのか！

「なるほど俺はこの里をでるだろうからあの連中の行動は丁度良かったということか…」

父さん、ありがとう」

「ちなみに俺がフォウルと殴り合いをし始めたのは人形態のお前の技術向上のためだ。」

あと俺の憂さ晴らし」

後者が本音みたいでやだな…

「転校先は駒王学園で2学年から通ってもらって、それまで3ヶ月ほどあるから準備など済ませておけ」

「その間に会いに行つてはいかんのか？」

「構わんが場所わかるのか？流石に俺もしらんぞ？」

「大人しく学校で愛います。」

「そうしろ」

そうして父さんと話していると

「あたしも行くから。」

よろしくたのむよ」

なっ！

「おっ！ディースさん行つてくれるんですか？
じゃあ頼みます」

え！？え！？

「ん？何でつて顔してるねえ。

言つたる？一生付きまどつてやるつて」

ディースさんは言つて

「覚悟しな！」

妖艶に無邪気に笑つた。

「あと二ーナも行くつて行つてたよ」

「「えー！！！！」」

父さんは絶望していた。

成長そしてはじまりへ（後書き）

いかかでしたか？

そろそろイツセーたちがでてきますよ。

学校へ（前書き）

主人公ぶっちやけます。

学校へ

フオウルside

俺は今柄にもなく緊張している。

ちなみに今日から学校で今校門に立って校舎を見上げている。

周りでは俺と同年代の少年少女ばかりで談笑している者、慌てて走っているものなど様々な人がいる。

そして俺のことをチラチラ見ているものも多い。

それもそうだろ、銀髪の外国人が自分たちの学校の制服を着て校門に立ってぼけーとしているのだから仕方ない。

そんな視線を受け流しここにいるであろうミリアのことを考えていると興味深い話しが聞こえてきた。

「おいイツセー！昨日貸したAVどうだった!？」

「エロかったろ?」

「見た見た！お前は俺を猿にするきか？いつもながらいいおっぱいでしたよ！」

特にあそこの乳揺れは何回も繰り返し見てしまいましたよ!」

「流石イツセー！お前なら絶対あそこに目をつけると思った!」

「と言うことは松田も?」

「「にやり」「

……まざりたい！俺と同じくおっぱいを愛するものがこの学園に
いるとは！

俺は話しかけようとしたとき周りが騒がしくなった

「きゃー！グレモリー姉妹よ〜！」

「幸せ！今日も朝から綺麗なものをみれたわ」

「いつ見ても美人姉妹だな〜」

「うお〜！！朝からついてるぜ！」

何が？と思いふりかえると、俺の鼓動がはね上がった。

顔が似ている。

表情が同じだ！

雰囲気と同じだ！！

魂の繋がりが教えてくれた！

俺は無我夢中で駆け出し

「ミリア！」

彼女をだきしめた。

フオウルside out

ミリアside

「ミリア！」

私の名前が呼ばれました。

ただ名前を呼ばれることがこんなに嬉しいなんて。

いきなり抱きしめられました。

普通なら驚いて悲鳴をあげていたでしょうが私は自然に受け入れていました。

私を抱きしめている人を知らないのに知っている。

「気付いたようね

そのあなたもこの制服を着ているのだから駒王学園の生徒なの
でしょう？」

とりあえずは学校に行きましょう。

話したいことがあるなら放課後、旧校舎にあるオカルト研究部まで
来なさい。」

「ああ、いきなりすまなかった。

そうさせて貰おう。

何分今日からこの生徒になるゆえ挨拶すらしていない。

迷惑をかけて申し分ないが職員室まで案内してくれないか？」

「ええ、構わないわ。ついてらっしゃい。

ミリア行くわよ」

「はい！」

こうして私と彼は再開をはたした。

ミリア s i d e o u t

イツセー S i d e

オツス！おら、空孫さと…違います、嘘です。俺は兵藤一誠！自他
共に認めるエロだ！

学校ではエロいことでしられ、何故か他の学校の奴にも知られてい
るほどエロい！

そんなエロい俺は朝から悪友でありエロ友である松田とエロトーク
に勤しんでいた。

「おいイツセー！昨日貸したAVどうだった！？」

「工口かつたる？」

あゝ、あれかあゝ

「見た見た！お前は俺を猿にするきか？いつもながらいいおっぱいでしたよ！」

特にあそこの乳揺れは何回も繰り返し見てしまいましたよ！」

あそこは良かった…

生で見れたらさぞかし絶景なんだろうな…

「流石イツセー！お前なら絶対あそこに目をつけると思った！」

やはりお前もか！わかっているじゃないか！

「と言っことは松田も？」

「「にやり」「

はい、変態です。」

んっ？何か見たことない銀髪の長い髪の男がこっちを見てるな。

けっ！イケメンかよ！イケメン死ね！

イケメンは敵だ！

こっちはモテない男の領域だ！みるんじゃねえ〜！

「きゃー！グレモリー姉妹よ〜！」

ん？グレモリー姉妹？

「幸せ！今日も朝から綺麗なものをみれたわ」

本当に綺麗な姉妹だよな〜。二人ともおっぱい凄いし。

「いつ見ても美人姉妹だな〜」

うんうん。あんな彼女欲しいな…

「うお〜！！朝からついてるぜ！」

目の保養です。

あれ？銀髪ロン毛イケメンが走りだしたぞ！？

あの方向！まさか！？

やっぱりかああああああ！！！！

ミリアちゃんに抱きついてやがる！

つか抱きつかれてミリアちゃんのおっぱいが潰れて凄いことになってる！ありがとございます！！

じゃなくて何やってんだあいつ！？

イケメンだからって何やっても言いわけじゃねーぞ！

はっ！そのままひっぱたかれればいいって抱き合ってるううううううう！？

名前呼びあってる！？

何ミリアちゃんの恋人！？

なっ！リアス先輩とミリアちゃんとイケメン（死ね！）が一緒に行った！

「……………なあ松田」

「……………なんだイッセー？」

「あの銀髪殺したい」

「奇遇だな、俺もだ」

「転校生っぽいから同じクラスなら異端審問会だな」

「他クラスでも男子を召集するぞ！」

「おお！イケメンを血祭りにあげモテないズの恐ろしさと世間の厳しさを教えてやる！」

「具体的には？」

「手足を縛り椅子に縛りつけ部屋に一人にしてAVをひたすら見させる！」

「ヒイヒイヒイヒイ！」

「イッセー、なんて恐ろしいことを！」

「ああ、自分で考えていて何だが凄まじい拷問だ。俺なら発狂してしまう……」

モテない男にしか効かない拷問だと俺達は気がつかなかった。

「イツセー、そういえば今日から新任の先生が来るらしいな」

「そうなのか？女か？美人か？おっばいでかいかな？」

「…それに外国人で養護教諭が二人らしい」

きたあああああ！！！！！！！！

「何だその最強コンボは！遊 王もビックリだよ！！」

美人巨乳外国人養護教諭二人組とか最強でしょ！？むしろ最凶だろ！いつ見れるんだ？」

「今日の始業式で紹介だそうだ」

「なら急ぐぞ松田！」

「おっ！」

俺たちは夢と希望をもって駆け出した！

すぐに絶望するとも知らずに。

始業式

皆ソワソワしているのがわかる。

普通に巨乳なのにならだが小さいから余計大きく見えるビジョンマジック！

くっ！まだ一人目なのにこのダメージだ！

さてもうひとりには青毛にこちらもブルーアイ！

俺は元浜を見る

「……………イツセー君、覚悟はいいかい？」

これをきけば君は意識を失うかも知れない」

俺は覚悟を決めた！

「じゃあ行くよ。」

身長175、上から……………99・55・88だ

「よ

がはっ！！

「イツセー！」「イツセー君！」

「やるじゃないか……………新人のくせにここまでやるとは……………」

「イツセー……………お前、無事なのか??」

「ふっ！松田よ、馬鹿いつちやいけない！

俺達の戦いは始まったばかりだっ！」

俺たちはいつだって激戦区だ！

「えゝ、静粛に。」

ではまずフォウル君からお願いします。」

あゝ女どもうつせ！

男なんかどうでもいいんだよ！

まあお楽しみの前の前座くらい聞いてやるか。

「ふむ、俺の名前はフォウル・ドラグニール。」

男達の熱き魂の声が体育館に響き渡った！！！！

因みに女子は

恥ずかしがるもの、自分の胸に手を当てほっとしているもの、ガツクリしているもの、笑っているもの、呆れているものなど様々だが唯一嫌ったり、きもがったりしているのがいない！！！！

イケメンか！？イケメンだからか！？

あの方は尊敬するがイケメンは嫌いだああああああああああああああ！！！！

あの方のインパクトが強すぎて忘れてたが次は待ちに待った美人先生だ！

「ごほんっ！

フオウル君、ありがとうございました。

続きましてニーナ先生よろしくお願いします。」

「はい。」

「今日からここ駒王学園で保健の先生をやらせて頂くニーナ・ドラグニールです。」

好きなものは夫と息子のフォウル。
息子共々よろしく願いますね」

カワイイです！綺麗です！キレカワイイ！！！！

でもちよつとまで！

今、息子共々つて言つた！？

あの方のお母様！

なんつー若さだ。

女性陣落ち込んでるよ！！！！！！

まあいい、見てて楽しくなる人が増えたんだ！

さあ次だ！

「ありがとうございます。

続きましてディース先生

よろしく願います」

きたっ！スーパーボディ！

「あたしの名前はディース・ドラグニール。

フォウル、ニーナと同じ部族出身。

担当はニーナと同じだよ。

好きなものはフォウル、楽しいことだ。

後ひとつ言っておくがフォウルはあたし達のだ！

やりたいならまずはあたしかニーナ、またはミリア・グレモリーに
話しを通しな！」

姉御的な美人先生きたあああああつてまでええええい！！！！！！！！

あたし達の？あ・た・し・た・ち・の？
やりたい？や・り・た・い！？

えっ？デイス先生はとかく二ナ先生は親子じゃないの！？
っ！か何気にミリアちゃんが入ってるし！

「あの、デイス先生？

教育の場に相応しくないことと倫理的にまずい発言は控えてもらえますか？」

「大事なことなんだから黙ってな！

っ！か倫理的って何がだい？」

こえ〜！美人が怒るとまじこえ〜よ！

「あ、え？すみません！

倫理的というのはその親子でそのゴニョゴニョ…」

おっ！校長ナイス！

皆が気になったところだっ！

「そのことかい？

うちの部族は特殊で近親相姦、親子結婚が割りと普通なのさ」

なんだと！つまり部族と美形家族で方程式をだすと

部族∥美形家族∥皆美形∥近親相姦∥美人とやりまくり！？

なんだそれは！

絶望した！

俺は世界の不条理に絶望した！

なんだよ、そのハーレム的な環境は！

あの方はあの歳でハーレムを実現させたのか！？

………神だ

俺たち男に絶望もあたえたがそれはあの方のせいではない！

世界の不条理に絶望したが、彼は俺たち男にハーレムという希望を
与えたのだ！

そしてあの方は俺と同じおっぱいを愛するもの！

神と呼ばずなんと呼ぼうか！

俺にも神がいたんだああああ！！！！！！

こうして始業式はグタグタで終わり、俺は神を得た

イツセイ side out

学校へ(後書き)

イッセーつつこみ多いね

キャラ設定。原作開始直前（前書き）

取りあえずです。参考程度に考えて下さい。

キャラ設定。原作開始直前

フォウル・ドラグニール

龍人族はファミリーネームは里の名前を名乗りますので以下同様。

17歳、高校2生

身長180、髪は銀髪の瞳は空色。容姿はブレスオブファイア4のフォウルです。

龍化すると以前の姿になります。

成長するにつれて口調が昔に近くなるが父の影響もあり完全にはもどらない。

性格は基本はクールだがミリアやニーナには駄々甘え。あとおっぱいとエロに関してはイツセーに尊敬される。

エッチに関しては絶倫で究極のテクニシャン。

子供ながら逝かせなかったものはいない。

強さは前世の八割ほどで弱チート。

ただ今後もまだ成長しますのでいずれ前に追い付く予定。

色々技術も手に入れているので闘いかたの幅は広がっている。技などはまたべつの設定でのせます。

好きなもの、こと

ミリア、ニーナ、ディース、リュウ、家族（彼の中で部族は家族です）、おっぱい

嫌いなもの、こと

好きなものを奪う、傷つける貶すこと。
星を傷つけること。

ミリア・グレモリー

17歳、高校2年生

身長、160、スリーサイズは上から98・54・88（前世の推定まんま）

性格、穏やかな質の癒し系、独占欲がうすくむしろ皆で仲良く派
霸王龍の目覚めに合わせて転生した女神ミリアの転生後。

転生することに力をつかいフォウルのことを除く記憶がほとんど薄れている。

悪魔のグレモリー家の次女として生まれた。

姉のリアスの影響で日本が好きになり姉と同じ駒王学園へ入学する。

強さ

一般的な上級悪魔を35くらいとして40ほど。

リアスは45くらい。

好きなもの、こと

フォウル、家族、日本

嫌いなもの、こと

好きなものを傷つける存在

ニーナ・ドラグニール

年齢不明、見た目では25くらい。

身長152、スリーサイズは上から92・52・82

容姿はブレスオブファイア2のニーナで翼を白くした感じ。

羽は魔法で隠します

性格はお姫様系ののんびり、息子大好き親バカ

フォウルの実母にしてフォウルの初めてを奪った人。

有翼人だが霸王龍の加護を得て不老長寿となる。

エッチが大好きだが自分の愛しているもののみでしか快感が得られない。

息子大好きなちょっと行き過ぎな天然お母さん。

ここからは裏事情ですがフォウルの父であるリュウが仕事で長期間

家に帰れないのでフォウルについて来た。

駒王学園の保健の先生として就職。

強さ

戦闘はしませんがだいたい50くらいです。

好きなもの

リュウ、フォウル、エッチ、フォウルを甘やかすこと

嫌いなもの

自分からフォウルを奪うもの

デイス・ドラグニール

年齢不明

身長175スリーサイズは上から99・55・88

容姿はブレスオブファイアシリーズのデイスさんに足がある感じ

龍化すると『蛇龍』蛇のような東洋の龍になります。

性格、姉御のようなさばさばしている。自由気まま。ワガママ

フォウルの魔法の師匠で色々引つ掻き回す人。

フォウルとずっといることを条件に師匠になる。

性に関してもオープンだがフォウルに関してのみで他の男には興味がない。

楽しいことが好きでニーナがフォウルを食べた直後にそれに参加にフォウルの二人目の相手。

強さ

戦闘にかんしてはものすごい力をほこり、魔法にかんしてはフオウル以上。

75くらいで考えています。

キャラ設定。原作開始直前（後書き）

近いうちにその他の設定、龍人魔法などに関して書きますので

神から友へ、悪魔との会合（前書き）

イツセーと仲良くなります。

神から友へ、悪魔との会合

フォウルside

始業式を終えて、俺は教師と共に教室に向かっている。
かつかつかつ

「今から行くクラスだが若干名騒がしのがいるが君なら問題ないだろう。」

なれない国、文化などで大変だと思いが頑張ってくれ」

「はい。お気遣い感謝します。」

「ここだが今日から君が通う教室だ
僕が名前を呼んだら入って来てくれ。」

先生はそう言って教室に入ってしまった。

さてさて俺はここではどうなるのか…
流石に里の時の様にはならんだろが…

「ではフォウル君
入って下さい」

では行くか

「失礼します」

「今日からこのクラスの一員になる、フォウル・ドラグニールだ
よろしく頼む」

反応はまずまずだな……………女子は。

休み時間、俺が屋上に行くとき既にイツセーとポーズ頭がいた。
俺が彼らの前に行くとき彼が

「神よ！話しとはなんでしょうか？」

「お前らが今朝話していた話に興味があつてな……………お
前らが話していたAVとは『オツパイズ・トゥエルブ』だな」

「な、何故それを！」

「ふつ、俺は乳揺れの動きで作品が分かるしおっぱいで個人が特定
できる！」

流石に絶句しているな……………

ここにも俺の同志はいないのか……………

「ふ、ふふふふふふ……………

流石神だ！だがおっぱいに関してなら俺だつて負けてない！」

「ならばこの動画を見る。

俺のお気に入りだ！」

どうだ？わかるなら答えてみる！

この乳揺れしか映っていない動画でお前にわかるか！？

「これは……！」

流石だ、良いチョイスですね」

「わかるのか!？」

「神よなめないでもらいたい!

作品名『パイオツ・オブ・カリブいや〜ん』

58分32秒から50秒の間の18秒、アップで映される。

あの激しくも繊細な動き、見間違う訳がないでしょう?。」

や、やるではないか!？」

なら!..!

..... (長いので飛ばします)

俺とイツセーは己の熱き魂をぶつけ合い

「「同志よっ!」「俺達は力強く握手をかわした。

「まさか俺とおっぱいで語れる男がいるとは

「ふふ、神よ。

俺もですよ

「神はやめろ。

俺とイツセーは同志だ!

敬語もいらん!

俺のことはフォウルと呼べ!

友イツセー!..!

「っ!..!..!..!..!

ああっ!わかったぜフォウル!

これからおっぱいの素晴らしさについて語り合おう!..!

俺はこの日親友を同志をてにいた!

ちなみにボーズ頭は

「この俺がついて行けないとは……」

流石神!流石イツセーだ!」

すがすがしい笑顔をうかべていた。
だが

「何を言っている?

なあイツセー。」

「そつだぞ松田!

俺が今まで見てきた作品はお前のオススメが大半じゃないか!」

「そつだぞ。」

確かにお前は俺やイツセーの様にはおつぱい見極めができないかも
知れんが、お前は広く見渡せることができる。

これから頼むぞ『選定者』松田よ!」

松田は大声で泣いていた。

この後教室に戻ると異様に仲良くなった俺らを見て不思議がるクラ
スメートたちだった。

放課後、イツセーたちと別れをつげ母さんとディースさんをつれて

オカルト研究部に向かった。

部室につくと席に案内されて俺を間にはさみ、母さんとティースさんが座っている。

正面にはミリアとミリアと同じ紅髪の女性が座っていた。彼女たちの裏には数人の生徒が立っている。

「お招き頂き感謝する。

俺はフォウル・ドラグニール。

『霸王龍』フォウルだ」

「貴方がミリアが言っていた『霸王龍』ね。

私はリアス・グレモリー、ミリアの姉で駒王学園3年、オカルト研究部部长で悪魔よ。

後ろの子達は私の眷属悪魔よ。

ミリアには眷属はいないから全員わたしの眷属ね。」

「悪魔か……」

と言うことはミリアも悪魔か？」

「はい、私は悪魔の貴族グレモリー家に転生しました。フォウル、待っていましたよ」

ああ、やはりミリアの笑顔はいいな。

容姿は多少以前と違うが魂を感じる。

彼女の笑顔は全く変わっていない。

「じゃあ貴方達の目的を教えてください？私は一応この辺りを管理しているの。」

大丈夫だと思うけど一応答えられるかしら？」

リアスさんが俺たちに聞いてきたので

「ミリアがいると聞いたから」

「フオウルが行くってきいたからねえ」

「フオウルが行くっていいましたから」

上から俺、デイスさん、母さんの順番だ。

「そ、それだけ？」

そのためにわざわざ日本に転校したの？」

「それだけと言うのが愛するものがあるのに行かない訳がないだろう」
俺がムツとした顔でいうとリアスさんは少し驚いたあと

「それもそうね。」

「ごめんなさい、訂正するわ」

リアスさんは出来た人のようにだ。

彼女のような家族に囲まれて育ったのならさぞかし幸せだっただろう。

「フオウルはつと、失礼。フオウルと呼ばせてもらおうよ？」
それでフオウルはどうしたいの？」

そんなもの決まっている！

「ミリアと共にいたい」

「なら話しは簡単ね。」

フオウル、貴方ミリアの眷属になりなさい」

む？

「眷属になるとどうなるんだ？」

「特に変化はないわよ？」

悪魔として転生するくらい。

後は身体能力の向上くらいかしら？」

ふむ、特に問題ないな

「母さん、いいか？」

「フォウルはフォウルなんですよね？
なら好きなようにしていいんですよ」

「なら俺は問題ない」

「ならさっ「待つてください！」「どうすたのミリア？」

「彼が私の眷属とかあり得ません！

フォウルは霸王龍なんですよ？

霸王が人の下に、ましてや眷属なんかになつては駄目です！」
ミリアはそんなことを気にしているのか

「俺はミリアと霸王龍となる。

この名前をつけてくれたのはお前だろう？」

「ですが！」

「お前といれるなら眷属でも下僕にでもなつてやる。

それとも俺が眷属では不満か？」

つと、そうだった

「悪魔に転生するにはこの『悪魔の駒』を使うの。

駒の種類は主になる『王』を頂点に『女王』『戦車』『騎士』『僧侶』『兵士』があるの

あなたはどの駒になるのかしらね。

朱乃！調べてあげて」

「わかりました、では調べます

っ！部長！わかりました」

何故か慌てている。何か問題あるのか？

「朱乃、結果をおしえて。」

「……………ん部です」

「は？」

「だから女王を除いた全部です！」

……………なにそれ？

「ちょっと待ちなさい！

ミアアの駒は女王と戦車と騎士が『変異の駒』でしょう？
それはどうなっているの！？」

「わかりません！

始めます。

ふう、先生は女王一つで何とかかなりますわ」

「何とかってどういう意味だい？」

「女王が『変異の駒』だから大丈夫って意味です。

ちなみに『変異の駒』とはですね。

力の強いもの、特異な力を持つものを眷属にするときに複数の駒を消費することがあります『変異の駒』はそれ一つで肩代わりできるんですが……」

むっ！朱乃さんが俺を見ている！

「あはは……」

…笑って誤魔化した。

「まあ意味はわかったよ。

朱乃、ありがとね」

朱乃さんは「いえいえ」と言ってから後ろに下がった。

「それでミリア？覚悟は決まった？」

「もう確定なんですわね……」

はあ、わかりました！確かにフオウルを眷属にできたらと思ってい

ましたから！もうヤケクソです！先生も私の眷属にしちゃいます！」
こういふ所は変わらんな……

「ならミリア、さっさとやってしまいなさい。
ふう、やっとミリアを護る眷属ができたわ。
これで安心できるわ」

ミリアさんの言葉に頷く眷属たち。

「安心しろ、これからは俺がいるしディースさんもいる。
ミリアを傷つけるものなど存在させない。
後主は違うがグレモリー家の眷属として改めて自己紹介をしよう。
フオウル・ドラグニール。」

今日からまた『霸王龍』を名乗らせてもらう」
「ならあたしもしとくかねえ

あたしはディース・ドラグニール

『蛇龍姫』と呼ばれたときもあつたね。

まあ好きに呼びな」

俺達の挨拶がおわると

「あなた達がするならこちらもするのが礼儀ね。
改めまして、私はリアス・グレモリー。
あなた達の主の姉でこの子達の主よ」

「なら次は私が

私は姫島朱乃と申します。

駒は女王。

よろしくお願いいたしますわ」

「次は僕だね。」

僕は木場祐斗

駒は騎士だ。

よろしくお願いするよ。」

「…塔城子猫です。

駒は戦車です。

よろしくお願いします。」

「私達は終わったわね？

なら最後はミア

あなたがやりなさい」

「はい！

私はミア・グレモリーです。

今日からフォーウルとディース先生の主になります！

お姉様の眷属の皆さん、今まで助けて頂いてありがとうございます。

フォーウル、先生これからよろしくお願いします！」

ミアは笑顔でいった。

この日俺とディースさんは悪魔となりミアは俺たちの主になった。

ちなみに母さんは

「皆楽しそうですね」

ニコニコしていた。

神から友へ、悪魔との会合（後書き）

はい、眷属になりました。

ミリアの眷属は二人ですが問題ありません！

親友、転生、悪魔（前書き）

おかしくなっていたので修正しました。

親友、転生、悪魔

フオウルSide

いきなりだが皆に質問したい。

朝おきたら見知らぬ豪華な部屋に寝ていたらどう思う??

何が言いたいかと言うと

「...ここ、どこ?」である。

取りあえず昨日のことを思い出してみる。

昨日からミリアが俺達の住んでるアパートの俺たちの部屋に引越してきた。

「私もフオウルといたいです!」

この一言ですぐに決行された。

お疲れ様です。グレモリー家臣団のみなさん。

そして夜、珍しく母さんとディースさんは違う部屋で寝ている。

「前世ぶりなんですよね？」

「最初くらい二人つきりにしてやるさ」
など言っつてそそくさと部屋に入っつていった。

つまり俺たちはベッドの上で抱き合っていた。

「久しぶりです。」

昔と姿は私もフェウルも違いますが。
あなたのぬくもりはかわらないですね。」

「ミリアだつて変わっていないさ。」

さて、久々にお前を味わいたい。

いいか？」

「一々聞かないでくださいノノノ。」

私だつてあなたを感じたいんですから……」

俺はミリアにキスをしてまずは服を脱がした。

ミリアは美しい。

その身体は昔そのままだ。

それだけで俺は暴走しそうになる。

そしてズコバコあつはんな行為をして
いつの間にか寝てしまい、今起きた訳だが…

何故かアパートの一室ではなく豪華な部屋で寝ていた。

そして先ほどから感じる股間の違和感。

気持ち悪い訳ではなくむしろ気持ちいい。

そしてミリアはと言つと

「すー、すー。ん、はぁー」

俺の身体の上で気持ち良さそつに寝ている

そつ「気持ち良さそつに」だ

もうわかったただろう。

俺もわかってはいるが最終確認のために見てみると

わーい、アワビさんがバナナ君を食べてるよー！

くっ！ミリアめっ！

俺が寝たあとに

アワビさんにバナナ君を食べさせていたな！！！！

起こしてくれたらおれも一緒にしたのに！！！！！！

俺は意趣返しの意味を込めて腰を数回うごかした！

「にゃっ！あん！フオウル！？」

いきなりあんっ！な、なんですか！？？」

寝ぼけているな。

なら

ああ、これですか？
とりあえず外を見て下さい」

外？

「……いつもと同じ風景だ」

つまりは…

「グレモリー家の力です！！！」

自慢気に言うミリアを無視して部屋の外にでる。

リビングらしき（豪華すぎて）部屋を抜けて階段（無かった）を降り、^{フロント}玄関をでてふり返ると！

そこには5階建てのビルが建っていた。

「なんじゃこりゃあああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

珍しく俺は絶叫した。

グレモリー家家臣団恐るべし！！！！！！

とりあえず俺たちは朝食をとり登校した。

教室に行くとイツセーが嬉しそうに松田とメガネに何か話している。

松田とメガネは何故か世界の終わりのような顔をしている。

とりあえず挨拶をしようか。

「おはようイツセー。松田にメガネもおはよう」

「おはよう!」「イツセー」

「ああ…おはよう神よ」「松田

「うん…おはよう。

あと僕は元浜だよ」「メガネ

「イツセー以外元気がないただのしかば」「生きてるよ!」「
むっ!心を読むとはやるな!」「

「いや、口に出てるぞフオウル」

「本当に?」

「」「」「くくり」「
むっ

「神がボケるなんて……」

やっぱり世界の終わりだあああ……」
元浜よ……

「俺、まだまだ死にたくないよ……」

松田よ

「何があった？

」なるほど、イツセーに彼女が出来たと。

別に何でもないじゃないか、良かったなイツセー！」

「うう、ありがとうフオウル。

素直に祝福してくれたのお前だけだよ…

それに比べてお前は！」

「だってイツセーだぞ！」

エロさでは近隣の学校でも知られているイツセーだぞ！」

「フオウルだってエロいじゃないか！」

なんで俺だとその反応なんだよ！」

「神はイケメンだからだ！既にミリアちゃんをゲットしたらしいし説得力がある」

「だがお前は悪い奴じゃないがイケメンではない！」

モテない

エロい

総じて説得力がない！」

イツセーが愕然とし膝をつき

「た、確かに……
でも本当なのに……」

イツセー………友達に信じて貰えないとか可哀想だな………

「その辺にしておけ。」

男の嫉妬は醜いぞ？」

「」「」「ぐづっ」「」

「それにイツセー、少し言われたくらいで膝をつくな！

胸を張り、前を見る！

自分に自信をもて！

自信を持ってない男に女はなびかん！

そんなんではイツセーに告白した娘に失礼だろ！」

「!!!!!!!!!!!!!!」

ああ！そうだな！」

「うむ、良い面になったな。

では少し相談にでも乗ってやるか」

「サンキューなフォーウル！」

「なに、気にするな……………」

「いきなり相談なんだがデートはどこがいいんだろうか？」

「俺のデートスポットはベッドの上だな」

「くっ！流石フォウル！

いきなりクライマックスか！

答えてもらってなんだが参考になんねえ」

「そうか…

あとはわからんな。

スマン…」

「それしかないのかよっ！」

なんだかんだでイツセーは自分で考えて次の休みにデートに誘うよ

うだ。

イツセーは俺たちを彼女に紹介したいようなので今日の放課後によんで貰った。

彼女の名前は天野夕麻。

中々に可愛い娘だった。

松田と元浜は

「イツセーにこんなに可愛い娘が……………」

「うそだあああああああ！！！！！！」

など喚いて走り去って言った。

俺は「おめでとう」と言っでビル（家）に帰った。

休み明け、イツセーにデートがどうなったか聞こうと思いき学校に行くといッセーが不思議そうにしていた。

「おはよう。」

「イッセー、デートはどうだった？」

「神までイッセーの冗談に乗らないで下さいよ」

松田、何を言っ

「フオウル！ちょっと来てくれないか！？」

「イッセーが真剣な目でこちらを見ていた。」

だから

「了解した。」

「俺は屋上でイッセーから話しを聞いた。」

天野に黒い羽がはえ、光の槍で殺される夢。

その夢の最後に見えた鮮烈な紅

起きたら何故か皆天野のことを忘れて、写真なども消えていて自分の夢かと思っていた所に俺がきたそうさ。

ふむ。

「……………何かわからないか？」

すぎるようなイツセーの視線に俺は。

「少し心あたりがある。
待っていてくれ。」

「…わかった。フオウル、頼むぞ！」

「と言うわけだ。」

リアスさん、イッセーは死んで悪魔になったのか？」

俺は今部室でリアスさんに話しを聞いていた。

ちなみに俺はオカルト研究部に入部しているし母さんとディースさんは顧問1、2である。

「イッセーと言うのがあの子のことを言うならそつよ。」

「いつ伝えるつもりだ？」

「今はタイミングを図っている所よ。」

「フォウルはどうするつもり？」

「今はどうもしないさ。」

「ただ墮天使がバカなことをしない限りな……………」

「……………私もそう祈るわ。」

「神ではなく貴方にね。」

「暴れたりしないから安心してくれ」

「お願いよ？」

その後何事もなく数日がたち、学校へ行き教室に入ると………

「お前達、生乳を見たことあるか？」

愉悦に浸るイッセーがいたので

「おはよづいッセー」。

で？触ったのか？」

「おはようフオウル。……………」
「まだです」

「はあ、情けないぞ！

生乳がそこにあるなら揉まないで何をする！

お前は見るだけで満足なのか！」

「違います！
触りたいです！」

「なら次に生乳をみたら！？」

「揉みます！」

「臆しは？」

放課後、部室に行くと言った気が満ちたイツセーがいた。

「リアスさん、イツセーがここにいるってことは…」

「ええ、全て話したわ」

「そうか…」

「イツセー！」

「こちら側へようこそ！」

「ああ！俺もこれからハーレムを目指して頑張るぜ！」

「ふっ！それでこそ我が友イツセーだ！」

「共に乳道を極めようではないか！」

「おう！すぐにフオウルに追いついてやる！

そつだ！俺ドラゴン派のモノマネができるようになったんだ！

いくぜー！

ドゥラ〜ゴ〜ン〜」

まさか！あの技か！

「派あああああ！」「ピカーー！！！！

くっ！…本当にやるっはっ！

だがっ！

「やるではないか、それにそれは神器か…

だがな……………俺はリアルで射てる……………！」

「な、な、何だとおおおおお！」

「……………見たいか？」

「くくくくくくくくくく……………！」

「ならっしいてっしー…！本当のドラムン派を見せてやる…！」

「おおおおおー！ー！」

「言ってしまったわね。」

ねえミリア？」「

「何ですか？お姉様」

「フオウルって」

「はい、たまにああなりますよ。」

可愛いですよね」「ニコニコ」

「……ニーナ先生」

「あんもお、可愛いですう〜。」「くねくね

「……………デイス先生」

「ああ、あれかい？子供のころはいつもあんな感じだったよ。そのせいか落ち着いた今でもでるんだよ。」

「ーナは気にしないでくれ。」

「あれは最上級の親バカだから」

「デイス先生は大丈夫なんですか？」

「先生もフォウルのこと好きなんですよね？」

「大丈夫なわけないだろう？」

さっきから身体が火照って濡れまくりだよ。

………みるかい？」ケラケラ

「けっこうです！！！！！！」

「はあ、朱乃」

「なんですか？」

「フォウルって」

「ええ、フォウル君も一誠君も可愛いですわね」

「………子猫」

「子猫ちゃんはフォウル君について行きましたよ。」

「祐斗、彼って」

「……………はい、」

思っていたより愉快的な人みたいですね」

「私、霸王籠って憧れてたけど印象が変わったわ……」

「僕もですよ……」

この日「ドゥラ〜ゴ〜ン〜派あああああ」の声と共に天を貫く一筋の光が目撃されたという。

後日談

「子猫

なんで昨日フォウルについて行ったの？」

「……………本物のドラゴン派を見たかったです。」

……………駄目でしたか？」

「そんなことないわ。」

それでどうだったの？」

「……………凄かったです。」

「……………そう。」

親友、転生、悪魔（後書き）

今後書き方を少し変えて「side」とかを減らそうと思います。

飛んで飛んで特訓（前書き）

できたー今回はあるネタをいれました！
わかるかな？

飛んで飛んで特訓

「ねえ、フオウル……」

「何だ？ミリア」

「助けに行かないのですか？」

「今回は俺は行かないし、行けない。」

イツセーは自分の決意を貫こうとしている。

それは己の力で貫かなくては意味がない。

いざとなればリアスさんもいるしな。

それに仲間認められるには必要なイベントでもある。

まあイベントという言い方はイツセーとイツセーが助けに行った」

「確かにお姉様がいれば問題ないと思いますが……………」

それに必要なイベントですか？」

「ああ。」

イツセーのことをグレモリー関係者で兵藤や一誠ではなくイツセー

と呼ぶのは何人いると思う？

……………俺とリアスさんだけだ。」

「まだ皆仲間に成り立てのイツセーに壁がある。だからイツセー…

……………

お前の決意、見せてこい！！！！！！」

その後見事とは言い難いが少女の救出に成功し、イツセーも神器の力が目覚め、ボロボロになりながらも敵のリーダーの墮天使・天野夕麻改めレイナーレの撃破に成功。

レイナーレはリアスさんの力により完全に消滅した。

救出された少女、アーシア・アルジェントは神器を抜かれたことにより一度死亡した。

その際先ほども述べたがイツセーの力が一部目覚めた。

『赤龍帝の籠手』

ドライブグが神器にされた姿。

その力がイツセーに宿り

堕天使撃破の最大の理由だ。

これから大変だぞ、

龍は力を呼ぶ

イツセーを鍛えてみるのも良さそうだな……………

ともかくレイナーレは倒したが死んでしまったアーシア・アルジェント。

イツセーが悲しみと悔しさで泣き崩れている。

それを救ったのは彼らの主であるリアスさんだ。

彼女の持つ『悪魔の駒』によりアーシア・アルジェントは悪魔に転生する。

転生の際、抜かれた神器も彼女に戻った。

ここまでがだいたいの大筋だろう。

そして今彼女はイツセーと話している

「……………なあ、ミリア」

「フオウル？どうかしましたか？

そんなおっぱいを触れそうなのに、触れなかったような顔をして。

……………私ならいつでもいいですよ？／／／／／／

「むう。

何故そんなに具体的なんだ？構わんが……………

まあ気になったんだがアーシアはイツセーに惚れてるよな？

後お前がいいならそうさせて貰う「ムニィ

「あんっ！

た、たぶんあう、そうだ、と思いますすっつっ「…！

「はあ、勿体無い。
それでも我が友なのか？」

据え膳食わねば男の恥ともいうだろうに

イツセーはぶつぶつ……………「モミモミ

「あつ！ま、つてくだ、さいつ。す、少、し手加減してあんっ！く
れないとひう！こ、声がで、て、は、恥ずかし、いです。／／／／
／」

「ああ、スマン。

無意識に動いていた。

これで許してくれ「ちゆ

おでこですよ

「／／／／／／

……………許してあげます。

でも皆さん見てますね……………あつっ！」「モミモミ

「む？

なんだ？

皆言いたいことがあるなら話せばいいだろうに。」「あん！」

後イツセー。

鼻血を出しながら泣くな、「はう

顔が凄いことになってるぞ?」

「ひう」

モミモミ

「うるせえよおおお!

しょうがないだろ!

リアル乳揉み現場と感じちゃった 祭りは初めての遭遇なんだよ!
鼻血もでるわっ!

まだ揉んでるし!

っーかうらやましいんだよおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!
!!

うおおおおおおおん!!!!!!!!!!!!!!

「そこにおっぱいがあれば揉むだろ?

なあ祐斗?」モミモミ「あっ!ち、ちょっと!ま、また激しくひや
ん!」

「……………ノーコメントで」

「むう。

なあ子猫。

本当に凄いのね／＼／＼／

「ん？興味があるのか？」

「人がよがる姿ってそりません？」

まあ多少はありますが……………／＼／＼／

「なら今度うちに来るか？」

いくらでも見せてやるぞ！

興味があればいつでも相手するぞ？」

「……………考えておきますわ／＼／

「ずる〜い〜！！！！」

俺もおっぱい触りたいわ！

っーかミリアちゃん気絶してんじゃん！

いい加減揉むのやめろ！」

「いつものことだ」

「いつもかよっ！！！！」

「イッセー、そんなに触りたければ触ればいいだろ？」

「相手がないんだよおおおおお！……！」

「ならアジアに触らせて貰えば？」「わ、私ですか……！
えと、私は、でもイツセーさんなら、でもでも、うーー！
きゅっ」

あ、気絶した

「アジアあああああ！」

「はあ、全く……」

イツセー、アジアを隣の部屋に寝かしにいきなさい。

襲っちゃ駄目よ」

「部長！了解です！
ただアジアにそんなことしませんよ！」
「ならいいわ。」

後フォウル。

そういうことするなどは言わないけどやるなら家でやりなさい……！

皆赤くなっているでしょ？」

「むう、スマン。善処する。」

ただ今日は用があつてな。

とりあえずベッドを借りるぞ、ミリアを寝かせてくる。」

「ならアジアと一緒に寝かせておいて。広いベッドだから二人でも余裕よ」

「感謝する。」

「それで用って？」

「いやな、イツセーを鍛えようと思つてな」

「イツセーを？」

「一応私自らトレーニングはつけているけど」

「身体はリアスさんに任せるし

魔力は朱乃さん

体術は子猫

剣技は祐斗がいる。

俺が教えるのは龍気、

要はドラゴンのオーラを使ったものだ」

「えっ！俺にドラゴンのオーラなんてあるのか！！？？」

「もちろんだ。

忘れてないか？

お前に宿っているものを。」

「あっ……………」

「まあいい。

今日からイツセーにドラゴン波を教えようと思う」

「まじかつ！！！！」

「ねえフオウル？

イツセーも子猫も凄いつて言っていたけど
あれってネタではないの？」

「ドラゴン波の名前はネタだが内容は究極の基礎だぞ？」

ゆえに中々強力な技だ。」

「どつという意味？」

「ふむ。」

魔力や気、妖力などなんでもいいがどれもコントロールは大切だろ？」

ドラゴン波の修得はコントロールを全て巧くやる必要がある。」

集め、ためる、凝縮留める、放つ。」

以上のことを出来てドラゴン波は完成する。」

魔力弾などとの違いだが、魔力弾は集め、放つに対してドラゴン波はさらにためて、凝縮、留めさせることで威力が何倍にも何十倍にも何百倍にもなる」

ただその分時間がかかるがな。」

「なるほど。
わかったわ、
イツセーを鍛えてちょうだい」

「了解したならさっそ「クイツ」なんだ子猫？」

「…ドラゴン波は私も使えますか？」

「子猫、ドラゴン波はドラゴンのオーラ「つかえるぞ」「つかえるの
!？」」

「言っただろ？
名前はネタだと。」

イツセーにドラゴンのオーラを教えコントロールを覚えさせるのに
一番最適な技がドラゴン波なだけだ。

別に魔力でもいいがイツセーは魔力が少ないだろ？
それにイツセーに宿る力は赤龍帝。
ドラゴンのオーラは十分にある。

その使い方を覚えてもらっ技だ。

長々と話したが要は魔力、気、妖力なんでも使えるぞ。」

「…なら私にも教えて貰えませんか？」

「構わんが子猫は俺を嫌ってなかつたか？」

「いつもイツセーとおっばいおっばい言ってるし」

「うおおおおい！！」

何気なく嫌われてる中に俺をいれるのかよ！！」

「好かれてる自信あるのか？」

「……………ないです、はい。」

「……………別に嫌ってないです。」

ただ不潔だと思っただけです。

それにフォウル先輩は尊敬してます。

ドラゴン波漣かった……」

「……子猫もあのアニメ好きなのか？」

「こく／＼／＼」

「子猫……」 「先輩……」

「同志よっ！」「……同志です
ガシッ！

俺と子猫は手を強く握りあった。

「あっ！俺も俺も！」

イッセーが嬉々と近寄ってきたが

「………よらないで下さい。
不潔です。」

そんなことか

「勿論だ。」

「一つコントロールが出来れば後は力の切り替えだからな。」

それに魔力などで身体能力を上げる際に無駄がなくなるぞ。

この際だお前もやるか？」

「是非お願いするよ。」

「あらあら私達はどうします？」

「そうねえじゃあお願いし「リアスさんと朱乃さんは意味ないと思
うぞ」

「どういう意味？」

「ミリアから聞いたが魔力コントロールは二人ともミリアより出来
るのだから？」

「ミリアも出来たしやろうと思えば出来るはずだ。」

まあ威力はそこそこだろうがな。

「そういうことね。

なら出来た場合はどうすればいいの？

究極の基礎なのだからそれで終わりではないでしょ？」

流石リアスさんだ。

そこまでわかったか。

ほらそこ！イツセー！えっ？見たいな顔するな！

「良くわかったな。

リアスさん達は多分一発でできるが威力がそこそこくらいだろう。ゆえにより多くをより早く。

これをやれば自然と上達する。」

「そう、わかったわ。

ありがとう。

今度何かお礼をするわ」

「ではありがたく頂く」

ではそろそろ行くとするか。

「ちょっと待って。アーシアもお願いね。」

「……………了解だ」結局リアスさんと朱乃さん以外全員か…

所変わって我が家の地下一階。

魔力加工をして幾重にも結界を張った特別なトレーニングルームだ。デイスさんが酔っ払って暴れたことがあるがそれでも壊れない優れものだ。

ここならほとんどの奴が周りの被害を気にせず訓練出来るのだが…

……………

「これはなかなか……………」祐斗

「……………難しいです」子猫

「……………ドラゴンのオーラってどれ？」(泣)「イッセー

……………誰も出来てないな……………

「……………よし！集合！」

これからアドバイスをする！」

うむ、皆集まってきたな。

「まず祐斗！子猫！」

「なんだい？」「…はい」

「二人はどうかやら放出が巧く出来ないようだが
それなら対処は簡単だ

行程を減らせばいい。

まずは放つことになれる

お前らは後は問題ない。」

「…質問なんだけどいいかい？」

「祐斗？どうした？」

「その放出は僕みたいな接近戦の者の戦力になるのかい？」

ああ、言い方が悪かったな……

「スマン、言い方が悪かった。」

放出とは言ったが要は魔力の使用方法の事だ。

ドラゴン波の場合外に放つが
内で爆発させると…」すっ

俺は体内でドラゴンのオーラを爆発させたブースト状態で祐斗の裏
に一瞬で移動した。

「消えた！」

何処にいつ、っ！……！！……！！……！！」

反応が早いな

「……………何をしたんだい？」

「体内でドラゴンのオーラを爆発させた一種のブースト状態で肉体を活性化させた。」

その状態で裏に回り込んだだけだ。」

まあ俺は素でもできるが…

「……………なるほど。」

こういう使い方もあるのか……………

ありがとう、もう少しやってみるよ。」

「ああ、何かあれば声をかける。」

さて子猫は何かあるか?。」

「……………私は才能がないんですか?。」

「いや、この3人の中では一番あるぞ？」

ただ放つ動作に慣れてないだけだろうな。

子猫の場合魔力弾を打ちまくって放つ動作になれる。

なれば直ぐに出来るようになるから安心しろ。」くしゃ

そう言っつて俺は子猫の頭をなでた。

「／／／／／

……ありがとうございます。」

さて、二人は訓練に戻ったな…

イツセーだが

きつと直ぐにドラゴンのオーラが使えるぞ。

何故ならイツセーは俺と同じく熱い思いを持っているんだからな！

！」「………イツセー

安心しろお前は直ぐにドラゴンのオーラ……………長いから今後龍気と呼ぶぞ？

つと失礼。

龍気を使える。」

そうさ、イツセーなら必ず……………！！

「…でもフォウル〜その龍気がわからないんだよ（泣）

「焦るな。

今から龍気について説明する。

簡単に説明すると龍気は思いの力だ」

「……………思い？」

「感情の高まり、怒り、悲しみなどが一番龍気が発生しやすい。

お前が墮天使を倒したときなどかなりの龍気が出たはずだ」

「フォウル〜でもさ、いきなりあのときみたいにキレたり出来ないって…」

「…いわな」言え「わかった…」

誰にも言うなよ。

部長だよ……………」

「やはりな。

ならリアスさんのおっぱいをみたことは？」

「やっぱりって何だよ！

わかってたのか！？」

「で、見たことは？」

「……………」あります」

「よし！では俺がお前の龍気を引きだしてやる！

まずは目をとじろっ！」

「はいっ！」

「リアスさんのおっぱいを思い浮かべろ！」

顔を埋めたいよおおおおお!!!!!!!!!!
ドオオオオオオオン!!!!!!!!!!

イツセーの周りに力が満ちる!

「……イツセー、
それが龍気だ!」

「……これが龍気……ふ、ふ、ふはははははははっ!

これが龍気!

わかった! わかったぞおおおおお!!!!!!!!!!」 「そ
うだ! それが龍気だ!

イツセー! 今ならいけるはずだ!
だからもう一度言っぞ!

おっばいを思え! おっばいに願え!」

「おっ! いくぜっ!!!!!!!!!!

ドオオオオ!

ラアアアア!

飛んで飛んで特訓（後書き）

ネタわかりました？

正解は蒼天の拳です

不死鳥は死にたがり（前書き）

あんまうまく書けなかったです……………

不死鳥は死にたがり

俺は今非常に不機嫌だ。

と言つかグレモリー家のもの達はみんな不機嫌である。

理由は簡単だ。

ライザー・フェニックス

コイツが現れたのが原因だ。

俺たちはいつもの様に部室に集まっていた。

そして奴が来た。

ライザーは自分の眷属を引き連れ、さも当然かのように居座った。

この時点で俺たちのテンションは最低だ。

リアスさんは……………ぶちギレ寸前だ。

ライザーは気にせずリアスさんにセクハラもといアタックをかけていて

それを見ているイツセーもぶちギレ寸前である。

ミリアは俺にしがみつきぶるぶる震えている。

ライザーが大嫌いらしい。

それすら気にしないのがライザークオリティだ。

そしてリアスさんがキレた。

ライザーを払いのけたがライザーは家がどうこう言い始め
それを聞いてたイツセーがキレた。

だがイツセーはライザーの眷属に瞬殺された。

そこで終わればまだ良かっただろうが
まだまだ絶好調なライザー君

こともあるつにミリアにも手を出してきた！

「…やれやれ、相変わらずだなリアスは。

まあいい。

それよりミリア。

あの話しはいつ受けてくれるんだ？」

あの話し？

「……………私があなたの愛人になる話しならすでに断っているでしょ……………」

ブチッ

「……………ライザー、どういうこと？」

私が嫌がるからってミリアにも手を出したの？」

「ふん、そんなのは関係ない。

欲しいから言ったただけだ。

リアス、お前は俺と結婚し、ミリアは俺の愛人になる。

姉妹仲良く俺といれるんだから幸せだろ？」

ブチブチッ！

「勝手に私達の幸せを決めないで貰いたいわね！

それにミリアにはフォウルがいるのよ？

あなたが入り込む隙間なんてないわよ！」

「そうです！私にはフォウルがいるんです！あなたはいらないんで

す！邪魔なんです！目障りなんです！うざいんです！なんですかそのホストをさらに着崩した格好は！？カッコイイと思ってるんですか？私からしたらだらしなないだけです！」

……………ミリアは相当嫌いなんだな。
少しすつきりした。

「ず、随分嫌われているな。

まあいい、いずれ俺の物になるのだからな」

ブチブチブチッ！

「それにフォウルと言ったか？

残念だったな、ミリアは俺の物だ！

お前のような眷属悪魔には勿体無い極上の女なんだよ」

ブチブチブチブチブチッ！

お、抑える俺！

今キレたら色々面倒だ！

そうだ！おっぱいを数えよう！

おっぱいが一揺れ、おっぱいが二揺れ……………

「よおみんな元気にしてるかぁ？って何だいこりゃぁ？」

むっ、デイスさん

「あらあら、みんなどうしたんですか？」

あら？初めてみる子が沢山いますね。

お客さんですか？」

母さんまで。

「なんだお前は？」

無関係なものは出て行って貰おうか。」

「無関係ではないよ。」

あたしはミリアちゃんの眷属だし、ニーナはフォウルの母親さ。」

「ほう、つまりミリアが手に入ればそこのご婦人も手に入る可能性

もあるのか……………

是非とも欲しいな」

ブチブチブチブチブチブチブチブチ

やっ、やばい。

我慢が……………

いやいや！こらえる！

そっだ！イツセーと考えた「おっばいのテーマ」を！

おっばいのテーマ

作詞・フォウル& amp ;イツセー

作曲・ノリでなんとなく？

おっばい パイオツ バストに乳房

いろんな呼び方あるけれど

やっぱりおっばいが一番いい！

おっばいが揺れる「あ〜ん」

おっばいが形を変える「あは〜ん」

おっばいの頂きに

君臨するスイッチ！

押せばなにがおきるかな？

「よし、スイッチオン！」「いや〜ん」

おっばいおっばいおっばいおっばい

やっぱりおっばい最高です！

e n d

デイス side

あーあ、あの餓鬼やばいね。

「あんたらちよつと下がったほづがいいよ。」

「なんでですか？」

「祐斗、フォウルの目をよくみな」

「何か瞳孔が縦長になってませんか!？」

「……それに何かぶつぶつ言ってます。」

「子猫はよく気付いたねえ」

「……耳がいいんです」

「ふん。」

まあ今はいいか。

祐斗、あれはね龍の目だ。

龍人ってのはキレたときがわかり易くて
瞳孔が縦長なる。

つまり目が龍化するのだ。

まあつまり

フォウルが暴れるかもしれないから捲き込まれないように下がった
ほうがいいよ。」

「……………フォウルってそんなに強いんですか？

強いのは色々教えてくれるからわかるんすけど

普段から俺とおっぱいおっぱい言ってるイメージしかなくて……………」

「そう言えばあんたらはフォウルの鬪いを見たこと無かったね。

まあフォウルの本気がどれだけデタラメか今度見せてやるから今はさがりな」

さてはて、今話しはどれだけ進んでんのかな。

「ほう、つまりミリアが手に入ればそこのご婦人も手に入る可能性もあるのか……………是非とも欲しいな」

あちゃー、あの餓鬼フォウルの逆鱗に触れまくってるよ。

死んだかな？

「ついでに銀髪君の母君も貰ってやろうか？」

子供を産んでいるとは思えない美しさだな！」

次に何かあったら終わりだな。

「そうだ！」

銀髪君の目の前でミアア達を抱くのもい「ブチンっ！……」……
…何の音だ？」

あーあ、自業自得だけどご愁傷様だね。

あんたは今絶対怒らせてはいけない存在を怒らせたよ……

Side out

「ミアア、リアスさん。

少し下がっていてくれ」

「フオウルあなたは何を「お姉様、さがりましょ」「………わかったわ」

「すまん………」

「……黙れ、殺すぞ!!」
カアアアア!!

「くっひっ!!」「くっ」 ドサッ!

雑魚が………気絶したか。

「くっ!き、貴様!何をした!
たかだか眷属悪魔にこのおがああああああ!!……!!」

「黙れと言ったのが聞こえ無かったか?

まあいいお前に終わりを選ばしてやる。

- 1、身体を切り刻まれる。
- 2、このまま頭を握り潰される
- 3、殴り殺される

さてどれがいい?」

本当はまだあるがこの3つが一番すつきりするからな。

「くっくっく、俺を殺す気か?

無駄だ!俺はフェニックス!
何度切り刻まれようと、頭を潰されようと何度でも蘇る!」

「まだ回復するのか……」

「じゃあ」

「まだ終わらせない！」

「まだまだ殴れるな」

「くっ！」

調子に

乗るなああああああ……！！！！！！
「ほおおおお……！！
熱いな

だが！

「はははははは！」

「この炎で貴様を燃やしつくしてやる！」
「炎が俺を包み燃やしつくそうとせまる。」

「ただ熱いだけだ」

俺は右手を振るい、炎を凧ぎ払った。
それだけで炎は消えライザーは吹き飛ばされる。

「ぐはああ！」

お、俺の炎がう、腕、腕のひ、ひとふりらで、けすだと！

貴様はいつたい……！！！」

「ふむ、お前こんな唄は知っているか？

〃我霸王龍、星襲いし流星ことごとくを葬り眠りにつかん。
我目覚めるとき夢より現れ光の柱が降り注ぐ〃

俺が前世の死ぬ前に残したものだが」

「その唄は！」

始まりの龍『霸王龍』の最後の唄！

あれはカビのはえたお伽噺話ではないのか！？

いやまて！貴様今前世と………まさか………！！

ふっ、ふざけるな！

そんな化け物とやりあえるか……！！

お、おい！お前ら起きろ！！！！
か、帰る「帰すとおもうのか？」ひっ！？」

「散々おちよくつてくれたんだ。
少しは礼をさせてくれ。」

そうだな。

お前が言うカビのはえたお伽噺話しでの姿でお礼をしようか。

俺を……………我を敵にまわした自分の愚かさを恨め！

〃我目覚めるは「お待ち下さい！」……………汝何者だ？」

俺が我になろうとしているとき1人の銀髪のメイド女が待ったをか
けた。

どうやら女の足下にある魔法陣で転移したらしい。
魔法陣をみるにグレモリー関係者か？

「失礼いたしました。」

私、魔王サーゼクス・ルシファー様の女王、グレイフィアと申しま
す。

どうか矛をおさめていただけませんか？」

「俺が矛をおさめる理由がない。
許すつもりもない。」

こいつには礼をしなければ気がすまない。
だが話しくらいは聞いてやる。」

俺を納得、またはそれなりの対価によっては考えなくもない」

「ありがとうございます。」

まず今回の件ですが、誠に申し訳ございません。

我が主がライザー様をけしかけたのでございます。」

魔王がか？

「お兄様が！？グレイファイア！
どういう意味ですか！？」

「ミリア、少し待て。」

魔王がお兄様とはどういう意味だ？」

「あっ！話してませんでしたね。」

現魔王であらせられるサーゼクス・ルシファー様ですが
旧名サーゼクス・グレモリー

つまり私とリアスお姉様の実の兄なんです。」

「なるほど、理解した。」

「それより！」

お兄様がこのなんちゃってホストの駄目焼き鳥をけしかけたってどういう意味ですか！」

ミリア……………ライザーのことになると口が悪いな。

ライザーなんか「なんちゃってホスト……………」

駄目焼き鳥……………」

とか膝をついてつぶやいている。

哀れだ……………」

「ミリアはなんでそんなに嫌っているんだ？」

「だってこの女誑しの駄目やりんは私の身体にペタペタ触ってきた

「ぐるうあああ！！！！この焼き鳥いいいい！！ミリアに触れてた

だですむと思うなよ！！！！俺は龍だけど喰らえ！ペガサス流星拳！」

「ぎゃああああああああああああ！！」

今はフォウルがいますから安心できますが、やっぱり嫌いです。」

「ふう、なるほど。理解したぞ。」ぱんぱん 手を叩く音

「……………」ライザー再生中

「つと失礼。

グレイフィアさん話しの続きを頼む。」

「はい。」

我が主はミリア様の話しより霸王龍の話しに興味を持たれていました。

そして霸王龍の力を知る為に悪魔でも力があり、リアス様と婚約者であることでグレモリー家と関係のあるライザー様に話しをしたのです。」

「ちょっと待って下さい！」

時期が合いません！」

私が焼き鳥にセクハラされ始めたのはフォウルと再会する一年ほど前からです！」

お兄様はフォウルの存在を確認できていないはずですよ！」

「いや、俺の存在はわかっていたようだ」

「はい。我が主とフォウル様の御父上であらせられるリュウ様の会談によりお互いにお二人のことは認識しておいででした。」

「つまりはだ、俺の力を知りたがっていた魔王が焼き鳥を俺にけしかけ力を確かめようとした、ということか。」

なら、なぜこいつは俺の家族を奪おうとした！」

か、かしこまりました！」
シュバツ！

グレイフィアさんは魔法陣を使いライザー達と共に転移した。

そして最初に戻る訳だが部室の雰囲気は最低だ。

だがその雰囲気をぶち壊したのは他でもない

俺だった。

「はあ〜。
おっばい」

乳道を歩むんじゃ無かったのか!？」

「!!!!!!!!!!」

お、俺は間違っていたのか……………」

「大丈夫だイッセー」。

俺たちが目指すのは乳の道!

道は間違えることもある。

間違えを繰り返さなければいいんだ!」

「……………フォウル」。

俺、フォウルと友達になれて良かった……………」

「友達? 違うな!」

「えっ!?!? で、でも」

「イツセー君最初普通でしたよね？」

「ええ、普通だったわね」

「引き込まれてますね。

何か歌い初めましたし。」

さっきフォウルが心で歌っていたものです。

「そうね……………」

彼もイライラしてるのよ

「「はああああ」

「フォウル？少し落ち着きなさい」むぎゅっ

「む、しかし母さん……………」

「いいから、ね？」

「む、むー！むー！」

「あらあら、いい子いい子」むぎゅ

「凄いわね。」

あの状態のフォウルが大人しくなっ たわ」

「流石母親ってところですかね。」

それよりイツセイ君、相方が急にいなくなって途方にくれていますよ
？」

「はあ、全くあの子は……………」

イツセイ！バカなことやってないでこっちに来なさい。

魔王様の返事がくるまで暇なの。

少しお話ししましょ？」

「は、はい…」

そして各々時間を潰すのであった。

ところ変わって魔王の執務室。

「報告ご苦労。」

グレイフィア、彼はそんなに怒っていたのかい？」

「はい……………」

正直冷や汗が止まりませんでした。」

「君がそこまで言うほどか……………」

参ったな……………」

怒らせるつもりは無かったんだが……………」

「ミリア様とご家族は彼にとっては逆鱗のようです。」

ただ扱いさえ間違えなければ友好的な人物のようですが。」

「……………大切なものを傷つけるものは許さない。」

リュウさんと似ているな。」

「リュウさんとはあの『龍騎士』のリュウですか？」

「君は彼を知っているのかい？」

以前彼との会談の時、君はいなかったはずだが？」

「私が旧魔王派に所属していたときです。」

私達は現魔王派のとある会議に襲撃をかけましたが其処に居合わせ
た『龍騎士』によって敗退しました。

1人の死者もださずに……………」

「そうか……………」

彼は本当に強いからね。」

自慢じゃないが私は強いと自負している。」

が彼には勝てない。」

それほどに彼の

龍の民の戦闘力は高い。

中でも歴代最強の名は伊達では無かったというわけだ。」

「しかしフォウル様は……………」

「みたいだね。」

リュウさんに「俺はフォウルの足下にも及ばない」と言わしめるくらいだ。

謙遜もあるだろう、息子自慢もあるだろう、フォウル君が霸王龍だと言っのもあるだろう。

だがそれでも「勝てない」とはつきり認める存在。

これから彼に会わなくてはいけないが本当に怖いね。怒ってるみたいだし…

でも」

「凄く楽しみだ！

実は私は霸王龍の大ファンでね！！！！」

この後魔王による霸王龍の話を聞いていたグレイフィアは柄にもなく聞き入ってしまった。

それによりフォウルとの約束の時間ギリギリになったのはいうまで

もない。

不死鳥は死にたがり（後書き）

ライザー君きつと救いはあるよ！

魔王様は大ファン。意外な結末（前書き）

すみません。

ちょっと遅れました。

ちなみに戦闘はなしですがフラグはたてたよ。

魔王様は大ファン。意外な結末

ここは魔王の居城。

流石に魔王がそう簡単に魔界をでる訳にもいかずグレイフィアさんの用意した魔法陣でここまで来た。

今ここにいるのは俺、ミリア、ディースさん、魔王、グレイフィアのみである。

リアス達はライザーとのレーティングゲームが決まり早速修行に入ったので来ていない。

そしてライザーだが

「嫌です！ライザーなんか見たくないです！会いたくないです！許してあげますから私の前に来ないで下さい！」

とミリアが言うので帰らせた。

「……………ミリアにここまで嫌われるなんてある意味凄いです？」生理的に駄目です！」……………そうか。

まあともかく今魔王と対面しているわけだ。

「連絡が遅れてすまない。

こちらは何かと忙しくてね。」

「構わん、時間は守られている。」

で、どういっつもりだ?」

「そうです!なんで焼き鳥を私に……」

ミリアが泣きそうになってる……

「いや、すまない。」

ミリアがそこまで嫌っているとは思ってもいなかったものでね。

私は霸王龍の力を見たかったんだ。」

「何故だ?」

「それは……」

「それは?」

「私が霸王龍の大ファンだからだよ!……!……!」

「……」

「……」

「……何か言ってくれないかい?」

「すまん、予想外すぎて反応に困った」

「私事です。」

お兄様は何故フォウルのファンなんですか？」

「私はミリアが生まれる前から霸王龍のお伽噺話が大好きでね！

大人になってからも文献をよく調べたもねだ。

そしてミリアが生まれたことだと思ったのだよ！
チャンスでは？とね！」

「……………それで？」

実際あってみてどうだ？」

あとミリアの件はしっかりと謝罪してもらっぞ。」

「ん？それは勿論私に出来ることはなんでもするよ！

それと君に会えただけでも満足だ！

これで夢がひとつかなったよ。」

「それは良かったな。

では俺の要望は二つ。

ひとつは巨人族の情報だ。
出来るだけ早くだ。

もうひとつは俺と闘う者を用意しろ。
こちらは至急だ」

「ひとつ目はわかった、直ぐに手配しよう。
理由も聞かないでおこう。」

ただ二つ目は理由を聞きたい。
何故かな？」

「簡単な理由だ。」

ミリアはライザーのことをなし崩しとはいえ許したが
俺は許した覚えはない。

だが主の決定だ。

逆らう訳にはいかんだろう？

この鬱憤をはらすには思いつきり闘うのが一番良い。

ゆえにこの元凶であるお前が用意しろ。

まあついでにイツサー達に強者の闘いというものを見せたくてな。

あいつらもレーティングゲームの前に見れば多少なり勉強になる
だろ？」

「なるほど、わかった。」

なら相手は私がしよう」

ほう、魔王が相手か。

確かに魔王なら相当な力があるだろうが……………

「いささか役不足だ」

「なっ！！！！」

驚きの声を上げたのはグレイフィアさんだ。

当然だろう。

自分の主であり冥界のトップの1人『紅髪の魔王』サーゼクス・ルシファーをして役不足と言ったのだから。

だが

「言っただろう？」

俺は鬱憤をはらすと。

当然全力でやるし龍化もする。

魔王1人だと死ぬぞ？

せめてもう一柱用意しとけ。」

ん？魔王の様子がおかしい。

俯き体を震わしている。

俺の発言を侮辱ととったのだろうか？
だが事実なのだからしょうがない。

そして魔王が顔をあげた。

目を輝かせて！

「素晴らしい！

霸王龍の力をこの身で味わえるだけでなく、君の龍化した姿も見れるのか！？」

夢が二つも一気に叶うとは！」

むしろ喜んでいる。

ミリアはなれているのかいつものように微笑んでいる。

ディースさんは魔王の反応が面白いのか笑いをこらえている。

グレイフィアさんは啞然としている。

初めて見たときはクール美女のイメージがあっただが今日は印象と違う顔を見るな。

可愛いと思ったのはここだけの話だ。

俺はと言うと

「魔王、お前はさっきから夢夢言っているがまさかお前の夢とは俺関係か？」

そのためなら私に出来ること全てを行おう!」

こいつは……………

「あ、あんた、あはははははは!!!!!!

冥界のけ、権力をつ、つか、使ってもふ、フォウルはははははは!
背中にの、乗りたいのかい!?

あははははは!!!!!!」

「勿論だ!」

馬鹿なのか?

「いゝひはははははははははははははははは!!!!!!!!!!

ま、魔王に、こゝ、殺されるゝ!

ひーひー腹痛いいいいいい!!!!!!!!」

デイスさんは笑いすぎだ。

「……………まあいいだろう」

「本当かい!?!」

「ただし「条件だろ?」……………わかっているではないか。」

「そうだね。」

『我目覚めるは始まりの龍なり！』

星と生まれ

星を護る

流星ことごとくを葬り

汝に終わりの始まりを告げようか！！！！』

「やばい！フォウルは全力をだすよ！

皆このフロアからにげな！」

「デイス様でしたか？

何故です？

この部屋はいくら龍でも10体は入れる広さがありますよ？」

「大きさはじゃないんだよ！

むしろ霸王龍はそこまで大きくない！

問題はあの言霊だよ！

普通だったら龍化に言霊はいらない。ただフォウルはまだ完璧に力をコントロール出来てないから自分にロックをかけてるんだ。

あの言霊は解除の言霊なんだよ！

そしてあいつの本気は魔王でも相手にならない。

つまり「

「つまり？」

私フオウルが龍化するのすら見るの初めてなのに！

ディース先生の話し聞いてるだけで怖かったんですよ！？

フオウルちよつと暴走してましたし！」

「いや、スマン。

だがフオローはしたぞ？

それに俺がディースさんやミリアを傷つけるわけないだろ？」

「そんなことはわかってんのさ！

そついうかと言つてんじゃないんだよ！

だいたいね……………」

ディースさんとミリア様の抗議が聞こえた。

私はその抗議が向いてる先に目をむけるとそこには龍がいた。

薄燈色の身体にスマートなフォルム。

それに反して腕は巨大。

その籠手のような手は地面に着くほど大きく肘から先は盾の様に肩まで伸びている。

籠手の様な手の中央には宝玉の様なものが埋まっつていてその腕を飾

りたてているがただの飾りなわけがないと本能が告げている。

そしてその腕の存在は全てを葬り、全てを護るイメージを沸かせた。

頭に生える3本の角。

2本は動物の耳のように生えていて短く前に向かって太い。

もう1本は頭の延長のように大きい。

後頭部にあるその角はまるで1本のランスのように頑強だ。

そして何より背に広がる一対の大きな翼。

空の王者の証。

全てが合わさった存在が目の中にある。

龍にしては異質。

龍にして龍にあらず。

だが誰が見ても龍と答えるだろう。

その存在が龍。

それだけの存在感があった。

神々しいまでの姿は味方には希望と安心、勝利を。

敵には絶望と不安、敗北をあたえるだろう。

私はその姿に見とれていた。

「美しい……………」
ふと声が聞こえた。

声の主は魔王様。
我が主、サーゼクス・ルシファーだ。

その顔は先ほどまでの子供の様な無邪気なものでなく。

聖人を目にした信者のようであった。

そしてそれは私も同様であろう。

そして龍が動いた。

S i d e o u t

「惚けるのはいいが私の背に乗りたいのだから？
魔王早く乗れ。」

む、この姿になると口調が昔に戻るな。

「 はっ！

し、しかしいいのかい？

私が願ったこととはいえ……………」

全く面倒だな。

我がこの姿になると大概先ほどのディースさんみたいに抗議してくるか、

魔王のような反応だ。

「 良いからこの姿になったのであろう。

良いから乗れ。

お前の見たことのない世界を見せてやる」

「……………わかった。

では失礼するよ。」

そういつと魔王は俺の背に飛び乗った。

緊張しているのが分かるくらいぎこちない乗り方だな。

「魔王、私の首に跨がれ。

それだけでいい。

お前は何もする必要がない。

後は我がやる。

我が乗せる以上、快適な空の旅に招待してやるから感謝しろよ?」

行くか。

天井は……………つむ、さつき
の龍化でこのフロアが吹き飛んでいるな。

最上階で良かった。

弁償などといわれても払えないからな……………。

そして我が飛び立とうとしたとき声がかげられた。

「お待ち下さい。

あなた方で勝手に話しを進めないで下さい。」

グレイファイアさんだ。

いかん、忘れてた……………。

「グ、グレイファイア？」

わ、私の夢を叶えるために、手伝っては、くれないか？
彼女の意思を無視していた……………

「サーゼクス様は黙りなさい。」

「うっ！」

……………弱いな、自業自得だが。

「別に拒否しようとしているわけではありません。

ただ条件があります。」

「勿論可能な限り聞くが……………」

条件とは何かな？」

「サーゼクス様は当然です。

私の身体を売ったのですから」

「うっ」

そう聞くと悪いことをしたな……………

半ば強引に我が進めたからな。

「後フォウル様にもありますが宜しいでしょうか？」

「構わん。」

我が出来ないのは金の用意くらいだ。

要望を言え。」

「ではサーゼクス様から、
2週間の休暇を頂きます。」

ただしフォウル様に私を売った日を除いてです。」

「……………わかった。」

ただその休暇はリアス達のレーティングゲームが終わってからでいいかな？

今君に抜けられると厳しいのでね…………」

「構いません。」

後その2週間私は貴方と関係のない1人のグレイフィアに戻らせて頂きます。

眷属悪魔でもなく、メイドでもなく、
貴方の妻でもない。

……………サーゼクス、私はこれでも怒っているのよ
？」

「わかった。
寂しいがそれが君の要望なら仕方ない。
受け入れよう。」

2週間グレイフィアさんはフリーになるのか……
と言っか、魔王の妻だったとは……

魔王は自分の妻を売る。
まさしく魔王の諸行だな（笑）

「そしてフォウル様。
貴方の2週間をもらいます。」

そして私を貴方の背に乗せて世界を回って欲しいのです。」
なんと

「そんなことでいいのか？」

「はい。」

その分2週間は私の言いなりになって頂きますよ？」

「構わん。」

何処にでも連れて行ってやる。」

「決まりです。」

頼みましたよ？

では行ってらっしゃいませ。

後のことは此方で処理しておきますので心おきなく空の旅をお楽しみください。」にこっ

ぞおおお!!!

なんだこの寒気は!?

綺麗な笑顔なのだが背筋がぞっとしたぞ!

それは我だけではなく

「じ、じゃあグレイフィア行ってくる。

あ、後はたのんだよ?」

魔王と霸王龍に恐怖を与えるとは……

2週間が少し怖くなったぞ……………

「で、でわフォウル君、行くっか」

「う、うむ」

そうして我らは飛び立った。

我らは今冥界の空を飛んでいる。

最初は魔王もグレイフィアさんが怖かったらしく元気が無かったが
今では

「ははははは！」

凄い！これが霸王龍の見る世界か！

景色の流れが早いな！

それなのに私に負担はない。

そして負担はないのに風は感じる！

どういふこと何だい？」

まるで子供だ。

「スピードはまだまだでるぞ？」

後負担がないのは我が力場を展開しているからだ。」

普段は展開しないが快適な空の旅に招待してやると言ったのだから当然だな。

グレイフィアさんのおっぱいのために我は全力をつくす!!!!!!
!!

「なるほど、君が力場を作っていたのか。
すまないね。」

龍はこの景色を常に見ているのか……

ん？龍……………

そうだ!!!!

君の対戦相手の候補が一柱いる!」

「む？本当か？そいつは強いのか?」

「勿論だ!

彼は最上級悪魔だし君と同じドラゴンだ!

『魔龍聖タンニーン』
悪魔にして龍。

彼のーげ「タンニーンだと!？」

彼を知っているのかい？」

まさか、タンニーンは生きていたのか!
ドライブ達のように神器に封じられたと思っていたぞ。

「知っているも何も奴は我の子だ。」

そうか、奴は生きていたのか……………」

「そうだったのかい!？」

ならせつかくだ!
タンニーンに会いに行くかい？」

「それは良い!
我も久々に我が子を見たいゆえ急ぐぞ!
場所は何処だ!」

あっちだと言う言葉の方向に我は全力で飛んだ!

その間魔王は

「魔王サーゼクス・ルシファーだ。」

突然ですまないがタンニーンの所に案内してくれないか？」

「魔王様！……！」

か、かしこまりました！

こちらです！」

警備をしていた龍について行くと懐かしい顔の、されど記憶より大きな姿の我が子がいた。

「いきなりだなサーゼクス。」

何かなよう………親父！？」

「うむ、タンニーンよ久しいな。」

随分と大きくなったようだな。

元気そうで何よりだ」

「やあタンニーン。
いきなり悪いね。」

「サーゼクス！！」

どういうことだ！！???

何故親父がここにいてお前という!?」

やはり混乱するか……

だが久々の親子の再会なのに驚いてばかりだな。
父はいささか寂しいぞ?

「ああ、それはだね

と言っわけだ」

《説明中》

「ぬ、サーゼクス。

お前は馬鹿だろ?

そして親父は相変わらずだな。

むしろ龍人になったことで悪化したたる?

昔はお袋だけであつたのに今は見境なしか?」

「我は我だからな!

それに見境無しではないわ!

手をだしているのは認めるが相手の了承あつてのこと!

所謂和姦だ!」

我は胸をはった!!!

「親父よ、自慢気に言うことではないぞ……………」

「変わらないとは何がだい？」

む、それはだな

「我は「親父が女の乳が好きだと言う話した」……………父のセリフをとるでない……………」

む、魔王が震えている？

「き、君は女性のバストが好きなのかい？」

プルプル震えながら聞いてくるくる魔王。
どうしたのだ？

タンニーンを見るとタンニーンは「さあ？」と答えた。

まあ良い。

我は乳道の探求者！

おっばいで嘘は許さない！！！！

「当然だ！

おっばいのためなら世界を敵にまわしてやるわ……………」

「……………何故だ！俺は何故これの子なのだ！

乳のために世界を敵にまわす親などいやだ！」

「馬鹿ものがあああああああ！……………！……………！
我はタンニーンをなぐるうとし、

「うおおおおお！……………！……………！

親父！何をする！？

危ないではないか！」

避けられた！

やるようになったなタンニーンよ！

だが……………！

「黙れ！

汝はなぜおっぱいの素晴らしさがわからん！？」

「わかるはずないだろ！

俺は龍だぞ！

人に興味ないわ……………！」

ま、まさか！？

バストが！！！！」

我と魔王の目が合う。

我は、我はどうやら勘違いしていた！

考えてみれば分かることだったのだ！！

グレイファイアさんは美女だ。

そしてあの凶悪おっぱい！

あれをもつものを妻にするのだ！

おっぱいが嫌いな訳がない！むしろ好きに決まっているではないか！

「魔王、いやサーゼクス……………」

「フォウル……………」

「「同志よ！！！！」」

我に友が増えた瞬間だった！！！！

「勝手やっている！

「はあ」

タンニーンは呆れていた。

ちなみにタンニーンは我と闘うのを認めた。

日時は明日に行く。

なかなか楽しみだ！

だが今は！！

「はははははは！

行くぞサーゼクス！

我とともに乳道を！

そうだ！今度お前に紹介したい猛者がいる！

そいつはリアスさんの眷属なんだが

ドライグを宿すものだ！！！」

「何と！！！！！！

赤龍帝はバスト好きなのかい！？

これは楽しくなってきた！

「それはそれ！これはこれ！」

我らの気持はひとつになったのだった。

魔王様は大ファン。意外な結末（後書き）

はい！魔王様も仲間入り！おっぱい仲間はまだ増えます！

少し今回の補足です。

フォウルは説明にあつた通り力を完全に制御が出来ていません。だから暴走のことを考え自らの龍化にロックをかけました。

ぶっちゃけこれは原作の『覇龍』のセリフが好きだったので入れたかったから作つた設定です。

あれカツコイイじゃん？

ちなみに『霸王龍スターダスト・インフィニティ』と名付けた理由ですが

フォウルは過去に流星から世界を護るのに全力をつくしました。

そこから全力を出す龍化を使うときのロック解除の技名に『無限の星屑』スターダスト・インフィニティと『霸王龍』を掛けてみました。

補足以上！

霸王籠、闘う（前書き）

すみません。遅くなりました。

エロを期待して頂いている方すみません。エロはないです。

今回は戦闘です。

……戦闘難しかった……

拙い文章ですが楽しんで頂けたら幸いです。

霸王龍、闘う

今俺の前に二つの強大な存在がある。

ひとつは魔王。

『紅髪の魔王』サーゼクス・ルシファー！

消滅の魔力をその身に宿し使いこなす存在。

ひとつは龍。

『魔龍聖』タンニーン。

前世での俺の子で元龍王の一角で転生悪魔でありながら最上級悪魔に登り詰めた。

その二柱と俺は対峙している。

闘うために。

場所は草原。

ただし冥界ではなく地上。

正確に言えば地上の草原を模した仮想空間だ。

俺たちが闘えばただではすまないゆえ、レーティングゲームで使われる空間をしようすることになった。

この空間の外には数多くの観客がいる。さもあるう。闘うは魔王に籠、しかもその二柱が闘うのではなくあくまで対戦相手なのだ。

そして対戦相手は俺こと『霸王龍』。

黙示録よりさらに前に星と共に生まれた存在。

全ての龍の祖。

始まりの龍。

神話で神話と語られるもの。

そんな者の闘いだ。興味のない者などいないだろう。

観客の中に他の魔王もいるらしい。それが何よりの証拠だろう。

ちなみにグレモリー家とグレモリー眷属はVIP席だ。

当然であるう。

対戦者が両者共にグレモリー関係者なのだから。

さて、そろそろか。

「では闘いを始めようか……………」

フォウルが闘うだけで俺としてはびっくりだが理由を聞いて成る程
と思った。

ライザーの件での鬱憤をはらす。
納得だ。

俺だってあいつにはムカついているからな!!!

ライザーがフォウルにボコられてすっきりしたのは俺だけではない
だろう。

それはともかく対戦者が凄い!

部長のお兄さんで魔王様のサーゼクス・ルシファー様と最上級悪魔
の名前は忘れたがドラゴンだ。

魔王様が強いのはわかる。

だって魔王様だし?

そしてあのドラゴンさん。

なんとドラゴンさんの力は魔王様クラスらしい。

フォウルが強いのはこの前のことでよくわかったが、流石に魔王様
クラス二柱相手だと無理じゃね?とか思っているのは俺だけではな
いだろう。

現に観客の中には「あの方達に挑むとは馬鹿だな」などと揶揄して
いる連中もいるくらいだ。

それよりもだ！

この闘い良く見ておけ！

これから始まるは強者の闘い。

お前が赤龍帝を宿す限り避けられない闘いがある。

だがお前は弱い！

だから見る！学べ！盗め！そして身につける！！

龍の闘いがどういうものか身に、魂に刻め！！！！

では、始めるぞ！！！！！！

「「来い！！！！」」

闘いが始まる。

S i d e o u t

闘いが始まった。

先手は俺！狙うはサーゼクス！

俺は踏み込むとほぼ同時に懐に入っていた。

サーゼクスには見えていなかったらしいが知ったことかと拳を奮つ。

しかしサーゼクスも流石。

気付くと同時にガードをして後方に飛ぶことでダメージを巧く消した。

だが完全に消しきれなかったのだろう、見事に吹っ飛ばされた。

しかし次の瞬間タンニーンの巨大な火球が襲ってきた！

俺は龍気を拳に集め

「どらああああああ！！！！！！！！！！」
殴った。

火球はそのまま霧散して消えた。

「ちっ！親父はその姿でもデタラメか！」

「いきなり懐に入り込まれたときは流石にヒヤッとしたよ……だがこれからはさせない！」

「お前らだつて十分にデタラメだ。

タンニーンの火球はあのとときの流星のひとつに匹敵するし、サーゼクスはあそこで決めるつもりだったのだぞ？」

でもな

「だからこそ本気でやれる！！！！」

行くぞ！！！！」

俺は龍気を高め

「ボルケーノ！！」

龍人魔法を放った！

奴らに向かい放たれた巨大な炎の塊。先ほど放たれたタンニーン
の火球がサッカーボールに見えるほどの大きさ。

「！！！！！！」

タンニーンは瞬時に空に逃げたが、サーゼクスはそのまま飲み込ま
れたかの様に見えた。

しかしサーゼクスは無傷だ。

奴の周りには小さな黒い球体が無数に舞っていた。

消滅の魔力。

それがあれの正体だ。

あれで己の周囲の炎を削りとったようだ。

「次はこちらの番だ。」

サーゼクスが球体を放ってくる！

あれに触れてはいけない！！！！

襲ってくる球体を避けつつ俺は

「テンペスト！！！！」

「危ない危ない。」

危つく燃えるところだった……………」

「俺もだ……………」
数多くの敵を燃やしつくしてきたがまさか自分にもその恐怖が迫るとはな……………」

流石に無傷ではないが両者大したことなさそうだ。

「やはりお前らも十分にデタラメだ。」

今のは地上に放てば半径一キロくらいは燃やしつくす威力があるのだぞ?」

「そこはサーゼクスのおかげだ。」

「君がブレスで攻撃の威力を弱めてくれたからだよ。」

しかしフォウルは龍人魔法の他に魔術まで使えるのかい?」

「補助程度だがな。
さあ、もういいだろう。
続きといこうか?」

そして始めと同じようにサーゼクスの懐に入り込み

「もう効かないよ」それにサーゼクスがカウンター気味に拳を合わせてきたが

「残念。残像だ！」俺は既に後ろに回り込んでいた。

「な、何だ」だらあっ！！！！」がはあっ！！！！！！」

ドガアアアアン！！！！

拳を放ちサーゼクスは地面に叩きつけられた。

ここで決める！！！！

「アースクエイク！装填！拳」

龍人魔法を拳に宿して

立ち上がるうとするサーゼクスに

「アースクエイク・インパクトオオオ！！！！！！！！」

ズドンッ！！！！！！

「ガッツツツ！！！！」

地震の力を乗せた拳を放った。

そして……………

『魔王、サーゼクス・ルシファアー。
り、リタイア！！！！！！』

1人倒した。

*

サーゼクスを倒した後、当然タンニーンとの闘い。
2対1でサーゼクスを倒したのだからタンニーンを圧倒すると思われたがそんなことはない。

理由はある。その体格だ。

いくら俺の攻撃が規格外でもあちらは龍。

タフさが尋常ではない。

それに加え空を自在に駆けほとんどの攻撃をよけ時折反撃をしてくる。

サーゼクスがいなくなったことで遠慮がなくなり、俺らの闘いは災害レベルになっていた。

この闘いも我が子ということもあり楽しいのだが

「らちがあかないな、タンニーンよ」

「そうだな。」

そう、お互いに決定打に掛けていた。

俺の攻撃は威力は十分、しかしスピードに掛ける。

そしてタンニーン、その攻撃はスピードは十分、だが威力に掛ける。

ここで注意しておく、別に俺らの攻撃は遅い訳でも威力がない訳でもない。

お互いには効きにくいだけであり並の者なら一撃で終わるだろう。

そろそろやるか。

「タンニーン、そろそろ良い頃合いだ。久々に父の力を見せてやる。」

「!!!!!!」

させると思つか!?!」

それもそうだがタンニーンよ。

忘れたか?俺の名を!

「俺は『霸王龍』!!」

お前が力でくるなら押し通るまで!

俺の覇、受けてみる!!!!」

さあ、終わりの始まりだ!!!!

暴走の危険があるゆえ力を抑えているだけだ」

「……………我が父ながら化け物だな」

「己の父によく言っわ。」

汝とて十分に化け物の癖にな。

まあいいだろう。

終わりを始めようか！！！！」

我は言い終わると同時に殴りかかった！

「ぐっ！龍で殴りかかる奴なんて親父くらいだろう！！！！？？？」

そうだろうな。

龍のなかでもこのような腕をしているのは我だけであるうからな。
そして人の形を得て体術を学んだゆえの攻撃方法だ。
故に……………」

「よく受け止めた！

だが、これで終わりと思うな！！！！」

我は受け止められた腕に力を込め、殴り飛ばした。

「うおっ！！！！」

くそっ！なんてバカ力だ！」

「あまり騒ぐからだ」

「誰のせいだと……………」

「我だな!!!」

「自慢気に言うなあ!!!!!!」

くそっ!もうヤケクソだっ!

俺の全力で消し飛ばしてやる!!!!!!」

むう、からかい過ぎたか。

だが全力か!

「面白い!

なら我も全力を持って相手しよう!!!!!!」

我もタンニーンも瞬時に力をためて

「がああああああああ!!!!!!」

「『霸王龍の息吹』(カイザーブレス)!!!!!!!!!!!!」

必殺のブレスを放った。

タンニーンは先ほどより更に巨大な炎球の連撃

しかし私のブレスはその全てを飲み込む強大で巨大な光の奔流!

私のブレスがタンニーンの火球連撃を飲み込み奴にせまるが
飲み込まれなかった一撃が私の足下を崩した!

「ぬおっ!!!!!!」

霸王龍、闘う（後書き）

いかがでしたか？

感想などいただけると幸いです。

次回！グレイフィアとむふふの予定。

もしかしたら主人公はまたキレるかも？

技説明（前書き）

龍人魔法やつと出せた！

技説明

龍人魔法

龍人が使うことのできる魔法で正確には龍気と人の発声器官ドラゴンのオーラが必要。故に龍人ではないがニーナ（フォウルの加護により）も使える。勉強すればイツセイやヴァーリも使えるはず。もしかしたらオーフィスも？

特徴：龍気と言霊を合わせることが必要で扱いが非常に難しい。龍気龍気の量と形を合わせ言霊をのせるのでコツを掴むまでが大変。

その代わりに一撃の威力はどの魔法や魔術より高い。

龍人がみなフォウル並の威力を持っているわけではない。

難点は連続使用が難しい所。

フォウルは他の魔術、魔法形態をとり入れることで連続使用なみの攻撃方法を得たがこれは速度が若干遅くなる。

使用例

『ボルケーノ』

巨大な炎の塊で一撃はタンニーンの火球以上（タンニーンが少し力

を加えればそれ以下)

『テンペスト』

強烈な暴風。

サーゼクス達には足止め程度にしかならないが実際には足止め所か軍隊を殲滅できるほどの威力がある。

『アースクエイク』

大地震、正確には大地震の振動を起こす。

サーゼクス、タンニーン戦では拳に纏う形で使用。(イメージとしてはワ ピース白髭)

合成

フォウルがデイスより教わった技術。

龍人魔法の強化と弱点を少しでも埋めるためのもの。

他の形態と合わせることで戦争クラスの破壊をもたらす。

使用例

「術式合成。 魔術魔法陣展開。 龍人魔法ボルケーノ固定」

「合成完了。」

撃ち抜け！ファイア！！！！！！」

イメージとしては某リリカルの金髪ツインが使った魔法。
または某英雄王の宝具です。

龍化

龍人が龍になること。

普通の龍化には言霊は必要ないがフォウルの場合力を制御仕切れて
ないためにロックをかけた。

これは暴走したとき対策で言霊を唱えずに龍化したときの力は全力
の5割ほどでその辺の上級悪魔より少し強いかな？程度です。

ちなみにロック解除の言霊は

『我目覚めるは始まりの龍なり！』

星と生まれ

星を護る

流星ごとごとくを葬り

汝に終わりの始まりを告げようか！！！！！！』

『スターダスト・インフィニティ
覇王龍!!!!!!!!!!!!!!』

です。

ぶっちゃけるとこの設定は原作の『覇龍』がカッコイイと思ったのでいれました。

とりあえず今回は以上です。

技説明(後書き)

次こそはいよいよ

イツセー泣く、グレイフィアは鳴く(前書き)

はい！またもや暴走です！

やっぱりエロは書きやすいなあ

ちなみにこれは誤字を見つけたので編集したものです

イツセー泣く、グレイフィアは鳴く

イツセー side

フォウルの闘いが始まった。

正直言えば俺はフォウルが負けると思っていた。

ミリアちゃんやニーナ先生、ディース先生は余裕そうだが多分みんな思っていたはずだ。

つーかミリアちゃんは対戦者がお兄さんなのにあの余裕そうな顔って何？

まあともかく俺たちはフォウルがどんな闘いをするか見ていた。だが始まった瞬間俺たちはフォウルを見誤っていたことに気付いた。

フォウルが何か言った瞬間フォウルが消えサーゼクス様の懐に入り込み殴り飛ばしていた。

その後は凄まじいの一言時には殴り、蹴り、避け、受け、捌き、魔法を使った。

そして強烈な一撃が魔王様に入り

『魔王、サーゼクス・ルシファア。
り、リタイア！！！！』

ま、魔王様がやられた！？

まわりも物凄くざわついている。

当然だ！自分達のトップがやられたんだから！

「……………部長」

「な、何かしら」

部長も混乱しているようだがなんとか立て直したようだ。

「フオウルでデタラメですね。

後勉強しろとか言っていましたか……………」

動きが速すぎてわかりませんよおおおおおおお！！！！」

「……………イツセー、大丈夫よ。

私も見えないわ。

ちなみに祐斗はどう？」

「僕にはかろうじて見える程度ですね。」

木場でかろうじてかよっ！！！！

「そう、なら朱乃」

「はい？」

「あの魔法防げる？」

「……………5発が限界ですね。」

マジかよ……………」

「なら、子猫」

「……はい。」

「フォウルの体術に耐えられる？」

「……無理です。」

おいおいおいっ！……！！

「………なら部長は魔王様見たいにあの戦艦砲撃みたいな攻撃防げますか？」

「無理ね」

そうですか………

「イッセー、みんなも聞いて。

この闘い、はつきり言って次元が違い過ぎて勉強にならないわ。だから映画をみる様な気持で見ましよう？

修行の合間の娯楽とでも思っつてね。

後は世界のトップの力を頭に焼き付けましょ！」

「………はい！」

そして俺たちは観戦にうつった。

その後も凄まじい。

フォウルが龍になった！

何あれ！？何で龍になってんの！？

「……か何あの手！？めっちゃ凶悪ななんだけど！？」

「部長…………… フォウルが、フォウルが龍に……………」

俺はたまらず部長に聞いた。すると

「あら？イツセーは知らなかったの？」

龍人は龍に成れる一族よ？

ちなみに聞いたことあるでしょうけどフォウルは『霸王龍』という最初の龍の転生体。つまりは全ての龍や龍人の神みたいな存在よ。彼は生前この星に降り注ぐ流星群から星を護り眠りについたと言っ
わ。

この話しは有名でお伽噺話になっていて、神話の中でも神話として語られているの。」「

マジかよ……………」

フォウルってそんなに凄いやつだったのか……………」

普段があれだからなあ……………」

そうこうしているうちに戦闘が始まった。って殴りかかったあああああ
ああ！？」

龍だよ？ドラゴンだよ？i t i s d r a g o n だよ？これは
ドラゴンです、だよ？

龍が体術使うとかどんだけなのさ！！！！

っーかつよっー！

相手のドラゴンさんボロボロじゃん！

あっ、なんか最後っぽい感じになってきた！

恐る恐る上を見た

天井、と言つか俺より背の高いものがない。
壁すらない。

試しに頭を触った。
毛はあるが一部短くチリチリしている。

周りの人達を見た。
皆気の毒そうな顔をしている。

俺は結論に至った。

つまり、フォウルの破壊光線 仮想空間破壊 何かこつちに来た
俺の頭上を通りすぎいいいいいいいいいやああああああ
ああああああ!!!!!!

考えにいたり俺はガタガタ震え出した!
当たり前だ! だってあの破壊光線が俺のあ、ああああ頭のすす
すすすぐ上を!!!!!!

「ぶ、ぶ、ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ部長?
おおおお俺、俺、俺、のあたあた頭は?」 凄くどもった。

「……………大丈夫よ、イツセーは生きているわ!

……………髪の毛が一房焼かれたけど……………」

あああ！？お前にわかるか！？あれが頭のすぐ上を通り過ぎる恐怖を！！！！！！

あとちよつとずれていたら俺の頭君は永久に体ちゃんとサヨナラしてたんだぞ！？

つーかなんだよあれ！？

あれですか？どっかの国の最終兵器ですか！？

宇宙戦艦の主砲ですか！？

1人で世界滅ぼす気がこの野郎おおおおおお！！！！！！

！！！！！！

うわあああああああああああああああ！！！！！！！！！！

！！！！！！

ぐう！な、何も言えん！

「あんな、イツセーよく聞け？

あれはちよつと調子に乗ったというか、テンションが上がったと言
うか、魔がさしたと言うか……………すみません。」

「うるせえええええええええ！！！！！！

魔がさしたり調子に乗ったで殺されかけてたまるかよおおおおお
お！！！！！！

つーか変身とけよ！怖くてそっちみれないんだよ！！！！」

むっ、それもそうか！

なら

シユバアアアアアア

光が我を包み晴れると我は俺に戻った。
全裸で

「イツセー、戻ったぞ」

イツセーがこちらを見て

「何で全裸なんだよおおおおおおおおおおお！！！！！！！」

「仕方なかるう？」

俺ら龍人は龍化のさい龍の身体を纏うのでなく体を変化させるのだから服が弾け飛ぶのは当然だろ？」

俺が堂々と胸をはり手を腰にあてていうと

「自慢気に言うなあ！後隠せよ！！！！」

でかすぎて嫌でも目につくんだよ！！！！！！

つーか周りの人を見ろよ！

赤くなってフリーズしてんだろ！」

むう？あつ、本当だ！

つーかミリア！ディーヌさん！母さん！したなめずりをしてこちらを見るな！！！！

ちよつと怖いだろ！！！！

あつ！待て！引きずるな！

なに？着替えを手伝う？助かるが今は、あつ！あああああああ

ああああああああああ！

こうして俺はミリア達に連れてかれた。

イツセー、本当にスマン……………

*

翌日俺はサーゼクスの居城に来た。

……………あの後何があったかは言うまでもないだろ？いやんあはんうつぶんごちそうさまでした、だ。

まあともかく今日は朝早くにタンニーンの見舞いに行って散々愚痴られた後、そのままサーゼクスの見舞いと約束を果たして貰いにきたのだ。

むふふ、グレイフィアさんのおっぱい……………

あーはっはっは！

楽しみだなー！！

直ぐの未来に心を弾ませているうちにサーゼクスの部屋についた。

コンコン

「どなたかな？」

今日誰とも会う約束は無かったと思うんだが……」

「俺だ、フォウルだ。」

入ってもいいか？」

「フォウルかい！？

ぜひ入ってくれ！」

部屋に入るとサーゼクスがベッドから身体を起こした状態で出迎えてくれた。

どうやらさっきまで寝ていてグレイフィアさんに世話させていたようだ。

「見舞いと約束を果たして貰いに来た。体はどうだ？」

「まあ見ての通りだね。」

今日は1日安静にしていれば明日から問題ないそうだ。

それとこのタイミングでくるかい？

敗者にムチうつようなことは止めて欲しいんだが………」

サーゼクスが引きつった笑顔で言う。

グレイフィアさんは真っ赤だ。

「知らん、約束は約束。」

今日1日借りていくぞ。

どうせ今日は1日お前の世話の予定で他に仕事はないのだから？」

「そうなんだが……………」

「ならいいだろ？」

ではグレイフィアさん、行こうか」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！

そうだ！私の世話は誰がするんだい！？」

「他のメイドにやらせる」

俺はサーゼクスの言を切り捨てた。

そしてグレイフィアさんの手を引き行こうとする

「待ってくれ！」

まだあるのか？

「……………避妊はしてくれよ？」

俺とグレイフィアさんはジト目でサーゼクスを見て

「……………行くか」

「……………はい」

部屋を後にした。

*

場所は変わりサーゼクスの別荘。

流石に朝から俺とグレイフィアさんという有名なものがホテルなどに行けばスキヤンダルも真っ青な状態になる。

ゆえに簡単に転移でき人が少ない別荘を選んだ。

つかグレイフィアさんがさつきからガチガチでめっさ可愛いのだが……………

部屋に入るとグレイフィアさんが口を開いた。

「……………貴方は本当に宜しいのですか？

ミリア様は何も言われないのですか？

それに私はサーゼクス様：いえ、サーゼクスを愛しています。子供もいます。

条件をつけて納得したとはいえ、心の奥底では貴方を拒むかもしれません。」

それでも、と繋がりそうだが俺は人差し指のはらをグレイフィアさんの口に当て制止した。

「なんら問題ない。

ミリアのことはお前もわかっているだろう？

あの性格だ「また家族が増えますね」とかいいそうだ」

「……………おっしゃられそうですね。」

「それにサーゼクスを愛していると言ったが、だから何だ？俺だってミリア達を愛しているぞ。」

まあ俺は龍人ゆえこの辺の考え方からお前達とは違うのだがな。それに子供か？

気にするなどは言わんが今は忘れる。

今日この時この場所ではグレイフィアさんはただの女だ。

後、俺を拒むかもしれないと言ったが

俺が相手が拒むような中途半端なことをすると思っか？」

グレイフィアさんは真っ赤になりうつむいている。

「……………わかりました。」

ですが私が嫌と感じたら直ぐに止めて頂けると約束して下さい」

「わかった。」

ただその場合、グレイフィアさんとの約束はなくなりサーゼクスとの約束は代わりのものをいただくぞ？」

「それで構いません。」

では……………」

そう言うとグレイフィアさんは服を脱いだ。

*

あれから数時間がたった。

結論から言えば

特別調教モード突入！！！！

成功だ！！！！

パチンコネタ

である。

つまり

「はあはあ、もっと、もっと下ろせ。」

「はあはあ」

となった。

さっきからずっとこの調子だ。

ちなみに

アワビちゃん

あーそーぼー

やーだーよー

には一切手を付けていない。

俺はお菊ちゃんとしか遊んでいない。

それでここまで乱れるとは

流石俺

と言いたいがグレイフィアさんのある意味才能もあるだろう。

ちなみにグレイフィアさんは身体中真っ白だ。

とくにお菊ちゃんは

うええええカ ピスのみすぎたあああ

状態である。

……… 5回こぼして、10回飲ませればそうもなるわ。

「もう、駄目です!」

ぬっ!こらお菊ちゃん!勝手に食べちゃ駄目でしょ!そんな悪い子にはお仕置きです

1日はまだまだ長い。

*

あれからさらに数時間。
時間も残すところ4時間ほどだ。

グレイフィアさんと言うと……

「あ、あふ。はあはあはあはあ、ひう、ふうふう、す、凄い。」

絶賛痙攣中だ。

「グレイフィアさん？
どうだった？」

何がと言わない。

「は、はい。凄く気持ちいい”マッサージ”でした。」

ほう、”マッサージ”と言うか……

うまい逃げ口だ
なかなか柔軟な考えをするな。

「グレイフィアさんさえ良ければ何時でもするぞ？」

試しに誘ってみると。

「は、はい。また、お、お願い、します／＼／＼／＼／」

顔を真っ赤にし、体を痙攣させながらも答えた。

よし！またグレイファイアおっぱいを楽しめる！

うおおおおおおおおお！……！！……！！
テンション上がったきたあああああ！

おっ？息子よ、お前もか！ならば

「そんなに良かったなら残り4時間弱、最後まで楽しめ！」

「えっ？ちょ、まつ！少し休み、あああ、だめえ、ひっ！ひやあああああああああ！！……！！」

このあとマイサンとお菊ちゃんは時間一杯遊び続けた。

ちなみに全てが終わわり身綺麗にしてからグツタリしたグレイファイアさんを抱えて送り届けるとサーゼクスが待っていた。

「おかえり。で………どうだった？」

何がと言わない

勿論

「最高だ！

おと安心しる避妊は完璧だ。

というより手をだしてない。」

おっ？サーゼクスが驚いている

「君がそれで満足するのか………？」

「馬鹿にするな！
お前もわかるだろ！？
俺は乳道を志すもの！
おっぱいだけでも十分満足できるわっ！」

「それはわかる！
わかるがグレイフィアはあれだから……………」

「だから代わりにア○○セ○○スだ！」

ふふふ、サーゼクスよ……………
約束は守っていたぞ？

サーゼクスは衝撃をうけていたようだがニヤリッとして

「なら改めて聞こう！
グレイフィアは！？」

「最高！」

「バストは？」

「最高！！！」

「ア は？」

「最高！」

「総じて？」

「最高おおおおおおお！！！！！」

サーゼクスも何か吹っ切れたようだ。

「サーゼクス……………」

「何だい？」

「お前はいい妻にめぐり会えたな！」

サーゼクスは嬉しそうに

「ああ！！！！！」

そう答えた。

その後俺とサーゼクスは笑い、歌い、踊り続け、目が覚めたグレイ
フィアさんがつつこむまで続いた。

……………グレイフィアさんは俺に対するつつこみもサーゼクス同様
に遠慮がなくなったのはここだけの話し……………

マジいてえ……………

イツセー泣く、グレイフィアは鳴く（後書き）

さてさて、いかがでした？

個人的には18禁一步手前だと思ってかいてます。

まあ作者は変態なんで基準がずれてるかもですが……

さて今回は既にイツセー達はライザーとの対決を終えた所からスタートします。

時系列では三巻あたりです。

それではまた次回！

あれから、そして日常（前書き）

色々と考えた結果すこーし自重しようかなと思います。

ただし！おっぱいは譲らないぞー！

あれから、そして日常

俺がグレイファイアさんとちよめってから時間たった。

まずはリアスさん達。

ライザーとの鬪いに破れた。

正直見てられなかった。

リアスさん達が弱いからではない。

むしろ善戦していた。イツセーが作ったドレス・ブレイクは最高の技だ！俺も何か作るうかと悩んでいるほどだ。

まあともかく何が見ていられなかったかというと

イツセーが殴られている。

何度も、そう何度もだ。

それだけならまだ良かった。

殴られても殴られてもイツセーは立ち上がり向かって行く。

殴られては立ち上がり

殴られては立ち上がり

殴られては立ち上がる。

何度繰り返し返したかわからないほど続いた。

「イツセー止める！死ぬ気か！？」

俺が思わず言ってしまう程に。ミア達も心配そうにみていた。

それでもイツセーは立ち上がり最終的にはリアスさんの投了によりゲームは終了となった。

数日がたちリアスさんとライザーの披露宴が行われた。

ライザーは俺を見て顔を引きつらせながらも挨拶をしてきたときはびっくりしたものだ。

ミアも同様のよう口を半開きのまま固まっていた。

そして、やってくれたわ！あの馬鹿は！
どこからともなくイツセーがやってきて

「部長の処女は俺のものだ！！！」

大勢の前で言つてのけた！

気付くと俺は動き出してどうやら俺以外も同様らしい。
皆でイツセーを捉えようとするものを抑えている。

「イツセー！！！」

ここは俺等にまかせろ！

リアスさんを渡したくないのだろうか？

男を見せる！！！」

「!!!!!!!!!!!!!!」

ああ

恩にきる!!!!!!!!!!」

イツセーは駆け出した。

その後はイツセーとライザーがバトル、『禁手』となったイツセーが辛うじてライザーに勝利しリアスさんを連れてグリフォンに乗り何処かに飛んで行った。

それにしても

「邪魔した俺が言うことではないが良かったのか？
俺の横にいつの間にかいたサーゼクスに問いかけた。

「ああ、私とてリアスがこの結婚を望んでいないことくらいわかっていた。

どうにかしてやりたかったが立場上それもできなくてね……」

「そして丁度いい所にイツセーがやって来た。

いや、お前が手引きしたんだな？」

「わかるかい？」

「まあな。

で、この惨状はどうするんだ?」

「後は父上達がどうにかするさ。」

父上にもリアスの気持は伝わっただろうしね。

君はどうするんだい?」

「俺か?俺は日常に戻るさ。」

久々にミアとゆっくりしたいしな」

「そうか、

ミアも私の妹だ。

宜しく頼むよ?」

「誰にものを言っている?

ミアは俺が前世より愛するものだぞ?

我が主にして我が方翼

世界が敵になろうとも絶対にミアを護りぬいてやる!」

「それを聞いて安心したよ。」

あつ、そうだ!フォウル、君上級悪魔に昇格するから。」

は?なんだと?

「爵位は子爵で領地も与えられる。」

ああ、安心してくれ！

領地経営は代わりの物をだすから数年は好きにしていいていいよ？」

「そうではなく俺が昇格だと！？
いつ決まった！？」

「ん？昨日だよ？」

私が推薦した。

流石に私とタンニーンを相手に勝つものがいつまでも下級悪魔では不味いと言うことで満場一致で可決されたよ。

来月から君は上級悪魔で子爵だ。

領地はグレモリー領の隣だから。

後昇格式のさいに『悪魔の駒』を渡すんで

ちよっと待て！と言うことは俺とミリアは……………

「待て！俺とミリアの関係はどうなる！？

俺が上級悪魔になり『悪魔の駒』を得ることでミリアとの主従関係が解消されるならその話は断るぞ……！！」

別に主従関係がいいと言うわけではないが何であれひとつでもミリアとの繋がりが無くなるのは御免だ……！！

「ん？ああ、安心してくれ。」

「ミリアとの関係はそのまま君は上級悪魔になるんだよ。」

「どうということだ？」

「つまりは君は爵位を得て領地を得るだけで後は何も変わらない。」

「仮にミリアがレーティングゲームを行う時には君はミリアの駒として参加する。」

「成る程、変わらないならそれでいいな。」

「むしろ得るものの方が多いかもしれないね。」

「自分の部下が手に入るし何よりミリアとの婚約のさいの面倒が減る。ミリアもグレモリー家の子女だ。」

「次期当主ではないといえ貴族との婚約だ、貴族のほうの話がスムーズに行く。」

「しかも領地持ちならミリアの将来も安泰。」

「私の両親もそちらのほうで安心できるのさ。」

「そうか、確かにな。」

「部下云々はともかく領地はあって困るものではない。いささか面倒だがまあいいだろう。」

「ミリアのこともそうだ。」

「今まで漠然とずっと一緒だと思っていたが今の世の中金が必要だ。」

「領地が上手くいけば金に困ることはないだろう。」

「婚約のさいもスムーズにいくとなれば乗らない手はない。」

「わかった、その話お受けしよう。」

「ああ、これからも宜しく頼むよ、ドラグニール子爵？」

詳しくは後ほど書状を送らせて貰うのでそちらを見てくれ」

「了解だ。

それでは報告することができたし、イツセー達が気になるゆえこころで失礼するぞ」

そうして俺はミリア達の方に向かって行ったのだった。

余談だが昇格の件を皆に話した所、全員が賛辞をおくってくれたがただ一人悔しがるものがいた。

イツセーだ……………

己と同じ位に悪魔になったのにいち速く上級悪魔になった俺が羨ましいらしい。

色々あーだこーだ言ってきた五月蠅かったので

「力があるのだから当然であろう！

後嫉妬はみつともないぞ？」

と言つと黙った。

全く……………

こいつも色々と得るものがあつた癖によく言つわ！

今回の件でリアスさんは完全にイツセーに惚れたようだし前々からアーシアからは好意を抱かれている。

拳句に二人と同じ屋根の下で生活すると来た。
俺にはハーレムを作れて羨ましいとか言っていた癖に自分もちゃっ
かりハーレムを形成しているではないか。

イッセーは己の境遇を理解していないのか？

とまあ一部五月蠅かったがこれでひとまずは落ち着いたな。
やっと日常に戻る。

*

日常、フォーウルとミリア

俺はミリアと二人で駒王学園旧校舎の裏にある樹の幹にいた。
風が抜けて気持ちがいい。
そんな場所でミリアに膝枕をして貰い休んでいた。

静かに時間が流れて行く。

「……たまにはこうして時間を過ごすのもいいですねえ」
「ああ」

ミリアの言葉に短く返す。

確かに悪くない。

ミリアと二人きりでこんなにも穏やかな時間を過ごすのは久々だ。最近は何かと騒がしかったからな……

だがな……………

目を開けるとそこにはミリアの立派過ぎるおっぱいが……！！

ぐうぐう、触りたい……！！

だがミリアは今の状況を楽しんでいるようだし邪魔したくない……！！

だが、しかし、でもおおおおお！！

目の前にあるのだぞ？少し動くだけで揺れるおっぱいが……！！

お、俺はどうしたらああああ……！！

そんな俺の葛藤を見抜いたのかミリアはふっと微笑み

「いいですよ？」

フォウルの好きなようにして。

フォウルは私に気を使ったようですが私はフォウルといられれば幸せなんですから。」

ああ、やはりミリアにはかなわないな……

俺もお前と共にいれて幸せだ……………

そして俺たちは互いに求めあったのだった。

*

日常、フォウルとニーナ

俺は非常に困っている。嬉しいのだが困っている。

困っている理由だが俺の頭を抱きしめ頬擦りをしている母さんだ。

そしてこんなべったり状態が既に3日続いていた。

母さんは超が付くほどの親バカだ。
俺も自分がマザコンであるのは理解しているゆえ今の状態は非常に嬉しい。

嬉しいが今は

「……………母さん。今は授業中なんだが……………」
そう、今は絶賛授業中なのである。

何故母さんがこのようになったかと言うと原因は俺だ。

最近色々（グレイフィアさんのことや爵位授与など）あつて家を空けることが多く母さんとのスキンシップが不足していたからだ。

先ほども言ったが母さんは超が付くほどの親バカだ。

そんな状況が続けば我慢できるはずもなく……………

「んふん」 授業中でも関係ありません！私とフォウルのスキンシップは誰にも邪魔させません！」

こんな状態におちいったわけだ。

俺としても母さんに甘えるのは好きだし母さんとのスキンシップも好きだ。

母さんは俺の頭を抱いていて当然俺の頭は母さんの豊満なおっぱいに挟まれとつても幸せパフパフを現在進行形で行われている。

あつ、イツセーが物欲しそうにこつちを見ている。

「イツセー、こつちを物欲しそうに見るな！母さんは俺と父さんのだ！」

お前はリアスさんにしてもらえ！」

俺の発言で今まで俺達を見ていた連中が一齐にイツセーを見た。

リアスさんは男女問わず人気がある。

「わかったよ。」

ならさっきの出来るようになったら何でも言いつと聞いてやるわ。」

「本当か？」

「ああ。」

「なら、やるぞー！」

「あんたは自分の欲望に忠実だねえ。」

「さあ、行くぞー！ディースさん！」

「はいはい。」

「ううって日常はずぎていくのだった。」

あれから、そして日常（後書き）

はい、いかがでしたか？

今回はその後と日常をそれぞれのキャラと二人っきりという場面を書いてみました。

感想や指摘などございましたらお願いします。

次回はリアスさんちの眷属との日常を書くつもりです。

赤龍帝と霸王龍と悪魔たち（前書き）

ドライブ出番すくないよ。

あとフォウルの新技登場。

赤龍帝と霸王龍と悪魔たち

「イッサー!!!」
俺が叫ぶ

「フオウル!!!」
イッサーも叫ぶ

「おっばい!!!」

「お前らは朝から何を言っているんだ………」

ドライブが呟いた。

一応説明しておくドライブは『禁手』の時からイッサーと話せる様になり俺とも話せるようになった。

まあともかく。

「朝の挨拶だが?」

そう、朝の挨拶だ。

現在だが朝の校門で多くの生徒が校門を潜り自分のクラスに向かっている。

そんな中たまたまいッサーと会い何となく言ってみたら同じ言葉が

でた。

やはりイツセーは我が友！

言わずとも伝わる！それがおっぱいの力！

俺がサムズアップをするとイツセーもサムズアップを返してきた！
そして

「おっぱい！！！！」

俺達の友情は深まった！！！！

「……………父は変わったな、昔から母の乳が好きなのはわかっていた
が……………」

相棒が二人いるようだ……………」

イツセーが二人だと？

ふふふ、ドライグよ！甘い、甘いぞ！！

「俺はイツセーの一步前に行く！

……………イツセー！確かドレス・ブレイクだったか？

俺はあの技を超える技を作り出した！」

「な、何だと！

俺のドレス・ブレイクを超えるエロ技を編み出したのか！？」

「ああ。

鼻血をだしながら！

「…………でも、でも。
リアルを知っちゃったんだよ……………」

イツセーの独白は止まらない。

「……………そして、知ってし、まったり、アルにフオ、ウルぶはっ
！技を照らしぶう！合わせてしまった」
イツセー、まさか！お前は……………！

「……………おっぱ、いさ、い、こおおおおおおお……………！！！！
至ったのか……………！！！！」

禁手のことではありません。

手にいれたんだな！あの無限の可能性を！究極を……………！！

重ね重ねいいますが禁手ではありません。

おっぱいを揉んだのだな……………！！！！

ふ、ふふふふふ！

「イツセー」。

今のお前なら分かるはずだ。

いや……………分かったからこんな状態なのか……………
俺の技、どう思う？」

「見たいか!？」
「見たい!」

ふむ、イツセーの覚悟は分かった。

幸い他の生徒はすでに教室にいてここには関係者（最初からいました。）しかいない。

ここにいるのはミリア、母さん、デイスさん、リアスさん、アーシア。

母さんとアーシアを除き皆俺達の茶番（本人達は本気です）を冷めた目で眺めていた。

ちなみに母さんはニコニコ、アーシアは血にまみれた（鼻血）イツセーを心配そうに見ていた。

「ならば.....」

俺も覚悟を決めた!

「迎えるは乳の乱舞

赤龍帝.....鼻血の準備は万全か?」

「……………ただな、服を着てあれなんだ。全裸ならどれだけ素晴らしいか……………」

「イツセー、そこでお前のドレス・ブレイクが役に立つ!」

「そうか!!!」

「ああ!俺とお前がいれば」

「俺達は無敵だ!!!!!」

「行け!!!イツセー!!!!!」

「おう!!!」

イツセーは駆け出し

「喰らえええええ!!!!!ドレス・ブレイぶばらあああああああ

ああ!!!!!!!!!」

殴り飛ばされた

「やれやれ、やっと終わったよ」

ディースさんに!

ここで副作用の説明だ!

「ぱいたりテイ」はおっぱいを元気にさせる。つまりは活性化の技だ。

おっぱいを活性化させる=女性自体を活性化させるということでもある。

最初は俺の煩惱も混じり快樂のおっぱいダンスを披露してくれるが時間がたつと余剰分が全身に広がり肉体が活性化するのだ!

これによりお肌つるつる、髪の毛つやつやの健康体になり

「さて、フオウル？この前のお仕置きじゃ足りなかったみたいだねえ？

フオウルのお陰であたしは今絶好調なんだよ」

パワーアップしてしまうのだ！！

「全く馬鹿だよねえ。素直に言えばいくらでも相手してやるのに…

……

ほら、ミリアにニーナもお仕置きしたいみたいだよ？」

俺は恐る恐るミリアと母さんをみた。

すごい笑顔だ。

本当に綺麗だよねえ、黒いオーラがなければ……

ちなみにこのパワーアップ、一時的ではあるが馬鹿にできない。

具体的に言つと、デイスさんなら龍化しないと勝てなくなる。体術ありでもだ。

それほどパワーアップをした人達に囲まれた。

俺は生き残れるだろうか……

イッセー……お前も頑張れ……

リアスさんもアーシアもなかなか怒ってるっばいぞ？

さて

「終わりを始めようか……………」俺のな。

「終わらせませんよ？

始まるのはお仕置きです。

その後は皆に奉仕してもらいますよ」

母さん…………それは飴とムチですか？

「お仕置きは何がいいのでしょうか？

ひとまずボロボロになって貰いますが」

ミリア…………さらっと怖いこと言っなあ……………

「あたしの魔法で一時的に子供に戻すか？

あの可愛いかったころにして奉仕させるのも面白そうだねえ」

ディースさんが一番恐ろしいわっ！！！！

女性陣は色々言い合っていたが結論に至ったらしく

「とりあえず」母さん

「ボロボロになって貰います」ミリア

「覚悟しな」ディースさん

え！ちよ！3人同時！？無理無理無理無理！！！！！！

赤龍帝と霸王龍と悪魔たち（後書き）

はい。今回もはっちゃんけました。

次こそは先にすすめるぞ

霸王龍と女神と巨人、霸王龍された（前書き）

とりあえず完成

霸王龍と女神と巨人、霸王龍された

ヴァルハラ、それは大神オーディンの住まう宮殿。
数多くのヴァルキリーが在中し戦死者の魂を集めていると聞く。
戦死者はエインヘリヤルと呼ばれ日々訓練をし、来るべき巨人族と
の闘いに備えているらしい。

俺がこんな説明をしたのは理由がある。
まあ理由と言っても俺が現在ヴァルハラにいるだけの話なのだがな。

そして

「そのドラゴン！
大神オーディン様の住まうヴァルハラに何用だ！
用がないのなら直ちに立ち去れ！
もし良からぬことを考えているのなら……………」

ヴァルキリーに囲まれていたりする。
ちなみに俺は龍の姿。
故に警戒されるのは当然だろう。

ん？一人称が我じゃない？心の声だ、気にするな。

「我はオーデインの小僧に会いに来た。
少々聞きたい事があるのでな。
汝らはオーデインの部下であろう？
奴に取り次いでもらおうか。」

さて俺がなぜオーデインに用があるのか。
それは数日前のことだ。俺のもとにグレイフィアさんがやってきた。
実はグレイフィアとお菊ちゃん事件と2週間の世界旅行以来よく『
マッサージ』を受けに来るようになった。
仕事のついでにらしいがお気に召したようで何よりだ。

この日もお菊ちゃんと遊ぶのかなあとか思っていたのだが今回はサ
ーゼクスよりの使者として来たらしい。

前に俺が要求した巨人族の情報が手に入ったらしい。
正確には情報を持っている人物のだからな。

大神オーデイン。
北欧の神で奴なら巨人族について何か知っているらしい。

俺はグレイフィアさんにサーゼクスに礼を伝えてくれと言い早速ヴ
アルハラに向かうため準備をしようとしたらグレイフィアさんに袖
を引っ張られた。

「主への礼の件は承りました。
ですが仕事とはいえ私が伝えたのですから何かあっても宜しいので
はありませんか？／＼／＼」

顔を真っ赤にして言うグレイフィアさん。

うむ、お気に召したようで何よりだ

お礼に『マッサージ』をしたのは言うまでもない。

余談ではあるが『マッサージ』中に『ぱいたリテイ』を使ってみた
ところ

「えっ！？なんで？私の胸がかつああん！

さ、さつきより、す、ごいよいよ！！！！！！」

分かっただろうか？

そうなのだ、『ぱいたリテイ』には感度倍増効果がある用なのだ。

恐らくだが副作用による肉体活性化のさい感覚も活性化されたのだ
ろう。

副作用にも副作用があるとは『ぱいたリテイ』……………

我が技ながら素晴らしくも恐ろしい……………

ちなみにダンスは最高だった！！！！

邪魔する物がないからもう縦横無尽！

もう暴れる暴れる

バインバインのポヨンポヨン、グイングインだった！！！！

イツセーにも見せてやりたいな……………

おっと！話がそれたな。

そういう訳でヴァルハラまできたのだがヴァルキリーに囲まれ今にいたるわけだ。

「いきなり現れて何を言うか！

取り次いで欲しければ名を名乗れ！！」

忘れてたな…

「我が名は『霸王龍』 フォウル！

名前くらいなら知っているだろう？」

ヴァルキリー達が驚愕しているのがわかる。

突然現れた龍が霸王龍を名乗ったのだから仕方ない。

「……………お前が『霸王龍』殿である証拠はあるのか？」

疑い深いヴァルキリーだな……………

警備をしているものとしては当然か。

「私の姿をオーディンに見せればそれが証拠になる。

奴は我の姿を知っているからな。
方法は問わん。」

「分かった。」

この場で少々お待ち頂くが宜しいか？」

「構わん。」

でわ、といいヴァルキリー数人は飛び立って行った。

その後俺が『霸王龍』と分かり謝罪されたのはまた別の話。

*

ヴァルキリーに案内され俺は大広間にいる。
俺が龍の状態で普通に通れたのは驚きだった。

それだけ大きな宮殿の主が俺の前にいる。

「久しぶりと言ったほうがいいのかの、霸王龍殿？」

「そうだな。」

それにしても汝は老いたな。

最後に会ったのは確か汝がまだ童のときだったか？」

「言うてくれるな。神と言ってもわしらも歳をとる。

霸王龍殿と違い転生などできぬのだから仕方ないだろう？」

まあ女や一部は若い姿の物が多いがの。

それより霸王龍殿は何故昔の姿なののお？」

龍人に転生したと聞いたが？」

「……………理由はいくつかがあるがひとつ目はヴァルハラに来るのに楽だったからだ。我は日本に住んでいるのでな。

二つ目に龍の姿のほうに汝がわかりやすいと思ってな。

最後の理由だが龍人が龍化するのには変身ではなく肉体変化に近いゆえ服が弾けとんでもしまう。

俺としては全裸でも気にしないのだが一度怒られたかつ襲われていたのでな。

そしてヴァルハラにはエインヘリヤルを除き女ばかりゆえ気を使ったのだが、いらん気遣いだったか？」

「……………いや、気遣い感謝するぞい。

ここには初なものも多ければ性的に奔放なものもいるのでな。

では服を用意させるので人型になってくれんかの？

見上げるのも疲れて来たのじゃ。」

「了解だ。」

シュバアアアアアアア

俺が人型になるとオーデインが呆れたように言ってきた。

「……せめて服を用意してからやってくれんかの？
ぬしの気遣いが無駄なるところじゃったぞ？
幸いここにはぬしとわししかお、ら………」

オーデインが絶句した。

何故だ？

俺が疑問を浮かべていると

「霸王龍殿、どうやら不味いのに見られたの。
見上げていて気付かなかったわしもわしだが。」

それでフレイヤよ、いつからおったんじゃ？」

ん？フレイヤと言えば確か豊穰や戦の女神でヴァルキリーの主だったか？

どこにいるのだろうと俺は周りを見渡すが何処にもいない。すると

「オーデイン様と霸王龍殿が話してる途中からよ。」

声が聞こえた。

下から。

何か「ほえ〜」とか「ひゃー」とか「すご〜」とか聞こえる。

恐る恐る下を見ると美女が

「女、フレイヤといつたか？

あえて聞くぞ。

何している？」

俺の「」をガン見していた。

「何ってあなたのこを見てんのよ。

それにしても凄いわねえ」。

………ねえ、触ってもいい？」

こいつ俺の女版か？というくらい興味津々らしい。
だが。

「今はやめろ。

オーデインに大切な話があるのだ。

後でならいくらでも触らせてやる。

まあその場合俺も好きに触らせて貰うがな。」

そう、フレイヤにも凶悪なものがあるのだ。

下手したら今まで見たなかで最大かもしれない。

本当なら直ぐにでも飛び付きたいくらいのおっぱい革命だ。

「ほんと！？」

なら後にする！

いや、手間が省けて良かったわあ」

じゃあ後であなたの所に行くわ！」

そう言っつてフレイヤは広間からでて行つた。

「……………オーディンよ、あいつはなんだ？」

「……………あやつは女神フレイヤ。

一応女神の代表的な存在での、性的に奔放なものの代表的なものでもあるのじゃ。」そうか、それはいいことを聞いた。

確か後で来るとか言つてたな……………

むふふ っといかんいかん、話の途中だった。とりあえず……………

「オーディンよ。……………服を頼む」

「……………あいわかった」

やっと本題にはいれる。

*

「それで話とはなんじゃ？」

俺は服を着て改めてオーディンと向かい合っている。
何故かフレイヤもいる。

理由は何となくだがわかる。俺もたぶん同じようなことをするだろうからだ。

それはともかく

「巨人族のことを教えて貰いたい。

出来れば俺が生きていた時からいるもの達のことを………」
オーデインはわかっているのだろうが聞いてきた。

「…何故じゃ？」

「自分の子に会いたくない親がいるか？」

それもそうじゃな、と言ってオーデインはため息を吐き

「わしが知っているのは二人。

一人はスルトでムスペルヘイムの番人をしておる。」

おお！スルトは生きていたのか！

あいつは昔から強かったから納得だ！

それでもう一人は誰だ？

「もう一人はアングルボダじゃ。」

アングルボダ！アンも生きていたか！

アンことアングルボダはミアにそっくりな子だ。
俺やミアに色々としてくれた優しい子でもある。

良かった………

1人でもいれば良いと思っていたが二人も分かるとはな！

「それでアンは何処にいるのだ？」

するとオーディンは少し表情を沈めて

「アングルボダは今ヴァルハラにおる。

ただロキによって狼に変えられてしまったの。

色々あって他人を怖がるようになってしまったのじゃ。

今はヴァルハラのお森におる。」

な、んだと？

アングルボダが狼になった！？

あの優しい子が他人を怖がるだと？

「……………しろ」

「他のものたちはわしもわからんが死んだとは聞いておらんから何処か、ってどうしたのじゃ？」

他の連中も生きているかもしれないと言つのは嬉しいがそれどころじゃない。

今は！

「アンの元へ案内しろと言つたのだ！！！」

アンの所に行かなくては！！！！

俺の様子がおかしいと感じたのかオーディンは直ぐに

「わかった」

とうなずいた。

「……………フレイヤ。

すまんが直ぐには相手を出来なさそうだ。

後で俺から行くゆえお前の部屋かわかりやすい所にいてくれ。」

「わかったわ、霸王龍殿。

代わりにあなたの名前を教えて。

霸王龍殿って呼びにくいのよねえ。」

あっさりした女だ。

中々好ましいがな。

「霸王龍フォウル。フォウル・ドラグニールだ」

「フォウルね。

改めて私は女神フレイヤ。

美、愛、豊穣、戦を司るわ。」

よろしくねと言ってフレイヤは俺達をおくりだした。

*

オーディンに案内され俺は今森の中で大きな狼と向かい合っている。

オーディンは「わしはアングルボダに警戒されとる」とか言って途中から戻って行った。

アングルボダは俺を警戒している。

昔とは姿が違うのでしょうか。

「アン！俺、いや我だ！」

俺の呼びかけにアンはピクツと反応し俺のことをジッと見た。そして何かに気づき始めている。

「分からないか？」

汝の父の霸王龍フォウルだ！」

「！」

俺は少し力を解放した。

俺が力を解放したことで完全に俺が父であると理解したようだ。

最初警戒していたのが嘘の様に俺にすりよってきた。

大きいので食べられそうで少し怖かったのは内緒だ。

「くうううん」

「よしよし、何があったかわからんがこれからわ俺がいるしミリアもいる。

安心するがいい…」

姿は変わっても我が娘なのだから」

そう言っ俺はアンをなで続けた。

アンも安心したように甘えてくる。

そうして親子のスキンシップを楽しんでいると男の声がきこえた。

「久しぶりに様子を見に来てみれば何やら面白そうなことになって
いるな。」

そいつは今まで誰にもなつかなかったんだがな。

……………貴様何者だ？」

男が現れた瞬間、アンが怯え警戒し始めた。

そうか……………こいつがロキか…

「俺か？俺はこの子の父だが？

お前こそ誰だ。」

わかってはいるが確認の意味を込めて聞いてみる。

「俺は邪神ロキ。」

それにしても貴様がそいつの父だと？

確かそいつの父親は霸王龍殿と記憶しているが？

貴様が霸王龍とでもいうのか？」

やはりこいつがロキか……………

ならば……………

「そんなことどうでもいい！

何故アンを狼に変えた！？

何故アンはこんなにも他人に怯える！？

オーディンから聞いた、お前が関係しているとな！」

俺がそう言つとロキはダルそうに

「俺からすればどうでも良くはないのだがな。霸王龍は俺でも恐ろしい。」

それにしても……

ちっ、オーディンめ！余計なこと言いやがって。

まあいい。そいつを狼に変えた理由だったな？

簡単だ！我が息子の巨狼フェンリルの子を生ませるためだ！
そいつのお陰で元気な子が二匹も生まれた！」

こいつはなんと言つた？

狼の子を生ませるだけ？

そんなことのためにアンは狼にされたのか？

……………ふざけるなよ。

「流石は霸王龍殿の娘と言つた所か？

中々強い子が生まれた！

今後も子を生ませるために飼つてやっているんだよ！

あははははは！……………！！」

ああ、こいつは……………

「……………終わりを」

「ん？何か言ったか？自称霸王龍殿？」
馬鹿にしたように問いかけてきた。
やはりこいつは

「始めようかああああああ！！！！！！」

生かしておかない！！

『我目覚めるは始まりの龍なり！』

俺は詠唱を始めた

『星と生まれ
星を護る』

口キも力を感じたよううで

「貴様！本当に霸王龍だったのか！」
とか喚いている。

『流星ことごとくを葬り』

「ちっ！ここで使うつもりは無かったがしかたない！来いフェンリ
ル！！！！」

『汝に終わりの始まりを告げようか！！！！』

一匹の巨狼が現れた。たいした力だが
「行け！！！！」

汝はどのように終わりたいか？」

顔を青ざめさせて呆然としていたロキに問いかけた。

「っ！！！！」

お、俺は！くっ！

俺はまだ死なな「逃がすわけなかるう！」ぎゃああああああああ！！
！??????」

逃げようとしたロキを捕まえ握った。

「ぎっ！！？は、離せ！………おおお俺はまぎいいいいひあああ
ああああ！！！！」

「汝は五月蠅いぞ？」
少し強めに握った。そして言う

「我が娘に手をだしたこと後悔して死ね」

「ひっ！ま、まて！お、俺を殺したらアング「黙れ！汝が娘の名を
呼ぶな！！！！」ひい！！！！」

我が握り潰そうとしたとき

「待つんじゃ！！！！」

オーディンがやってきた。

「何故止めるか？」

邪魔をするなら汝とてただではすみさんぞ！」

「……そんな奴とはいえ神の一柱なのじゃ、一柱居なくなるだけで世界のバランスが崩れてしまうのでのお。」

それにアングルボダを直ぐに戻せるのはロキだけじゃ。わしらでも出来なくはないが時間がかかるわい。」

………世界に影響がでるとなれば我とて迂闊に殺せない。そしてアングルボダを直ぐに元に戻せるのはロキのみ。

仕方ないか………

「………おい、ロキと言ったか？」

汝はアンを元に戻せるのだな？」

我がそう聞くとロキはニヤリと笑い

「教えてやってもいいがさっさとこの手を離せ！
さもながあああああああ！！！！！！！！」

勘違いしている用なので少し強く握る。

「勘違いするなよ！」

別に汝がいなくとも元には戻せるのだぞ？

汝は出来るのか出来ないのか答える！

出来るのなら元に戻すことを条件に解放してやる。

出来ないのなら死なない程度に痛めつけてやる。その巨狼の様にな」

我が巨狼に目を向けるとそこにはギリギリ原形を留めた巨狼の姿がある。

腕がなく所々切傷や火傷、打撲、骨折が見受けられるがな。

ロキも我が見ている物を見て顔を青ざめさせ慌てたように

「わ、わかった！

元に戻す！

だからは、離してくれ！」

これにてアンは元に戻り、ロキは巨狼をつれて何処かに消えたのだった。

霸王龍と女神と巨人、霸王龍された（後書き）

時系列的に言えばこの話は三巻の頭くらいです

眷属は女神と娘（前書き）

今回もエロとネタに走りました。

眷属は女神と娘

アングルボダが狼の姿から元の巨人に戻り1時間がたった。

現在アンはと言うと

「んふふ〜 お父さ〜ん、ありがとう〜。」

俺に甘えている。

俺にいたっては

「うううううう、苦しいいいいいい。

でも幸せええええええええええ……………」

である。

それにしてもアングルボダは相変わらずだ。

見た目は前世のミリアそのままの違いと言えばサイズ位だろうか。

ミリアが全長15mほどだったがアンはそれよりも小さく10mほどだ。

それよりも俺が何故苦しいのに幸せなのか。そして何故アンの容姿について話したのかは密接に関係している。

この答えは先ほど言ったアンの言葉を聞けば分かると思う。

アンが言った言葉、それは

まさに至高の一品！

さらに自分を抱くように腕を回すアンによってさらに圧迫されおっぱいの柔らかさがさらに俺を包む！！！！

む？娘に何を考えているかだと？

俺は龍人！そんなの関係あるかああああああ！！！！！！

っーか母さんに喰われた時点でそんな感覚なくなっただわ！

だがそろそろ辛くなってきた。

いくら大好きなおっぱいであろうと全身を圧迫されれば俺とて苦しい。

よって若干惜しくはあるが

「アンよ……………」

甘えてくれるのは俺とて嬉しいのだが少し力を抜いてくれないか？

いささか苦しいのだ……………」

すまんアンよ！俺とて辛いのだ！

本当はもっと甘えさせてやりたいのだ！

俺の言葉を聞いたアンは

「あっ！そっだよね、今はお父さん小さいから苦しいよね。どうしよう……………」

まだまだお父さんに甘えたいし……………」

「そうだ！あれがあった！」

何か思いついたようにアンが言ったあとアンが光だした！

「うおっ！アン大丈夫、夫、か？」

俺が言い終わる前に光がはれ、俺は混乱した。

アンが人のサイズになっているだと！？

「ア、アンなのか？」

俺は思わず聞いてしまった。

外見は正しくアン。

だが身長は150センチほど。

俺の頭は????で埋め尽くされていた。

そんな俺をよそに

「そうだよ！」

これはね巨人族が今の世であまり目立たない様に作られた魔法なの。
要は魔法で体を小さくするんだよ！」

「凄いでしょ！と胸をはるアン。」

確かに凄いな。

元々巨人族は器用だが魔法まで作りだすとはな。

「これならお父さんに甘えてもいいよね？」

アンは期待したような目で俺をみている。
俺が断れるはずもなく、断るはずもない。

「構わん。気がすむまで一緒にいてやる。」

わくわくと言ってアンは俺に抱きついてきた。

ミリアにも早く会わせてやりたい。

ミリアは前世の記憶の大半を薄れさせている。

だが会えば絶対にわかる。

だって親子なのだから。

この日、俺はアンとずっと一緒にいたのだった。

*

あの後離れようとしないうとアンと一緒に寝た。
ただ寝ただけだからな？

まあともかく寝たのだ。

そして夜中に重みと違和感を感じた。

……………主にJ r . にだ。

何となくわかっているのだが目をあけてみた。そして

「……………フレイヤ、何をしているんだ？」

フレイヤが俺に股がっていた。

「な、何って、決まってああん！いるでしょ？
なか、なか私、のと、所に来ないひゃん、から、来ちゃった」

俺は一度ため息をはき

「まあ、それはいい。

それよりもアンはどこだ？」確か俺に引っ付いていたはずだ。

「アンってアングルボダのこと？

アングルボダならここにいるわよ？」

ここでフレイヤが指を指した所、フレイヤの後ろを上体をずらして見る。

そのさいフレイヤのスイカと表するよりさらに大きななんかもう爆弾おっぱいが

ホホホホホ、捕まえてごらんさ〜い

とばかりに動きまわっているが理性を総動員して無視した。

そして見てしまったものに俺は完全にフリーズした。

どれだけ時間がたったのかわからなかったが俺は上体を元に戻し現実逃避を試みた。

具体的には目の前で暴れ狂う凶悪な爆弾の爆破スイッチを押そおと

一度人差し指を抜き親指に変え、

「ペガサスローリングクラッシュ!!!!!!!!!!!!!!」

こねくりまわした!

「あ、あ、あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

そしてとどめは!!!!!!

「どどん波あああああああああ」

ただなのでこぴんです。正確にはちくぴん?

ぴん!

「ひいん!!!!!!!!!!」パタリ

ふん、逝ったか。

手強い乳だった……

「ふ、フオウル……はあはあ

あなた、あれだけ、じゃないのね……

はあはあ、気に入っちゃったわ

そ、れよりいつ、まで、現実、逃避するつも、り?」

フレイヤが息絶え絶えで質問してきた。

そうだないつまでも放っておいても問題の先送りでしかないか……

……

俺は現実を直視する覚悟を決め、アンに問いかけた。

「アンよ……………何しているのだ？」

「ん？あむ、ちゅつづつづ、えつと、んんんん、ん、お手伝い」

アンが何をしているのかストレートに言うのは何なので会話風にならせて貰うと。

~~~~~

「わーいおいなりさんだー」パクリ

「おいなりさんは好きなのかい？」

「うん！好きー！」

「それは良かったね。でもそれだけでたりるのかい？」

「大丈夫だよ？バナナもあるから！」

「そうなのかい？それなら良かったね」

「うん！」

~~~~~

である。

わかってくれただろうか？

わかったな？

わかれっ！！！

ともかくそういう事だ。

「……………お前はこういったことは好きなのか？」

俺は大好きです

皆知ってますし聞いてません。

「それもあるけどフェンリルのことを忘れたかったの。

完全に忘れるのは無理でも誰かに埋めてもらいたかった。

でも他人はまだ怖い。

でもお父さんは大好きだし怖くないの。

だからお父さん……………お願い」

ふう、元気に振る舞っていたがやはり心の傷は深いか……………

まあ娘の頼みだ。いくらでも聞いてやるさ。

「わかった。お前の望むようにしよう。」

俺はいつの間にか寝ていたフレイヤをそっと寝かせアンと向き合う。

「アン、これからは俺がいるし日本へ帰ればミリアもいる。俺と同様で姿は変わっているがわかるはずだ。」

他にも俺を産んでくれた母さんもいるし、師匠もいる。

皆俺の家族だ。

それに仲間もいる。

お前を傷つける奴はいない。

だから……………」

この言葉をつげる。

「俺とこい。」

また家族で過ごそう。

まあ父と母、あとはドライブしかお前が知るものはいないがな」
最後の部分は少し苦笑気味で言った。

俺の言葉にアンは

「うん！……！」

嬉しそうに微笑み頷いた。

「よし！ならまずはお前の記憶を俺で埋めてやる。」

俺の相手は大変だぞ？」

覚悟しろよと告げ、

長い夜が始まった。

*

翌朝目が覚めるとまた違和感を感じた。
目の前にはまたもや爆弾おっぱい乱舞。
とりあえずスイッチオン。ズム

「あひん!？」

つて、フオウル、ん、ん、起きたのね、ああ、やっぱり、最高おお
お！」

やはりな…

まあいいか、今はこの状況を

「楽しむとする、かつ!!!!!!!」

最初からクライマックスだ!!!!!

*

あの後なんとかフレイヤを満足させ休憩しているとアンも目を覚ま
した。

そして俺の現状を話した。

俺が悪魔であること。

つい最近だが上級悪魔になって爵位と領地、『悪魔の駒』を手に入
れたこと。

駒王学園に通っていることなどだ。

アンとフレイヤは『悪魔の駒』の所に反応し、俺が話しを終えると
「私を眷属にして！」

と言ってきた。

「アンはまだわかるがフレイヤは何故だ？」

フレイヤは誰もが知る女神。

そんなものが悪魔になってもいいのだろうか？

俺が疑問を浮かべていると

「だってヴァルハラつまんないのよ〜！」

私はもつと楽しく生きたいの！

フオウルが今までで一番凄かったの！

もつとS Xしたいの！

それにレーティングゲームってのも面白そうだしね！」

欲望の塊だな……………

やっぱりこいつは女版の俺だろ？

っーかエッチ好きな所とかミリアに似てる。ディースさんも足した

感じなのが少し怖い……………
どことなくだが容姿もミリアに似てるな。
何か関係があるのだろうか。

まあともかく

「俺はいいが女神が悪魔になってもいいのか？」
疑問をぶつけると

「いいのよ！」

私の人生よ？私が決めるわ！
オーデイン様にも文句は言わせない！」
決意は堅いようだ。

「わかった。

フレイヤを眷属と認めよう。

アン、お前もいいのか？」

アンにも確認をとる。

「うん！私にもお父さんのお手伝いさせて！」

うむ、本当に良い子に育った。

「わかった。

アンを眷属と認めよう。」

こうしてフレイヤとアングルボダは俺の眷属となった。

フレイヤは『変異の駒』であった『女王』を使用。
アングルボダは『僧侶』2個使用した。

そしてオーデインに報告と情報を貰いに行ったのだが

「で？フレイヤよ。何故悪魔になったのじゃ？
わしの心労を増やすのがそんなに楽しいのか？
そうなんじゃな？」

フレイヤは物凄く嫌味を言われている。

だが流石はフレイヤ、女版の俺。

そんなこと知らんとばかりに

「だってヴァルハラつまんないのよ。

私の仕事なんてリングの管理くらいじゃない！

エインヘリヤルだって所詮人間だし後はヴァルキリーばかりだし
オーデイン様はじじいだし！

エッチの相手がいないのよ！」

そこが重要らしい。流石は女版の俺！

「それに引き替えフオウルは最高よ！

やること一杯あるみたいだから暇なさそうだし、

ちこでかいし！

S Xうまいし！！

私を満足させられる数少ない存在よ！？

だったら悪魔になって女神の名を捨ててでもついて行くわ！」

うむ、欲望丸出しだ。
流石は女版の俺！

フレイヤの発言を聞いてオーディンはため息を吐き

「そうじゃったな、お前はそういうやつじゃったな。

わかったわい、好きにすればよからうよ。

リンゴの管理以外の仕事がなかったのが幸いじゃよ……」

それを聞いたフレイヤは「よし！」とガッツポーズを決めていた。

「それで霸王龍殿は何のようじゃ？」

ゴホンと場を仕切り直しオーディンが尋ねてきた。

「スルトに会いたい。案内を頼みたいのだが」

前の情報でムスペルヘイムの番人をしているのは知っているが場所がわからない。

だから聞きに来たのだ。

「それなら後で転移の魔法陣を用意させよう。
これで話しは終わりかの？」

もうない。

オーディンには世話になったな。

「オーディンよ、感謝する。
礼としてラグナロクの時力になろう。」

「それは助かるのお！

わしらの敵でも倒してくれるのか？

わしが見た未来では世界が滅びるのじゃが。

具体的にはどうするのじゃ？」

「誰も死なせん。

そもそもラグナロクすら起こさせない。」

オーディンは驚愕している。

自分の見た確定した未来が外れると言われたのだ。

驚いていたオーディンだがやがてふつと微笑み

「そうじゃったの。

おぬしは『霸王龍』星の片割れにして守護神。

龍、龍人、巨人の祖。

おぬしがいればこの世界は安泰かの」

いつの間にか守護者から守護神になっているな。

まあいいか。

それにオーディンの言ったことに間違いはない。

この世界を滅ぼそうとする存在は俺の覇によって駆逐してくれるわ。

そして俺達はスルトに会うためにムスペルヘイムに向かったのだ
た。

余談ではあるがフレイヤがヴァルハラからいなくなることで一番落
ち込んだのは何を隠そうオーディンである。

理由は「あの乳を毎日みれなくなる」とはのお………」
まさか同志がここにもいたとは……！！！！

今度会うときはここら辺を語り合おうとしよう！

眷属は女神と娘（後書き）

フレイヤは皆さんご存知かと思いますが作者的にあんな人物ではないか？
と思っ書かせて頂きました。

アングルボダは実際の北欧神話ではロキの妻でフェンリルの母であるのですがDDでは生み出したという表現をし、女巨人を狼にしてフェンリルの相手をさせたとなっていたので彼女を使わせてもらいました。

番外てきな？朱乃さんも一緒（前書き）

今回エロ100%でお送りいたします。

だって朱乃さんだし。

規制かけたほうがいいかな？

真面目に悩み中

番外てきな？朱乃さんも一緒

これはライザーをイッサーがボコったあとのお話。

今日は休日、俺は朝からミアアといちゃついている。
ただしいつもと違うものがある。

朱乃さん。

俺が通う駒王学園三年生の先輩でオカルト研究部副部長、そしてミアアの姉リアスさんの眷属で『女王』をつとめている方だ。

何故彼女がいちゃついている俺らと共にいるか、それは以前彼女に言った言葉が原因だ。

ミアアの恥ずかしい姿がみたいならうちくれば？興味があるなら相手しちゃうよゝ的なことを言ったのだ。

半分冗談だったのだが朱乃さんは結構本気だったらしく昨日の放課後に

「明日の朝お邪魔しますね。

あの約束はまだ有効ですよね」

と言っ来てたのだ。

そして今朝、正確には夜の悪魔のお仕事を終えてそのまま家やってきて俺と最初は母さんとディースさんも含め4人であっはんうっふ

んしていた。

開始直後は朱乃さんは顔を真っ赤にして驚きの表情をしていたのだが、皆の艶のある声を聞いているうちに今の様な妖艶な表情に変化して言った。

そして母さんとディースさんは所用があるとかで出かけて行ってから更に変化がおきた。

ミリアが声を上げる度に朱乃さんはゾクゾクと身体を震わせているのがわかった。

イツセーが言っていた朱乃さんS説は本当のようだな。

母さんとディースさんが出かけてミリアへの攻めが激しくなるのは必然だ。

激しくなれば当然より感じる。

そしてその声を聞きたびにその妖艶な表情でその身をふるわせているのだ。

ここに朱乃さん混ぜたらすごく面白くなりそうだな。

うちの女性陣はどちらかと言うと受け身が多いし、男が混じるとしたら殺すが朱乃さんなら歓迎だ。

しかしだそうすると俺が少し暇になりそうで嫌だ。

ミリアへのある意味攻撃はしっかり行いミリアを堪能しつつも俺が思考を巡らせていると朱乃さんから声がかかった。

「あの、その、私、……」

先ほどと違いまるで初な少女だな。

普段はお姉さんのような雰囲気があるがこういうのも良い。
ギャップ萌えとか言うやつか。

「なんだ？朱乃さんはどうしたいの？
はっきり言わないとわからんぞ？」

少し意地悪な言い方をしてみよう。
何故かそんな気分させられた。

朱乃さんは更に顔を赤くさせ口をパクパクと動かし何か言おうとしている。

うむ、かわいいな。

「……………私もしてみたい」

がんばっているなあ

だがまだまだいじめたい

「なにをしたいのだ？」

先ほども言ったのがちゃんと言わないとわからんぞ？」

最後まで言わせてみたい。

俺ってこんなにSだったっけ？

「あまり…いじめないで下さい……」

私も、ミリアちゃんをいじめてみたいです。

私の手でミリアちゃんがどうなるか想像しただけで……

ああん」

最初は少女なのに後はなんかもう、な？

朱乃さんは人により若干性癖が変わるのか？

俺には少女のような態度だがミリアにはSになるようだ。

まあいいか、ともかくトリップしてる朱乃さんに帰ってきててもらわねば。

「朱乃さん？」

朱乃さん！」

「……………はっ！
す、すみません！
なんででしょうか？」

戻ってきたな。

「ミリアをいじめてみたいと言ったな？
俺は別に構わん「本当に！？」
最後まで聞け。
ただ条件がある」

「条件ですか？」

「ああ、俺が朱乃さんを楽しむ。
これが条件だ。」

「……………具体的には？」

「俺がおっぱい好きなのは普通の俺とイッサーを見ていて分かるだ
らう？」

「だがら朱乃さんのおっぱいで遊ばせてもらう。
最後まではしないので安心しろ。
朱乃さんが望むなら話しは別だがな。」
「朱乃さんは少し複雑そうな顔をしているが嫌がっているわけではな
いようだ。」

「だがな、大切なことを俺はまだ聞いてないし言ってない。」

「しかしイッサーに惹かれているのだろうか？
いいのか？」

この言葉に朱乃さんは驚いた顔をした後何故か少しむくれて最後には諦めた表情をした。

「……フォウル君は自分に向く気持に余り鋭くないのですね。他人に向く気持には鋭いのに……」

はあ、分かりました。白状しますわ。

確かに私はイツセー君に惹かれています。彼、可愛くて楽しいんですもの。」

でもと言って朱乃さんは少し沈黙して

「フォウル君にも惹かれているんですよ?」

この発言に俺は少なからず衝撃を受けた。

「失礼だが何故と聞いてもいいか?」

「……私は極度のSです」
自覚しているようだ。

だが次の言葉に俺は驚愕し、同時に納得したのだ。

「そして、極度のMでもあるんです。

ただ私のMの部分は私よりSな人にしか反応しません。」

それで俺とミリアの態度が違ったのか。

だが待てよ……」

「俺はSか？」

「はい」

そろって言いやがった。

「ともかく最初はそれで興味を持ったんです。

容姿も綺麗な顔立ちに長い銀髪で惹かれるには十分でした。

でもリアスとライザーの件でのイツセー君を見てイツセー君に惹かれていた自分にも気づいてしまったんです。

それでどうしたらいいか分からなくなって、前にフォウル君に家に来てもいいって聞いたのを思い出したんです。

それで来たのですが……………」

「何か答えはでたか？」

朱乃さんは横に頭をふり

「皆さんの艶やかな姿や声を聞いてるうちに忘れちゃった
顔を赤く染めつつも悪戯っぽく笑う朱乃さん。」

「……………あほらしくなった。」

俺は悪態をつきベッドに倒れこんだ。

む？朱乃さんが近づいてくるが先ほどと様子が違う。
どっちかというミリアを見ているときに……

「……………ふふふ、フォウルがいけないんですよ？
あんなに激しく攻めるとこ見せられたら私だっっていやらしい気分
になりますわ」

えっ？何が起きているんだ？

先ほどまでミリアをいじめたいと言っていたのに！？

フォウルは混乱している。

フォウルは混乱して動けないようだ！！

「最初はミリアちゃんを鳴かせてみたかったのだけれど、フォウル
君が意地悪なことばかり聞くから変なスイッチがはいっちゃったの。」

だんだんと朱乃さんの口調が崩れてきた。

「もう駄目、我慢できないわ！

あなたを鳴かせたい、あなたに鳴かされたい。」

朱乃さんが俺にのし掛かってきた。すりより方が異様にエロいな……

……………

むう！こ、このおっぱいはっ！

サイズ的にはミリア達より少し小さい。

それでも十分以上のサイズを誇り、尚且つこのハリと弾力は素晴らしい！

ミリアやディースさんとはまた違う美がある。

どちらかと言うと母さんのに近いが何処か違う。

触って見てみないと詳しくわからないがとても素晴らしい物を持っているようだ。

「ん？私のおっぱい触りたいの？
好きにしているよ。」

私はまだ処女だけどあなたにならあげられるわ／＼／

朱乃さんが大胆になって行く。

っーかミリアが若干空気になってないか？

ほら！いつの間にか部屋の隅っこで膝抱えてるし！

涙目でこっちをにらんでる！

しかしミリアには悪いが滅茶苦茶可愛い！何か癒される！

それは朱乃さんも同様だったらしく

「やっぱりミリアちゃんも可愛いわあ、私にどんな顔を見せてくれるのかしら／＼／」

朱乃さん絶好調だな……………

俺にスリスリしながらミリアを見て和みつつ攻める妄想をしているのだから。

攻めるねえ

む！これで行こう

俺はさっそくミリアに声を掛けた。

「ミリア、悪かったからそんな所でいじけるな。こっちに来い！朱乃さんを一緒にいじめるぞ！」

「は、はい！」

ミリアは顔を笑顔に変えて走ってきた。ぶるんぶるんとおっぱいが揺れる。

俺は幸せになった。

「え？な、何？どういうこと？」

朱乃さんが混乱している！今が好機！

俺は朱乃さんがのし掛かっているまま上体を起こした。

「きゃあっ！」という声を無視して抱き上げ俺の膝の上に横向きに座らせた。

突然の行動に驚いた朱乃さんは俺の首に抱きついて硬直している。

そこにミリアがやってきて朱乃さんに

「ふふふ、朱乃さんは私をいじめたいって言ってましたけど」

キスをした。

ちゅ、ちゅう、と音がする。
いきなりべるちゅーとはやるなミリア！

「ちゅ、あふ、んんんん、ぷはあ！
させませんよ？

今日は私とフオウルで朱乃さんをいじめちゃいます」

ミリアは宣言した。

朱乃さんはキスの余韻でポーとしている。
そんな彼女に

「朱乃さん、こっちを向いてくれ」

朱乃さんははつとしてこちらを見た。

「え？何むううううう！」

唇を奪った。

ミリアのキスより激しく、しかし優しく。
浅く深く刻みつけるように。

やがて唇を離しつうーとよだれが糸を引いている。

またして朱乃さんはポーとした。
だがこれで終わらない。

ミリアは言ったはずだ、今日はとな。
今はまだ朝、1日が始まったばかりだ。

そして今度はまたキスをした。
それが終わるとまた俺がする。
それを何回も何回も何回も繰り返した。

朱乃さんが何か喋ろうとすれば口をふさぎ、何かしようと思えば口をふさいだ。

朱乃さんはキスだけでとろろんとしている。

「朱乃さん大丈夫か？
まだキスだけだぞ？」
俺が聞くと

「……………朱乃よ。さんはいらわないわ。
今日私はあなたのものよ？」

朱乃が要求してきた。
「わかった。これからは朱乃と呼ばせてもらう。
それでは次のステップに進むか。」

俺はおもむろに朱乃の服を脱がしておっぱいを掴んだ。

「い、いきなりね／＼／＼
ひゃん！ほ、本当におっぱいが好きなのね」

何とか自分のペースに持ち込もおとする朱乃だが

「ミリアはまた朱乃にキスをしてくれ。」

俺は少し遊ぶ。」

「分かりました。

じゃあ朱乃さん？

また可愛い所見せて下さいね。」

ミリアと朱乃さんのキスが始まった。

俺がしたことまずは揉んだ！揉みまくった！もみもみってな！

「あん！ちゅ、んむ、はぁ、ちゅうう、ちゅ」

俺の揉みテクとミリアのキスで朱乃はまたしてもとろ〜んとしている。

だがまだ俺のターンは終わらない！

リバーズカードオープン！

サンダーボルト！

「ひんっ！！！！」

何をしたかというところやったことは単純で乳首を摘まんだだけだ。

きゅっ！てな感じでな！

そして連続使用！

サンダーボルト！サンダーボルト！サンダーボルトオオオオオオオ！

きゅっ！きゅっ！きゅううううう！

「あひん！や、やめあん！む、むりいいいいいい！！」パタリ

朱乃は俺にもたれかかった状態だ。

まだ先は長いぞ？

*

あれから数時間がたった。
ミリアは疲れて寝ている。

朱乃はまだまだいけるようだ。

ちなみにトンネル開通式は決行した。

朱乃も気に入ったようだ。

ここまでしてなんだが俺は聞かずにはいらなかった。

「朱乃、良かったのか？」

「な、何が、ああん！？」

現在トンネル水浄掃除中だ。

「イツセーのことだ……………」

朱乃は一瞬困った顔をしたが

「い、いの、あん！イツセーああん！君にも惹かれてるひん！けど、あつ！わ、私は、後か、いはしない、わ。

さ、最後ひゃん！は、はあはあ、イツセー君を好き、になるかもし

れないけど、今あな、たが好きなあつ！また！
はあはあ、好きなのは、じ、事実なのっ！
あっあんあっあっあっあああああああ！……！！」

はは、朱乃の気持は無駄には出来ない。

最後に決めるのは朱乃だが俺としたことを後悔だけはさせたくない。

俺は新たに心に誓ったのだった。

番外てきな？朱乃さんも一緒（後書き）

やばい？これやばいかな？

皆さんどう思いますか？

感想待ってまーす。

ちなみに次回はギャグの予定。

おっぱい発言はでるでしょうがね！

番外てきな？ イッセーと子猫と祐斗にミルタン+あの人！？ (前書き)

今回エロはないです。変態発言はあるけどね！

あとミルタンとあの作品のとある管理者がDD風になります。

番外てきな？イツセーと子猫と祐斗にミルタン+あの人！？

突然だが俺は闘い方を教えるのが苦手だ。

理由としてはまんまだが俺の戦闘スタイルにある。

俺はたくさん技を持っているし完成度もたかい。

力もある。

だが体術は完全に我流なのだ。

子供のころからの度重なる父さんの訓練しゅんれんにより身体が自然と効率よく動くようになった。

つまり武術などの型も知らないし、習ったこともないからどう教えていいかわからないのだ。

せいぜい組み手をしてここ駄目だろ、ということしか言えない。技ならいくらでも教えてやるんだがな。

さて、何故俺はこんな話しをしているか。

それは俺に闘い方を教えて欲しいと言った奴がいたからだ。

我が友、兵藤一誠。
みなイツセーと呼ぶ。

奴はライザーとの闘い以来自分の力の無さを以前より強く感じたよ
うで

「フオウル！俺に闘い方を教えてくれ！

俺は弱い……………

確かに俺の神器は神をも殺す力があるかも知れないが俺が弱くちや意味がないんだ！」

と言ってきたが先ほど話しを理由に断つたのだ。だがイツセーは諦め無かった。

奴は恐ろしい提案をしてきたのだ！

「俺に闘い方を教えてくれたら御礼に……………
駒王学園の覗きスポット全て教えよう……………！！！！！！」

「っ……………！！！！！！」

俺の身体に電流が走った！
だが俺は理性を総動員して

「ふ、ふん！お、おおおお俺はまままま毎日直接みてててて
ているのだぞ？

のののののぞ、覗きなどし、しないわ！」
そ、そうだ！俺が覗きなど、覗きなどおおおお！！！！！！

「ふふふ、フオウル！嘘はいけないぜ！っーか声震えすぎてバレバ
レだ！

……………わかつているんだろ？
覗きは直接と違う素晴らしさがあることを……………！！！！！！」

くっ！痛い所をついてくる！
ああ！わかっているさっ！わかっているがっ！

「誰とも知らない女性の裸体、同性しかいないからこそその解放的な動きに羞恥の無さ！ たまに外れもあるが当たった時の喜び！ フォウル！お前ならわかるだろ！」

ああ！わかる！わかるさ！
でもな、俺……………

「覗きしたことないんだよおおおおおおお！！！！」
普通のことです。

イツセーが絶句している。何故と

「…ふふふ、イツセー笑えよ。
普段偉そうに乳道を語る癖に俺は覗きもしたこともない半人前のな
んちゃって乳道探求者なのさ…」

「な、どうして！？
お前ほどの男が！
フォウルだって分かるだろう？
あれの良さを！
直見とは違うあの素晴らしさを！」

「わかる！
いや、わかってるつもりだ！
俺とて見たい！
普段とはまた違うおっぱいを！
だがな、俺は覗きをできる環境では無かったのだ！」

「どういう意味だ？
覗きが出来ないなんて！」

「正確にはする必要がなかった。

入学のさいデイスさんが俺らの里の事を話さなかったか？
そう、俺の里は性的に奔放だ。

それでも普通は1人の者のみとで稀に複数くらいだ。

だが俺は里の女全員を相手にしたのだ！

この手がしてしまった……………」

「ま、まさか！」

「そう、俺は、俺は！覗きをする必要なく、常に堂々と見放題、触
りたい放題、やりたい放題だったんだああああ！！！！」

「そつちのが羨ましいわああああああ！！！！」

……………だけどな、覗きは男のロマン！だから…

……………」

「ああ！だから……………」

「「覗きに行こう！」」

その後一緒に覗きに行ったのだった。

鍛え方としてはイツセーは子猫に武術をならい型の練習、後はひたすら組手。

組手の相手は基本的に俺だ。

変な所があれば指摘してやるだけだが自分のスタイルは自分で見つけるのが一番、下手に教えても俺の場合ろくなことにならないだろう。

そしてこのやり方は良い方に予想外だった。

ドラゴン波で苦労したイツセーだから時間がかかると思っていたが直ぐに自分のスタイルを見つけたようだ。

後はひたすらに訓練すれば直ぐに強くなれるだろう。

イツセー、後はお前しただぞ？

さて次に子猫だが子猫は通常の打撃でほぼ必殺の威力を誇る。さらに数多くの武術も修得しているので並の者ならまず負けはしない。

だが本当の強者への決め手がないのだ。

あの力を使えば別なのだがな……………

実は俺は子猫が元猫又だと知っている。

以前子猫より悪魔の魔力とは違う力を感じ直接聞いたのだ。

子猫は素直に話してくれたが何処か辛そうだった。故に詳しく聞かなかつたし力の使用は強要はしなかつた。

子猫にも色々ある。ただそれだけのことだ。

俺は「変なことを聞いてすまなかつた」と言い頭を撫でたのだった。

話がそれたが子猫は強力な技が欲しいと言つた。

故に俺はあるアニメを参考に作つた砲撃魔法を教えることにした。

『スターライトブレイカー』

某リリカルな魔法少女のアニメだが以前ディースさんと暇つぶしにテレビを見ているとき偶然みたものだ。

その時見たのがこの『スターライトブレイカー』である。

己の魔力と周囲の魔力を収縮し放つのがこの魔法。

威力は俺とディースさんが太鼓判を押すほどだ。

そして教えているのだが中々難しいようだ。

ぶっちゃけドラゴン波に周囲の魔力を合わせるだけなのだがそれが難しい。

魔力を集めるのも割と難しいのだがドラゴン波でコツは得ていたよ
うだがそのさきが問題だった。

集めた魔力を上手く練り込めないとコントロールを失い霧散してし
まうのだ。

しかし流石というか何というか子猫はできるようになった。
時間はかかるが慣れればそれこそリリカルな魔法少女並みのスピー
ドで撃てるはずだ。

作れたものを霧散させるのはもったいなかったなので試しに撃たせて
みた所ヤバかった。

俺の全力の結界、具体的にはタンニーン of 攻撃すら耐えるものを一
発で撃ち抜いたのだ。

恐ろしい威力だが難点があった。

子猫の現在のコントロールだと一発撃つのに1時間かかるのだ。

要練習である。

子猫は子猫でこのアニメを知っていたらしくえらく感謝された。

そしてこの日より子猫が俺になつくようになった。

本当に猫みたいで滅茶苦茶可愛いのだが？

持って帰っていいかと思っただくらいだ。

そして祐斗だが祐斗は自己鍛錬と戦術、能力の変わった使い方を教えた。

祐斗ははっきり言って教えることが少なかった。

既に祐斗の理想形の原形ができ上がっていて後は鍛錬あるのみの状態だったのだ。

それでも直ぐに強くなりたいたいの事なので戦術と能力の変わった使い方を俺なりに教えた。

戦術は暇の時に様々な書物を読ませ俺との組手で試すを繰り返し取り入れることをした。

そして能力についてだが祐斗の神器は『魔剣創造』剣を作る能力だ。作る場所は任意で指定できるそうなので「魔法か何かで遠隔操作は出来ないか？」と言ってみた所、出来た。

慣れてないせいかまだぎこちないが撃ちだすだけなら簡単だったよ
うだ。

後は複数を設置したり同時遠隔操作が出来ればそれだけで祐斗は今の数倍強くなる。

………某英雄もビックリである。

ともかくこれが完璧になり禁手に至ればいずれ悪魔で祐斗はトップクラスの実力者になるだろう。

と全員方向性は違う（イッサーはまだ初歩）が順調にことを進めていた。
そして特訓に一先ずOKをだすと皆が御礼にとご飯をおごってくれ
ると言ってくれた。

今はその帰りで4人で雑談しながら歩いていた。

そろそろ皆と別れる場所につくといったころ、あれはやって来た！

住宅街の十字路に差し掛かったときぬうと人がでてきた。

それを見た瞬間イッサーを除く皆が動きを止めた。

俺にいたっては直視し難い現実をどう回避しようかと脳が高速で回
転している。

しかし俺の頭には？で埋めつくされていた。

何故？何が？どうして？

つかイッサーは何故どうして平気なんだ？

イッサー以外のもの。俺と祐斗は硬直していて祐斗なんか笑顔で固
まっている。

子猫は俺の後ろに隠れ服の裾をギュツと握っていた。

思考が回復した俺は改めて見て後悔した。

な、何だあれは!?

何故あんなものが存在しているんだ!?

回復した思考で考えても結果は変わらなかった。

突然現れたモノ、それは漢だった。

ただそれだけなら良いだろう。

筋骨隆々の漢がしている格好が問題だった!

ゴスロリ?猫耳?

なんじゃそりゃあああああ!!!

しかも服がぱつぱつ!?

素手でイッサーとか倒せそうだろ!?

この時点で俺の体が震え始めた!

震えている俺に気がついた子猫が手を握ってくれて少し落ち着いたのは内緒だ。

そして珍獣が

悪魔さんも一緒に探しに行くによ？」

ムーンナイトフラワーって何！？

あるかも知れんがアレが言つと別のヤバイ物に聞こえる！

つーか誘うなよ！アレと歩くとか怖いわ！

「夜は危ないから気をつけるよ？ミルタンは乙女なんだろう？

後今日は悪いけどパスしとくわ、何か頼みたいことがあるれば以来し
てくれよ。

格安で引き受けるぜ？」

「残念によ……」

でもわかつたによ！悪魔さんは敵だけど良い悪魔さんだからまたお
願ひするによ！

後心配してくれてありがとうによ／／／／／／／／

ひいひいひい！！！！

か、顔をあからめるなあああ！！！！

イッセーも変な所でフラグたててどうするのだ！！！！？？？
珍獣ではなく女にしる！

つーか待て！イッセーは何て言った？

乙女？いやいやいやいや！漢女だろ？つーかコレに女の漢字を使い
たくないわ！

最後にひとつ！

お前が俺の敵だああああああああああ！！！！！！

俺は膝をつき自分を抱きガタガタと震えていると何かが頭撫でてくれた。

子猫だ。

子猫……………お前凄く良い子だな……………

お前も怖いだろうに。

俺は子猫こから勇気を貰った！

しかし俺は知らなかった。

このあとの出来事が俺を壊しかねないほどの衝撃と恐怖をあたえるとわ！

*

あれから数分たった。イツセーと珍獣はまだ会話している。俺らは先ほどのままである。

そうこうしているうちにそれはやってきた。

「ちょっと！ミルタンは何やってるのん？探したわよん！」

突如珍獣を呼ぶの太い声が聞こえた。

つてつおおおおお！触ってしまったあああ！

「ぶるるるるああああああああああ！！！！！！」

い、いきなりひど「どつせええええええええええい」ちよつ！
まちなきいいいいいやああああああ！！！！！！」

「お前が天使を名乗るな！

この場に天使は子猫だけだ！悪魔だけでも！！！！

お前のようなのが天使なら……

……天使など俺が滅ぼしてやるわああああ！！！！！！」

そして俺は殴った！ひたすら殴った！

ミルタンと名乗る珍獣なんか「天使さまをいじめる悪魔さんはい
「よるな！」によおおおおお！」

と俺に威圧され逃げた。

今俺は変態のマウントをとり殴り続けている。最初は痛がっていた
が今では「ああん、激しいわん！」とか喜んでる。

殺すか？

「たたた、本当にあなた激しいわねん。

私いつちゃう「kill！！！！」「ちょ！冗談よ！これ以上は
私もやばいわん！

いだっ！も、もうむ！

し、しょうがないわねえ

.....いだ！.....
うつつつつつふうふううん！.....！.....！.....！.....

何！？俺が押し返された！？

「いただだ、今日はもう帰るわん！

あと私たちのことは内緒にし・て・あ・げ・る

じゃあまた会いましょ

「やつは去って行った。

「二度とくるなああああああああああああ！.....！.....！.....！.....！.....」

俺の叫びが響き渡ったのであった。

余談だが祐斗はあのことを完全に忘れていた。

イツセーすら珍獣との会話の途中から記憶がないらしい。

覚えてるのは俺だけかと打ちしがれていると子猫がポンポンと背中叩いた。

俺は「子猫おおおおおおお！」と叫び子猫に抱きついた。

子猫も俺を受け入れてくれて、子供をあやすように背中を撫でてくれた。

強烈に嫌な出会いがあったが子猫と仲良くなった。
そんな1日であったのだった。

番外てきな？イツセーと子猫と祐斗にミルタン+あの人！？（後書き）

お疲れさまでした。

いかがでしたか？

ミルタン達は主人公の天敵です。

貂蟬は今後もだしますので！

では次回で！

次は話しすすめるよお！

番人は娘。新たな力（前書き）

何とか更新完了。

長くなったのでコカビエルや白龍皇は次回です。

あと今回はかなりご都合主義なので嫌いな人は勘弁して下さいね。

番人は娘。新たな力

オーデインの案内で俺達はムスペルヘイムの門へ向かった。用意された魔法陣をこえるところには一点の光を除き薄暗い空間が広がっていた。

オーデインはやることがあるとかで案内はここまでらしいがどちらにせよ案内は必要無かった。

……………感じる。

とても強く大きい力を。

そしてとても懐かしい気配を。

巨人族の中でも強大な力をほこる存在。

俺とミリアの子のひとり。

スルトがそこにいる。

「……………アン、分かるか？」

「うん、私も感じるよ。スルトがいる」

アンもわかったようだな。

「……………これがスルトの気配なの？」

オーデイン様の見た未来でラグナロクの時にスルトが私達に奇襲をかけるとされていたけど……………

フオウルの眷属になって良かったわね。
あんなの私でも勝てるかわからないわよ?」

フレイヤは戦の女神でもあるのだが
彼女にここまで言わせるか……………。

流石は俺の子だ。

「さて……………行くか」

俺達は光に向かい歩き始めた。

*

どれほど歩いただろうか。
やっと門が見えて来た。

門に近づくにつれてスルトの存在を強く感じるようになっていった。

奴も俺達の存在に気づいたようだが、まだ3人が近づいてきたとし
かわかってないようだった。

現に奴の前に行った時に言われたのだ。

「貴様ら何用だ？」

ここは我が父である霸王龍の眠る地ムスperlヘイムである。
用が無ければされ！」

スルトは俺の亡骸を守ってくれていたのか！
変わらん。

姿も昔のまま美しいままだ。
長い紅髪に整った顔立ち。
気の強そうで猫の様につり上がった紅い瞳。体つきも全く無駄のないプロポーションで出るところはでて引っ込む所は引っ込んでいる。
全長は約13mほどか

しかし何より変わらないのはその心根。

強く、優しい家族想いの俺とミアアの娘。

久しぶりの再会なのに
何も話さない俺の代わりにフレイヤが話しかけた。

「何も話さない主の代わりに私が言っわ。
マスター

スルト、あなたに会いに来たのよ。」

スルトに会えた感動で話せないでいた俺の代わりにフレイヤが告げた。

「私にか？わざわざムスペル Heim まで来るとは物好きもいたものだな。

それよりも貴様は女神フレイヤではないか！

何故悪魔の気配がする！？

そして貴様が主と仰ぐその者は何者だ？」

姿も違うし力も抑えているから仕方ないか……………

「……………スルト。

俺、いや我がわからんか？

汝は我を忘れてしまったのか？

魂は何も感じないのか？

我は感じるぞ！

汝を遠くからでもわかった、感じた！」俺は力を開放し

口調を昔に戻し問いかけた。

何故直ぐに正体を言わないのか。

それはスルトにもアンと同じように気づいて欲しかった。

俺のわがままだが

「まさか……………ち、父上で、すか？」

俺はスルトに尋ねる。

「母上も！は、はははは！」

今日はなんと素晴らしい日だ！

父上に会えた！母上もこの世界に生をうけている！

良かった………本当に良かった。

しかし父上。私はムスペルヘイムを離れられません。

父上の身体はまだ燃えていないのです。

父上の身体を求めてやってくる愚か者がいるやもしれないのです。」

「なんだと！俺の身体がまだあるのか！？」

どういうことだ？

「はい。」

父上がお亡くなりになられ我々は父上の墓を建てようとなりました。

しかしいつ父上の力を求める者が分からない以上、安易に建てる訳にはいかず心苦しくはありましたが火葬し、骨を祀ろうとなったのです。

ですが流石は父上、生半可な炎どころか我々の生み出したどの炎でも燃やすことが出来ませんでした。」

スルトはここで一拍おき

「そして我々は原初の炎と呼ばれているムスペルヘイムの炎に目をつけこちらにお連れしたのです。」

ですが原初の炎でも父上を焼くには足りなかったようです。

ですが替わりに私が父上をお守りしていたのです。

しかし悪戯に父上の身体を動かしてしまいました。

申し訳ございません……。」

「謝る必要はない。

お前らの判断は間違っていないのだからな。

しかし俺の身体がまだあるのか……

ん？

そういえばムスペルヘイムにはどのような伝承があるのだ？

原初の炎などと呼ばれているのだ、何かあるのだろうか？」

俺の質問に応えたのはフレイヤだった。

「ムスペルヘイムはね世界を作った原初の炎と呼ばれているわ。それに対をなすのがニブルヘイムの氷ね。」

この二つが合わさり世界が生まれ霧の巨人が生まれたとされているわ。」

………わかった。
理解した。

北欧神話は解釈が少々違うがあながち間違っていなかったようだ。

「スルトよ、俺の身体が燃えなかった理由がわかったぞ。

まず俺はなんだ？」

「ち、父上ですか？

え、霸王龍でこの星の片割れで……………あっ！」

わかったようだな。
フレイヤにアンは頭に??を浮かべている。

「そうだ、ムスペルヘイムとは星の力の一端。ニブルヘイムも然り。そして俺はこの星と言ってもいい。

つまりムスペルヘイムは俺の力でもある。

よって俺の身体をムスペルヘイムの炎にさらした所で燃える所か力を取り込み回復しているだろう。

下手したら新たな自我が生まれているかも知れない。

ちなみに霧の巨人とは俺のことだろうな。」

3人とも驚いているな。

スルトに限っては顔を青くしているほどだ。

「父上……………」

わ、私は何てことを……………」

「スルトよ、そんなに落ち込むな。」

膝をつき泣きそうなスルトに近寄り手に乗ってから顔に近づけるよ

うに言う。

近づくとスルトの頬を撫でながら

「お前は今までよくやってくれた。

他の馬鹿に奪われていなかったのだ、それで十分だ。

例え新たな自我があったとしてもそれは俺の弟の様なもの。
お前が気にする必要はない。

本当に今までありがとう。」

この言葉でスルトは俺を抱き締めて泣き出した。

ぬう！スルトも立派な凶器を持っているのだったな！

うぶ、潰されるのが幸せだ！

つと、今はそんなこと……………そんなことではないわ……………！！！！

おっばいサンドは至上の楽園！極楽！

馬鹿なことを考えるのはこの頭かああああああ！！！！！！！！！！

ズゴオオオオオン！

俺は自分の頭を殴った。

あ、ヤバイ血がでてきた。

突如自らを殴った俺をみて

「ち、父上！

如何なされたのです！？」

突然ご自分を殴りだして！！」

「い、いや、娘に抱きつかれる幸せに酔いしれていてな……

後俺が女のおっぱいが好きなのは知っているだろう？」

お前のに挟まれて幸せにひたっていたのだが、まだやることがある
ゆえ理性を取り戻しにかかったのだ………」

実の娘にも性癖をぶつちやける。

それがこの俺霸王龍！

っーか知られてるしい〜

「だ、だからと言ってご自分を殴らないで下さい！

それに幸せと言って頂けるのは嬉しいですが、私のような無骨な者
に父上が幸せと言って「馬鹿者おおおおお！！！！！！！！！！」ひ
うっ！！」

俺は怒りと悲しみのあまり声を上げスルトのおっぱいサンドの中で
暴れた！

そのさいスルトが変な声を出したが気にしない！

「お前が無骨だと？

ふざけるなあああ！！！！！！

俺のもの!!!

子供欲しければ俺に言え!

つーか俺の娘を誰が嫁にだすかあああああ!!!」

「なっ! / / / / /

し、しかし我等は親子です!

そんな非道德的な!!!」

「関係ない!!!

俺らは人間じゃねーんだよ!

神話の存在だぞ!?

近親相姦当たり前!

はい! 問題なーし!

お前俺の! けつてーい!!!

それともスルトよ、父は嫌なのか!？」

俺は自分で壊れたのを自覚した。

だが構わん!!!

ミリアもディースさんも母さん………は父さんのでもあるけどアングルボダもフレイヤもスルトも俺のだ!!!!!!

いつそハーレム作ってやる!

本人はハーレムの実感がありません。

っーか娘に嫌われてると思うと……………じゅううう。

「そ、そんな父上が嫌なんてありえませんか！！！！」

はっ！だからと言って父上の子を生みたいと言っわけでは……………

……………でもでも！

あああああああ！

私はどうしたら！？」

良かった。嫌われてはいないようだ。

……………っーかヤバイ。

先ほどまで感情を爆発させていて気づかなかったが俺おっぱいプレスされてたんだ……………

ああ、意識がやばいなあ。

マジに幸福死する……………

「っうっうっうっうっうっうっう……………

わ、わかりました！

私父上の子を生み……………父上？

どうしたのですか？

び、びくりとも動いてませんよ？」

スルトはひきつった笑みを浮かべていう。

「……………スルト……………大変幸せなのだがな……………」

「あ、ああ。すまん今そつちに行く。」

ここで動かなければこの後の自体にはならなかったであろう。

しかし俺は動いてしまった！

まだ痺れているのにもかかわらず！

つまり

ツルっ！

「ぬおおおおおおおお！またかあああああ！

イエス！おっぱいライダー！あああああ！！！！！」

俺も大概余裕である。

ズボっ！

「むがつ！」「ひゃん！」

トンネル（服のなか）に突入した！

く！なにか掴むものはっ！？

いくら俺でも痛いものは痛い！

何か！何かないか！服は滑って掴めんし……………

あった！

せえええええい！

ぎゅむ！

「あああああああああ！……！！……！！」

スルトの声が響いた。

ん？コレ何？ピンク色のコレなー？
あっ！わかったー！

CHI KU BI だあ！

馬鹿なことを考えているこの時も絶賛おっぱいクライミングの真っ
最中ゆえに

「あん！ち、父上！
いくら父うきゃん！ち、小さくとも、父上の力、でっ、掴まれひ
いいん！」
になる。

こうなつては仕方ない。とりあえず

「いただきます」

こりっ！

「ひゃあああああああ……！！……！！……！！」

巨人はでかかった

アングルボダかつ！

しかし何故小さくなっている！？」

そしてアンによって説明をつけると成る程と納得し術式を教えて貰っていた。

「それで父上は今後どうするのですか？

私は父上の身体を守護しますので離れられません……」
瞳が会いに来て下さいよ？とつげているが。

「何を言っている？お前もくるのだぞ。

こんな所だれも来んだろうし来たとしてもムスペルヘイムの炎に焼かれ死ぬわ。

焼かれない奴であればそもそも俺の身体を必要としないだろ？
だからここを守る必要はない！」

「しかし！」

頑固だなあ

「わかったわかった。

とりあえず俺の身体を見に行くぞ。

それで取り込めるようなら取り込む。

無理なら俺があとかたもなく消し飛ばす。それでいいな？」

と伝え俺達は門を潜り俺の身体に向かった。

俺の身体は直ぐに見つかった。

姿は俺の龍化時と同じ。

俺なのだから当たり前だ。

しかし不思議な気分だ。

俺がもうひとりいる感覚。

これは生まれた時を思い出す。

〴〵その感じは間違っていないよ

声が響いた。

これは！！！！！！

「貴様！何「スルト！待て！」父上？」

これはまさか

「……………久しぶりだな〴〵俺よ。」

もうひとりの俺。

片割れ

この星そのもの。

“ そうだね、生まれた時いらいだ。

色々話したいこともあるけど単刀直入に言うよ

この身体持つて行ってくれない？”

「自我が生まれそうなのか？」

“ うん、流石に僕たちと同じ力が目覚めると面倒だからね。

だけど君が取り込むと君が暴走する恐れがあるんだ。

だから君に眠る神器の核に埋め込もうと思うんだ。幸いまだ何も宿つてないしね。

それなら君の許容量は越えないで力は単純計算では「ま、待て！」
どうしたんだい？”

俺に神器の核だと？ どういうことだ？

神器は人にしか宿らないのであろう？

俺が疑問を浮かべていると俺が応えた。

“ ああ、もしかして気づいてない？

君は龍人だけど何代か前の龍人が人間と子をなしているんだよ、確かに人間の血は薄れているけど人間の血なのは確かだ。
だからかな、君に神器が宿ったのは。

やったね、君も今日から神器使いそれも神殺しクラス、いや僕たちは神以上だから星殺しかな？」

楽しそうに言う俺。

自分で言うのもなんだがやばくね？

だが持つて行かないと面倒らしいし仕方ないか……………

「わかった。

持つて行くから俺に俺を埋め込め。」

「了解だ、頼むよ」

「任せろ」

前の俺の身体は光になり俺の身体に入り込み

俺は新たな力を得た。

「うん、上手く定着したね。」

君の能力は何かな

え」と

「いや、わかる。」

俺の能力は俺（お前）の力だ。

正確にはお前は生物で俺は無生物だがな」

「いいね、創造の力か。
そうだねえ、『マタークリエイティブ物質創造』ってとこかな？
頼もしいね。

今度もその力をあわせて僕を護ってね、僕

「ああ、今度は死なずに護ってやるさ。
ではな！」

俺達は去ってのだった。

さてそろそろ帰るか。ミリア達は元気だろうか……………

ミリアがこの子供達をみて喜んでくれるといいがな。

余談

スルトも一緒に来ることになり人サイズになる魔法を使った時のことだ。

「さてスルトよ、今の世は人の世だ。その大きさはまずいから人間サイズになれ。あと普段は力を抑えるのを忘れるな。俺達クラスの者が常に力を垂れ流しにすると色々影響を与えかねない」

「はい！」

俺に返事をして魔法が発動。

光が晴れるとそこには人間サイズのスルトがいた。

「サイズは問題ないな。なら今度は力を抑えろ」

「はい！」

またもや返事をしてから行動を開始。

何故か光だした。

光が晴れるとそこには

「父上？如何なさいましたか？」

14歳ほどのスルトがいたのだった。

ちなみにスルトの元の外見年齢は20半ばほどである。

「……………スルト、若返ったぞ、外見が」

番人は娘。新たな力（後書き）

どうでした？

主人公＋主人公着属チートが凄まじいです。

やりすぎかな？

神器は凄い！こかびー乙！白は役立たず？（前書き）

余り良い文章ではないかも……………

私的には長くなりすぎてまとまりが悪い気がします。

それでも読んで頂けたら嬉しいです。

ちなみにエロはないかな。

おっぱいはあるよ！

これは内容に時間軸のずれが一部あったので修正したものです。

神器は凄い！こかびー乙！白は役立たず？

あの後スルトも俺の眷属になった。

駒は『兵士』だが個数は8個、しかも1個は『変異の駒』でだ。

神器に封じられて力が落ちてるとは言えドライグをこえるとは……
…。

まだ駒は『騎士』と『戦車』が2個つつ残っているのだがなあ。

まあ良いか。

戦力は多くて損はない。

しかも内2人は俺の娘だし1人は元最上位の女神だ。
文句などあるはずもない。

しかし問題、と言うか失敗が1つあった。

スルトを眷属にしたあとに思いついたことだ。

それは俺の神器使えば駒を『変異の駒』に作り変えるのが出来たの
では？である。

神器『物質創造』だが物質を創造する以上、物質を理解する必要があるが
この神器の副産物として解析がある。

この解析は無生物、つまりは物質に存在するデータを例えプログラム
ムであるつと自動で解析する。

それを自動で記憶して俺にバックアップするのだ。

この機能は大変便利で俺が何か創造するのにも適用される。

何か想像すると自動で想像したものの物質を、例えば末元物質でさえ構成、概念、使用方法、創造時間を解析してしまう。ゆえに創造して直ぐに使えるのだ。

俺の肉体がベースとは言え恐ろしい神器だ。

これにかかれば最強の魔剣、聖剣は勿論今の科学力を超える所謂オーダーパーツすら作成可能なのだ。

ただどんな物にも完璧な物が存在しない様にこれにも問題があった。とりあえず今わかっていることだが

? 時間が掛かる

? 複数同じ創造は種類に関係なく10個まで

? 創造するものにより時間の経過に差がある。

? 一度創造したものは破棄不可能。

である。

短剣などはともかく戦闘にはあまり使えなさそうだ。

他にも何かあるようだがまだ神器が宿ったばかりで全て目覚めていないようだし、神器とは思いに左右され能力を最適化、もとい変化させるもの。

もう少し使いがってが良くなれば良いのだがな。

っと、話がそれたが今の説明から分かるだろう。

つまり『変異の駒』のデータがある物質を結合するように創造し駒に結合させれば『変異の駒』の完成であり、無駄に駒を消費しなかったのでは？と言うことだ。

ならば駒を作ればと思うかも知れないがそれは出来なかった。

正確には作れるのだが俺をマスターと駒が認め無かった。

これは推測になるが駒1つ1つは独立しているが悪魔である限り駒の使用限度があり駒はそれを自動で読み取り限度をこえないようにするのだと思う。

ならばその機能を消せばと思うだろうがそれは出来なかった。

先ほどの『変異の駒』は分類では上書きに値するので創造は簡単だ。要は『変異の駒』と普通の駒の誤差を見つけその誤差を上書きするのだ。

そるに対して駒のエラーを消すのはそのまま消去に値する。

消去することで駒のバランスが狂い『悪魔の駒』ではなくなってしまうのだ。

その効果は悪魔になり駒の特性は変わらないが眷属にならなくなってしまう。

つまり駒の特性を持った独立した悪魔になってしまうのだ。

それでは意味がない。

そして上書きと消去を繰り返すと全くの別になることは容易に想像できるゆえ出来ないのだ。

説明が長くなつたがちよつと勿体無いことしたなあと言つた話だ。

まあまだ駒は4つ残っているのでスルトクラスの者で無ければ『変異の駒』でこと足りるゆえ問題と言つほどではないか。

さて、それでは現在の話をしてしようか。

今俺達はヴァルハラの間で待機している。

何をしているかと言うと帰るための転移魔法陣を創造中なのだ。

内用は部室のグレモリー家魔法陣に直接アクセスし召喚の容量で帰るためだ。

その作成に数時間必要なので待機している。

龍化して帰っても良かったが、一々服が弾け飛ぶのがアホらしいのと神器の実験も兼ねているためである。

待機中に色々したが一番驚いたのはスルトが処女だったことだろう。スルトによれば

「仕方ないではありませんか！

父上が亡くなりムスペル Heim へ移動してからほぼ独りだったので
すから！

その前も父上や母上と共にいるか己を磨くことに時間をさいていた
のですから！」

らしい。

それだけ男を知らなければ自分に自信が持てる分けないか。

ふむ、娘の処女を奪う父か。

人間的には鬼畜だな。

だが俺は人間ではないから関係なし

ちなみにこれを聞いたフレイヤ（一緒にいた）と俺はそろって

「「勿体無い！人生の八割損してる！」」
と言ってしまった。

フレイヤはイツサーとも仲良くなれそうだな。

そしてアン（一緒にいた）は

「スルトはいいなあ、初めてがお父さんで〜！
別に私の初めてが悪かった訳じゃないけどなんかずーるーいー！」

どこかずれていた。

まあともかくあと数時間で帰れる。

まだ数日だが皆は元気にしているだろうか。

そしてミリアは喜んでくれるだろうか。

俺は早く時間がたたないかと心待ちにしているのであった。

*

イツセイ side

フオウルが出かけてから直ぐにとあることが起きた。

聖剣、これが関係していた。

まず木場の様子がおかしくなった。

どこか上の空で何か思い詰めた様子。

俺の家に集まって俺の恥ずかしい写真を見てからだ。

そして教会の聖剣使い、紫藤イリナとゼノヴィアが現れてこの件は急速に進んでいった。

何故かイリナ（幼なじみだった！）達と闘い追い詰めるもあえなく敗北。そのさいアーシアと小猫ちゃんにドレスブレイクを発動して

！！）だけどいざ戦闘になれば流石は魔王様の妹、部長にせまる戦闘力をもつそうで、しかも魔力は部長以上だそうだ。

ケルベロスを部長、朱乃さん、ミアアちゃんて攻撃したときは敵のケルベロスに同情してしまったほど凄まじかった。

そして俺達の戦力はそれだけではない。正確にはなくなった。

木場が『禁手』に至った。

木場の『禁手』、それは『聖魔剣』。

聖と魔という普通なら合わさることのない力をもつ異常な剣だ。

だがその力は複数が合わさったエクスカリバーをもつフリードに打ち勝つほどだった。

そして戦力はこれだけではない。

ゼノヴィア、彼女も参戦している。

ゼノヴィアの持つ破壊のエクスカリバーとそれを凌駕する聖剣『デユランダル』を使い俺達と共に戦っていた。

だが、それでもコカビエルの力は異常だった！

俺の『赤龍帝の籠手』で倍化した力を第2の力である『赤龍帝からの贈り物』で部長に譲渡し何倍にもなった滅びの魔力による攻撃すらもはね飛ばされた。

絶体絶命のピンチだが俺には打開策がある。

俺の『禁手』である『赤龍帝の鎧』を使えばコカビエルを倒すのも不可能ではない。

だが俺はまだ弱いから何か代償が必要だろう。

前回は左腕だった。

今回はどこだろうなあ……………

どこであろうと皆を護るためならくれてやるさ！

でもご褒美が欲しい！

身体の一部を捧げるんだ！

何か欲しいんだ！

だから

「部長おおおお！

こいつ倒したらおっぱい触らせてくれますか！？」

我ながら最低だ……………

でもな！触りたいんだよ！部長のおっぱいは至高のおっぱいなんだよ！

「わ、わかったわ！コカビエルを倒したらいくらでも触っていいわよ！

こんなことでコカビエルを倒せるなら安いものだわ！」

……………諸君、聞いたか？

聞いたな？

聞いたぞ！ふふふ……………

「ふざけるなあああ！」

お前が倒しちゃったら俺が部長のおっぱいを触れないだろおおおおお
おお！！！！！！

俺はお前と違っていつでも触れるわけじゃないんだよおおおおお
おお！！！！！！」

イツセーがぶんすかと擬音がでそうな怒り方をして俺に文句を言うてきた。

なんだ？何故ここでイツセーが怒りリアスさんのおっぱいに触るか言っているのだ？

そもそも状況がわからん。

帰って来て見れば部室には誰もいないわ、学校は結界で被われているわでフレイヤ達を部室に残し外にでてみればリアスさんを殺しミアを犯して殺すとか言った馬鹿がいたから思わず踏みつけたのだが……………なんだ？

俺は????を頭に浮かべミアを見た。

ミアはそれで理解し、俺に状況を説明してくれた。

ふむ

「イツセーよ……………すまん」

とりあえずイツセーに謝った。

俺を相手に余裕でいてただで、「五月蠅い（うるせえ）！！！！！！」
「ぐっ！！」

俺とイツセーの言葉が重なる。

「元はと言えば……………」イツセーが一步踏み出す。

「お前がいなければ……………」俺が続く。

「だから……………」

「故に」

「「お前を倒す！！！！！！」」

「ウエルシュ・ドラゴン、バランスブレイク！！！！！！」

イツセーが一瞬で『禁手』に至り、全身赤い鎧姿で俺と並んで立っている。

皆はイツセーが一瞬で『禁手』したことに驚いているようだが怒りに燃える俺達には気にする余裕はない。

「イツセー、ドライブ、どれほどいける？」

「……………どうだドライブ？」

何か俺、スゲーいけそうだ！！」

「驚いた！この前は10秒だったが今なら5分はいけるぞ！
代償もない、相棒から溢れるドラゴンのオーラが賄っているようだ
！……！」

ドライブの返事を聞いてイッセーは

「そうか、ドライブ。

赤龍帝の力知らしめてやろうぜ！

おっぱいの為に！」

「応相棒！……！」

おっぱいはともかく！……！」

イッセーとドライブの声が響いた。

そしてイッセーがこっちを向き。

「フオウル………ごめんな。

俺、お前に八つ当たりしてた。」

謝るイッセーにたいして

「気にするな。

俺も言い過ぎた。

すまん。」

言い過ぎたことを謝った。

「ただな、俺はおっぱいの為にコカビエルを倒したい！」

イツセーの思いが伝わる。

「俺もこかびーを殺したい……………」
俺のミリアを護るために」

俺も思いを伝える。

「なら」イツセーが提案しようとして

「一緒に」俺が続く。
だが思いは同じ！

「こかびーを倒すぞ……………」

俺達の声が重なった！

そして俺は言う

「イツセーよ、今から龍気を高める呪いを使っぞ！ついて来い！」
「応……………」

イツセーが応えた。
行くぞ……………！

「おっばい……………」
俺は叫ぶ。

「おっばい……………」
イツセーが復唱する。
そしてスピードが上がっていく……………！

「おっぱいとは……！」
「至高……！」

「おっぱいとは……！」
「幸せ……！」

「おっぱいとは……！」
「男のロマン……！」

「おっぱいに……！」
「勝るものなし……！」

「おっぱいは……！」
「最強……！」

「おっぱいは……！」
「最高……！」

「おっぱいの敵は……！」
「俺らの敵……！」

「おっぱいを……！」
「思え……！」

「おっぱいに……！」

「願え！……！」

「おっぱいを奪う者は……！」

「消せ！……！」

そこで俺は一度止めイッサーを見る。
イッサーは頷き

「「おっぱい……いいいいいい……！」」

龍気が膨れ上がった……！

そして

「「行くぞ……！」」

俺とイッサーは突撃した。

*

まずは俺が力のかぎり「ぐほあ……！」
殴り飛ばし。

「イッサー！行ったぞ……！」

飛ばした先にはイッサーがいて

「Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!
! Boost! Boost! Boost! Boost! Boost!
Boost!

「！」

「おっぱああああああい！！！！！！」
どっせええええいと言っているようです。

「がはああ！！！！」

瞬時に力を高めたイツセーに殴りかえされた。

それをさらに

「バストオオオオ！！！！！！」

チエストオオオオと言っているようです。

「がばあああ！！！！」

殴り返した。

それをさらにイツセーが殴り返しを繰り返した。

俺達の気合いのかけ声と共に繰り出される拳によりさながらキャッチボールのごとく行き来するこかびー。

本人達は気合いのと言っていますが周りからはおっぱい用語を叫んでいるようにしか聞こえませんか。

プロもびっくりのスピードで繰り返されるキャッチボール改めて殴りこかびーだがこかびーも力を持つ存在。

何とか俺らの無限ループから抜け出した。

「ぐっ！き、貴様は何者だ！」

そこの赤龍帝がこれだけの力があるのはわかるが、何故貴様にそれ

ほどの力がある!?

この聖書にも記される俺をここまで手玉に取れる存在など限られて
いるぞ!!--!!」

こかびーの癖に自信過剰だな。
少しづついぞ。

「聖書くらいでいい気になるでないわ!!--!!
こかびーは調査しなかったのか?

ミアアの眷属を!」

俺の言葉に反応を見せるこかびー、顔が若干青くなっている。

「貴様、は、霸王龍か!!--!!」

しかし霸王龍は北欧に向かったはずだ!
それに戻ったと「フオウルうううううううう」ええい!また被せ
やがって!!--!!」

こかびー邪魔されてばかりだな。

「どつした?」

軽い調子で聞いてみた。

「そろそろ5分たつから終わりにしようぜ!」

もうそんな時間が、楽しい時間(殴りこかびー)はすぐにすぎるな。

「分かった。」

「ならばあれで決めよう！……！」

「これだけでイツセーなら分かるはず！」

「ああ。俺達にはあれがふさわしい！」

「わかったか！」

「そう、俺達には」

「「ドラゴン波だ！」」

「な、なめるなああああああ……！！！！！！」

「この俺が来ると分かる「無駄だ。」何、ぐう！？体が！うごかない！？」

「霸王龍！何をしたあ！？」

「この俺がただ闇雲に殴っただけだと思っただのか？
それこそなめるなよ？」

「こかびーの体に存在する身体機能低下のありとあらゆるツボをひたすらについた。」

「これでこかびーはしばらく動けんぞ！」

「ふふん、俺は神器の解析を使いこの様なこともできるようになったのだ！」

「肉体も一応は物質、作れはしないが解析はできるのだ！」

最初に試したのはスルトだがな！

良い声で鳴いてくれたわ！あーはっはっは

「くっ！そのようなことができるとは！

白龍皇より厄介ではないかっ！

それよりこかびーとは何だ！

俺はコカビエルだ！」

こかびーはアルビオンを知っているのか！
なら会う日も近いだろうな。

まあともかく

「コカビエルだと長いのでこかびーと名付けたただけだ。
良かったではないかアダ名ができて。

お前はここで死ぬのだから！

イツセー！行くぞ！！！！！」

俺らは一斉に構え

「ドオオオオオオ」 「パアアアアア」
イツセー？

「ラアアアアア」 「イイイイイイ」
何か違うくないか？

「ゴオオオオオ」 「オオオオオオ」
まさかこいつ!?

「ンンンンン」 「ツウウウウウ」

ああ、イツセーお前は……

「波あああああああああああああああ!!!!!!!!!!!!」
「!!!!!!」

お前はリアスさんのおっぱいで頭が一杯だったんだな。

俺とイツセーのドラゴン波が交わり巨大な光の奔流となってこかびーに迫り

「くそっ!体が!

あ!まてまてまて!に、逃げ!あ、あああああああああ
あ!

ぎゃあああああああああああ!!!!!!!!!」

こかびーを飲み込んだ。

撃ち終えた俺達は

「イツセー……」

「ごめんフォウル。」

俺、俺は……！！！！」

俺はイツセーの肩に手を置き

「大丈夫だ！俺にはわかっている！！」

お前はリアスさんのおっぱいが楽しみだったのだよな！

お前は悪くない！

むしろ乳道の探求者である俺がわかってやれなかったのが悪いのだ！

俺こそ悪かった！」

「フォウル……」

「イツセー……」

「友よ！！！！」

俺達は熱い抱擁を交わした！

様子を見ていた者たちは驚くもの（見ない顔の中々良いおっぱいをした女やアーシア）、呆れる者（祐斗や小猫）、ニコニコしている者（ミリアと朱乃）、そして顔を赤らめる者がいた。リアスさん

「さあイツセーよ！お前を咎める者はいない！

約束を果たしに行くのだ！

行け勇者よ！姫がお前を待っているぞ！！！！」

イツセーを極楽に誘うがごとく仰々しく言つとイツセーもテンション

おお！このドラゴンのオーラは紛れもなく父のものだ！

久しぶりだ父よ！」

先ほどの声とは違う声で応えてきた。

こちらがアルビオンか。

アルビオンの様子で俺が何者か理解したようで白（名前が分からないため）が話しかけてきた。

「貴方がかの『霸王龍』か？

話はアルビオンより伺っている。

会えて光栄だ。

ちなみにコカビエルは貴方が？」

こいつは強いな……

わりと丁寧な対応だが強烈な闘気がひしひしと伝わってくる。

少なくともサーゼクス並だな。

まずは話をすすめようか。

「正確には俺とそこで延びてる奴だ。」

ちなみにイツセーは吹っ飛ばされたさい気絶したようで今はアーシアに膝枕をしてもらい治療中だ。

白は若干目を細め

「彼は何者で？」
と聞いてきた。

「あいつは赤龍帝の兵藤一誠だ。
なかなか良い龍気を放つぞ？」

まあお前のほうが強いだろうがな。」

赤龍帝の言葉に反応した白。

……………まさか

「……………アルビオンよ」

「な、何だ？」

こいつらまだ

「お前らはまだ喧嘩しているのか？」

「け、喧嘩ではない！」

俺とドライグとの死合いだ！
喧嘩と同列など父でも許さんぞ！」

こいつも変わらん。

「すまんすまん。」

あまり変わっていないようで呆れたのと嬉しいのが半々と言った所なのだ。

「……………ただ分かるな？」

最後の部分に殺気を込め良い放つ。

「……………父よ、わかっている。
この星を破壊するな！だろ？」

安心しろ、俺もドライブもそれぐらいはわきまえている。」

「なら構わん。」

スツと殺気を消すとアルビオンも少し安心したようだ。

「はぁ」というアルビオンのため息の様な声が聞こえた。

「……………凄まじい殺気だ。」

流石は霸王龍と言った所か？

今の俺では手も足も出ないだろうな。

「ははは！」

白は突然笑い出した。

「ど、どうしたのだ？
少々気持ち悪いぞ？」

聞いてしまった！

だが訳もわからず笑いだした奴がいたら気持ち悪くないか？

「いやいや、失礼した。」

俺より強い、それも圧倒的な存在にまさかお使用で出会つとは思っていなくてな。

いささか嬉しくなってしまったようだ！

俺は強い者と闘いたい。

だから」

そう言つて白はこかびーを抱え

「いつか貴方に挑ませてもらう。

では失礼する。」

来たときと同様、光の様な速さできえていったのだった。

余談だがイツセーは無事リアスさんのおっぱいに触れたようだ。ただ触つただけらしい。

このへタレが……！

神器は凄い！こかびー乙！白は役立たず？（後書き）

どうだろうか。

私のヴァーリとこかびーのイメージってあんな感じなんですよね。

ちなみに遅れましたがスルトのイメージは赤ポリのコーティカルテです。

フレイヤは女神ミリアをベースに猫っぽいつり上がった目をした感じをイメージしてます。

ではまた次回で会いましょう！

再会・出会い・驚愕（前書き）

あまり進みません。
後日談みたいな？

再会・出会い・驚愕

今この空間はカオスだ。

場所は旧校舎の教室の1つ。

メンバーはリアスさん、ミリアとその眷属、俺の眷属、母さん、ゼノヴィア、グレイフィアさん、後は生徒会長のソーナさん、眷属の匙だ。

時間はこかびー撃退の翌日の夜10時ほど。

何をしていたかというとパーティーだ。

内容はこかびー撃退出来ましたー！と俺の眷属いらっしやーい！とミリアと娘達の再会！を纏めたものと言っておこつ。

だがいきなり話を始めても分かりにくいだろうから昨日のあの後から話を始めようと思う。

こかびー撃退後、サーゼクスが慌てたように現れたが事態が解決していたので後のことをグレイフィアさんに任せ帰った。

なんでもこかびー襲撃のせいで3陣営の関係が変わるかもしれないらしく忙しいらしい。

こかびーめ！奴のせいでサーゼクスとおっぱいトークが出来ないではないか！

せっかくイツセーを交えた3人で語り合おうと思ったのに！

いなくなっても迷惑な奴だ。

まあそれはさておき片付けはとりあえずグレイフィアさんに任せて部室に戻って俺の眷属を紹介した。

スルトとアングルボダは驚きながらも娘と言うことで納得したようだがフレイヤを紹介したときの皆の驚きようは凄まじかった。

それはそうだろう、女神が悪魔になるなど墮天どころの話ではないからな。

だがフレイヤと言葉を交わすことで皆は納得したようだ。

俺の女版、皆この感想を持ったに違いない。

そしてミリアと娘だが二人を見た瞬間に理解したのだろう、ミリアは二人を抱き締めていた。

二人も久しぶりの母に甘えていたようである。

ちなみにイツセーは俺の眷属をみて涙を流し「神よ！」と言って膝をついていた。

自分の理想を俺に見たらしい。

突然笑い出した。

.....クッションを抱いて。

スルト.....色々溜まっているのだな。

何かあれば父は話をきくぞ？

次に小猫とディースさんこの二人はまだましだ。
ひたすら飲み食いをしている。

ある一点を見なければまだ良かったのだ。

二人の足下を見なければな。

足下にあるもの、それはテーブルに乗りきらなくなった皿と酒瓶。

それに足下が埋めつくされているのだ。

それでもまだペースが落ちていない。

時折二人は顔を見合わせ「ニヤリ」と意味深に笑っている。

何コレ？ちょー怖い。

さ、さて。次はアーシア、ゼノヴィアの二人。

この二人は祈っていた。

悪魔であるのに神に祈っていた。

ぴくりとも動かない所を見ると多分あまりの頭痛に気絶しているの
だろう。

次にある意味本当の自分をだしているリアスさん、グレイフィアさん、朱乃だ。

だが近くにまとまってはいるが皆各々何か話している。

リアスさんは

「どうすればイツセーは私の気持ちに気づくの？」

「うううう、分からないわ。」

恋する乙女だ。

グレイフィアさんは

「全くサーゼクスは！」

私に色々押し付けて！拳句には私を売るし！

ああ、でもアレは凄かった／＼

だからと言って許す訳では、でも／＼」

怒ったり赤くなったり忙しいようである。

朱乃はだが

「ふふふ、私は幸せね。」

フォウル君とイツセー君二人が私を取り合っているなんて！」

若干トリップしているようである……………

一番マシの連中が祐斗と匙である。

最初は匙が祐斗を嫌っていたようだが話しているうちに打ち解けたよう
で今ではお互いの苦労話で花をさかせている。

不憫だ……………。

そして一番五月蠅いのがイッサーとフレイヤである。
フレイヤが元は女神であるせいかイッサーはもの凄く恐縮していた
が酒が入るとそれは変わった。

よってテンションの上がったイッサーが突然「おっぱい！」と叫ん
だ。

それを聞いたフレイヤがニヤリと笑い

「これ？」と言いながらぐいつと己の爆弾おっぱいを持ち上げた。

「イエス！おっぱい！」イッサーのサムズアップ

「OH ～！おっぱい！？」

フレイヤはおっぱいを動かす。

そして

「「イエーイ！！！」」「ハイタッチをかわした。

正直意味が分からん。

内容がではない。このテンションがだ。

そしてこれは何故か闘いに発展した。

「おっぱいが最高だ！」イッサーの弁

「ち こが最高よ！」フレイヤの弁

「ち このどこがいいんだよ！」

おっぱいに決まってるんだろ!?

おっぱいは見ると幸せ触れば極楽なんだぞ!?!」
わかるが女に語ることはないぞ!

「それはわかるわ!」

わかるのか?!?

「でもねち こは凄い気持ち良くなるのよ!
心も体も満たされるのよ!

触ると面白いし!」

フレイヤよ、男に言うことではないぞ?

「なんだと!」

「なによ!」

もう訳が分からなくなってきたな。

さて、最後に俺と母さん、ソーナさんだが

ここが一番力オスだ。

何より俺が酷いだろう。

実は俺は酒に酔うと

「わーい、お母さーんのおっぱい!」だきっ!もみもみ

そう!俺は酔うと性格が子供のころ、具体的には4歳くらいに戻っ

てしまうのだ！

当然子供のころからおっぱい星人だった俺はおっぱいを揉む！
子供故に抱きついて！
ただそれが母さんだけなら良かった。
それだけなら

「あん！あらあら、フオウルはおさんんん！！お酒を飲むとひゃん、
い、いつも、こ、子、供になるのですねひあ！」

ですむがこともあろうに俺は

「わ〜い！お姉ちゃんのおっぱい！」

「え？え？きやあ！

ちよ、ちよつと！？」

ふ、フオウル君？や、やめつやん！

お、おねが、い。

あ、ああ、だめええええええ！！！！！！」

やっっちゃった

俺の暴走は止まらずこの後も母さんとソーナさんのおっぱいでおっぱいバレーをし続けた。

しまいにはソーナさんもなれていたよう

「あんまり悪戯したら駄目よ？」

とお姉ちゃんみたいになっていたのだった。

ちなみに俺がこのように説明できるのは理由がある。

俺は酔っても記憶が完全に残るタイプだ。

そして理性あるにはあるが行動が幼児化するのだ。

おかげで知らない奴とは酒を飲めないのである。

はあ、明日ソーナさんに謝りに行かなくては……………はあ。

ちなみにソーナさんのおっぱいはサイズは普通だが触り心地が良かった！

余談ではあるが

後日ソーナさんに謝りに行くと

「何がです？」

と返ってきた。

昨日のこと忘れているらしい。

ちょっと羨ましいと思ったりしたのだった。

再会・出会い・驚愕（後書き）

次はどうしよっかなあ。

そつだ！そろそろあの先生がでるぞ！

と言っわけでまた次回よろしくです。

魅了するもの。(前書き)

すみません遅れました？

理由はなかなか文章がまとまらなかったからです。

ちなみに前回のあとがきであの先生が！とか言っていましたけど予定を
変更しました。

誰かは読んで頂ければわかると思います。

魅了するもの。

何だこれ？

目が覚め体にかかる重みに気がつき自分の胸元を見た俺の感想だ。

時刻はおよそ午後2時ほど。

他の生徒は普通に授業を受けている時間だが俺は何か気分がのらなくさぼって屋上で昼寝をしていた。

そして今日が覚めたのだが何故か猫が俺の胸に乗り寝ている。

真っ黒な猫だ。

日の光を反射してしまいそんな艶のある毛は風をあびサラサラ揺れ動いていた。

試しに撫でてみるとやはりサラサラしていてそしてふわふわしていた。

思っていたよりも良い触り心地に俺はそのまま撫で続ける。

気がつくくと黒猫も起きていたようだが逃げたり暴れたりせず気持ち良さそうに目を細めなすがままだにされている。

可愛いな。

純粹にそう思った。

そう、この黒猫がただの猫ではなかったとしても。

俺は黒猫を解析してしまったのでどのような存在か理解してしまっている。

小猫と同じ『猫又』かその上位の『猫しょう』であろう。

だがどうでもいい。

「黒猫よ、お前が何者であろうと俺は知らん。だがお前が猫の姿で有る限りお前を猫として扱っ、それが嫌なら俺のもとから消えるか本来の姿になるのだな。」

黒猫は一度目を見開くがまたすぐに目を細めなすがままにされた。

「このままで良いのだな？」

ならこの時を今は楽しもうか」

そうして俺はまた眠りについた。

*

次に目を覚ましたら空が赤らんでいた。
そして目の前には

「フオウル？起きました？」

ミリアがいた。

頭に感じる柔かな感触とミリアの顔の位置から膝枕されているのがわかる。

ミリアに警戒などするはずもなくずっと寝ていたようで結構時間が経っていたようだ。

それに黒猫も何処かに行ってしまったようだ。

俺は少し残念に思いながらミリアに話かけた。

「ミリアありがとう。」

おかげで良く眠れた。

今は何時くらいだ？後黒猫はいなかったか？」

「今は5時くらいですよ。」

今日は悪魔家業はなしにしたのでその連絡にきたんです。

それと黒猫ちゃんならあそこですよ。」

やはり結構寝ていたようだなど考えながらミリアの指さす方を見る。
いた。

少し離れた所でこちらをじっと見ている。

チヨイチヨイと手を動かしてみると近寄ってきてまた俺の上ののり丸まり俺はまた撫でる。

それを見たミリアが

「その子随分とフォウルになつてますね。」

それにフォウルがこんな風に動物と戯れるの初めて見ました。」

だろうな、俺も猫に触ること自体初めてだしな。

「気づいたら俺に乗っけていな。」

試しに撫でてみたら思いのほか良かった。

動物というのは中々良い、癒される。」

事実だ気分が落ち着く。

もしかしたら俺が小猫によく癒されるのは小猫が可愛い女の子というのもあるが猫というのも関係しているかもしれない。

試しに小猫が猫耳を生やした姿を想像してみた。

や、やばいぞ！

可愛い！持って帰りたい！

今度小猫に会うときには気をつけなくては。
会った瞬間撫でくりまわしそうだ……

俺が素晴らしくもくだらない事をかんがえていると

「ふふふ、フオウルは猫が好きみたいですな。」

と微笑みながらミリアが言った。

そこで俺の思考が変な方に働いた。

ミリアが猫耳をつけたら？

良い！凄く良い！！！！

そこで俺の思考は止まらず俺と関係を持った者達の猫耳をつけた姿
を想像した。

やばい、イツセーじゃないが鼻血でそうだ……………。

「……………猫耳良い」

思わず呟いてしまった！

「急にどうしたんですか？」

ミリアに聞かれたらしい……………

「いやな、どうやら俺は猫が好きのようでふと小猫によく癒されるのは実は猫と関係があるのでは？と考えたのだ。」

「確かに小猫ちゃんには良く癒されますねえ。

でもそれと猫耳にどのような関係が？」

確かに気になるところだ、何故？と。

「そこで俺の思考が小猫が猫耳を生やした姿を想像してしまってな。

……………どう思うっ？」

「……………可愛いです！持って帰りたいです！」

ミリアも賛同してくれたようだ。

「そして俺の思考はさらにミリアの猫耳姿を想像してしまったのだ

「！」

「……………どうでした？」

そんなの決まっている。

想像しただけでわかるぞ！

「最っつっつっ高！！！！！！！！！！」

俺は力いっぱいサムズアップをした。

猫は少し驚き

ミリアはニヤリと笑った……………様な気がした。

「ふふふ、そうですね？ありがとうございます。」

じゃあそろそろかえりましようか。」

どこか機嫌良さそうにミリアが言う。

確かにこれ以上学校にいても意味がない、悪魔家業もないし帰るか。

「わかった、帰る。」

お前はどうぞするっ。」

お前も来るか？という意味を込めて黒猫に聞いてみる。

「にゃあ
「にゃあ」

黒猫は一鳴きして己の体を俺にすりよせた。

ふおおおおお！

か、可愛いではないか！

これはついてくるってことでいいのだな！？

お持ち帰りだ！

俺は黒猫を抱え立ち上がる。

「フオウル？その子、連れて帰るのですか？

でもその子は……………」

ミアも気づいているようだが

「構わんさ、我が家のメンバー相手に何か出来るものなどオーフィ
スかグレートレッドくらいなものだろう」

俺の言葉に「それもそうですね」と応えたミアと共に歩きだす。

さて、帰ったら黒猫と戯れよう。

そう考えながら家路につくので会った。

*

ビルのような家につき玄関を潜ると

「お帰りー ー!」

アンが飛び込んできた。

「おっと!」

俺はその突撃を受け止め

「ただいま。

アンよいい子に勉強してたか?」

と聞いた。

現在アンとスルトは我が家にて勉強をしている。

勉強とは言っても俺らの様に学校などで習うことではない。

若干のズレや誤差はあるがそれは生活知識のことで学問知識に関しては全く問題がない。

生活知識にしてもここで生活していれば自然と身に付くことなので問題ないであろう。

では何の勉強なのか。

それは領地経営についてである。

なんせ俺は爵位持ちで領地持ちの上級悪魔だ。

将来は自らの領地経営に勤しむことになる。

その時俺の手伝いをしたいと二人は言ってくれた。

嬉しくて涙が出そうになったのは内緒である。

そしてサーゼクスに頼み領地経営に詳しい者を派遣してもらいアンとスルト、時間がある時は俺とミリアにも授業を行なっているのだ。まあともかくアンである。

アンは俺に抱きつき充電中と言わんばかりに微動だにしない。

ちなみに黒猫は咄嗟に俺の肩に移動し事なきを得ていた。

俺も今日猫が好きと自覚したと言っのにその日の内に猫踏んじやったならず猫潰しちゃったは御免だ。好きなのにトラウマになるなど最悪であろう。

故に黒猫が無事で安心したし咄嗟に移動したことに称賛を贈ろう。

アンはまだ充電中のようにミリアに目でどうする？と伝えるとそのままにしてあげて下さいと目で伝えられた。

ならと充電終了まで黒猫と戯れようと手を延ばし顎下を撫でた。

暫くして充電終了したアンが顔をあげ

「ちゃんとしてたよ〜」。

もう少ししたら簡単なことなら任せても大丈夫だってさ！」

そう言っつて俺から離れた。

そして「お母さんもお帰りー
！」とミリアに抱きつきおっき
までの俺と同じ状況になっていた。

俺はミリアを待っつていようとしたのだが

「先に行っつて構いませんよ？

このままアンを連れてお風呂に入りますので。

後準備したいものもありますし。」

と言われたので黒猫と先に行くことにした。

リビングに行くときスルトがいたので

「ただいま帰った。

スルトよ、勉強は上手くいっつているか？」と尋ねた。

「はい、アン共々順調にいっつております。

後父上、お帰りなさいませ。

ふふふ、母上はアンに捕まっつているのですか？」

と微笑みながら聞いてきた。

「ああ、だが先ほどまでは俺にしがみついていたがな。」

「でしようね。

ふふ、アンは甘えん坊ですから。

父上、それはそうと肩に乗っつている黒猫はどうしたのですか？」

黒猫に気がつき聞いてくる。
言外にこの者は何者か、とも聞いているのだろう。

「今日気づいたら俺と寝ていて戯れてる内に気に入ったので連れてきた。」

後こいつのことは気づいている。
そもそもこの家で好き勝手できると思うか？」

「確かにそうですね。
はつきり言っこの家の単純な戦力なら世界すら相手に出来るでしょうからね。」

確かにこの家の戦力は異常だろう。
何せ半分以上が世界で上から数えたほうが早いほどの力を有しているのだから。

「それでは父上、母上に挨拶してきますので失礼します。」
スルトは一礼して玄関に向かって行った。

俺はリビングのソファに腰を下ろし、黒猫を膝の上に乗せた。

まだ母さんとディースさんは帰ってないようだ。

フレイヤは部屋か？

黒猫を撫でながら色々と考える。

そしてどれほど時間が経ったかは分からないが自分がまだ制服であることに気がつき着替えようと立ち上がり歩きだすと黒猫もついて来た。

随分となついてくれたものだと思いながら自分の部屋に入ろうと扉をあけて部屋の中を見た俺は驚愕した！

「はあ〜いフオウル〜。
お帰りにゃを」

フレイヤがいた。

猫耳と猫尻尾をつけて。

ご丁寧に語尾ににゃんをつけ猫っぽいポーズつきで。

ここで俺の頭では妙な計算式ができた。

フレイヤ＝美人＋美爆弾おっぱい

フレイヤ×（猫耳＋猫尻尾＋語尾ににゃん）＝

「良い！凄く良い！！！！」

「にゃふふ、作戦成功にゃ！」

にゃ〜、良い仕事して誉められると嬉しいにゃ〜！

フレイヤもご満悦のようだ。

だが問題がでてきた。

黒猫は本来の姿は知らんが今は猫であるため純粹に可愛がるがフレイヤは人型の美人だ。

ようはムラムラしてきた。

「フレイヤよ………」むにゆう

俺はフレイヤのおっぱいを掴む。

「にゃっ！」

やる気になったにゃ？

猫プレイやっちゃうにゃん

「いただきます……！！……！！……！！」

「にゃ、にゃん！」

いきなりにゃ！

しかも耳だけでなく尻尾まで！
流石はフレイヤさんです。」

「にやはははは！！！甘いにゃ！
今の私は猫フレイヤにゃ！
耳と尻尾だけじゃないにゃ！

楽しむためなら妥協はしない、それがフレイヤクオリティにゃん」
フレイヤが変わらず語尾ににゃんをつけ猫っぽい仕草でミリア達につげる。

「ふふ、完全に私達の負けですね……」

敗者は潔くさりましょう。

フォウルに楽しんで貰おうと頑張ってみましたがフォウルは今日、
フレイヤさんのものです。

アン

スルト

行きますよ」

どこかキャラが違うミリアがアンとスルトにつげる。

二人は態度こそ違うが残念そうである。

だがひとつ忘れていたことがあった。

ちなみに黒猫は俺のパラダイスをじつとみていた。

*

俺は夢を見ていた。

黒髪猫耳でどこか小猫と似た顔立ち。

と言つか小猫を成長させたような容姿をしたおっばいが大きな女とにゃんにゃんする夢だ。

寝る前にしていたことが関係しているのだろうか？

それともあの黒猫か？

猫又には色々な伝承があるが確か淫魔と似たような特性もあったはずだ。

きっとこの女はあの黒猫なのだろう。

まあいいか、夢とはいえ楽しい故に今はこれを楽しもうか！

夢でも楽しめる俺だった

目が覚めると異変に気づく。

まず俺に誰かが乗っている。

ミア達ではない。

フレイヤは横で寝ているが他の者は既に起きていてこの部屋にはいないようだ。

何より乗っている者は髪が黒い。

俺の知り合いでさらに俺と寝る人物など朱乃かドラグニールの里の人達くらいだろう。

そして昨日の客は黒猫一匹だけである。

そしてこの黒髪の女は夢に出て来た奴だ。

つまりこの黒髪の女が黒猫なのであろう。

何故人の姿なのかはわからんが。

ただ俺には気になっていることがある。

猫耳と尻尾だ。

やはり猫又に耳と尻尾は標準装備らしい。

しかもピクピク動いていて凄く気になる。

フレイヤの耳と尻尾も良く出来てはいたが流石に本物とは違い動きが人工的だったがこの黒猫女の耳と尻尾は本物の動きだ。

触りたい。

おっぱい以外でここまで俺を魅了するものはかつてあったであろうか。
ないであろう。

普段おっぱいおっぱい言っている俺だが流石にミリア達家族と比べたらミリア達のほうが大切だ。

そもそも俺がおっぱい好きになった理由がミリアなのだから当然だろう。

そういうのを抜きにしても俺はおっぱい以外にここまで何かに執着したことなどない。

故に不思議ではあるが触りたい感情が渦巻き俺の手は自然と耳に吸

い寄せられて行く。

そして耳をつまんだ。

「じゃー！」

起きてしまった。

「じゃ？にやにやにや？」

黒猫女は上体を起こし周囲をキョロキョロみている。そして

「じゃーん！」

下にいる俺を見つけ猫の姿のときにしていたように顔を擦り付けた
り顔を舐めてきたりした。

どうやら自分が猫の姿だと思っているらしい。

ここで俺はある仮説を思いついた。

猫又も淫魔と同じ性質があると先ほど言ったと思うが多分それのせ
いであろう。

淫魔、夢魔とも言うが奴等には夢でえっちいことをして精気を奪っ
ていく。

猫又も同様なのであろう。

そしてこの黒猫女は俺の精気を無制限に吸ってしまったのであろう。

俺は星の片割れ故に普通の生き物からすれば無限に等しい精気を持

っている。

それを吸いすぎれば当然酔ってしまっ。

最初は黒猫の姿であったのだろうが吸っているうちに力がみなぎり本来の姿に戻ってしまった。だが酔ってしまったのでそれに気がつかず満腹でそのまま寝てしまいい今にいたるといわけた。

完璧かはわからんが間違いでもないはずだ。

まあ仮説はここまでにして困ったことが起きた。

「……………立った。」

何がと言わなくてもわかるだろ？

ただでさえ朝で男性特有の自然現象がおきやすいのに「じゃあん、じゃあああ、じゃん」スリスリペロペロ

だぞ？

しかもこの黒猫女の容姿は小猫の成長させたような可愛らしい顔立ちにミリア達に匹敵しそうな美爆おっぱい！

こうならないほうが男としてどうかしているであらう。

黒猫女が「じゃん、じゃん」と言っているのが可愛らしくも憎ら

しい！

抱いてしまおうか？

いやいや待て待て！

しかし、だが、むむむむむむむむむむ！！！！

ここで俺には二つの声が聞こえた。

俗にいう天使と悪魔だ。

天使の俺は

「駄目だよ！やるなどは言わないけどせめて相手が正気に戻って了承してからにしようよ！」

微妙に肯定的な天使だ。

悪魔の俺は

「やっちまえよ。ほら、黒猫女も待つてるって！」

悪魔はストレートだ。

「悪魔の誘いへのつちや駄目だ！

こんな可愛らしい娘を襲えるのかい！？」

できるだろうな！

つーかそれをどうしよいか悩んでいるのだよ天使君。

「つーかぐだぐだ考えてないでやっちまえよ！」

こんなになつてんだからどうにでもなるって！

「つか悪魔の誘いとか言ってるけど俺達悪魔じゃん。」

「あ」

天使は己の間違えに気がついた！

天使は悪魔にクラスチェンジした！

そして

「「「ゴー！！！！」」」

二人の悪魔、いや俺はすることにした！

ふふふ、やることは初めから決まっていたようだな。

だって俺悪魔だもん

ではフォウルいざ行かん！！！！

俺はまずじゃれついている黒猫女の唇をうばう。

「にゃー！ちゅう、ぷはっ！にゅっうー！むっううううう、にゃぶうううう。」

少しトロンとした所でその大きなおっぱいを揉み上げた。

こつ下からぐいつてな感じでもみもみっど！

「にゃん！にゃん！？にゃあああああ！な、なんにゃ！何なのにゃ？あれ？でも私猫、にゃっ！」

どうやら少し酔いが覚めたようだがもう遅いわっ！！！

「酔いが覚めたか？まあやることは変わらんからとりあえず楽しめ
」！

「にゃ！た、確かににゃん！よ、よくわからにゃいけど、せ、せっかく、だ、し楽し、もうかにゃ！」

わりとノリが良いらしいな。

だが許可は得た！

最初っから最後まで俺のターンだがドロー！

とりあえず俺の揉み回し！そして耳かみ！

「す、凄く良い！

にゃ！み、みみみ耳は反則！ひゃ！」

耳も敏感らしい。

なら尻尾は？しゅっしゅっ

「あああああああ！

し、尻尾は駄目！

ついているのはご愛嬌だ。

「私の名前は黒歌！
黒猫女じゃにゃい！」

「それは失礼した。
黒歌だな。」

では黒歌改めて聞くが何しに来たのだ？
まさか俺に会いにとかわないよな？」「そうだったらびっくりだ。
っーか誰に聞いたって話だ。」

「その通り！
ヴァーリ、白龍皇から聞いて会って見たくてきてみたにゃん」

ぐっ！一々可愛いではないか！
ぬお！フレイヤまで真似るな！
また理性がとんでしまうわ！

「んで実際会ってみれば撫で方は上手だし、
精気は美味しいし、
あ
っちは凄いで最高！」

霸王龍は強いだけじゃないんだにゃん」

「それは光栄だな。
っーか黒歌は白と知り合いなのか？」

と、そうだ。

俺はまだ名乗って無かったな。

俺は霸王龍フォウル、フォウル・ドラグニールだ」

相手が名乗ったのに俺がまだ名乗って無かったな。

「フォウルね！おぼえたにや！

え〜と白ってヴァーリのことじゃ？

知り合いつて言うか協力者？

面白そうだから一緒にいる感じ？」

白と協力者が……

つーか面白そうって……

「それだけの理由なら俺の所にくるか？

俺もお前が欲しい。今の姿も猫の姿も両方気に入ってな。」

試しに誘ってみた。

「本当！？

凄く楽しそうじゃあ。

でもごめんなさい。

今はまだ無理にゃん。

もうちょっと経ってからでもいいかにゃ？」

今は、か。

その白との協力関係が関係しているようだな。

「構わんさ。

いずれ俺のもとに来るのであろう？」

なら待っているさ。

後、いつでも此処に来ていいぞ。

その代わり他の者にも挨拶はしておけよ。」

そう言っただけで

「わかったにゃん

にゃふふふ、フォウルありがとくにゃん」

こうして俺の眷属候補が一人できたのだった。

ちなみにこの後に起こしてきたミアに

「知らない人と寝ちゃ駄目です！」と怒られたり、黒歌を紹介したりと一気に話が進んだ。

そして今まで俺が独占していて気づいていなかったようだが黒歌が黒猫モードになり皆にじゃれつくと言った。皆がそれにはまってしまったのだ。

魅了するもの。(後書き)

はい、黒歌登場です！
今回も暴走気味です！

黒歌のしゃべり方は自分のイメージではあんな感じなので「黒歌はあんなんじゃない！」って方は諦めてください

友達な総督。新たな家族。（前書き）

またまた少し遅れました。

ネタはあるんですが文章が上手くまとまらなかったです。

友達な総督。新たな家族。

「うむ、アーちゃんよ！
リアルで会うのは久しぶりだな！」

「ようフーちゃん！
確かに久しぶりだ。
ネットではほぼ毎日会っているんだけどなあ。」

俺は人と会っていた。
いや、人ではないか。
このアーちゃんと俺が呼んだ人物は墮天使だ。

何故俺が墮天使と仲良さそうに呼びあっているかと言えば

「それはそうとアーちゃんよ！
昨日は酷いではないか！
俺を見捨ておって！
あのあとイラついてすぐログアウトしたぐらいだぞ！」

「うわああ、勿体無えなあ！

彼奴はあんな死に方すれば特典がついてきたのによお！」

「ぬな！何で教えてくれなかったのだ！」

「誰に見られてるかわかんねえのに教えられるかよ！

せっかく人が誘導してやったのに勿体無え……………」

だいたいわかっただろうか？

そう、アーちゃんとはネットゲームで知り合いチャットやメールで話しているうちに仲良くなったのだ。

そしてたまにこの様に会っていたりする。

アーちゃんの見た目はダンディーなおっさんって感じた。
見た目は俺と同じ外国人だが日本が好きなのかよく着物や浴衣などをきている。

初めて会ったときは

「ぬおっ！お前がアーちゃんなのか！？」

メールの感じから20代くらいかと思っていたがおっさんではないか！！！！」

「うるせえよ！

おめえこそアーちゃんかよ！

何か古くせえしゃべり方しゃがるし妙に女のことを知ってるから結構な歳かと思っただが餓鬼じゃねえか！！！！」

「何だと！！」

「ああ？何だよ！！」

であった。

いきなり喧嘩腰で始まったのだが

「ふはははは！やはりそう思うか！

アーちゃんはわかっているようだな！

おっばいこそ至高！

おっばいは男のロマンだ！」

「当たり前だ！

誰に言つてやがるんだよ！

しかしお前こそ俺が今までしてきたこと以上をしてやがるんだな。

餓鬼かと思った俺が馬鹿だったようだ！」

と何故かおっばい話になって喧嘩はおさまり今でも会うようになったのだ。

ちなみに俺はアーちゃんの本名を知らなかったりする。

ネットではアザゼルと名乗っていたが、まさかな。

アーちゃんもかなりの力を持った存在だが墮天使の総督がこんな所にいるはずがなからう。

「それはそうと今日はどうする？
前に会ったときみたいに風俗ツアーでもするか？」

「あれは金が掛かるしもういい。

所詮は人間だ、俺達の相手は厳しいであろう。」

俺もアーちゃんもお互いの正体を知ってるためこのような会話もできるのだ！

イツセーとの会話もいいのだが奴は未だ童貞ゆえ限界があるのだ。

だがアーちゃんは聞いた話ではあるが過去に数多のハーレムを作ったらしいので俺との会話が良く合うのだ。

しかしアーちゃんも奇特的な奴だ。

俺が転生悪魔とはいえ悪魔には変わりはない。

なのにこの様な付き合いがあるのだからな。

普通の墮天使なら悪魔を嫌う者が多いと聞くが。

まあそれは俺も同じなのだが。

悪魔にしても墮天使を嫌う者が多いゆえやはり似た者同士なのである。

「じゃあ適当に駄弁るか。
こんな日もあつていいだろ？」

確かに。

普段はおっぱいばかりだしな。

「フリーちゃんは三勢力が手を組むって話は知ってるか？」

「知ってるぞ。」

俺が通う駒王学園で行うのだろうか？

サーゼクスに言われて俺も参加するからな。」

何故か俺も参加することになっているのだ。

正直面倒だがサーゼクスの頼みだし聞いてやることにしたのだ。

「……………魔王を呼び捨てとかお前何者よ？」

まあいい、それでその会談に俺も参加するんだけど「ちょっと待て
！」何だよ？」

今参加と言ったが墮天使側で参加するのは二名ほどと聞いている。
一人は総督アザゼルともう一人は知らないがそれなりの者がくるで
あろう。

「アーちゃんは何者だ？」

「あ？俺？あゝ、そういえば言っただけで無かったな。つーかネットで使ってる名前まんまなんだが。

んじゃ改めて。

俺はアザゼル。墮天使の総督だ。

つーかフーちゃんこそ何者よ？」

アーちゃん、マジでアザゼルだったとは……………

俺は少しの間衝撃的なカミングアウトに固まってしまったのであった。

*

「ほ、フリーちゃんがあの『霸王龍』だったとはな。

つかフオウルって言うのか。」

フリーちゃんも名前まんまだったのな。」

改めて俺も自己紹介をするとアーちゃんは驚きはしたがそれ以上に興味深い者を見る目になった。

だがそれもすぐにやみ

「まあいいか。」

俺は今まで通りフリーちゃんできかせて貰っぜ。」

「ああ、俺もアーちゃんと呼ばせて貰っ。」

そのほうが楽しだし正体が判明したところで俺達の関係はかわらんであるう。

「ん、じゃあ何すっかなあ。」

フリーちゃんも会談に参加するなら今話すことじゃねえしよ。」

確かにそうだな。

なら

「俺の友を呼ぼうか？」

「友ってどんな奴だ？」

つまんねえ奴だったら俺帰るぞ？」

「ふふ、安心しろ！
俺と同じく乳道の探求者だ！童貞だけど！

ついでに赤龍帝を宿すものだぞ？」

「何だと！まさかフーちゃんに童貞で認められる奴がいるのか！？

フーか赤龍帝がついでかよ！？

よし！今すぐ呼んでくれ！」

俺はイツセーに電話をした。

すぐに来るらしい。何故かイツセーの声が沈んでいた。
何で？

10分ほどでイツセーが到着した。
何故か小猫と祐斗、アーシア、ゼノヴィアも一緒だ。

ついでからいきなり

「フオウル、何だよいきなりさあ。」

せっかく部長に膝枕してもら

.....あああああ

「笑うなああああああ!!!」

俺だって、俺だってなああああ!!!

「つか二人は何でそんなに仲良さそうなのさ!?アーちゃんにフリーちゃんって何だよ!

何処で知り合う訳?「ネットゲ」グローバルうううう!?!」

イツセーは混乱しているようだな

だがこの言葉で納得するだろう。

「イツセー、

おっばいだ!」

俺はサムズアップをした。

「っ!!!!!!」

ま、まさか!」

イツセーはアーちゃんを見た。

「赤龍帝!

乳だ!」

アーちゃんもサムズアップ!

「「「同志よ！……」」」

新たな同盟の誕生であった。

少し離れた所で祐斗とゼノヴィアの会話があった。

「なあ、木場……」

「……ゼノヴィアどうしたんだい？
まあ何となく分かるけど。」

「私はな『霸王龍』に憧れていたんだ……」

「だろうね。僕や部長だってそうだったよ。

でもフォウルは本物だよ？

普段はあんただけどさ」

「それはコカビエルの時でわかってはいるのだが」「イエス！お

っばい！」「……あれだろ？
別に女に興味があるのが不快な訳ではないのだがイメージがな……
…」

「まあね。

だったら一度話してみなよ。

話したことはないんでしょ？

イツセー君とかと良く話しているからあんな感じだけど人によって会話は選んでくれるよ？」

「そうだな、一度ちゃんと」「イエスおっばい！ゴー、タッチ！

！」「……話せるだろうか」

「……ははは」

この時小猫とアーシアの会話もあったようなのだが

「……小猫ちゃん、私は「むにむに

「……………先輩はまだいいです。私なんて」ぺたぺた

「「はぁあ」「」

悩める少女達だった。

*

「それでフォーウル、何のようだったんだ？」

場所は変わってここはファミレス。
各自好きなメニュー頼み終わった所で
イツセーが俺に聞いてきた。

「いやな、やることを考えていて何となく？」

「何となくで呼ぶなよ！俺部長に膝枕して貰ってたのによおおおおおー！」

「むう、それはすまん。

だがそちらこそ何でこんなに集まったのだ？」

「何か小猫ちゃんと木場はまた教えてもらいたいことがあるんだとさ。

んでゼノヴィアはフォウルと話したことがないから話してみたいらしい。」

「アジアはその付き添いだ。」

ふむ、なるほどな。

「小猫に祐斗よ、今はアーちゃんもいるから聞きたいことがあるなら存分に聞いたほうがいいぞ。」

「アーちゃん……俺も答えるのか？」

「だったら何かくれねえの？」

「流石に会談前に情報の安売りするつもりはねえぞ？」

「それもそうか。なら」

「今から作るから5分ほど待て」

全員の顔に??がみえた。

……………そう言えば皆に神器のことを話して無かったな。

まあ今からみせるからいいか。

とりあえずあれを作ろう。

そして5分ほど経ち完成したものをアーちゃんに渡した。

「これは……………」

すげえ純度の金か？

珍しくはねえが簡単な受け答えならしてやるよ。

それよりコレをどこから出した？

こんなの持ってたら気がつく。」

他の者達も同じことを疑問に思ったようだ。

「今作った。」

「「「「は?」「「「「

おおっ！皆揃ったな。

「だから作った。
俺の神器の力だ。」

「ちょっと待て！俺は自他共に認める神器マニアだが金を作る神器なんて聞いたことねえぞ！？
何て神器なんだよ？」

「アーちゃんは神器マニアだったのか。」

「僕も気になるね。」

「その能力は戦闘に使えるのかい？」

「祐斗って若干バトルマニアだよな。」

「フーか神器って人間にしか宿らないって聞いてたけど、フォウルって人間ではないよな？」

「イツセーが以外と鋭い！」

「順番に答えてやる。」

「まず俺の神器の名は『物質創造』。」

「名前の通り物質なら何でも作れる。」

「副産物的な能力もあるし条件もあるがそれはいいだろ？」

「戦闘に使えると言えば使えるが使えないと言えば使えない。」

「条件のひとつで作る物により時間がことなるのだが純度や性質、概念などにより創造時間がかかる場合がある。」

まあ作り置きはできるがな。

後イツセーの質問だが俺にも人間の血が少し流れていたそうだ。」

皆の質問に一気に応えようと

「さつき純度や性質、概念と言ったけどまさか僕みたいに魔剣も作れるのかい？」

祐斗が少し冷や汗をながしながら聞いてきた。

「作れるぞ。」

ただ祐斗の様にぼんぼん作れないが一時間もあればある程度の魔剣はつくれるし聖剣、近代兵器、家庭用品から家電製品まで物質で有る限りなんでもつくれるぞ？

それこそナイフやフライパン位ならほぼ一瞬だ！

作れないのは生物位だな。」

祐斗は絶句している。

正確に言えばアーちゃん以外全員だ。

そしてアーちゃんといえは目を子供の様にキラキラさせ

「フーちゃん！！

調べさせてくれ！」

と言ってきた。

「別にいいぞ？

俺もこの能力についてはあまり分からないので丁度いい。だが俺は一応爵位持ちの悪魔だからせめて会談が終わってからしてくれ。」

それを聞いたアーちゃんは目に決意を宿らせ

「いいんだな！？

約束だぞ？

しゃああああ！

会談は絶対に成功させてやる！

こうしちゃいらねえ！

今から準備に力をいれるから俺は帰るぜ？」

そう言うとアーちゃんは「うおおおおおおおおおおおお！」「とドッ
プラー効果を生み出しながら走り去っていった。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
え〜と、小猫と祐斗は何を教えて欲しい？」

とりあえず無かったことにした。

「あ、ああ、僕はこの前教えて貰った剣の遠隔操作の最終確認をし
たくてね。」

「……私は砲撃の時間短縮方法です。」

前に二人に教えた奴だな。

と、そこで

「何の話かな？」

とゼノヴィアが聞いてきた。

「ゼノヴィアが来る前なんだけど俺達はよくフォウルに色々教わってたんだ。」

俺がまだ転生したてでそこそこ闘えるのもフォウルのおかげだな！」

イツセーが説明してくれた。
少し嬉しかったのは内緒だ。

「……なるほどね。」

なら私も鍛えてもらえるのかな？

まあ無「いいぞ」「……いいのか？」

「今さら何人増えようがあまり変わらんしゼノヴィアとはあまり話したことがないゆえ丁度良い。」

「それは助かるよ。」

私の今の力ではデュランダルは扱いきれない。

だから早く強くなりたいんだ。」

ゼノヴィアは力を持って余しているのか。
勿体無いな、デュランダルもだがゼノヴィアもだ。

ならいつそのこと

「ゼノヴィアよ。」

「何かな？」

やっぱり無しとかはやめてほしいんだが？」

「そんな訳なからう。」

お前も強くしてやるさ。

ただな今の状態だとあまりにも勿体無い。」

「……私にはデュランダルは宝の持ち腐れだとも言うのか？
流石に聞き捨てならないな！」

「まてまて！」

そうは言っていないだろ！

確かにデュランダルが扱いきれないのは勿体無いがそれ以上にゼノ
ヴィアが勿体無いと言っているのだ！」

「……どういう意味かな？」

「お前の剣技や戦闘技術は祐斗と方向性は違うが高い。

それなのにデュランダルの力に振り回されているのが非常に惜しい。
格下ならそれでも押し通れるが格上には通用しないであろうな。

だが剣の性能と自分の技量を最大限に使えばゼノヴィアは格上相手にも十分通用するだろう。」

「そう言ってくれるのは有難いが生憎私にはデュランダルしか無いのでね。」

どうにか私自身の力の向上をと思っているんだ。」

「それも勿論行うがゼノヴィアよ、

もう一本剣を持つ気はないか？」

「だからその一本はどこ………あー！」
気が付いたようだな。

「俺がお前のもうひとつの相棒を用意してやる。」

ゼノヴィアが目を見開き驚いている。

それはそうだろう、強くして頼み了承を得たと思ったら何故かもう一本剣を手に入れることになったのだから。

だが俺にとって特別でも何でもない。

皆、大なり小なりではあるが俺の力で出来る限り与えてきた。

今回はたまたまもう一本聖剣があればそれだけで強くなれるし、俺にはそれが出来る能力があった、ただそれだけの話だ。

「確かにそれは凄く嬉しい。」

嬉しいが私にはそれに払う報酬がないんだ。だから……」

こいつは何か勘違いしているな？

「報酬などいらんぞ？」

そんなこと言ってたらいッセーはケツの毛まで抜かれているわ」

「い、いや、しかしだな！」

「ちよつと待て！」

ここでイッセーが待ったをかけた。

「何だ？」

「なんでその具体例が俺だけなんだ！？
木場だつてそうだろ！」

「お前が一番手がかった。以上」

「じゃ、じゃあ小猫ちゃんは？」

「可愛いからOK！」

「差別だあああああああ！！
俺達友達じゃないのかよおおおお！！」

「差別ではない！
鼻貞だ！！」

「かわんねえよ！…っ！か悪化し「イツセー！うるさい！」……………
はい、すみません」

ゼノヴィアの一言でイツセーは黙った。

「イツセー弱っ！」

「うるせええ「イツセーうるさい！！」「何で俺「う・る・さ・い
っ！」……………すみません、ぐす」

イツセー……………

ちよつと憐れだ……………

「それでフオウル。

お前は報酬はいらなと言ったがそれでは私の気がすまない！
何かないのか？

私に出来ることなら何でもする！

もし何も受け取ってくれないのなら私も剣を受け取らない！」

ゼノヴィアは若干頑固だなあ、だがマジでない。

「ではゼノヴィアができる例を教えてください。

正直俺はお前らが強くなればそれで良い。

俺としては何も欲しい物などないのでな。」

ゼノヴィアが出来ることがまず分からないのでこういった聞き方が
できません。

「……………てつきり私の体を要求されると思ってたよ。」

む、ちょっと失礼だな。

「それは些か失礼だぞ？」

確かに俺はおっぱい好きだが分別くらいはわきまえている。

相手の許可が無い限り俺から要求することはないぞ？」

「嘘だっ！！！！」

またイツセーが噛みついてきた。

今日のイツセー若干うざい…………

「フオウル嘘つくな！」

しょっちゅうミアアちゃんや先生達、たまに朱乃さんともイチャイ
チャしてんだろ！

っーか羨ましい！！！」

…ただの嫉妬ではないか。

「俺の女と俺の母だ。どうしようも俺の勝手だし朱乃はあちらから
絡んでくるのだから別に俺から要求はしていない。」

なら聞くが俺がリアスさんにおっぱいを触らせてと言ったか？

アーシアには？

小猫には？

ゼノヴィアには？

道行く生徒には？

俺から迫ったことなど無いだろうよ。」

俺の発言に皆はそう言えばと言う顔つきになった。

………俺の事をどう思ってたかよおおおおくわかった。

「………ゼノヴィア以外もう何も教えてやらん。」
俺は少しいじけた。

「「「「「！！！！！！」」」」」

「一応聞くが何で私は良いのかな？」

「ゼノヴィアはまだ来たばかりだし俺と話したことが少ないゆえ勘違いしていても仕方ない。」

………なのにコイツらは今まで散々面倒見てやったのになあ。
悲しいよなあ。

俺のこと強 魔か何かと勘違いしてるのではないか？」

「ごぞとばかりに俺はいじけた。」

とそこで

ぐい！

何かに腕を引かれた。

「……ごめんなさい」「すみません！」

アーシアと小猫だ。

悲しそうな顔をしている。

うっ！そんな顔をするな！俺が悪いみたいだろ！

「……許して下さい。」

私はもつと強くなりたいですし、先輩に何も教えてもらえないのは嫌です。

……寂しいです。」

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

私も皆さんの役に立ちたいんです！

まだまだ教えて欲しいことがいっぱいあるんです！

だから許して下さい！」「

そして

アーシアはイツセーを追いかけていった。

「さて、ゼノヴィアよ。

改めて聞くが俺に何をしてくれるか例を出してくれ。」

「……………イツセーはいいのかな？」

「構わんさ、明日にはケロツとしている。」

それがイツセークオリティだ。

「ならいいけどね。」

……………そうだね、何でもすると言っておいてなんだけど私に出来ることは護衛や君の身の回りの世話くらいかな？
後は私の体を差し出すくらいだがこちらは流石に条件があるな。」

ゼノヴィアが良いのなら勿論最後を選ぶが

「……………条件とは？」

「私を孕ませてくれ！」

……はい？

俺以外の者も固まっている。

話の内容が内容なので結界を張っていて良かった。

忘れているかもしれないがここはファミレスです。

「え」とゼノヴィア？

何故か聞いてもいいか？」

当然気になる。

「……………私は今まで主のために教会のためにと力を奮ってきた。でもその主がいないと知った今、私はどうしたら良いのか分からなくなってしまうたんだ。

今後の人生は自分のために使おうと悪魔になっではみたけど特にやりたいことが無かった。

だがそこで私は思ったんだ。

子育てをしたいと！

そして自分の子には強くあって欲しいと私は思っている。

だから最初はイッサーにと思ったけどイッサーには部長とアーシア

が
いる。

孕ませてくれるならそれでも良いと思ったが私は気がついた。

フオウル、君がいたじゃないかとね。

話を聞く限り君は相手が許可を出せば良いのだろ？

なら聖剣の代償として私の体を差し出す。

その後は子が出るまで相手をしよう！

どうだ！とばかりにゼノヴィアは言い切った。

「俺はそれでも構わんが本当にいいのか？
どうせなら好きな相手のほうが良いだろ？」

当然だが大切な事を聞くが

「いいさ、私には好きな相手はいないからね。
イツセーには悪いが彼にしたって赤龍帝を宿しそれでいて彼の性欲
ならと思ったからだし、君のことは特別好きな訳ではないけど嫌い
でもないよ。」

むしろ尊敬はしているさ。

それに伝説の存在の子を宿せるならこれほど光栄なことはないよ。

ああ、安心してくれ。子供は私一人で育てる！君に負担はかけないさ。

ただたまにで良いから会ってあげてくれないか？」

そこまで聞いて俺は

「わかった。

ゼノヴィア、お前がそうしたいならそれでも構わん。俺としても嬉しいことになるからな。

だがな……………ふざけるなあ！！！！」

キレた。

「な、何を怒っているんだ？

私は何か不快にさせる事を言ったのか？」

ゼノヴィアは何故俺が怒っているのか分からないらしいが小猫と祐斗は流石にわかっていているようだ。

「お前は俺を何だと思っている！？

子供は私一人で育てるだと？

ふざけるなよ！

俺は『霸王龍』だ！

俺が家族を護らない訳があるか！

お前は俺を尊敬していると言ったな？

つまりは伝承やおとぎ話などで知ったのだろうかお前は何を見てきたのだ！

そこには何と書いてあった？

何と聞かされた？

俺が何のために一度死んだと思っている！

星のためだ！

ミリアのためだ！

子供のためだ！

家族のためだ！

あまり俺を見くびるな！

お前と子供を養うこと位わけないわ！」

一気に言い切った。

こいつは俺をただの甲斐性無しにしたいのか？

自分の行動には責任を持つのは当然だ。それをゼノヴィアは……………

……………だあああああ！！！！

そんなことを考えていると

「し、しかし君には」

ゼノヴィアが何か言おうとして

「もうやめなよゼノヴィア。」

祐斗が遮った。

「彼はこういう人だよ？」

自分の庇護する者は全て護るし家族を仲間を何よりも大切にする。

それを壊し傷付ける者は何者でも許さない。

だから『霸王龍』なんだよ。

まあ何が言いたいのかって言う「待て祐斗」後はフォウルが言うことだね「

そう、後は俺が言うことだ。

ちなみに

「そう言えば私はフォウルの事をあまり知らないな。

君の事を教えてくれないか？」

とゼノヴィアが言ったので

「うむ、俺は霸王龍フォウル、フォウル・ドラグニールだ。
上級悪魔で爵位は子爵。
一応領地も持っている。」

眷属には女王にフレイヤ、僧侶にアングルボダ、兵士にスルトがいる。

ちなみにアングルボダとスルトは前世での俺の娘でもある。

今は俺、ミリア、母さん、ディースさん、フレイヤ、アングルボダ、スルトと共にビルのような家にすんでいる。」

ここまで言つと

「……………ちなみに全員に手を出してる外道です」

な、何で小猫が知っている!?

隠してはいるが知ってるのは少ないはず!

「……………魔王様本人が冗談のように言っていました。」

サーゼクスうううううう!!!!

言って良い情報と悪い情報があるだろおおおおお!!!

どうするのだ!マスコミにばれたらスキャンダルどころの話ではないぞ!

つーか小猫がやけに突っかかるな。

「……………小猫よ、何故そこまで俺をいじめる?」
すると小猫は

「……………知りません///」「ぷいっ!

と顔を赤らめそっぽを向いてしまった。

むうううう、何故だ？

最近小猫は反抗期だ。

優しい小猫帰ってこおおおおい！

友達な総督。新たな家族。（後書き）

どうでした？

途中から話が変わっちゃいましたね（笑）

どこがおかしいところがあったら教えてくれると助かります！

ではまた次回に！

授業参観直前お泊まり会（前書き）

とりあえず投稿です。

ちょっと急ぎ足ですが気にしないで下さい。

授業参観直前お泊まり会

「あの〜フォウル？」

「……………」

イツセーが俺に話しかけてくるが無視をした。

ゼノヴィアの件の後悪魔家業があるので部屋に集まったのだが俺はイツセーを無視していた。

何故か。

イツセーの態度が面白いからだ！

どこかそわそわしていたり、わざとらしく「や〜今日は良いおっばい日和だ」とか、前に俺と作ったおっばいのテーマを歌いだしたりとあからさまに「構って！」と言っているようで面白かったのだ！

素直に謝ってくれば相手にしてやるのにな。

周りの皆も俺の意図に気がついていよう微笑ましい者を見る目でみていた。

見ているがわからしたら面白いがやられる立場はたまったものでは

「な、なんだよおおおお、ドツキリかよ。

フオウルに嫌われたかと思ったあああ。

でも良いんだよな！

フオウルとおっぱいの話して良いんだよな!？」

「ああ！存分に語りあおう!！」

こうして俺とイツセーは仲直りした。

ちなみに

「あ、そうだ！

ゼノヴィアも俺の家族になったから!」と言うと俺の家族はもともとそういうのに緩いので「家族がふえました」「や」「よろしく」などで誰も拒絶せず、リアスさん達もなれたのか「幸せにね」など祝福していた。

だがイツセーは

「な、何だと!

ふ、フオウルはどこまで神なんだ!」

ひたすらに驚愕し

「っーかずりいいいいいい!!」

嫉妬していた。

*

さて明日は授業参観！

先ほどまでイッサーいじりをしていたが今の俺は心を踊らせていた。

何故かって？

だって初めての授業参観だ！

それに父さんが来るらしい！

俺と母さんは久しぶりに父さんと会えることで二人揃ってハイテンションだ！

俺達を見て他の者はどんな人？と気になっているようだ。

ただリアスさんは

「くっ！アザゼルは一度ならず二度までも私のイッサーを！
しかも今度は私の眷属まで！」

と怒りを露にしていた。

何か俺に矛先が向きそうで怖いな……

「フオウル！」

うわゝ、マジで来たゝ

「貴方前からアザゼルと知り合いだったのね！
何故黙っていたの？」

「いや、俺も今日までアーちゃんがアザゼルとは知らなかった。

堕天使とは知っていたが何かするわけではないから放っていたのだ
がまずかったか？」

「当たり前よ！」

人間以外がこの地に足を踏み入れる時はまず私に挨拶するものなの！

くっ！きつとイッセーの『赤龍帝の籠手』が目当てね！

アザゼルは神器所有者を集めていると聞くわ。

イッセー安心して。貴方は私が守るわ！」

おゝ、リアスさんはイッセーを余程気に入っているな！

イッセーもかなりでれでれして顔が些か

「イツセー気持ち悪い！」

「うっせ！うっせ！」

良いも〜ん！部長に可愛がって貰えるなら気持ち悪くても良いも〜ん！」

あ！ちよつとイラつときた！

俺が何か言おうとすると祐斗に遮られた

「部長、多分大丈夫だと思いますよ？」

僕もアザゼルに会いましたが今の彼はフォウルの神器に夢中のようにですし。

それに何かあっても僕が守りますから。」

と祐斗は説明していた。

……………祐斗、その言い方は些か気持ち悪い。
当のイツセーも若干引いている。

だがリアスさんにはそこには反応せず

「なっ！フォウルは神器を「フォウルが神器を持つてるって本当ですか！？」……………ミリア？貴女も知らなかったの？」
ミリアに遮られた。

っか

「俺言ってなかったっけ？」

「聞いてません！」

「教えてくれないなんて酷いです！」

あれ？

とりあえず母さんとディースさんを見た。

「あらあら、聞いてないですよ？」母さん

「聞いてないね、どんな神器なんだい？」ディースさん

次にフレイヤ、アン、スルトを見た。

「言ってなかったわよ？」フレイヤ

「多分言ってないよ」アン

「言ってなかったと思います」スルト

どっちら本当に言っただけで無かったらしい。

とりあえず

「すまん！」

俺は全力で謝った。

皆には先ほどした説明と同じことを話した。すると

「今度何か作ってくださいね」「ミリア

「あらあら、家計に優しいですね。」「母さん

「良かったじゃないか、今後金にはこまらないよ」「ディースさん

俺は悲しくなったがここまではまだいい家族の願いだ！

だがリアスさんは

「凄く良い能力ね！

これで色々と経費が浮くわ！

頼むわよ？

あ、これは部長命令ね」

職権乱用だろ！？

理由を言わずに謝るリアスさん。
自分も俺に要求した手前言いにくいのだろう。

「そんな〜。」

おい木場あああ！

さつき守ると言っただじゃねえか！

何で助けてくれないんだよ！」

祐斗には強気なイツセー。

「いや、流石に今のはイツセー君が悪いよ。」

祐斗の言葉にイツセーは「ぐぬぬぬぬぬ」と唸っていた。

ん？この気配は……………

「それにしてもアザゼルね！

イツセーもフォウルも私たちの仲間よ！

それを彼はどうするつもりかしら？」

「彼は昔からああいう男だよ。」

いきなり声がかかり皆がそちらを向いた。

やはりお前か

「「お兄様！」」

「やぁリアス、ミリア久しぶりだね。」

「フォウルも元気そうで何よりだ。」

「サーゼクス、急にどうしたんだ？」

魔王サーゼクス・ルシファールとその女王のグレイフィアさんがいた。

「いやあ、リアスとミリアの授業参観があると聞いてね。来てしまったよ！」

良い具合にシスコン魔王だな。

「これを伝えたのはグレイフィアね！」

「はい、リアス様とミリア様の予定などの調整を行うのも私の仕事なので。」

当然お二方のご両親にもお伝えしております。」

「く！ですがお兄様！お仕事はよろしいのですか！？」

リアスさんはやけに突っかかるな。

ミリアなんて

「うわ〜！お兄様も来てくださるのですかあ！
楽しみです」

と嬉しそうなのにな。

「いやいや、これも仕事の一環なのだよ。」

三勢力会談のまえに現場を下見に来たのだ。」

「何も魔王自ら視察に来なくともよろしいではありませんか！」

「リアス、そんなに悲しいことを言わないでくれ。」

久しぶりに我が妹達に会いたいと思うのはいけないことなのかい？」

サーゼクスが悲しそうに言う。

妹はいないので小猫や娘達を対象に今のやり取りをトレースしてみ
る。

..... やばい、泣きそうになる。

「リアスさん！そんな非道なことを言うものではない！」

俺はサーゼクスの味方になった！

「そうですよ！せっかくお兄様が来て下さるのですから喜びましょ
うよー！」

ミリアも味方になった！

「おお！君たちは私の味方になってくれるのかい！
ありがとう我が妹！ありがとう我が友にして将来の義弟よ！」

俺達は結託し

「「「じ〜」「」」

リアスさんを見つめた！

「うっ！わ、分かりました！

もう何も言いませんからそんな目でみないで！」

リアスさんは敗北を認めた！

俺達は

「「「イエーイ！」」」とハイタッチをかわした。

「はぁ、グレイファイア。

どうにかならないの？」

「既に予定を組んでしまいましたので余程のことが無い限りどうにもなりません。

それにあのお三方に見つめられては私とて無理です。」

「はぁ、貴女でも無理なのね……」

「はい、無理です。」

「「はあ」「

リアスさんとグレイフィアさんがため息をついたのだった。

*

所変わってここは我が家。

そしてここではあるイベントが行われていた！

それは

「こんばんはー！」

「失礼いたします！」

「お邪魔します。」

「誰かの家に泊まるなんて久しぶりだね」

そう、お泊まり会だ！

何故このようなイベントが発生したかて言つとイツセーの発言が原因だ。

あれはまだ部屋にいた時のことだ。

サーゼクスが何処に泊まる話しになった。

当初サーゼクスは適当なホテルに泊まる予定だったそうだが生憎とこの時間に泊まれるホテルはない。

魔王の権力ならごり押しでいけるだろうがこんな所で使うのは馬鹿みたいな話である。

そこでイツセーは

「ならフォウルの家に泊めてもらえばいいんじゃないやありませんか？」

と何気なく言った。

俺としても問題ないので

「構わんぞ？」

部屋は無駄にあるからな」

と言ったのが始まりだった。

「良いのかい！」

いやゝ助かるよ。

でも少々残念だ。

イツセー君のご両親にもリアスがお世話になっているからご挨拶に伺いたかったのだが。

まあそれは明日の授業参観でも出来るし今夜は諦めよう。」

「ならイツセー達もくるか？勿論ご両親も一緒に。」

俺の発言から一気にことは進み結局は皆でうちに泊まることになって今にいたる訳だ。

そして現在皆でリビングで談笑していた。勿論イツセーのご両親もだ。

そして珍しいことに男女で別れていた。

「いやゝフオウル君で良かったかな？」

イツセーだけではなく私達夫妻までお招き頂いて感謝するよ。

ただ私達も一緒に良かったのかい？

本当は子供達だけのほうが楽しめただろうに………」

「誘ったのは俺ですから気にしないで下さい。

俺もサーゼクスも一度ご挨拶をしたかったですし。」

「そうかい？すまないね。

それにしても凄い家だね。ご両親は何をなさっているんだい？」

やはりこの家？が気になるようだ。

「俺の父は俺の生まれた里の代表のようなものでして世界中を飛び回っていますよ。

まあ明日の授業参観には来てくれるようですが。

後母はあそこで貴方の妻と話しているのがそうです。

ちなみにこの家はミリア、リアスさんの妹なのですが彼女の実家が用意してくれたものです。

俺はミリアと婚約しているので」

ちよつとの嘘を交えて話した。

「どちらにせよ凄い父君じゃないか。
それに母君もお若く綺麗で羨ましいね。」

それにリアスさんの妹さんと言うことは将来はイツセーとも……」

「はい、義兄弟と言うことになりますね」

俺の発言にサーゼクスは嬉しそうに笑いイツセーは恥ずかしそうに赤くなっていた。

イツセーは変な所で初だな。

「と言うことは私達はちょっとした親戚になる訳だ！

ならどうだい？一杯やらないか？」

どこからかイツセーの父君、長いのでイツセーパパは酒を取り出した。

「ちょっと父さん！未成年にさ」「素晴らしい！」「……え〜」

俺とサーゼクスの反応がかぶった。

「私は日本のお酒にも興味があつたんだ！

是非ともご一緒させて貰うよ!」
サーゼクスが乗り

「イツセーパパは話が分かりますね!

こうなったらいつそのこと酒宴にしましょうか!」
俺も乗り

「いいね!私もこれを持ってきた甲斐があると言つものだ!」
イツセーパパもノリノリだ。

こうして酒宴が始まった。

気がつけば凄いだんちゃん騒ぎである。

あるものは歌い、あるものは踊り、あるものは泣き出し、またあるものは疲れて眠りだした。

ただ皆に共通していることは薄着だと言つことだ。

もともとお泊まり会なのだから寝間着なのは当然で中には際どい格好のものもある。

極めつけは

「暑いわ!」とか言っつて脱ぎ出すものもいるくらいだ。

そして男性陣は

「イツセーよ。」

「なんだ父さん。」

「俺はフオウル君に誘われて幸せだ」

「俺もだよ」

「ここは天国だ!」

鼻血を出して喜んでいる。

祐斗はサーゼクスと会話していて

「……僕にはこの光景は些か刺激が強いです。

申し訳ありませんがお相手お願いします。」

「構わないよ。

君とも話してみたかったのだよ。

聞いた話では聖魔剣だったかい?

どのような剣なのかな?」

とこちらはこちらで盛り上がっているようだ。

そして俺は

「むにゃむにゃ」

「もう寝ちまったのかい？」

本当フオウルは酒を飲むと子供だねえ」

ディースさんに膝枕されて寝ていた。

この後何があったのかは知らない。

寝ていた時どこか気持ち良かった気もするが知らない！

起きたとき何故か全裸でミアア達も裸で寝ていたが知らない！

なんもしらなあああああい！！！！

授業参観直前お泊まり会（後書き）

補足説明です。

起きたら裸のミリア達の他の女性陣。

ニーナ、デイス、フレイヤ、アングルボダ、スルトです。

もしかしたら他の「グ」がつく人や「あ」がつく人がいたかもしれ
ませんがそこはご想像におまかせします。

では次回に！

授業参観とその夜（前書き）

エロはありませんおっぱいはあります。

今回のイッセーは繊細です。

ただこの作品はシリアスにはたぶんなりません。
ちなみにフォウルのトラウマ発動します。

授業参観とその夜

お泊まり会の次の日

そう！今日は授業参観！

そして俺と母さんが突撃した所ではある人物が立っていた。

「父さん！」「リュウ！」

俺の父さんであり母さんの夫、俺が生まれるまで龍人族歴代最強と呼ばれ『龍騎士』とも呼ばれる男。
リュウ・ドラグニールが立っていた。

626

「おーす！久しぶりだなって！ニーナはともかくフォーウルまで突撃つてぎゃあああああああ！」

ちよ！二人とも抱きしめ過ぎ！

ぐぐるじい！
う！がくっ！

「と、父さん！」「リュウ！」

父さんは何故か突然倒れて何かを言い出した。

二人が強く抱きしめ過ぎたせいです。

「ふふ、フオウルよ……」

やるようになったなあ……

まさか俺が絞め技でやられるとはな……

二ーナも相変わらずで安心したよ……」

「父さん？何を言ってる！」

「そうですね！いきなりどうしたんです！？」

そして父さんは言った。

「お前達の顔を見て良かった……
がくっ！」

そ、そんな！父さん？父さん！？

「父さああああああああああん！」

「リュウウウウウウウウウウウウ！」

ただの茶番ですよ？

「こつして父さんの犠牲は「生きてるから!」……犠牲あったものの授業参観は始まるのであった。」

「いや!だから生きてるって!つかフォウル声にでてる!」

「……始まるのであった!」

「うおおおおおおい!?!」

はい、茶番です!

「フォウルもーナもリユウまでテンション高いねえ」

「デイス先生、あの方がフォウルのお父様なのですか?」

「おや?ミリアは会ったこと無かったのかい?」

「はい、お兄様はよくお会いしていたようですが私は無いです。」

顔立ちはまるで違いますけど性格が何処かイツセー君ににてますね。

エッチじゃないイツセー君?」

「嬉しいんですね？」

「嬉しいんだろ？」

こうして授業参観は始まったのであった。

*

さて授業参観が始まった。

授業内容は英語！の筈だったんだが……

「粘土から始まる英語もある！」

と言う教師の発言で何故か粘土をやることになった。

何故だ？

ちなみに父さんと母さんは

「俺、久しぶりにフォウルの子供らしい所見た気がする。
10年ぶりくらい？」あんたを含めた里の男のせいだ！

「そうですか？」

私には子供らしい所をよく見せてくれますけど？」

だって母さんだし

「そうだねえ、つーか普通に子供だねえ。」

何故かデイスさんもいるし。

「……………デイスさんから見れば皆子供じゃ……………」
あ！父さんそれ不味い！

「あゝあゝ！？それはあたしが年増だつていいたいのかい！？」
父さんご愁傷様

「いや、そういう意味じゃな、ぎゃあああああああ！」

父さんの悲鳴あげ率高いなあ。

とそこで先生に注意されてる、少し恥ずかしいが嬉しくもあった。

だが悲惨なやつもいる。

イツセーだ。

何故ならイツセーのご両親は

「アーシアちゃん可愛いわよ〜！」

「アーシアちゃん！こつち向いて〜！」

とアーシアばかりでイツセーを見ていない。

皆を思い手を動かし続けた。

すると

「「「「「おおおおおおお！」「」「」「」

周りから歓声が聞こえてくる。

俺が目を開けるとそこにはイツセーが作った物よりは大分小さいが本人をそのまま小さくしたような皆がいた。

「す、すげえ！知らない娘もいるけどあれって、ミリアちゃんに――ナ先生、ディース先生、ゼノヴィアまでいるぞ！」

「本当！何なの？凄すぎるわ！」

「私は二人も生徒の才能を開花させたのです……………」

など様々な声が聞こえる。

拳句のはてには

「10500！」

「俺は11000出すぞ！」

「私は11500よ！」

「いゝやそれを手に入れるのは俺だ12000!」

またもやオークションが始まった。

しかし俺もイツセーも決して売らなかった。

愛する者を思い作り上げたものを売れるか!と言つものだ。

そして何とか授業が終わり父さん達の所に行くと父さんが言った。

「……フォウル。
それくれ。」

先ほどまで競り合っていた生徒は何を馬鹿なといった視線を投げ掛けていたが

「良いぞ、ほれ。」

他の者は驚いていた。何故金になびかなかったのに親にはただあげるのかと。

ぶっちゃけ学生が出せる金額など大したことはいし、これはお金がどうとかの問題ではないのだ。

しかし父さんなら構わないので全部あげた。

「おっ!サンキュー!

息子からの久しぶりの贈り物、しかも二丁ナのリアル人形まであるなんて最高だ！」

そんなに喜んでくれると俺も嬉しい。
なんかサービスしてやるか？

「色でも塗ってやろうか？」

「え？まじで？めっちゃ嬉しいんだけど！」

と、そこで異議を申し立てる輩がいた。

「少々待って頂こうか！」

その作品私も是非欲しい！

私にもチャンスをくれないかい？」

サーゼクスだった。

サーゼクスはどうやらミリアの授業を見ていたらしくミリアも後ろに控えていた。

もの凄いニコニコしている。

家族が来てくれたのが余程嬉しかったらしい。

兄が非常に恥ずかしい行動をとっているのも気にならないようだ。

何が恥ずかしいかだつて？

普通に考えてみる。

子が親にあげようとしたものを例え友であろうと、例え未来の義兄弟であろうと欲しがらるものではない。

ゆえに

「断る。」

これはもう父さんの物だ。

そこまで欲しければ父さんに言え。

まあ父さんは「嫌だ！」と言っているがな。」

そう言うときサーゼクスも少しがつくりつつも

「な、ならミリアのだけでも譲って欲しい！

私に出来ることなら何でもする！」

完全には諦めていないらしい。

だが父さんは妥協するつもりは無いらしい。

「い・や・だ！」

これは全部揃ってこそその物だ！

つーかいずれ俺の娘になる子達だぞ？

俺の息子からの贈り物だぞ？

何しようよ、いくら積もうと譲らん！」

「そこを何とか！」

「嫌！」

「どうしても？」

「駄目！」

「頼む！」

「やっ！」

父さんとサーゼクスの幼稚な言い合いが続く中、ミリアが俺に近づいて来た。

「ミリア、楽しかったか？」

とりあえずどうだったか聞いてみた。

「はい！家族が来てくれたのは久しぶりだったので張り切っちゃいました！」

本当に嬉しかったのだな。

「それにしても……」

「ん？どうしたのだ？」

「お兄様は普段はあんなにも聡明な方ですのにたまに妙に抜けてる所があります。」

あのような人形が欲しいのならフオウルに頼めば作ってくれるのに。

「

「本当にな。」

あれは父さんのだが別にもう作らないとは一度も言っていないのだがな。」

サーゼクスがこの事に気がついて俺に頼んで来たのは実に一時間後の話であった。

*

学校も終わり俺達は一度家に帰ったのだが今はイツセーの家にいる。

流石に全員は来れないので俺、母さん、父さんだけだ。

イツセーの家には兵藤家は当然だがグレモリー家（母君を除く）と

ドラグニール家（代表三名）が集まっていた。

何故集まったか、それは格家の父親達が意気投合してしまったからだ。

気がつけばイツセーの家に集まり息子娘自慢が始まっていた。

やれうちの子は可愛い、やれうちの子は頭が良い、やれうちの子は天才だの自慢しかしていない。

しかしここでも憐れな奴がいた。

イツセーだ。

イツセーのご両親はアーシアの自慢しかしていないのだ。

流石に可哀想になった俺はイツセーを連れ出し屋根に登った。

そして夜空を見上げ無言の時が過ぎていたが唐突にイツセーが語りだした。

「俺さ、嬉しいんだ。

アーシアを俺の両親が誉めればアーシアは家族になっただって思える

じゃん？

嬉しいんだよ。

嬉しいんだけど

何でだろうな

何か同じくらい悲しんだ……………。

俺がエロいのがいけないのかな？

俺が自慢出来ない息子だからいけないのかな？

ははは、俺は何言ってる？

俺とアジアならそりゃあアジアをかわいがるよな。
俺だってそうするし。

でも何だろなあ、凄い疎外感があるんだ。」

「イツセー……………」

聞いていらなかった。

イツセーがここまで思い詰めていたとは思いつかなかった。

だから俺は言ったのだ

「イツセー！歌おう！」

意味が分かりません。

「……フォウル」

「きつと気のせいだ！

歌えばそんな気分も吹き飛ばす！」

この前考えた新しい歌を歌うんだ！」

励まそうとしてるのは分かりました。

「わかったよ！

俺歌う！」

それで笑って皆に会った！」

「よし！歌うぞ！」

『乳を触りたい』行くぞ！」

く乳を触りたいく

作詞・フォウル & amp・イツセー

作曲・クリタル・キグ（ごめんなさい）

Your breast!

乳で鼓動速くなる

Your breast!

乳を見たら触りたい

乳を求めさ迷う俺の手が何か掴んだ

乳首を見たら指先ひとつでダウンさ（いや〜ん）

お前の乳を触るため俺は手を伸ばし

乳を揉みまくった

あの乳この乳その乳たくさん見たい

乳を触りたい

End

本当にごめんなさい

俺達は歌いきり意気揚々とリビングに戻ろうと下におりドアのぶに手をかけた所で声が聞こえてきた。

「おっ！ちゃんとイツセー君も撮っているじゃないですか。」

サーゼクスの声だ。

イツセーは「え？」と声をだし固まっている。
俺にしてもいつの間にと思った。

「そりゃ撮りますよ。」

確かにイツセーは馬鹿でエロでエロで馬鹿でエロですが私達にとっ
ては大事な息子ですから」

エロと馬鹿が多くないか？

「父さん……」

そんな風に思ってくれてたんだ……

俺、勘違いしてたんだな。

俺はちゃんと愛されてたんだな。」

イツセーは感動しているらしい。

結構馬鹿にされてる様にも聞こえるがな。

そしてイツセーは部屋に入り何かを言おうとして聞いてしまった。

「あ、でもここだけなんですな。」アーシア

「そりゃそうだよ。」

だってアーシアちゃんのほうが可愛いし。「イツセーパパ

イツセーは笑顔で固まっている。

イツセー……………憐れな。

だがイツセーも愛されているんだ！

気にしたら負けだ！

そうあれだ、妹ができた兄の感じだ。きつと

言っただけなのか分からないので心の中で言っているよ

「お、イツセーにフォウル君。
やっとおりてきたか。」

ほらアーシアちゃん的一生懸命な姿と一緒に見よう！」

イツセーは何か吹っ切れたのか

「……………うん！」

笑顔のまま駆けていった。

イツセーがお兄ちゃんになった、そんな夜だった。

ちなみにうちの両親だが

「か、可愛い！」

リアスちゃんとミリアちゃんの子供の時がここまで可愛いとは！」「
父さんはリアスさんとミリアの子供の時の写真を見て絶句していた。

だが父さんも母さんほどではないが中々に親馬鹿だった。

「可愛い、確かに可愛いがこれを見て貰おうか！」

フォウルのマル秘写真を集めた我等夫妻の宝！マイフォウルアルバムを！」

ババーン！と効果音が鳴りそうな勢いでアルバムらしきものを取り出した。

マル秘写真て何のことだ？

何か嫌な予感がする。

皆がどれどれと除き込み

「「「「うっ！／／／／／／」」」」

となった。

何が起こっている？
皆が集まっているせいで良く見えない。

「か、可愛い」
リアスさん何が？

「生まれてくる性別間違えたんじゃないか？勿体無い……」
「イッセー、勿体無いとはどういう意味だ？」

「本当に男なのかい？」

サーゼクスは何を見ている！

そして次のイツセーママの発言に俺ははっとした。

「本当に可愛いわねえ、でも何で女の子の格好してるの？

あら？縛られてる写真もあるしこっちは服がはだけてるのもあるわね。

写真集みたいだわ。

でも、あらあら／＼／＼／＼／＼／

え？なんで顔を赤らめてる？

っーか女装？

俺女装なんかしたお……………

……………したことあったあああああああああああああ……………！！！！

っーかさせられたことだけど！

わからない人は赤龍帝と霸王龍と悪魔たちを読んでみよう！

それよりも

「何で父さんが知ってる！？」

っーか写真何か撮ってるい、ぎゃあああああああああああああああ

あ！！」

見、見てしまった！
なんだよあれは！

確かに俺だけど無駄にエロいぞ！？

っ！か写真保持だけでポルノ法に引っ掛かるわ！

「はっはっ！ニーナに送って貰ったのさ！
子供のフェウルだけでも良かったけど女装した姿なんか可愛い過ぎて娘が出来た気分になれた！

ありがとうニーナ！
グッジョブ！」

「母さああああああああん！？」

母さんはいつもどおり「あらあら」と言っている。

ううう、あの時は俺が悪かったけどこの仕打ちはない……

「あ、その先は駄目だ！
18禁だから」

授業参観とその夜（後書き）

なかなか話が進みませんね。

次こそはダンボール吸血鬼をだしたい！

魔王少女と勘違い（前書き）

すみません！時間がかかりました！

文章が纏まらず考えているうちに……

ちなみに今回の話ですが魔王少女とその妹、そしてその眷属がでてきます。

ダンボールもあるよ！

やっぱりお外怖いよおおおおお！

先輩の嘘つきいいいいいいいい！

「はーなーしーてー！

私怒っちゃうわよー！

ソーナちゃんに会って説明して貰うのー！

何でお姉ちゃんを授業参観に呼んでくれなかったのかきくのー！
ー！

ああああああー！あきやあきやあきやあきやあ

「五月蠅いわっ！！」

あまりの五月蠅さに我慢できなくなり一喝すると

「ひい！」ガタガタガタガタ

「うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！うっ！

少し静かになった。

はあ、何でこんなことになったのだろうっ…。

俺は数時間前を思い返していた。

時間は放課後、俺は屋上で寝転がっていた。

特に何をするでもなく俺はぼーとしていたのだが

「フオウル！頼みがある！」

いきなりイツセーが現れた。そして

「フオウル君！お願い、助けて！」

ソーナさんも現れた。

何か嫌な予感にはしたが普段冷静なソーナさんの慌てようにとりあえず話を聞くことにした。

ちなみにイツセーだが

「これちょっと頼む！中には部長の眷属のハーフヴァンパイアがいるから！」

俺は2〜3時間で戻るからよろしく！」

と言いだんボールを置いて去って行った。

イツセーめ……………。

面倒そうなものを残しておつてえ!!
その後ソーナさんの話はこうだった。

どうやら彼女の姉に授業参観のことを言わなかったらしい。正確には親には伝えたがそれが姉に伝わらなかつたらしいのだ。

そしてサーゼクスより聞いて初めて知ったセラフォルーさんは悲しみ天界に攻め込むと言い始めたらしい。

三勢力会談の前にそんなことになるのは非常に不味いので何とか抑えて貰ったのだが今度は矛先がソーナさんに向かい「ソーナちゃんとお話ししてくる!」と言って冥界から飛び出したらしい。

なら話をすればいいと思ったのだがセラフォルーさんのシスコン具合はサーゼクスを超えるらしく興奮している今の状態ではどの様になるか分からなくて怖いらしい。

なので俺に抑えてもらい落ち着いてから話がしたいと言っつのだ。

以前迷惑を掛けたこともあるので抑えるだけで良いという条件でそれを受けたのだが、正直受けなければと後悔している。

仮にも魔王だ。

その力は絶大。

サーゼクスにも優るとも劣らない存在を抑え込むなどどれほど骨がおれるか……。

しかも敵なら兎も角俺は基本的に女性に乱暴をしたくはないので余

俺が暗い感情に支配されていると現在進行形で抑え込んで（抱きしめて）いるセラフオルーさんが話しかけてきた。

少し落ち着いたようだ。

「貴方は誰！？何で私とソーナちゃんの仲を邪魔するの!？」

それでも無かつたらしい……

魔力が渦巻いている。

「ならまずは落ち着け。」

俺は平気だが普通の奴ならお前の魔力に当てられて気絶するぞ？

後俺だが『霸王龍』と言えばわかるか？」

俺の言葉に二重の意味ではっとした。

やっと落ち着くのか？

やっと落ち着いてくれるのか!？

俺は期待を胸抱く

「ずーるーいー！」

霸王龍さんを仲間にするなんてずーるーいー！！

それにソーナちゃんは強い子だもん！

私の妹だもん！

きつとお姉ちゃんがキラッ っとしてもソーナちゃんは大丈夫だもん！
ん！」

キラッ って何だキラッ って……

そもそも発言に根拠が全くない。

確かにソーナさんは将来有望な悪魔の一柱ではあるだろうが魔王と一緒にするのは酷だ。

っ！か無抵抗とはいえ俺がここまでボロボロになるのを若手悪魔に耐えられるだろうか？

……………無理だろ。

タンニーンの火球を受け続けるようなものだぞ？

……………俺、よくもつたな……………。

ここでようやく待ち人の一人が来た。
盛大な突っ込みを入れながら。

「無茶言わないで下さい！」

お姉さまが光つたらまず小国一つが滅びます！
それを私がどう防ぐと言うのですか！？」

ソーナさんがあり得ない！といった表情で部屋に入って来た。
どうやらキラツ って部分が聞こえていたらしい。

っーか恐ろしいことを言わなかったか？

キラツ ってそんな威力があるのか？

………俺でも無防備な状態ならやばくね？

「あー！ー！ー！」

ソーナちゃああああああん！

お姉ちゃんを助けてええええ！

霸王龍さんに捕まってるのおおお！」

そのあんたの妹に頼まれたんだがなっ！

「私がフォウル君にお願いしたんです！

お姉さまが興奮していると私では話すのも辛いんです！」

だろっな、俺も辛かった！

主に精神的に！

「でもでも〜！」

……実際に言っている。

「そ、そんなあひう！」

お姉ちゃんはソーナちゃんがきやん！
す、好きなだけなのにな！」

「私も勿論お姉さまのことは好きですし尊敬もしていますがお姉さまは度が過ぎます！
自身の立場を考えて行動してください！」

「ソーナちゃんに優るものなしっ」

こいつ揉まれながらもポーズを決めたぞ……

ソーナさんも呆れているようだ。

「ひん！」

む、むううううう！

霸王龍さんは、お、おいたが、過ぎる！
そん、なはう！悪い子は、えいっ　！」

ガスッ！

「がはっ！」

な、殴ってきた！？

だが俺がその程度でやられると思ったたら大間違いだ！

「ぺっ！……中々に良い拳だが俺は止まらん！」

最終決戦が始まった。

*

「はあはあはあ……………せ、セラフォルー・レヴィアタン……………
…はあはあはあはあ、や、敗れたり!」

「はあはあはあ、だ、ダメ……………。
足に、力が……………はあはあ、入らない……………」

闘いに何とか勝利したが俺は久しぶりにギリギリの状態になった。

セラフォルーさんは腰が抜けたらしく立てないでペタンと座り込んでいる。

つーか、何故この様になった!?
割に合わない所の話ではない。

この俺がおっぱいを触りながらも楽しめないとは……………
……………恐ろしい娘!

「あの、フォウル君？」

だ、大丈夫なの？」

ソーナさんが顔を赤らめつつも心配そうな表情で話しかけてきた。

「む？も、問題ない、と、言いたい、と、所だが、些か疲れた……」

ああ！疲れたわ！何が悲しくてこの超絶シスコン魔王の攻撃を受けねばならんのだ！

おっぱいを揉んだからです。

「ごめんなさい……………」

むう、その様な顔を見たくて依頼を受けた訳ではないのだが。

「そんな顔をするな……………」

疲れはしたが別にソーナさんのせいではない。」

実際にそうだ、確かに依頼したのはソーナさんだが実質的な原因はそこで座り込んでいるシスコン魔王、セラフォル・レヴィアタンだ。

半分は貴方の自業自得です。

「ですが私がフォウル君に頼まなければそんな怪我はしなかったでしょう?」

半分は自業自得です。

「こんな傷直ぐに治る。

部室に行けばアーシアがいるだろうからな。

まあ魔王のおっぱいを触ったのだからこれくらいは当然だ。」

楽しむ余裕が無かったがな!

自業自得

「ではせめて何かお礼をするわ!

何でも言って!」

お礼か……

今回の件は前にかけて迷惑に対する詫びのつもりだったんだが、確かソーナさんはあのことは忘れていたのだったな。

「別に礼など要らんぞ?」

「それでは私の気がすまないの!」

と言われてもな……

「むうううう」

と唸りながら考えていると

「会長に何してんだごらあ！」

と言う声とともに

どかっとな音がして軽い衝撃を背中に感じた。

Side out

匙Side

よっ、俺は匙元士郎！

生徒会役員で会長である支取蒼那先輩、いや、本名ソーナ・シトリ
様の眷属悪魔だ。

悪魔になったのは最近だけど結構レアな神器を持っていたみたいで
悪魔に転生するさい『悪魔の駒』で兵士だが4つも使ったんだぜ？
兵藤の方が凄かったけどな……

まあともかく俺が何しているかって事だが仕事が終わったから報告
をするために会長を探しているんだ。

さ〜〜て会長はどっこかな〜

早く会長に会いたい。

会長と話したい。

ちょっと前までは会長のそばにいただけでも幸せだったけど兵藤と会って俺は決めたんだ！

会長の彼氏になって会長のおっぱいを揉む！

兵藤は言ったんだ。

「俺達でも主様のおっぱいを触れるんだ！」と。

俺は自信を得たんだ。

兵藤には悪いがあいつに出来たんだ、俺にだってできるはずだ！

そのための第一歩として慣れない仕事も懸命にこなしてきたし会長ともよく会話するようになった。

兵藤がどんな手順で主様のおっぱいを触れるたのかは分からないけど俺にはこんなやり方しか知らないし出来ない。

地道だけどここの努力が実を結ぶと信じてやり続けるんだ！

そんな訳もあって会長を探しているんだけど……

「何処にいんのかなあ」

ん？」

何か声が聞こえる。

この空き教室か？

もしかして会長ここにいるのかな？

だけでもしかしたら違う奴らがいけないことしてる最中かもしれないからいきなり開けるのは不味いかもしれないので」

ちょっと聞き耳をととねえ

どねどね

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

くらくらだ。」

おっぴい

こゝこの声は会長!?

一体何を話しているんだ?

何かおっぱいとかが聞こえたが……………

まさか!と思い教室の中を覗くと我等男子の神こと銀髪の留学生、
フォウル・ドラグニールが俺に背を向けた状態で会長と向かい合っ
ていた。

ドラグニールの影になり姿が完全にはわからないけど何か必死な会
長の様子は伝わってきた。

今までの情報から俺はある結論に至った。

ドラグニールは自他共に認めるおっぱい好き 会長におっぱいを求
めた 会長は拒否 しつこく要求 会長必死に説得中。

こう考えた瞬間ブチッと何かが切れるような音がして気がつけば
「会長に何してんだごらあ!」
ドラグニールに蹴りを入れていた。

「ぬおっ!な、何だ!」

奴は驚きの声をあげ少したたらを踏んだ。

会長は俺の行動に驚いて完全に固まっている。

待ってて下さい！今俺がこいつを追っ払いますから！

にしても蹴り飛ばすぐらいのつもりで蹴りを入れただけだな。

（匙はフォウルが悪魔だとは知っていますが霸王龍だとは知りません。）

まあとにかく今はこいつをどうにかしよう。

「ぬう？お前は匙か？

いきなり何をする！」

「てめえこそ会長に何してんだ！」

「俺はソーナさんの頼みを「おっと、嘘はつくくなよ？少しだけだが話は聞こえていたからな！」……………遮るなら言わせるな。つーか聞こえていたなら何を怒っている？」

何をだと？ふざけんな！

「てめえが色んな女性に手を出してんのは知ってんだよ！！
今度は会長か？
ふざけんな！」

てめえはおっぱいがあれば誰にでも手をだすのかよ！？

「つーか何でおっぱい講義になつてんだ？」

「俺は何に怒ってたんだって危ない危ない！」

「危うくこいつのペースに引き込まれる所だった。」

「
と云うわけだ。わかったか？」

「つーか」

「知るかああああああああああああああああ！！！！！！」

「全くミリア様も何でこんな奴を眷属にしたんだか。」

「俺や兵藤みたいに駒を複数使うレアな神器があるならともかくよお
！」

「つい思ったことが口からでた。」

「ドラグニールはピクツと動きそして固まっている。」

「会長が何か言おうとしていたようだが先に俺が言葉を紡いだ。」

「そもそもてめえみたいな奴を眷属にしたって役に立つのかよ？」

「どうせ普段からおっぱいおっぱい言っているんだろ？」

「やめなさい！」

「会長が止めようとするが俺はやめなかった。」

「それだけ頭に来てるんだよ！」

ドラグニールは先ほどと違い何の反応もせずうつむいている。その行動だけでもイライラする。

「黙ってれば許されると思ってんのかよ！」

「てめえは何ができた!？」

「おっぱいにしか興味はありませんってか？」

「はっ! 本当にいらねえよな！」

「ミリア様もお可哀想に、いやあの方の目が節穴なのか？」

「きつと後で会長からのお叱りをつけるだろうがもう止まれないに止まらねえ！」

「つーかミリア様のことを引き合いにだすと反応してるな。ならもつと言ってやる！」

「なんだ? 主のことを言われて怒ってんのか？」

「ならもつと言ってやるよ！」

「お前の主の目は節穴だ！」

「……………黙れ。」

「ああ、もしかしたらお前を眷属にしたのは夜伽でもさせるためか？

淫乱女なのか？

おい！答えてみるよ！」

思ってもいないことが口からでてきた。

ははっ、後で折檻確定だ。

「……………黙れ。」

「ああ？はつきり言えよ！」

たくてめえの親は何を教える……………ああ、そう言えばてめえは母親ともやっつてんだっただか？

じゃあしょうがねえか、子が子なら親も親ってか？」

どっどっ言葉が口からでてくる。

「……………黙れ！」

「デイス先生もだっけか？」

あの人も馬鹿だよな。

普通赴任の挨拶であんなこと言っただよ。

てめえの馬鹿さは先生譲りか？」

あの時は驚いたがここまででは思っただけ無かった。
後で皆に謝んなきゃな。

「元士郎、お願いだからやめなさい！」

「じゃないと貴方が……………」

会長がまた止めにはいる。
若干青ざめているのは何でだ？

「会長！何で止めるんで「ソーナさんすまない」今更謝ったってお
そ、え？」

気がつけば俺は天井を見ていて
そして

「ぐあああああああああああ！！！！！！」

背中に物凄い痛みが襲ってきた。
さらには

「ぐほっ！！」

腹にもとてつもない威力の何かが落ちてきた。

痛みに耐えながら腹を見ると足がめり込んでいる。
見上げるとそこには異様で異常で膨大なオーラを身に纏い目の瞳孔
が縦に裂けたドラグニールがいた。

「ソーナさんすまないな。」

お前の眷属を駄目にするかもしれん。

俺の事ならいくら言われても気にしないが、家族のことなら話は別
だ！！」

何なんだよこいつは！？

訳わかんねえよ！

会長は完全に青ざめて震えてるから聞けないし。

俺はなんとか声を搾り出し

「て、てめえはゴホ！な、なにもんだ、よ！」

俺は次の言葉に絶望した。

「俺か？俺は『霸王龍フォウル』、または上級悪魔子爵、フォウル・
ドラグニールだ。」

散々馬鹿にしてくれた礼だ！

お前の終わりを始めようか！」

匙 side out

ソーナさんには悪いが匙には教育を施す必要があるな。
殺しはしないがちょっとしたトラウマにはなるかもしれない。
それぐらいには痛めつけるつもりだ。

後教えてやらなければいけないこともある。

それを制裁とともに体に教え込む。
まさしく教育だ。

断じて調教ではないのであしからず。

「くそ、うううううう、足を、どけて下さい、よ。

俺は、間違ったことは、してない。」

俺の正体を知り敬語を使い始めたのは一応目上に対する接し方から

いは出来るらしいな。
だがこいつはまだわかって無いのか？

「一応聞いてやる。
俺が何をしたと思った？」

「だ、から、会長のおっぱいを、揉もうと、ぐうう、したんだろ！」

俺は踏みつけている足に少し力を加えた。

「がっ！あ、あああああ！」

匙は苦しんでいるようだが気にせず答え合わせをする。

「はずれだ。」

正解は俺がソーナさんの依頼を受けた。
依頼終了後に礼の話になりお前が乱入してきた。

わかるか？全部お前の勘違いだ！」

「なっ！？そんな！？
え？会長？ほ、本当ですか？」

驚く匙にソーナさんは首を縦に振ることで応えた。

「そ、そんな……………」。

じ、じゃあ依頼って何なんですか!?

何で俺達には何も話してくれなかったんです、ぐうううううううう!
う!

「まだ終わっていないぞ?

まあ良い、俺が答えてやる。

説明中

だ。
」

「ドラグニール、様は、会長を困らせる所か助けていた?」

「わかったようだな。

なら次の問題だ。

俺は何故怒ったのかだ。
」

「そ、それは俺が貴方を馬鹿に、したから、ですか?」

「違う、はずれだ」

そう言っつて俺はまた足に力を入れる。

「ぐ、ぐうううう!がは!がああああ!」

苦しいのだろう、本人が意識しているかはわからんが俺の足を掴ん

だ。

だからと言って緩めてやるつもりはない。

「ヒントをやる。」

俺を馬鹿にされようと俺は気になどしない。」

「っ!!!」

お、れが貴方の主、を、家族を、ば、かにしたから、ですか………
…?」

少し足の力を抜いて

「正解だ。」

だがそれで許してやるほど俺は!」

一気に踏みつけた。

「があああああああああああああああああ!」

「優しくないのでな。」

「

俺は足をどけ、もがき苦しむ匙を見下ろし

「まだまだ続く、気を引きしめる。」

ああ、殺しはしないから安心しろ。

後お前のためにもなるからしっぴかり学べ」

俺のごうも、じゃなく調きよでもなくえ〜と〜、あ〜、そうだ！
教育だ！

教育が始まった。

*

あれから時間にして30分ほど経ち俺は教育を終え冷静になった今
思ったことだが

「「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんな
さい」」

……………やり過ぎたか？

つーかダンボールからも聞こえるのは何故だ？

とりあえず俺はソーナさんに謝罪をする。

「すまん、かつとなつてやり過ぎたようだ。」

「……多分大丈夫よ。」

それに痛めつけた分だけ大切なことも教えてくれたみたいだし。

後のことは私が何とかするわ。」

俺が教えたことは単純だ。

見極める力を身に付けろ、だ。

状況を、相手を、など様々な物を見極める力。

今回の匙の行動は完全にそれが出来てなかった。

ソーナさんのためにしたことなのだろうが俺でなく他の貴族ならば殺されてもおかしくないことをやってしまった。

こう言ってしまったては何だが俺や他の力ある者ならばごり押しでどうとでもなるが下級悪魔にはまずこの見極める力が重要だ。

ゆえにその大切さを文字通り体に教え込んだ。

判断を間違えるところとな。

まあ俺もキレていた割には加減が出来るくらいには見極めはできていたと思う。

加減しなかったら匙はここにはいなかったらだろうからな。

「さて、匙よ。」

「は、はひ！」ガタガタガタ

ものすっごい怯えているが怯えることが出来るだけましと言っものだ。

だが何時までもこのままではせつかくの授業が意味をなくす。

「もうやらんから怯える必要はない。」

まあ散々やっておいて何だがお前の行動自体は間違えていない。だが……………わかるな？」

「……………見極める力、ですか？」

「そうだ。」

先ほども言ったがお前の行動自体は間違えていないがその行動につるまでの過程が駄目だ。

まずは状況を的確に理解しろ。

周りを見る、耳をすませ、対象の動きを把握しろ。」

「それも間違いではないが正解ではない。

最大のミスは相手の力量を見誤ったことだ。
と言っか相手をなめてかかった所だ。」

「で、でも俺はあの時、全力でやりましたよ！？
その判断も間違いなんですか!？」

「アホ！お前の攻撃が効かない奴など吐いて捨てるほどいるわ！

その判断が甘いと言っに。

お前は少々自意識過剰だ。

己が全力だから相手に通じると思うな！

己の力量を弁えろ！

ただお前の挑発は相手により有効な手ではある。」

「????？」

「お前と力量が変わらないものならば相手の隙を作る策になると言
うことだ。

ただ使う相手を間違えると……………」

「……俺のようになる、ですか……。」

「そう言うことだ。」

よし！これで講義は終了だ！

体に異常はないと思うが大分痛めつけた。
今日はゆっくり休め。」

「は、はい！」

ありがとうございます！

それとすみませんでした！」

「フオウル君、本当にごめんなさいね。
あとありがとうございます。」

そう言ってソーナさんと匙が出て行こうとした所に声をかけた。

「ソーナさん！」

良い眷属を持ったな！

大切にしろ、匙は強くなるぞ！

今日のことをいかせればな（笑）」

最後は冗談のように言ってやると

「ええ！」

と微笑み教室を出て言った。

余談

「おゝい、お姉ちゃんを忘れないで〜！」

完全に忘れていた……………

魔王少女と勘違い（後書き）

いかがでしたか？

悩みまくった内容だったので何処か変かもしれないです。

ちなみに私は匙も好きです！

つーかDDのキャラで嫌いなもの多分ないです！

ダンボール吸血鬼（前書き）

やっとダンボール吸血鬼をだせる！

今回のメインは吸血鬼です。

と言ってもあまり話は進みません。

全く一難去ってまた一難とはこのことか？

面倒事が絶えなさすぎる！

ふ、ふふふ………イツセーめ、ここに来たら対童貞用の拷問にかけてやる！

俺が黒い笑みを浮かべているとヒキビビが恐る恐る尋ねてきた。
「つかそろそろダンボールから出るよ。」

「……あ、あの！あ、ああ貴方は一体誰ですか？」

ああ、先の件で自己紹介をしていなかったのを忘れていたな。
まあ故にヒキビビと呼んでいたのだが。

「俺は『霸王龍フォウル』またはフォウル・ドラグニール、上級悪魔だ。」

先ほども匙に名乗ったが聞こえなかったか？」

流石にこの距離で聞こえていないとは思うが。

「ひーごめんなさいごめんなさい！

さっきは怖くて耳をふさいでました！」

別に怒っていないのに何故謝る？その態度が他人を余計に苛立たせることに気がついていないのだろうか？

「って、ええ！霸王龍？上級悪魔！？うわああああん！失礼な態

度をとつてごめんなさい！いいいいいい！ダンボールの中からごめんなさい！いいいいいい！ダンボールが僕つてことで許して下さい！いいいいいいいい！」

「だあああああああああ！

いい加減にしろっ！

一々喚くな！話が進まないではないか！

まずは名乗れ！それともお前は相手が名乗ったのに己は名乗らない無礼輩か？」

「ひう！ご、ごめんなさい……」

僕はギヤスパー・ヴラディですう。

ご存知かと思いますが主はリアス・グレモリー様で駒は僧侶ですう。ううう……」

ギヤスパー・ヴラディだな。よし覚えた。

「お前はハーフヴァンパイアと聞いたが？
もしかハイライト・ウォーカーか？」

「そ、そうですう。

よくわかりましたね？
うううううう。」

「なに、ヴァンパイアのハーフは大概がハイライト・ウォーカーと人間の子だからな。

普通のヴァンパイアは夜型故に人間との交流が少ない。
そのことから簡単に推理しただけだ。」

「わあああ、霸王龍さんは頭もいいんですねえ。」

ヒキビビ改めギヤスパーが感心したような声をあげる。
表情が見えないので電話で話しているようだ。

「ふむ、褒められて悪い気はしな「おおおおおい！兵藤一誠ただいま到着したぜえええええ！」……………」

会話の途中でやっとイツセーが戻ってきた。

散々人を待たせておいて悪びれもなく来たことに若干呆れはしたが
やっと帰れると思つて安心もしたが次の言葉でそれは変わった。

「よし、じゃあ早速始めようか！」

は？こいつは何と言つたのだ？始める？何を？
わーい、僕わかんない！

「……………何をする気だ？
俺は聞いてないぞ？」

「あり？言つてなかったか？
わりーわりー。」

何とかしてギヤスパーをあつ、そのダンボールのことな。んでギヤスパーをダンボールから出そうと思っただけどさ、なかなか上手く行かなくてフォウルに手伝って貰おうかと思ってさ!」

ははは、と笑いながら言うイッセー。

それならそれで言うてくれればちゃんと協力していたというに……

「わかった。協力しよう。」

だがひとつ気になることがある」

「何だ?」

「お前は何をしていたんだ?」

そう、俺が魔王少女と悪戦苦闘している間こいつは何をしていたんだ?

ギヤスパーからの実質的な被害はなかったとは言え精神的に疲れたのは事実だ。

「じ、実は白龍皇に会って……」

な、何!白龍皇だと!?

アルビオンが来ていたのか!

そうか…、アーちゃんと来ていたのは白とアルビオンだったか……
…。

ん？アルビオンと会っていた割には怪我はないようだが戦っていないのか？

「白龍皇と会って鬪いは無かったのか？」

あの男はなかなかのバトルマニアだと思っていたのだが？」

「俺もいろいろ教えて貰っていたから戦闘になると思っていたんだ。そしたら木場とゼノヴィアが助けに来てくれたし、相手は鬪うつもりは無かったらしい。」

おかげで無傷ですんだよ。」

なるほどな。

白はバトルマニアではあるが分別はあるようだな。

それとも強者にしか興味が無いとか？

まあ良い、それにしても戦っていないのならここまで時間は経たない筈だ。

「んで皆と別れた後に……」

「後に？」

「部長に甘えてた！ってあれ！？フォウルさん？何か体が縛られているんだけど？」

い、いつの間に縄を用意したんですか？

え？え？ちよつと待って！何で椅子に縛りつけるの！？

何でテレビの前に！？

ま、まさか！

や、やめろおおおおおおお！？

俺はまだ死にたくないいいいいい！

お願いだからやめてえええええ！」

イツセーの言葉を見無視して俺はテレビをつけ映像ディスクをセットした。

この映像ディスクというのも今日松田が持ってきたもので松田曰く「全ての性癖を満たす最高のエロ！」らしい。

ふふふ、イツセーよ。

童貞のお前に耐えられるか？

自ら慰められないで最高のエロを見続けよ！
スイッチオン！

くスタートく

ここからはイツセーの声だけでお楽しみ下さい。

「うううううう！

何だこれは！冒頭からこのエロさは！」

「なっ！ハーレムものだと！

ぬおおおおお！

男優かわれよおおおおお！」

「ぎゃあああああああああ！」

おっぱいが、おっぱいが凄いことにいいいいいいい！

うわあああああ！体が動かないよおおおおお！」

「くっ！仕方ないけど目を！

ってフオウルさん！？

何このおっぱいの感触は！？

え？作った？

どうやって？って神器かあああああ！

なんつー神器の無駄使い！

ちよおおおお羨ましい！」

「いやああああああああ！」

目を閉じても伝わってくる感触と聞こえてくる声！声がああああ
あああ！」

「ふんぬ！ふんぬうううううう！」

ううううう、全然ほどけない………

たまたまそこに放置してた疑似おっぱいに接触したイッセーがぎこちなくも動き出す。

「っ！か何を宣言しながらやっているのか……………」。

このまま続けるとどうなるのかわからんのか？

「……………イッセー。止めたほうがいいぞ？

このままでは下着がホワイトアウトする。」

この部屋がイカ臭くなるとか嫌だぞ？

「はっ！？

でも、でもおおおおおおおおお！

うぐ、うわああああああああん！」

泣き出したよ……………」

仕方ない、解放してやるか。

ジタバタ動き回るイッセーの縄をほどいてやると

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおお！」

と雄叫びをあげながらイッセーは教室から出て行った。

何をしに行ったかは検討つくので触れないであげよう。

*

あの後妙にすつきりしたイツセーを迎え何とかギヤスパーをダンボールから出すことに成功した。
様々な方法を試した結果無理矢理引きずりだした。

出した瞬間は女の子かと思いい乱暴にしたことを後悔したが俺の神器による解析が発動し男と判明したことにより後悔は消え去った。

まあギヤスパーは男の娘と言う奴だったわけだ。

話は変わるがギヤスパーは今まで神器の力を扱いきれず、危険故に封印されていたらしいがこかびーの件を境にリアスさんの力が認められ晴れて封印解除が許された。

しかしギヤスパーはヒキビビだったのでなかなか外に出ようとしなかったのを何とか出せるまではしたが今度はダンボールにこもりっぱなしになり今日の騒動に繋がったわけだ。

そして今現在だが俺達は教室で話をしていた。
内用は神器についてだ。

「停止世界の邪眼？」

俺が聞き返すと説明してくれた。
何でも対象の動きを止める力。

ギヤスパーの場合制御が出来ずに無意識に発動してしまうらしい。

706

試しに俺にかけて貰ったが凄いの一言だった。
対処方法はいくらでもあるが力の大小に関係なく対象の時間を停止
してしまうようだ。

「素晴らしい……」

思わず呟いた一言にギヤスパーは驚きイッセーは「だよな！だよな
あ！」と同意をしめた。

「そ、そんな！僕の力は皆停めてしまっんですよ！
こ、怖くないんですか!？」

ギヤスパーがヒキビビになったのはこれが原因の一つか……

ハーフヴァンパイアは基本的にヴァンパイアから嫌われ蔑まれる。だからと言って人間の元に行ったとしても神器の力により人間からも蔑まれる。

きつとりアスさんと出会うまで味方がいなかったのだろう。

俺は自然な動きでギヤスパーの頭を撫でていた。

先ほどまでのギヤスパーならば悲鳴を上げていただろうがあまりに自然な動きだったせいかなギヤスパー自身も自然に受け入れているようだ。

「ギヤスパーよ。怖くないかと言ったな？」

俺は怖くない。

仮にお前が俺を停めたとする。

その間にお前が俺に何かするのかわかるのか？」

「す、するわけないです！」

俺に撫でられながらもギヤスパーはしっかりと応えた。

「なら何を怖がる必要がある？」

ちよつと時間を停めたくらいで何かわかる？」

お前の力を、お前自身を知っているものならば誰も怖がらない、恐れられない、拒絶しない。

誰かに害を与えていると言つならばイツセーの方が何倍も与えているぞ。」

ここまで言つとイツセーが乗ってきた。

「そつだぞ！」

俺に比べればお前なんかまだまだ可愛いもんだ。

俺なんか変態だろ？覗きはするわ、エロトークばかりするわ、女の子の服は破くわで女の子から嫌われまくりだぞ？」

それに俺は続けた。

「イツセーの場合ギヤスパーの能力と併用しようとか考えていそうだな。」

「ば、バレた！」

くそお！良い作戦だと思つたのに……」

「だがイツセー、よく考える。

そこに俺のパイタルティを合わせてみる。どうなる？」

イツセーがその光景を想像したのだろう。目を見開き

「最強だ……。」「と呟いた。

「ぶっ、あははははははは！」

俺とイッセーのやり取りを見ていてギヤスパーが笑いだす。初めて笑っているところを見たな。

「せ、先輩のようなことを言う人達は初めてです。

皆怖がるばかりでした。

でも今日初めて僕は生きていても良いんだと思えた！

ありがとうございます！」

ギヤスパーが少しだが前向きになったようで晴れやかな表情をしていた。

このあと色々な話をしてギヤスパーは笑い、驚きはしていたが最初のように泣いたりびびったりはしていなかった。

こうしてギヤスパーは何とかではあるが外に出れるようになったのだった。

ダンボール吸血鬼（後書き）

ギヤスパ―上手く書けたかな？

会談直前、眷属強化作戦（前書き）

何とか今日中に投稿完了！

久しぶりにスルトが会話をするぞ！

あとゼノヴィアに新しい相棒がああ作品より出張だ！

会谈直前、眷属強化作戦

三勢力会谈が直前に迫った今日、俺達は我が家のトレーニングルームに集まった。

メンバーはグレモリーリアスさんとミリアの眷属と俺の眷属そして匙だ。

一名違うものの眷属もいるが流石に眷属も含め全員集まると中々に多いな。

今回集まった理由だが場所で見分かると思うが修行を行うためだ。

正確に言えばリアスさんとその眷属、ミリアに匙の修行だ。

はっきり言って俺の眷属達は最強と言ってもおかしくないもの達で揃っている。

一番戦闘力の低いアンにしても闘えばタンニーンに勝てないまでも中々に良い勝負が出来るはずだ。

フレイヤとスルトにいたっては全盛期のドライグ並の力を有しているだろう。

俺の勢力を順位別に表せば俺を頂点にスルト、フレイヤ、アンの順番になるだろう。

デイスさんにしてもサーゼクスなどとガチでやりあえる力があるし何よりも俺の師匠だ。

教えるという点ではこの中で一番上手いし教える引き出しが一番多いのだ。

まあ何が言いたいかと言うとだな、俺とその眷属、そしてデイスさんで三勢力会談の前に最終チェックをしようとなったのだ。

一応メンバーわけは以下の通りである。

俺のグループは教師として俺、スルトで生徒はイツセー、祐斗、匙、ゼノヴィア、子猫と近接戦闘がメインのもの達。

フレイヤのグループは教師としてフレイヤ、アンで生徒はリアスさん、ミリア、朱乃、アーシア、ギヤスパーと魔法や支援をメインとする者達だ。

デイスさんだが手が足りてない方に随時出張する予定だ。

そして修行開始となるわけだが始める前にやることがある。

まずひとつ目だが

「ゼノヴィア、ちょっとこちらに来い。」

呼ばれたゼノヴィアが何事か？と首を傾げながらこちらに来る。

「約束の物が出来たので今渡そうと思う。」

「本当か！？」

ゼノヴィアとの約束、それは「聖剣を作る」だ。

俺の場合頭で考えるだけなのだがそれでも些か時間がかかった。

正確には構想を練るのに時間がかかったのだ。
そしてやっと完成したのがこの

「聖剣、『デルフリンガー』だ。」

飾りの無い無骨な片刃の長刀である。
だがその性能と特徴はゼノヴィアのようなタイプには格別の剣である
と言える。

ただひとつ面倒なものもついたがな…

ゼノヴィアは剣を受け取り

「聖剣『デルフリンガー』……………」。

飾りの無い剣だけど、何ていうのかな。
美しいよ……。
機能美とでも言うのかな？」

そう言っつて剣を眺めているとアレが出てきた。

「嬉しいこと言っつてくれるじゃねえか！
姉ちゃんが俺っちの相棒か？
中々に良い使い手に巡り会えたようだな！」

「「「「喋った!?!」「「「「

全員が驚いている。
それはそうだ、何せ剣が喋るなど神や魔王でも見た者は少ないであ
ろうからな。

「とりあえずこの剣の話をする。」

まずこの剣の特徴だが成長することだ」

「成長？姿が変わるのかい？」

剣と言うことで祐斗が興味があるらしく聞いてきた。
ゼノヴィアも同じことを思ったらしく瞳が説明を求めていた。

「正確に言えば使い手に合わせて成長する剣だ。」

つまり強ければ強いほどこの剣は強くなり弱ければ弱いほど弱くなる。

要は力量測定器の役割もある剣だ。」

「強い弱いと言っていたけど具体的にはどう変わるのかな？」

ゼノヴィアが疑問に思ったのか具体的な説明を求めて聞いてきた。

「そのままの意味だ。」

聖剣としての機能全般、聖なるオーラや切れ味だな。

つまりこの剣で『デュランダル』と同じくらいのオーラを使えば『デュランダル』も完全に扱える証拠になる。

まあその成長と言う部分を強く想定して創造したせいか意思のある『インテリジェンス・ソード』になってしまったのだがな。」

俺の説明を聞いて皆成る程と納得したようだ。

「確かにこの剣は私に、いや剣士にとって最高の剣だ……。
ありがとう、大切にするよ。」

とゼノヴィアは下がるとしたが

「待て、まだ説明が終わってない」
と引き留めた。

「この機能だけでも十二分に凄いのにまだ何かあるのかい？」

「おいおい、相棒！俺っちを作ったのが誰だと思ってんだよ。
親父がそれだけの剣を作るのに時間をかける訳ねえだろ？」

親父とは俺のことだろうな。

まあデルフリンガーの言う通りなのだがな。

「先ほど話したのは特徴だ。

今から話すのは機能、性能の部分だ。

この剣は力を吸収する力がある。

流石に白龍皇程の力はないし直接切らないと吸収は出来ないがな。」

「……………随分と凶悪な能力だね。
どうしてそんな能力を？
私としては嬉しいけどね。」

「理由としては防御面の向上と『デュランダル』に関係している。防御に関しては説明はいらなと思うが『デュランダル』についてだがもつたいないからだ。」

「確かにデュランダルを使えないのはもつたいないけど上手く扱えないのだからしょうがないさ。」

ゼノヴィアが不甲斐なさそうに言うが

「そのための『力の吸収』だ。」

聖剣にも様々なオーラが存在するが『デュランダル』は格別だ。俺の龍化した姿でも傷つけることが出来るだろう。

この剣ならばその聖なるオーラすら吸収し力の分だけ性能にフィードバックする。

要は『デュランダル』が二本になるに等しい。

カモオートで最適化するから難なく扱える筈だ。」

「反則染みた剣だね……………。
ただひとつ疑問があるんだ。」

「何だ？」

「前々から考えていた使い方なんだけどオーラを剣に纏わせて疑似的にデュランダルを使えないかという方法なんだけど、それとどう違うのかな？」

ゼノヴィアもいろいろと考えていたようだがこの剣はその方法より
一歩先に行く。

「ゼノヴィアの考えた方法に近いがそのやり方だと一発放つのが限
度だろうか？」

切りつけても精々数回で霧散してしまう。

だが『デルフリンガー』なら纏うではなく吸収だ。

力が無くなるまでその効果が持続するしオーラを放つ際に調節も出
来る。

まあ使い勝手が大分良いと思うが？」

「本当かい？」

凄い能力だね……。

それにしてもフォウル、君は何故そこまで力について詳しいのかな
？」

「教師、いや、師匠が良かったからな。

それに俺の力は制御に失敗すれば下手をすると星が滅ぶ。

故に力の使い方は必須だし未だに完全に使いこなせていないから己
にロツクをかけているのだ。」

「成る程ね、納得したよ。

改めて礼を言うよ。ありがとう。」

礼を言ってきたが

「気にするな、家族だろ？」

と返した。するとゼノヴィアは顔を少し赤らめて

「う、うん／＼」

はは、慣れたつもりだけどやはり照れるね。

でも日本の諺にもあるだろ？

“親しき仲にも礼儀あり”だ。

何度でも言っさ、ありがとう」

ははは、ゼノヴィアはやはり頑固だな。

でもそこが彼女の良い所でもあるのだがな。

さて、次だな

「ギヤスパー、お前にも渡す物がある。」

「ぼぼぼぼぼ僕ですかああ!？」

そう、ギヤスパーだ。

こいつは力の制御が出来ない故にこのような性格になってしまった。
故に

「アーちゃんに頼んで送って貰った神器の力を抑えるネックレスだ。お前が日常的にこれをつけていれば神器が勝手に発動しなくなる。ついでに感覚を覚えられるだろうから常に修行になる訳だ。無くすなよ?」

「は、はい!」

「フォウル先輩、ありがとうございます!」

「とりあえずは以上だな。」

「では修行開始だ!」

三勢力会談直前グレモリー系悪魔+匙強化作戦始動だ。

*

「そらそら!どうした?」

「当たる所か掠りもしないぞ?」

「イツセーの連打を危なげ無くよけていく。」

「くっそ!な、んで!あ、たらな、いんだよお!

「匙!力を貯めるから時間稼ぎ頼む!」

「OK、おらあ！『黒い龍脈』！喰らえ！」
選手交代でイッセーが下がり匙が攻撃にはいるが

「ひよいつと」

それもかわす。

そしてかわした方向には

「のおおおおおお！トカゲのベロが引つ付いたあああああ！
おい匙い！どこ狙ってんだよ！

つーか力が貯まったそばからぬけるうううううう！」

イッセーがいて『黒い龍脈』の効果がイッセーに発動した。

「兵藤！直ぐに外す！

良し！

つーか何がトカゲのベロだ！ちゃんと『黒い龍脈』って言ってんだ
ろ！？

龍だよ！龍！」

直ぐに神器を解除するが何故か言い争いが始まった。

潮時か……………

「言い争う余裕がよくあるな。

そんなに余裕があるなら……………ぜえいつ！りゃあつ！」

近くにいた匙の懐に入り込み中段突きを叩き込む「ぐええ！」そし

て次の瞬間にはイツセーの目の前に足を上げた状態で現れ「ぐぺっ
！」振り落とした。

匙は後方にすっ飛びイツセーは地面に潰れたカエルのように這いつくばっている。

「さて、今の反省点はどこだ？」

二人が俺の前にやってきたので今の模擬戦の反省点を聞くが

「フオウルが強すぎる！」「ドラグニール様が強すぎます！」

二人揃って同じことを言う。

「アホオ！それは反省ではなく感想だ！
っーかお前らが弱いのだ！」

今くらいの俺の動きなら祐斗、子猫、ゼノヴィアもできるぞっ。」

俺の言葉を聞いて落ち込む二人。

「弱い……」「皆出来る……」「などと呟いている。

「はあ、落ち込む暇があれば考えろ！

まずはイッセー！」

「は、はい！」

突然の呼びかけに驚いている。

「お前はもう、全般的に駄目だ。」

いきなりのダメ出しに

「うおおおおい！」

俺が弱いのは分かってるけどそれ酷くねえ！？
匙よりは攻めてたと思いますか！？」

「ただ攻めればいいと言うわけではないわ！

お前は今まで何を子猫より教わった？

俺には武術はよく分からんがそれでもお前の重心がずれていたのも
力み過ぎていたのも分かったぞ？

当たらずなくイライラするのは分かるがそういつときこそ冷静になれ。

お前の力は基礎が高ければ高いほど強くなるのだからな。

まずは俺に触れるようになれ。」

「うううう、はいいいい。」

「次に匙い！」

「はははははいいいいいい！」

吃りすぎだ……

「そつびびるな、お前はある意味良くやった。」

匙は驚き目を見開く。
「イッサーより攻撃しなかったのに何故？」と。

「確かにお前はあまり攻めていなかったが攻めるタイミングが良かった。」

前に俺が言った『見極め』が未熟ながら出来ている。

「当たらないのは単純にお前の実力不足だ。」
「ただ、と付け加え

「お前の場合せの実力不足が致命的だ。」

だからお前には龍人魔法を教えようと思う。」

ここで異議を唱える者がいた。
またイツセーだ。

「ちよつと待てええええい！」

俺には教えてくれないのに何で匙は教えて貰えるのさ！

つーか匙に龍気はあんのか？」

匙も驚きながらもコクコクと頷いている。

「まずは匙についてだが匙に宿るのは何だ？」

「えっと、五大龍王の一角『黒邪の龍王』ヴリトラです。

あ

気がついたようだな。

「そうだ、仮にも龍王と呼ばれる存在を宿しているのだから大なり小なり龍気は存在する。」

「そ、それはわかったけど何で俺には教えてくれないんだ？」

「……………」
「ぷいっ

「うおおおおおい！」

顔をそらすなよ！

言いたいことあるならばつきり言えよおおおおお！」

言っただけの良いのだろうか？

多分傷つくと思うのだが……………

まあ本人が良いと言っただけだから構わないか。

「……………イッセー才能ないし、多分覚えられないから時間の無駄かなと。」

イッセーは愕然と膝をつき

「は、はは、俺魔術の才能ないから龍人魔法ならと思ったのに……………」

そんなイッセーを慰める為に俺は肩に手を置き

「ドンマイ」

と告げるが

「ちくしょおおおおおおおお！！」

部ちよぐええええええええ……………」

何やら騒ぎながらリアスさんに泣きつこうとしていたので襟首を掴んで止める。

「馬鹿者が！まだ修行は終わってない！

悲しむ暇があるなら己を鍛えろ！」

「うううう、鬼いいいいい！」気の毒だがしょうがない、才能ないからまずは肉弾戦に強くしなければ白龍皇に殺される。

まあ今は匙だな。

「さて、話がそれだが匙には初級の物を教える。

初級と言っても甘くみるな？威力だけなら中級墮天使くらい楽に燃やし尽くすぞ。」

俺の言葉に匙は表情を輝かせるが直ぐに沈んで

「……でも俺、魔術あまり得意じゃないんですよ？

それでも覚えられるんですか？」

「確かに魔術の才能はあまり無いだろうが龍人魔法はコツさえ掴めば難しい物ではない。

はつきり言ってしまうえば多少の龍気と集中力があれば初級なら出来るようになる。

ただそのコツを掴むのが大変だがな。

俺も独学では掴めなかったし。

まあ根性だ！流石に今日中には無理だろうから暇な時に俺の元に来て、教えてやる。」

これを聞いた匙は目に決意を宿らせ

「はい！よろしくお願いします！」

と力強く頭を下げた。

とそこでイツセーが聞いてきた

「なあ、根性とかでどうにかなるなら俺も出来ないのか？
根性だけは自信あるんだけど？」

イツセーの言うことももつともだ。

俺も最初はそれが理由で教えようと思ったのだが

「お前は集中力がもたないだろ？
絶対に途中でおっぱいを考える。」

「そんなことは！」

「ないのか？」

「……………考えます。」

「だからだ。」

まあ安心しろ。俺に模擬戦で触れるようになったら教えてやる。
今は体術に専念しろ。お前はそれで強くなれる。」

「はい！」

しゃあああああ！

匙い！組手しようぜ！

「応!!」

ふう、とりあえずこの二人はいいか。

暇な時にディースさんに見ていて貰えば問題ないだろう。

さて、祐斗、子猫、ゼノヴィアはどうなっているか………

スルトの方に目を向けるとスルトは俺の視線に気づき一旦訓練を止め俺に近づいてきた。

「スルトよ。そっちの様子はどうだ？」

「皆とても優秀ですね。特に木場は近い将来確実に頭角を表します。私が教える事があまりありませんでした。

ゼノヴィアも力の制御を身に付ければ基本的に問題ありませんね。

ただ子猫も十分に優秀なのですがあれが彼女の全てではないのですようつ？

非常に惜しいですが父上が何もおっしゃらないのなら何か理由があると思いましたが、何も言いませんでした。」

流石はスルトだ、良く見ている。

ちなみに今のスルトの姿だが力が半開放状態なので18歳位の見ただ。

肉体的にはこの位で完成していたらしくその凶悪な兵器も健在だ。

とと、話がそれたな。

「まあここにいる奴等は基本的に才能に恵まれているからな。教える方としては楽出来て良いだろ？」

「ふふ、確かにそうですね。」

どうします？一旦集めますか？」

そうだな、皆の話も聞きたい。

その旨をスルトに伝えると直ぐに集まってきた。

「さて、スルトはどうだった？」

祐斗から順に伝えてみる。」

「そうだね、一言で言うなら凄まじいだよ。」

その剣技もさることながら基本的な戦闘力の高さにも驚かされたよ。何よりあの炎の剣だ。

質量がないはずの炎が僕の聖魔剣と打ち合うなんて何事かと思ったよ。」

ほう、それは俺も初耳だな。

どういった物なのだろうか？

「スルトよ、説明してくれるか？」

「わかりました。」

この剣ですが魔剣とも聖剣とも呼ばれる『レーヴテイン』の原型になったものです。

正確にはこの剣とフレイヤの兄フレイの持つ剣ですが。「
なんと！あの終末の枝とも呼ばれる『レーヴテイン』の原型か！
しかしなるほど。」

伝承によればスルトは『レーヴテイン』の所持者であり世界に炎を振り撒くとされていた。

実際には『レーヴテイン』ではなくその原型だったわけだ。

「そしてこの剣ですが質量はあります。」

大気中のチリなどを集め圧縮し私の炎を練り込むことで出来るのがこの剣です。

私はこの剣を『ムスペルヘイム』と呼んでいます。

永年ムスペルヘイムにいたせいか炎の性質がそれと近くなったのでそう呼ぶようにしました。」

ムスペルヘイムの原初の炎、俺の力を宿す剣か。

つてことはスルトの一撃は俺と同等の可能性もあるわけだ。

……よく駒があれでたりたな……。

「説明ありがとうございます。」

成る程ね、だから僕の聖魔剣とも打ち合えた訳か。

それにしても世界を滅ぼすとも言われる剣の原型と打ち合えたなんて光栄だよ。」

「それほどに祐斗の聖魔剣も素晴らしいと言うことだ。

よし、次にゼノヴィアは何かあるか？」

「私の聞きたかったことは木場と概ね一緒だよ。

ただコレなんだけど……。」

そう言ってゼノヴィアは先ほど与えた『デルフリンガー』を取り出した。

「何か問題でもあったのか？」

「そうだぜ相棒！俺っちに何か文句があんのかよ！」

俺は少し疑問に、『デルフリンガー』は少々ふてくされて聞いた。

「いや、特に問題はないよ。」

ただ、とゼノヴィアは付け加え俺も忘れていた事を言った。

「……どうやって持ち運ぼうか？」

『デュランダル』と同じ方法でも良いんだけどせっかくだし常に持

ち運びたいんだ……………
まあ私のワガママなんだけど……………」

完全に忘れていた……………。
ゼノヴィアの気持ちは嬉しいがどうしようか……………。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

皆がどうしようか考えている中この沈黙を破ったのは他ならぬ『デルフリンガー』だった。

「別に難しいことじゃなくねーか？
俺っちに変化の魔術式を埋め込んで普段はアクセサリーにでもして持ち歩けば良いだろ？」

皆が驚き『デルフリンガー』を見た。
きつと皆同じことを考えただろう。

以外と頭が良いな、と。

「……………デルフは以外と柔軟な発想をするんだな。」

ゼノヴィアが大分オブラートに包んで皆の気持ちを代弁した。

「あつたばーよ！これからいろいろ相談に乗るぜ？」

遠回しにバカっぽいと言っているようなもののだが、『デルフリンガー』改めデルフは気を良くしたようだ。

「ははは。ああ、これからよろしく頼むよ。」

私も問題が解決したからもう良いよ。」

「では子猫は何かあるか？」

子猫は少しの間「ん〜」と考えてからスルトに言った。
この時子猫に癒されたのは俺だけでは無いだろう。

「……………基本的には祐斗先輩と同じです。」

ただあの技を教えてください。」

あの技？どんな技だ？

「ああ、あれだね。
僕の聖魔剣を拳で叩き折った奴」

祐斗の言葉に頷く子猫。

ゼノヴィアも苦笑しながら「あれは凶悪だね」と頷いている。

スルトは不思議そうに返事を返した。

「あれは簡単な技だぞ？」

ただ拳に魔力を籠めて放っただけだ。

この前みたハ ター×ハ ターの筋肉達磨が使っていた技なんだが
確か『ビッグバン・インパクト』だったか？」

まさかアニメの技をぶっつけ本番でやるとは……………

流石俺の娘だ！

しかし祐斗がアニメの技で自分の剣を折られたことに落ち込んでいた。

仕方ないことだ。

何せスルトは最強クラスの猛者なのだから。

しかしこのままにしておくのも可哀想なので慰める為に俺は祐斗の肩に手を置き

「祐斗、ドンマイ」と言ったのだが

「……なんだろうね。」

「イツセー君の気持ちが良く分かるよ。」
と余計に落ち込んでしまった。

むう、何故だ？

まあいいか

とりあえず子猫だな。

つか子猫が無表情ながら目を輝かせている。

「子猫、まさかお前……。」

「……はい、私ハター×ハター好きです。」

私にも使えるでしょうか？

俺と子猫の目が合う。そして

「同志よー」「……同志です。」

俺等は固く握手をかわした。

何故か子猫とはアニメの趣味が良く合うな。

まあ良い。とにかくあの技な。

「たぶんスルトより威力は劣るが子猫も使えるぞ？」

ちなみに前に教えた『スターライト・ブレイカー』はどれくらいで撃てる？」

あれによつてはスルトの『ビッグバン・インパクト』を超えるのも可能なのだが。

「……だいたい10分位です。」

まだ戦闘で使えるほどではないので先ほどの技を身に付けたいのですが……。」

「なるほど、確かにな。」

ではスルト、子猫に教えてやってくれ。

基本的なことは既に教えてあるからコツだけで使えるようになるだろう。」

ドラゴン波を教えたのがこんな所で役に立つとはな。

「わかりました。」

では子猫、あちらで教える。
ついて来い。」

スルトが歩き出すと子猫はそれについて行った。
歩き方が若干浮わついていることから余程嬉しいらしい。

……やばいなあ、子猫持ち帰りたい。

駄目かなあ。駄目だよなあ。

今度リアスさんに聞いてみよう。

「では子猫はスルトに教わるとして祐斗とゼノヴィアだが正直教えることがなくなってきたのでとりあえずは模擬戦だな。

相手は俺がする。

かかって来い！」

こうして修行の1日は過ぎて行ったのだった。

ちなみにフレイヤのグループだが。

「皆優秀だから教えるのが楽よね。」

アンちゃん、次は何教えようか？」

「そうだね、さっきはフレイヤさんの攻撃魔法だったから次は私の防御魔法でも教えようか。」

順調すぎる程に順調だった。

ちょっと羨ましいと思ったのは内緒だ。

会談直前、眷属強化作戦（後書き）

どうでした？

新しい聖剣を考えるのに悩んだ結果『デルフリンガー』になりました。

デルフも一応伝説の剣だし良いよね？

ちなみにスルトの剣ですが実際の北欧神話では『レーヴテイン』がそうだとも言われていますがフレイヤの兄フレイが持つ剣がそうだとも言われていたのでこの作品では原型という形をとらせて貰いました。

炎の剣と共通する部分もありスルトはムスペルヘイムの門番をしている巨人なので原型の剣でムスペルヘイムの炎を宿す剣『ムスペルヘイム』と名づけました。

さて、次回はいよいよ三勢力会談です。

フオウルをどう絡ませようかなあゝ

三勢力会談（前書き）

はい、投稿です。

テロまで一気に書くつもりかと思ったのですがぐだりそうだったので別
けました。

ちなみにこの四巻あたりのお話ですが時系列を多少いじっております。
ます。

すみませんちょっと言つの遅かったですね。

三勢力会談

三勢力会談

それは悪魔、墮天使、天使の今まで争い合っていた三勢力が手を結ぶ為に開いた会談。

今この場には各勢力のトップが揃い話し合いが行われている。

前回のコカビエル襲撃の件の関係者としてリアスさんにその眷属（ギヤスパーを除く）、そしてミリアに俺がこの場にいた。

本来ならばミリアの眷属であるディースさんもいるべきなのだが本人曰く

「つまんなさそう」

と言うことで欠席している。

正直俺も出たく無かったのだがサーゼクスに是非ともと言う理由で出席させられた。

流石に俺の眷属まで集めてしまうとももの凄い人数になってしまっためあいつらは家でお留守番だ。

と言うか俺の眷属は元とはいえ北欧勢力のトップが集まったようなメンバーだ。

今は違うとはいえ対外的には四勢力になってしまい関係のない北欧も交えた会談に見えてしまうので余計なトラブルを回避するためもある。

それはそうとイツセーがミカエルより聖剣にして龍殺しの剣『アスカロン』を貰ったらしい。

龍殺しの剣はどの程度まで殺せるのだろうか？

っーか龍殺しって何かムカツクな。

その概念を与えた存在を見つけたら丹念に殺してやろう。

まあともかく弱いイツセーには丁度良い武器だな。

聖剣でもあり龍殺しでもある『アスカロン』ならば天使を除く存在にはほぼ弱点になる。

今度試しに斬られてみるか？

あっ、でもヤバイか？

今の俺は悪魔で龍だから大ダメージだろ。

うむ、止めておこう。

べ、別に怖いわけじゃないからねっ！

……自分でやって何だがキモいな……。

はあ、早く終わらないだろうか。

「あゝあ、おっぱい揉みたい」

「
.....」
「
.....」
「
.....」
「
.....」

む？皆が俺を見ているな。

俺何かしたか？

ただぼくとしていただけかと思うが？

そこで隣に座っていたミリアが教えてくれた。

「.....フォウル、声に出てましたよ？

その、おっぱいがどうこうとか.....」

え？マジ？

俺が周りを見渡すと皆が頷いた。

そしてミカエルが俺に言う。

「霸王龍殿？

貴方は世界がどうなっても良いのですか？
仮にもこの星の守護者なのでしょう？」

いくら会談がほぼ終わりの状態だったとしても少しは真面目に取り組んで頂きたいのですが。」

ふむ、ミカエルの言うことももつとも聞こえはするが少々勘違いしているようだな。

「別に俺はこの会談が成功してもしなくともどちらでも良いのだが？

俺が護るものはこの星と俺にとって大切なものだ。

たかが一勢力のトップが頭に乗るな。

お前ら天使ごときがこの星の命運を握っていると勘違いして貰っては困る。」

俺のこの発言に悪魔勢は冷や汗をかき堕天使勢は笑いを堪えているようだ。

「はははははははははは！！フーちゃんナイス！

ミカエルの野郎言われてやがるな！

流星は霸王龍殿、言うことがちげえ！」

「くっ！くくくく、霸王龍殿は豪胆だな。

天使のトップにそこまで言えるのはこの世界でも何人いることやら」

めっさ笑ってらっしゃいました。

「し、しかし！私達が争えば世界が崩壊する恐れがあるのですよ！？」

ミカエルがまだ吠える。

「ミカエル、お前は怎樣だ？」

はっきり言っでやる。

神が、魔王が、天使がいなくとも世界はまわる。

この星が有る限り世界が終わることはない。

それに……」

一旦言葉をとめ周囲の視線を全て俺に集める。

「……………そして、何ですか？」

ミカエルの問いにこう答えた。

「世界の滅亡が迫る時、俺は我に、『霸王龍』となりこの世界を我が覇によって治めてやる。」

「そ、その様なことが可能だと思っているのですか！？我等が神ですらその様なことは出来ないのですよ！？」

ミカエルはまだ分かっていないらしいな。
悪魔勢は相変わらず冷や汗ダラダラだし墮天使勢は腹を抱えて

「や、やめる！し、死ぬうううう！

ミカエル、の、こんなところ、は、初めて見た！」

アーちゃんが死にかけていた。

しかしミカエルがうざくなってきたな。

「神様至上主義も大概にしる？
俺が神に劣るとそう言うのか？

馬鹿も休み休み言え！

その神を作ったのは何だ？この星だ！

そして俺はこの星の片割れ、半身だぞ？

いくら生前より力が落ちたとは言えお前らの神ごとときと一緒にする
な！」

流石に今の言葉に皆が驚いていた。

先ほどまで爆笑していたアーちゃんですら「それは言い過ぎじゃね
？」とか言っている。

むうう、普段馬鹿やっている弊害がここで現れるとはな。

皆俺の力を嘗めているのか？

ミリアなんか俺の力を知っている分気が気じゃないようでオロオロしている。

はあああ、ミリアに癒される。

何故ミリアは俺をここまで魅了するのだ？

とりあえずこの空気を何とかせねばな。

「……そんなに俺が信じられないのならドライグとアルビオンに聞け。」

その言葉に皆の視線がイツセーとヴァーリ（白のこと、さっき知った）に集まる。

そしてドライグが皆に聞こえるように答えた。

「……父の言っていることは事実だ。」

はっきり言おうか。

父が本気になれば父以外、それこそ俺やそのアルビオンを含めた全ての存在が闘えばまず父以外が滅び世界は始まりに戻る。

そもそも俺達龍や巨人、龍人は父と母を崇拜している者が多い。

その様なことが起きれば今上げた3種族は間違えなく父の味方をするだろうよ。」

ドライグの言葉に乗る様にアルビオンも話し出す。

「ドライグに賛同するのは癪だがその通りだ。

龍神と評される二大龍神すらもが父と争うことは望まないだろう。

神の龍すら超える龍の王、それが我等が父『霸王龍』だ。」

二天龍の言葉を聞き皆の反応は様々だ。

まずグレモリー系眷属だが「そこまで凄いのには教わってたの？あのおっぱい言ってるのが？」みたいな表情だ。

「つか俺に憧れてるとか言ってた奴等はどこのどいつだ？

お前らだろうに！

そしてサーゼクスだが目の輝きが半端ない。

先ほどまでの冷や汗は何処に消えた？

そしてアーちゃんだが

「うおおおお！早くフーちゃんの神器を調べてえええ！

こんな話聞いたら余計に興味がでてきたあああああ！」

アーちゃんはアーちゃんだった。

ミカエルはまだどこか納得していない様な表情だが理解はしたらしい。

セラフォルーさん（居ました）とヴァーリはよくわからん。

そして俺とミリアだが

「ううう、ぐす、ミリア、あのドライグが、ドライグがあああああ」

「ええ、まさかあのドライグがぐすっ」

泣いていた。

皆も俺とミリアに気がついたらしく注目していた。

「お前ら何で泣いてんの？」

代表でアーちゃんが聞いてきた。

「だって、あ、あのドライグが俺と、ミリア、をぐす、崇拜してるって、俺の味方するって、か、感動して……うわああああん！」

「あの、素直じゃないドライグがぐす、私達を、こんな風に言ってくれたのが、嬉しくて、うううううううううう」

これを聞いたドライグは

「ぐっ！こんなこと恥ずかしくて普段から言えるか！

っ！か泣くな！俺が親不孝のようではないか！

おい！笑うな！ぬがああああああああああ！！！」

場の空気は違う意味で一転した。

先ほどまでのぎすぎすしたものから微笑ましいものへと。

そして皆が口々に

「赤龍帝はツンデレ」

「ツンデレね」

「ツンデレだな」

「ツンデレですわね」

「ぎゃあああああああああ！」「めんなさあああああああ
い！」

イツセーに襲いかかった。

そして次の瞬間

「え？」

世界が動きを停めたのだった。

三勢力会談（後書き）

私の小説ではドライブはツンデレです！

キャラ設定2 (前書き)

フォウルの眷属です。

キャラ設定2

フレイヤ

身長170 スリーサイズ110 / 55 / 90

元北欧の大女神でフォウル曰く今まで見たこの無い大きさの爆弾おっぱいの持ち主。

面白そうで満足できるエッチ相手と言うことでフォウルの眷属となる。駒は『女王』

容姿は作中の女神ミアと似ていて目を猫っぽくした感じ。

性格は、自由奔放でエロ大好き。
女版フォウルと言った所。

好きなこと、もの

フォウル、エッチ、楽しいこと。

嫌いなこと、もの

暇、退屈

戦闘力は全盛期のドライグに近い。

スルト

巨人時、体長13mほど

人間サイズ時

フルパワー

身長172 スリーサイズ94 / 56 / 86

省エネ時

身長150

スリーサイズ78 / 50 / 75

(力の開放度合いで成長する。)

フォウルの子供の一人

巨人族でその中でも強い力を誇る存在で神話ではラグナロクで神々に奇襲をかけ世界に炎を振り撒くとされた存在。

ムスペルヘイムの門番で長い間『霸王龍』の身体を護り続けていた。

その後フォウルの元に身を寄せるようになる。駒は『兵士』で8使
用した。

容姿は赤ポリのコーティカルテをまんま使用。

性格は真面目で両親大好き。

ただそれ以外には威厳のある態度をとる。

好きなもの、こと

両親、闘い、アニメ

嫌いなもの、こと

両親を侮辱する輩

戦闘力はドライグ並

アングルボダ

巨人時全長10mほど

人間サイズ時

身長153 スリーサイズ98 / 54 / 88

フォウルの子供の一人

巨人族の女でロキにより狼にされフェンリルの子供を産まされた。作中にはでてないがフェンリルは嫌っていてもその子供は愛している。

フォウルに助けられそれ以降フォウルの眷属となる。駒は『僧侶』

二つ分

容姿は女神ミリアの生き写し。

性格は優しく甘えん坊で鬪いを好まない。フォウルとミリアに一番なついていた。
どこかずれた性格をしている。

好きなこと、もの

両親、自分の子供、甘えること

嫌いなこと、もの

ロキ、フェンリル

戦闘力はタンニーンに勝てないまでも中々に良いところまではできる程度。

キャラ設定2(後書き)

いやゝみなさんナイスバディで
完全に私の趣味です。

『渦の団』（前書き）

……お久しぶりです。

いろいろ言いたいこともありますが先ずは読んで下さい。

『渦の団』

突然世界が停止した。

この感じはギヤスパアの『停止世界の邪眼』だな……。

力あるものは直ぐに復活したがミリアと眷属悪魔達は停止したままだ。

そして俺だが

「ぬおおおおおおおお！」

体が、体が動かん！」

体だけ停まっていた。

「……………何でそんな中途半端に停まっているんだい？」

サーゼクスが若干呆れた様に聞いてくる。

他のミカエル、アーちゃん、セラフォルーさん、リアスさん、グレイファイアさん、ヴァーリすらも同じ様な表情だ。

「むぐぐぐ、どうやら先ほどのドライグの件で心に隙が出来ていたようだ。

そのせいで中途半端にかかってしまった！」

し、しかも精神に掛かる分も体に作用したようでもの凄く強固に……

……………」

「フオウル、貴方は凄いのかそうじゃないのかたまにわからなくなるわね……」

リアスさんの言葉に皆が同意を示した。

そしていつの間にかこの部屋に魔方陣が現れ、声が響いた。

「この作戦、霸王龍殿の存在が不確定要素でしたがこれは好都合ですね。」

「どうやら運は私達に傾いているようです。」

そこには露出の多いスリットの入った服を着た妖艶でおっぱいの大きな女がいた。

*

あの女、旧魔王レヴィアタンの血縁者でカテレア・レヴィアタンが現れてから話はトントン拍子で進んでいった。

何でもテロらしくこの学園は今攻撃を受けたらしい。

その鎮圧にヴァーリが出向いたが実はヴァーリも仲間だったようだ。奴の本名はヴァーリ・ルシファー、旧魔王の血縁者だったようだ。

そしてあの後復活したのがイツセー、祐斗、ゼノヴィアでイツセーはリアスさんとギヤスパーの救出に向かい成功してそのままヴァー

りと対峙している。

祐斗とゼノヴィアは雑魚退治に向かったが次から次へと沸いて出てくる相手に苦戦しているようだ。

サーゼクス達はこの学園に張っている結界の維持のために動けないようだ。

アーちゃんはカテレアとの戦闘を行っていた。

……正直替わって欲しい。

どうせアーちゃん殺すつもりなのだろう。

しかし俺には彼女を放って置くことが出来ない。

どうせならば……。

しかしまずはい！

ぬおおおおおおおお！！

あと、あと少しで解けるのにその少しが遠い！！！！！！！！！！

つーか奴等を何と言ったか？

確か『渦の団』……

オーフィスを頂点に動く組織……

オフィスよ……

お前は何を考えている？

もしお前が無闇に戦を始めようとするならば俺も始めなくてはいけなくなる。

お前の終わりを……。

オフィスよ、父に子殺しをさせるでないぞ………？

まあともかく今は！

「うおおおおおおおおおおおおおおお……！」

この戒めを解かなくてはなあああ！！
そしてパリーンと何かが割れるような音が響き俺を縛る物は完全に
なくなった。

「フオウル、行くのかい？」

サーゼクスが問いかけてきた。

「ああ、結界は任せた。」

俺はこの下らない戦いを終わらせよう。」

俺の言葉を聞いたサーゼクスが安心したような、それでいてすがりような表情で

「そうか、ではお願いしようか。」

それとカテレアのこと、頼んでも良いかい？

彼女は望まないかもしれないが私は彼女達旧魔王派にもこの世界で生きて欲しい。」

甘い、とても甘い考え。

だが俺はその甘い考えは嫌いではない。

「安心しろ、カテレアは俺の物にする。
どちらにせよ殺させはしない。」

「なら安心だね。」

君に護られるんだ。誰も彼女を殺せはしないな。

それにしても君も好きだね。

敵であろうと君には関係ないのかな？」

サーゼクスは笑いながら冗談のゆうに聞いてきた。

俺はそれに先ほど見たカテレアを思い浮かべながら答えた。

「なに、孤独な者は放って置けないだけだ。」

どうせ孤独ならば俺の物にしても構わないだろ？」

サーゼクスにも思い当たるふちがあったのか何処か納得した様な表情を浮かべた。

そろそろ行くでしょう。

「では行ってくる。」

さあ、この戦の終わりを始めようか！」

俺は部屋からとびだした。

S i d e o u t

カテレアSide

あの日私は全てを失いました。

魔王、新体制の者たちは旧魔王などと呼びますが彼等が亡くなったのが始まりでした。

多くの同胞が亡くなり、私は家族すら失いました。

私に残されたのはカテレア・レヴィアタンという名前だけ。

このレヴィアタンの名を誇りにこの疲弊した悪魔社会を立て直そうと、そう決意した矢先に新体制の老害どもは魔王の名を称号扱いしようと言い出したのです。

許せなかった……。

しかし民はそれを望んでしまった。

力のある者の下で社会を立て直すことを。

王は民を思い護るもの。

民なくして国は成り立たない。

ならばと私は実力で魔王になると決意しました。

しかし私の実力が及ばずその座はセラフォールの物になってしまった。

セラフォールが悪い訳では無いことは分かっていました。しかし

悔しかった、レヴィアタンの名を護れなかったことが。

悲しかった、レヴィアタンの名を奪われたことが。

何故私はたくさんものを失って更には家名まで失わなければならなかったのでしょうか？

皆、皆いなくなってしまったのに。

お父様もお母様も、お爺様もお婆様も！叔父様もおば様も！！皆、皆、皆皆皆皆皆！！！！

皆いなくなってしまった！

そして私と家族の最後の繋がりであるこの『レヴィアタン』の名すら私から奪おうとする！

.....壊れてしまえばいい。

こんな社会、壊れてしまえばいいのです!!

そして私は私と意思を共にする同志達と『渦の団』に身を寄せていました。

王の血族としてはテロリスト集団に属するのは抵抗がありました。新たな秩序のために、私は耐え続けました。

しかし私の心はいつも空虚でした。

時には同志達と慰め合うこともありましたが満たされることはありませんでした。

いくら仲間がいようと大切な者がいない私は孤独だった。

誰も私自身を見てくれない。

私を見てくれた人達はもういない。

そう、私は寂しかったのです。

魔王になり民を導きたかったのも嘘ではない。

名を名乗れない悔しさも嘘ではない。

名を奪われた悲しみも嘘ではない。

でもそれ以上に寂しかった。

今思えば私が全て失った時、助けを求めれば手を差し出してくれる者もいたでしょう。

今の魔王達は皆、優しい人達でしたから。

でももう遅い。

私の顔は嘘で塗り潰されてしまっていて誰も本当の私を知らないのですから。

そして今、私は最後を迎えようとしています。

堕天使の総督アザゼル。

彼の腕を奪うのには成功しましたが結局そこまで。

彼の凶刃が私に迫まりこの身を貫くのは後どれくらいでしょうか。

私はその時が来るのを目を閉じ待っていました。

しかし体に痛みは何時まで経ってもありません。

あったのは強大な衝撃波と何かがぶつかる音のみ。

怪訝に思い目を開けるとそこには龍がいました。

薄燈色の身体にスマートなフォーム。

それに反して腕は巨大。

その籠手のような手は地面に着くほど大きく肘から先は盾の様に肩まで伸びています。

籠手の様な手の中央には宝玉の様なものが埋まっっていてその腕を飾りたてているがただの飾りなわけがないと本能が告げました。

そしてその腕の存在は全てを葬り、全てを護るイメージを沸かせま

す。

頭に生える3本の角。

2本は動物の耳のように生えていて短く前に向かって太い。もう1本は頭の延長のように大きい。

後頭部にあるその角はまるで1本のランスのように頑強でした。

そして何より背に広がる一对の大きな翼。

空の王者の証。

全てが合わさった存在が目の前にあります。

私は直感で理解しました。

これが始まりの龍『霸王龍』であると。

何故彼が私を護ったのかはわかりません。

何が目的なのかもわかりません。

気づけば私は口を開いていました。

「何故………?」

と。

それに彼はこう応えたのです。

「何故、か。」

「孤独な者は放つて置けないだけだ。」

と。

彼は嘘で塗り固まった私ではなく本当の私を見てくれた。

そして

「汝、我の物になれ。」

もう孤独である必要はない。

虚像を演じる必要もない。

汝は汝として我の傍にいる。

まあ、汝一人を愛することは出来ないがな。」

最後の一言は冗談のようでしたが、言外に他にも愛する者がいると言っているようなものです。

しかし私は気にならなかった。

あの日以来初めてでした。

本当の私を見てくれた方は。

そして私は久しぶりに、本当に久しぶりに嬉しくて涙を流したので
す。

カテレア side out

我は龍の姿でアーちゃんの一撃を受け止めていた。

後ろではカテレアが涙を流したたずんでいる。

アーちゃんだが

「フーちゃんよお、おめえ本気か？

そいつは『渦の団』の………」

と我に問いかけてきた。

だが我の答えは決まっている。

「ああ、カテレアは我が貰い受ける。

文句はあるまい？」

ほんの少し威圧する。

アーちゃんは何やら呆れたのか脱力して

「はああ、俺は腕を無くしたつてのによお。
割に合わねえぜ。」

あーあゝ、やる気無くしちまったよ！

好きにしるっ！
たくよお〜。」

悪態をつきながら下がって行くアーちゃんを見送り、その後、私の後ろで何をするでもなく佇み涙を流すカテレアに声を掛けた。

「……汝を我のものにすると言ったが如何にする？」

拒否した場合、今回は見逃す。

しかし同じことを繰り返すようであるならば残念ではあるがカテレアを殺す必要がある。

だが、多分ではあるが

「……そ、そのお話、お受けぐす、してもよろ、しいのですか？」

私、は、ぐす、『渦の団』に身を、置く者、ですよ？」

嗚咽をもらしながらもカテレアは我に質問をしてくる。

しかしそんなことは初めから分かっていることだ。

分かっているこの様な話をしているのだから当然

「汝が何処に所属していたとしても関係がない。

我は汝を放つて置けなかった。
そして汝を欲しいと思った。
我の理由はそれだけで十分だ。」

カテレアが泣きながら、驚きながら、そして嬉しそうな表情をした。彼女がどのような感情を抱いているのかは詳しくは分からないが悪くはないと思う。

そして、大分落ち着き泣き止んだカテレアは

「あの、申し訳ありませんが少々時間を頂いてもよろしいでしょうか？

貴方のお話を受けたいと思う私がいいます。

いますが最後まで魔王レヴィアタンの血縁者として生きて死にたいと思う私もいるのです。

前者を選べば私は貴方の為に生きます。

後者なら貴方が私を殺して下さい。

ご迷惑をお掛けするのは分かっていますが、どうせ死ぬのなら貴方に殺されたい。」

「分かった、気は進まぬが汝の望む様にしよう。

では汝が答えを出すまでの間にこの戦を終わらせてくるとしようつ
つつつつつつつつ！！！！！！」

言い終わる前に我は上空に強大な存在を感じて空を見上げた。

この存在感、我と近い力を感じる……。

全盛期の我ならばともかく未だに全力を制御出来ない我ではこやつ
の相手は少々厳しいかもしれん。

負けはしないだろうが勝てもしないだろう。

多分であるがこやつは……………。

「カテレアよ。

少々用事ができた。汝はここで待っていてくれ。

他の者が手を出せぬよう結界を張るゆえあまり動き回らぬようにな

」

我はカテレアにそう告げ

「わかりました。

貴方が戻るまでここから動きません。

何があるのかは私にはわかりませんがお気をつけて下さい。」

カテレアの返事を聞き我は直ぐに上空に飛び立った。

*

強大な存在の気配を感じる場所に着くとそこには黒い服に身を包んだ少女がいた。

昔より若い姿をとっているが見間違う訳がない。

オフィス……………。

まさかここにオフィスが来るとはな。

我がオフィスの姿に呆然としていたりやつが話しかけてきた。

「父、久しぶり。昔と同じ姿で何より。」

それにしても弱くなった？父の今の力が我とあまり変わらない。」

我の存在を喜んでいるのか悲しんでいるのかよく分からないな。

我としてもオフィスに会い、喜びを感じ、やつが何をしたいのかに疑問を感じている。

「別に弱くなつた訳ではないぞ？

力が制御出来てないだけだ。

能力だけならば生前を超えたのではないか？

それより汝も変わったな。昔はあまり物事に興味を示さなかった汝が『渦の団』の頂点に立ち、この様なテロに姿を現すなどしなかったであろう?」

素直な感想を伝えるとオフィスが答える。

「別に『渦の団』の頂点に立つたつもりはない。我の目的と奴等の利害が一致したから力を貸しただけ。

今日は父に会いにきた。確かに我は何かに囚われはしないが、父と母は別。」

そう言つてオフィスは我に近づき私の首に抱きついた。

「やはり父は落ち着く……………」。
まるで狭間に居るよう。」

オフィスの言葉はある意味正確だ。

我はこの星の片割れ、この星であり、星とは独立した存在。故に我の存在に狭間を重ねるのは当然だ。狭間であろうとこの星に変わりはないのだから。

しばらくするとオフィスは我から離れ

「今日はこの辺にしておく。」

このままだと我は父から離れたなくなる。」

「我としては娘に甘えられて嬉しいのだがな。」

「……………我を娘と、女扱いするのは父と母、後はグレートレッドくらい。」

女扱いされたくば何故オフィスは男の姿をとっていたのだろうか？

オフィスは私の疑問に気がついたようでそれに答えてくれた。

「……………昔本来の人型で歩いていたら神族魔族にしつこく声をかけられた。」

鬱陶しいから男になった。

今は皆、私の力を知っているせいかそういうのがなくなったから元に戻した。

少し若いのは何となく。」

私の知らぬ所でそんなことがあったとはな。
と言っか鬱陶しいと言っことは

「汝は男に興味は無いのか？

女ならば己の子が欲しいなどあるであろう？。」

「男は父以外興味は無い。
子も同じ、父以外の子はいらない。」

弱いのに興味はない。

グレートレッドは私の場所を取ったから嫌いだ。」

私は娘から告白されたのか？

何故かこんなのが多くないか？

龍故に力を求めるのは仕方がないがまさか我を求めるとはな……………

「ならば我とくるか？」

「行かない。私は私の目的を果たす。」

先ほどから目的があるようだが……

「汝の目的とは何だ？」

「私は再び静寂を手にする。」

静寂とは狭間に戻りたいと言うことか？

しかし今のオフィスではそれは許されない。

昔より歪んでしまったオフィスでは狭間にどのような影響を与えるか分からないからな。

「そして今も一つひとつ増えた」

む？今？今と言うことはまさか我のことか？

「父の子を育てる。だから父を連れて行く。

父にはついていけない。

連れて行くから」

「……………本気か？

オーフィスが子が欲しいのならいくらでも相手になるが、我は連れて行かれる気はないぞ。」

「嫌だ、父と一緒に落ち着く。

母も一緒だとなお良い。

父が来れば母も来る。

3人で狭間で暮らせば我は幸せ。

だから連れて行く！」

オーフィスから力が溢れてきた。

恐らく力ずくでも連れて行くつもりなのだろうが……………

「オーフィスよ、落ち着け。」

俺は龍化を解き人型になりオフィスを胸に抱き頭を撫でる。

「……………父、それは狡い。」

ずっとこうしていたくなる／＼／

ぎゅっとオフィスは俺に抱き着き後は成すがままにされていた。

しばらく頭を撫で続けているとオフィスは俺から離れ

「今日は帰る、我は満足した。」

でも父を連れて行くのは諦めてない。

いつか父と母を連れて狭間に行く。」

「そうか、俺は行く気はないがここには何時でも来い。」

暴れないのなら歓迎するぞ。」

「分かった。」

そう言ってオフィスは去って行った。

それにしても俺の娘達は何故皆俺を求めのらるうか？

親として、男としては嬉しい限りだが。

まあ良い、予想外だったがオフィスにも会えたことだしそろそろ戻るとするか。

俺は学園に戻る為に急降下を始めた。

*

俺が学園に戻ると不思議な光景が広がっていた。

「これは部長の分！」バキィィ
「がはぁぁ！」

イッセーがヴァーリを圧倒していた。
どういうこと？

素直な感想である。
思わず目を擦ってしまつほど理解出来ない光景だ。

とりあえずカテレアの元に行ってみるとカテレアも驚きで固まってるようだ。

「……………カテレアよ、あれは何だ？」

俺の言葉に「はっ！」として説明をしてくれた。

「き、急に赤龍帝が強くなりました！」

ヴァーリが何か挑発をした後から赤龍帝の雰囲気が変わりヴァーリの物質を半分にする能力を見た後アザゼルの助言を聞いた直後に力が爆発的に上昇しました。」

半分にするか。

アルビオンの力は物質にも影響するのか。

「ちなみにアーちゃんは何と言ったかわかるか？」

するとカテレアは顔を赤らめて

「女性のむ、胸を半分にするとか何とか／＼／」

な・ん・だ・と！

おっばいを半分？

これは怒る。

イッセーなら当然怒る。

むしろ俺が怒る！！

……アルビオン。

いや、ヴァーリ……!

貴様は

「……………殺す!!!!!!!!!!」

俺の豹変に驚くカテレアを無視して俺は飛び出した。

そして何か言い合っているヴァーリとアルビオンに

「うらあああああああ!!!!」

「我目覚めるばふあああああ!!!!??」

蹴りつけた!

周りにいた者は突然の光景に唾然としている。

何故かイツセーがうんうんと頷いている。

どうやらイツセーは俺の行動の理由が分かっているらしい。
流石は我が友!

横合いからとは言え俺の一撃を弾くとはこいつは中々出来るようだ。

「お前は何だ？」

邪魔をするならばお前も殺すぞ……。」

少々殺気を込めて乱入者に問いかける。

「へっ、おつかねえなあ。

流石は霸王龍殿ってか？」

まあ良い、俺たちは美猴、鬪戦勝仏の力を受け継いだ妖怪だぜい。」
鬪戦勝仏、確か斉天大聖・孫悟空のことだったか？

孫悟空の力を受け継いだとなればそこそこ使えるであろうがまだ完全には扱いきれてはいないようだ。

美猴とやらの流れる気がまだまだ粗いことからそれは伺える。

ともかく俺がヴァーリを殺すのに美猴が邪魔なものには変わらない。

「……先ほども言ったことだが邪魔をするのならお前も殺すぞ。」

殺気を込め本気で殺す気で美猴に問いかける。

「くっ!？」

本当におっかねえぜい。

だが今ヴァーリを殺されるのは困るんでな!

伸びろ!如意棒!ー!うらああああ!ー!

美猴の武器、如意棒が奴の言葉通り伸び俺に向かって横薙ぎに振られた。

横薙ぎの一撃は中々の威力を有していて唯の横薙ぎであろうと並の者には必殺の一撃になるであろう。

しかし俺にはこの程度の一撃

「ふん、避けるまでもないわ。」

美猴の如意棒はぱしいと軽い音を立て俺の手に収まっている。

「はあ!?!今の結構全力でやったんだぜい!?!」

それを受け止めるとかどんだけ出鱈目なんだよっ!ー!

「あの程度受け止める位ならわけない。

っ!かこの世界にはたくさんいるだろ?」

「分かってるけど何か釈然としねえええええ!ー!」

ムキーーーー！と声をあげながら騒ぐ美猴に

「五月蠅いぞ？」

とりあえず黙っている！」

「うおっ!？」

綱引きで縄を引っ張る様に如意棒を引くと美猴が俺に向かって飛んで来る。

それに合わせて腕に力を込めて殴り飛ばそうとして

「D i v i d」

と声が響いた。
すると俺の力が半減し

「しゃああああ!!!!!」

これならいけるぜい!!!」

美猴が如意棒を掴んでいた俺の手を弾き勢いをそのままに殴りかかってきた。

だがいくら力を半減されようとお前程度では

「相手にならんわああああ!!!!!」

バキイイイイと音をたてぶつかり合う俺の拳と美猴の如意棒。

「ぐうう!！」

「のわあああ!！」

何とか押し勝つが今のは少々危なかった。

白龍皇の能力は中々にエグい、このまま半減され続ければ俺と言えどもかなり面倒だ。

まあ対処法は今ので分かったがどちらにせよ面倒なことには変わらない。

「くうううう!！」

なあヴァーリ!あれで本当に半減されてんのか?

お前に近づけたのは良いけど滅茶苦茶痛かったぞ!」

ぬ!美猴をヴァーリの方向に飛ばしてしまったか!

「……仕方がないだろう?

力を半減したとは言え、相手は霸王龍。

下手したら既に対処法を見つけられている。

ともかく今は去るぞ。

お前も俺を迎えに来たのだろう?」

「だな、こんなおつかないのからは逃げるに限るぜい！」

「逃がすか！！」

俺は半減した力を戻す為に力を込める。

ここでの白龍皇の対処法は簡単だ。
無くなつた分だけ力を込めれば良い。

白龍皇の能力は『相手の力を半減させる』だが相手の存在や潜在能力までを半減させるものではない。

相手の表層の力は半減されるが、まだ練られていない力は対象外と
言うわけだ。

故に先ほどと同程度まで力を練り上げ攻撃を仕掛ける。

「Divid」

しかしまたもや白龍皇の能力により力を半減され

「では霸王龍殿、俺たちはここで失礼する。」

「じゃあな！今度はもっと強くなってあんたに勝ってやるぜい！」
一歩及ばず逃げられてしまった。

どうも締まらない形でこのテロは終わりを告げたのだった。

*

テロが終わりを告げ今は会談の行われた場所に集まっている。

ギヤスパーにより動きを封じられていたメンバーも復活したが長い時間止められていた影響が皆眠りについてしまっている。

さて、何故今集まっているかだが

「ではカテレア。
君はどうする？」

「フォウルの元に行くか、残念だがここで死んで貰うか……」

サーゼクスという言葉で分かると思うがカテレアの今後についてだ。

皆、カテレアに生きて欲しいよな雰囲気伝わってくる。

唯一アーちゃんはどっちでも良さそうでも無くなった腕を撫でながら
あーでも無いこーでも無いとブツブツ呟いていた。

「……………私は、私はまだどうすれば良いのか分かりません……………。
霸王龍殿の元に行きたい。

でも魔王の血縁者としては今の悪魔社会は辛いものがある。

私は、私は！

う、ううううう！」

悩みに悩みまくっているようで未だに答えが見つかっていないらしい。

成る程、確かに前魔王の血縁者ならば今の民主主義の様な社会体制
は生きづらいのであろう。

しかしそこまで気にする必要があるのだろうか？

俺は今まで好きな様に生きてきたが特別不自由はなかったが？

「カテレア……………。」

君はそこまで今の悪魔社会が認められないのかい？

私達新魔王は今まで悪魔社会が良くなることを願い、現実になるよ
うに努力してきたつもりだ。

何が足りないのかな？

君の為にも今後の為にもどうか聞かせて欲しい。」

「そうよ、カテレアちゃん
私達頑張って来たんだから！」

カテレアちゃんも一緒に頑張りましょ？」

サーゼクスとセラフォルーさんが質問する。

何故だろうか……………

サーゼクスはふざけている所ばかり見ていたし、セラフォルーさん
はこの前の件のことがありどうも同一人物には見えない。

流石に仕事の際は真面目なのだろうが何故か納得できない。

普段の俺もおっぱいに全てを掛けているからたまに真面目になると
皆不思議そうな顔をするのだろうな……………。

……………いかな、何故か目から汗が出てきた。

自問自答をし、鬱になっているとカテレアが先ほどの質問に答えて
いた。

「貴方達は優秀です。

認めるのは少々癪ですが、私達よりも良き政治をしているでしょう。

あの戦争からここまで悪魔社会を立て直したのですからそれは十分

に証明出来ています。

しかし、私の心は納得出来ないので。

新たな指導者が生まれるのは構わないです。

しかし何故私達は家名を奪われるのですか？

私達の家名が称号になるのは確かに名誉なことです。

しかし生き残った者のことは考えたのですか？

家族を、家を、全てを失いさらには家名まで奪われた者の悲しみがその名前を奪った貴方達に分かるのですか！？」

感情を昂らせ、今にも掴み掛かろうとするカトレアを

「止める！落ち着けカトレア！」

羽交い締めにして押さえ込む。

「は、離して！私は！うわあああああああ！」

泣き出してしまったカトレアを見て皆悲痛な表情を浮かべている。またもやアーちゃんだけは無関心のようで自分の腕をどうするかで悩んでいるようだ。

今はまだしたくは無かったのだが仕方がない。

俺は一度離してから泣きじゃくるカテレアを「きゃあっ!?!?」
抱き上げた。

所謂お姫様抱っこと言う奴だ。

カテレアは騒ぐと思っていたが顔を赤らめボーっとしている。

何故かイツセーが羨ましそうに俺を見ていたが、どうせいつもの事
と無視することにした。

「サーゼクスよ、どうやらカテレアを少々落ち着ける必要がある。
悪いが俺はカテレアを連れて隣の部屋に行ってくるが問題ないか?」

799

「構わないよ。

むしろお願いする。カテレアを頼むよ?」

「ああ。

では失礼する。」

俺はカテレアを連れて部屋を出た。

S i d e o u t

イツセイSide

フオウルが旧魔王派のエロコスチューム姉ちゃん（確かカテレアさんだったか？）を連れて部屋から出て行った。

つーかフオウルちよおおおおおおおおお羨ましいんですけど!!!

何さらつとお姫様抱つことかしちゃってんの？

つーか今更だけどカテレアさんの選択肢にフオウルの元に行くって何それ!？

またか？またなのか!？

のおおおおおおおおおおお!

何故だ!何故フオウルには女が集まる？

俺と同じおっぱい好きなのに!!!

龍だからか?だけど俺だって龍だ!

俺に至ってはより詳細な情報を得る為に壁に耳をつけている。

何故かゼノヴィアも一緒なことをしていて口々に

「私だつてまだ少ないのに……」とか「どんな事をしているんだ？」
や「カテレア殿も落ちたな」と呟いている。

神よ……………

貴方は普段どの様な性活をしているのですか？

友人として、1個人としてひっじょおおおおおおおおおおお
おおにつ！気になります……………。

「あつ！駄目です！あ、あ、あああああ！！

す、凄い！こんなの、あん！初、初めてえええええ！」

たらり

ふふふ、流石だ。

部長達に鍛えられた俺が声だけで鼻血をだすとはな……………。

……………めっちゃ羨ましいわあ。

「ああん！そ、こは！？ち、違っ！
で、でもおおおお！」

そんな所まで！？

や、止めて、汚してしまいますっ！！！」

フオウルうううううううう！！

何処に手を出した！？

アソコか？それともアソコか？何処なんだこんちくしょおおおお
おおおお！！

俺はあまりの見たさに壁に指をグリグリ押し付け何とか穴を開けよ
うとしている。

だって見たいじゃん？

気になるじゃん？

俺の行動を見たゼノヴィアが同じ事をやり初めたけど

そっかあ、ゼノヴィアも気になるかあ。

今日も俺とゼノヴィアはエッチなことに興味津々です！！！！

俺達在必死に指をグリグリさせていると

「たく、落ち着け餓鬼共！」

堕天使の総督、アザゼルが俺達に話しかけてきた。

意識の半分以上をカテレアさんの艶声に傾けながらアザゼルに視線を送り

「邪魔するな!!」

俺とゼノヴィアがハモった。

「ちげえよ!

まずは落ち着け!

その状態じゃ後が持たないぜ?」

ま、まさかアザゼルは!

「覗きに行くぞ!

ついて来い!」

楽しそうに言うアザゼルに俺とゼノヴィアは

「はい!」

と近年稀に見ぬほどのしつかりした返事を返しつつ行って行った。

つーか皆着いてきた！

おい！ミカエルさんも来てるよ！
良いのか天使様！？

*

凄かった……………。

何がではなく全てが凄かった！

これは当分AV見れないわ、全部見劣りしちゃうって！

現に皆顔が真っ赤だ！

ミカエルさんなんて頭から煙がでて「おお、主よ。生物の営みとは
凄まじいのですね……………」と呟いている。

あれはフォウルが特別なんで皆あだとは思わないで下さい！

つーかゼノヴィアはともかく何でグレイフィアさんまであんなに羨
ましそうな顔をしているわけ？

は、はは、はははは、まさかね？

きつと違つよね？

誰か違つと言つてよ！

ご想像の通りです

うわあああああああああああ！
変な電波が肯定したあああああ！

くそ！何か文句を言つてやる！
嫉妬だつて分かつてるけど納得できるか！

俺はズカズカと音をたてながら扉に向かつて行くと俺が開くより先に扉が開いた。

今この部屋に入って来るつてことはフォウルしかないはず、なら早速八つ当たりだ！

「おい！フォ……………ウル？」

フォウルが先ほどと同じ様にカテレアさんをお姫様抱っこをして戻つてきた。

ただ先ほどとは違つ点がある。

まずはカテレアさんがすんごく良い笑顔だ。

ニーナ先生や朱乃さんみたいにニコニコしている。

そして次に先ほどは成すがままな状態だったのに今度は腕をフォウルの首に回し顔をフォウルの頬に擦り付けている。

先ほどまでとの態度の豹変に驚かされた。

何をしたかは分かってるけどこんなに変わっちまうのか？

じ〜と眺めているとカテレアさんが

「私、フォウル様のものになります！」

この身も心もフォウル様に捧げます！

もう貴方様から離れられない……………。
離れたくない！

こうなってしまったのはフォウル様のせいなんですよ？

だ・か・ら、責任、とって下さいね？」

と言ってフォウルにキスをしていた。

フォウル……………

お前はどこまで神なんだ……………？

ちよおおおおおおおおお羨ましいんですけどおおおおおおお
おおおおおおお！

その後だがカテレアさんは

「私は今日からカテレア・ドラグニールです！」
と言った。

しかしフォウルは

「ん？違つぞ。」

と否定しやがった！

こいつ！一回やったらもう要らないとでも言うつもりか！？
皆、と言っても学生組とカテレアさんだけだけど怪訝そうな顔をして
いる。

サーゼクス様達は何でそんな微笑ましいような顔ができるのだろうか？

カテレアさんはショックで震えつつも

「ど、どう言うことですか？

わ、わた、私はもう要らないのですか？」

と聞いた。

だが次のフォウルの言葉で全て勘違いだとわかった。

「そんな訳あるか！

違うと言ったのはお前の正式な名前がそれでは無いということだ！

お前は今日からカテレア・L・ドラグニールと名乗れ。

分かると思うがLとはレヴィアタンからとつてある。

大切な家族の繋がりなのだろ？

全てを捨てる必要はない。

流石にレヴィアタンを名乗らせてはやれないがこれくらいはな。」

カテレアさんは不安そうな顔から一転して笑顔になり

「はいつ!」

と今日一番の笑顔を見せたのだった。

『渦の団』（後書き）

如何でしたか？

自分的には大分ぐだっていたと思います。

今回はは四巻中ボスのカテレアさんを味方にしちゃいました。

後この小説のギャスパーの神器はパワーアップしてますのであしからず？

もうすぐ夏休み！霸王龍だって疲れるんだ！（前書き）

いろいろ妄想、ではなくインスピレーションがとまらない中、何とか話完成です。

今回は前回の後って感じですね。

もうすぐ夏休み！霸王龍だって疲れるんだ！

『渦の団』のテロ終決後、カテレアを我が家の家族に紹介するために連れて帰ろうと、まずはミリアを起こしに行く

「カテレア様!？」驚いたミリアと

「ミリアさん……」気まずそうなカテレアがいた。

どうやら二人は知り合いだったらしく
何でも社交界で知り合ったらしい。

ミリアはグレモリー家の次女ゆえ、カテレアは前魔王の血縁者ゆえに挨拶回りなどなく暇をしているときに会い時々手紙などの交流があったようだ。

ミリアに今までの経緯を説明すると、カテレアが『渦の団』の一員であったことに驚き、今では俺達の新たな家族であることに喜んだ。そんなミリアにカテレアは苦笑しながら

「ミリアさんは相変わらずですね」
と言ったのだった。

そして家に帰り皆にカテレアを紹介すると全員に歓迎され嬉し涙を流すカテレアの姿があった。

今まで長い時間、心を許せる家族がいなかったのだから大切にしていやらねばな。

それはそうと我が家（ビル？）に見慣れぬ部屋があった。

いつの間にか出来ていて家にいたフレイヤ達も気がつかなかったらしい。

この様なことをするのはグレモリー関係者ぐらいで、やったのは恐らくグレモリー家臣団の皆様だ。

あいつらに気づかせずに改装を行うとは相変わらず素晴らしく有能な方々だ。

とりあえず部屋に入ってみると何も無い部屋の中心に魔方陣が刻まれている。

魔方陣の紋章からしてグレモリーの召喚、転移のいずれかだろう。

詳しく解析してみるとやはり転移の魔方陣のようでは何処か行き来出来る様になっているようだ。

恐らくイツセーの家か部室だろうな。

危険は無さそうなので魔方陣に乗って魔力を注ぐと周囲が光りだし俺は転移した。

転移が終了した次の瞬間、何かが俺に突撃してきた。

艶やかな長い黒髪をポニーテールにしている女性、朱乃が抱きついて来たのだ。

避ける必要はないのでそのまま朱乃を抱き止めると朱乃は手を俺の背に回しギュッと俺を抱きしめた。

「フオウル君ようこそいらっしやいましたわ！
ここはイツセー君の家で今日から私はここで暮らすことになりました。」

ふふふ、私今凄く幸せよ？

何時でもイツセー君やフオウル君に会えるんですもの。」

本当に幸せそうに笑う朱乃。

そんな朱乃を優しく抱きしめながら頭を撫でるとまるで猫の様に擦

りよってきた。

猫好きな俺としては朱乃の行動はど真ん中ストライク。
先ほどまでのことは忘れ朱乃に夢中になっていた。

しばらく朱乃とじゃれていると

「部長おおお！何か知らない部屋があるんですけどおおおおお！」
と言う声と共にイツセーが部屋に入って来た。

俺と朱乃は今まで致してないにしてもじゃれついていたので端から
みれば最中にしか見えない。

部屋には沈黙が訪れ気まずい時間が流れた。

この空間に耐えられなかったのかイツセーは

「……………失礼しました〜」

部屋をでて行き

「部長おおおおおおおおお！」

部屋がフオウルで朱乃さんにいちやいちやあああああああああ
！？」

「イツセー！？まずは落ち着きなさい！」

何があったの!？」

外からギヤアギヤアと騒ぎ声が聞こえたのであった。

俺はとりあえずイツセーが落ち着くまで

「せいっ!」ズム

「ひゃん!？」

朱乃のおっぱいで遊ぶことにした。

*

しばらく遊んでいるとリアスさんとイツセーが部屋に入って来ていきなり説教されそしてこの魔方陣について説明を受けた。

どうやらイツセーの家もグレモリー家臣団のお力で我が家のようになり、どうせならと我が家と転移出来るようにしたらしい。

これにより朱乃は発狂しそうなほど喜び子猫も地味に喜んだそうだ。

朱乃は分かるとして子猫は何故だろうか？

修行がいつでもできるからか？

しかし最近小猫がやけになつている気がする。

以前から俺が頭を撫でると気持良さそうにしていたが最近は気がつけば膝に乗っている。

特に何かした覚えはないのだが……………
可愛いから良いか

ともかくこの日は説明を受け自宅に戻った。

自宅に戻ってから皆に先ほどの説明をすると無駄に有能なグレモリ一家臣団に皆畏怖と尊敬をしていた。

皆イツセーの家と繋がったことよりも自分達が気がつかぬ間に改装されていたことに驚いたようであった。

ただミリアとゼノヴィアはそれ以上に喜んでいた。

ミリアは何時でも姉であるリアスさんと会えることに

ゼノヴィアはこの家で暮らしているとは言え、リアスさんの眷属であるから集まる時に楽だという理由からだ。

俺としても仲間にすぐ会えるのは嬉しいので特に文句や不満は無かった。

ただ先ほど説明を受けた時に決めたことだが基本的に俺の家に来るときは連絡は要らないが、イツセーの家に行くときは一応連絡をいれることになっている。

あちらにはイツセーのご両親もいるし、ご両親は一般人ゆえ俺等の裏の顔は知らない。

認識操作によりあまり気にならないようになってきているようだが自宅にいきなり俺達がいれば驚くに決まっているから念のためこの様にしたのであった。

さて、今日はもう寝てしまいたい所ではあるがまだやることが残っている。

カテレアをどうするか、だ。

どうすると言っても眷属にするかしないかだ。

カテレアは俺に全てを捧げるとまで言ったが、未だに現悪魔体制には批判的だ。よって『悪魔の駒』による眷属化もあまり良い気はないらしい。

だが俺との確かな繋がりを欲しているようでどうするべきか悩んでいた。

これを解決したのは意外と言っては失礼だが快樂主義者のディースさんとフレイヤだった。

「あなたは難しく考えすぎだねえ。やりたい様にすれば良いのさ。

現在の悪魔体制が気に食わないようだけど、ことフォウルに置いては関係ないよ。

はつきり言っちゃえばフォウル、と言うかこの家の者だけでひとつの勢力とさえ言えるんだよ。

ゼノヴィアはリアスちゃんの眷属だから微妙な所だしまだまだ修行中だから外して置くし、ミリアちゃんだって将来有望だけど現在は新入上級悪魔の域をでない。

だけどそれ以外の面子は一人一人が各勢力のトップになれる器だしフォウルに至ってはこの子だけで幾つもの勢力を潰せる。

しかもフォウルを敵に回すことは龍族、巨人族、龍人族を敵に回すってことだよ？

まだその辺を理解してない馬鹿は沢山いるけどそんな奴に口出しする馬鹿はそうそういないだろう？

まあ何が言いたいかってことだけど、フォウルの眷属になったからって現在の体制に従う必要はないってことだよ。

形式上それっぽくはしてるけど、フォウルの領地はある意味独立してるからねえ。」

「そうそう。私なんて元は北欧の女神様よ？」

それを受け入れさせて文句を言わせないんだから問題ないわよ。

「ーか貴女面倒くさく考えすぎ！」

さっきディースが言ってたけどやりたい様にすれば良いの！

フォウルとの繋がりが欲しいんでしょ？

だったら眷属になりなさい！」

ディースさんとフレイヤの言葉に

「あの、話が少々ずれている気がするのですが……………？」

私は前魔王の血縁者として現体制が気に入らないのであって、その方法で眷属になるのが少々癪なだけです。」

とカテレアは自分の悩んでいる部分を明確に説明するがこの二人には意味をなさなかった。むしろ……………

「…だったら我慢しろ（しなさい）！」「と一蹴されてしまった。

確かに二人が言っていることは間違えてはいない。
だが考え方は人それぞれだ。俺としては無理に眷属にならなくても構わないのだが

「あ、あはは、何だがお二人の仰る通りな気がしてきました。」

見事に洗脳され始めているな……。

そして次のディースさんの言が決め手になった。

「カテレアちゃんはいろいろ悩んだみたいだけどねえ、あんたの誇りとフォウルとの繋がり、どっちが大切なのか考えてみなよ。
あたしなら断然フォウルを選ぶよ？」

この発言に他の者も同意しているようだ。カテレアも「あ」と少々間抜けな声を出したが自分の答えに行き着いたようだ。

………っーかディースさん？

随分さらっと言ったようだがすんごく恥ずかしいぞ？

いや、そう思われているのは嬉しい。嬉しいが恥ずかしいものは恥ずかしいのだ！

多分今の俺は顔が真っ赤であろう。

そんな俺に気がついたディースさんとフレイヤが近づいてきて俺の頬をつつき始めた！

ぐ、やめろ！つつくな！ニタニタ笑うなああ！

ううううう！お前らがその気なら……

「喰らえ！牙突 式2連撃！！」ズム、ズム

「ん／／」「やん／／」

俺の指が二人のおっぱいの頂上に君臨するスイッチを正確に押す。

ふはははは！俺にかかれば服を着ていようが関係ない！

突けば当たる！それがこの俺メイドガ……じゃない、霸王龍フォウル！

しかし俺の一撃はこの二人の別のスイッチも押ししてしまったようであつた。

「ふふふ、フォウル？その程度であたしがどうにかなると思つたのかい？

まだまだ甘いよ。

これからたっぷり教えてあげるから覚悟しな。」

いや、デイスさん？十分にどうにかなつてるでしょ？やる気まんまんではないか！？

「私も私も！私は十分効いちゃつた／／／

だ・か・ら、フォウル？責任とつてね／／／」

ですよねえ、フレイヤには効果抜群な上に活性化のスイッチでもあるんですよええ。

俺は二人に引き摺られていると

「フオウル様！私は貴方の眷属になります！
確かに私には前魔王の血縁者としての誇りがあります。しかしその
誇りは貴方が下さった名前の『L』に含まれています。
だから私は大丈夫です！」

力強い声。迷いのない決心した瞳。

カテレアは完全に吹っ切れたようだ。

「わかった。お前の思い確かに受け取った！
すまないが今はこん状態ゆえ明日、正式にカテレアを俺の眷属にす
る。」ずりずり 引き摺られている音

さて、これからこの二人の相手をしなくてはいけないから今日はこ
れで解散だな。

俺は皆にその旨を伝えようとして固まった。

カテレアさん？貴女はなぜ空中を舞っているのですか？
気のせいだと思いますが、ワタクシニオチテキテイマセンカ？

さあここで整理しようか。

俺は現在ディースさんとフレイヤに手を引っ張られ引き摺られてい
る。そりゃあもうズリズリと足から音が聞こえてくる位だ。

そして何故かカテレアがダイブして俺に落ちてきている。

こんな状態で受け止められる訳がない。

いくら俺でも痛いものは痛い。

故に次の様な状況になるのだ。

「えいつ！」 カテレアが飛び付いた。

「ぐばおおおおおおお！！！」 俺の悲鳴？

流石に人型では苦しい……………

俺は涙目になり咳き込みながらカテレアに

「い、いきなりダイブは不味いぞ？

そしてどうした？」

ちよっとした文句とダイブの理由を尋ねた。するとカテレアは

「明日なんて嫌です！今日して下さい！

どうせならフオウル様を感じながらが良いです／＼」

と、何とも可愛いことを言ってくれる。こんな事を言われたら男として拒否出来る訳がない。

俺はカテレアに了承の旨を伝えようとして口を開こうとして

「待って下さい！」

ミリアに遮られた。

うわあ〜、凄く嬉しくも嫌な予感がする〜……………

「3人だけ狡いです！私も行きます！」

やっぱりねえ〜。

ただこれだけでは終わらない気がするんだよなあ〜。

「そうだよお！皆狡いよ！私だってお父さんと一緒にいたいもん！」
アンよ、お前もか……………

「そうですね、私とて父上と閨を共に出来るのならそうしたいです。
」
スルト、父上は娘に愛されているようで幸せです。ただ今は少々大
変かな？

「むううう、私だってフォウルとの約束が果たされていないんだ。
私も行く！」
ゼノヴィアさ〜ん！そろそろヤバイツスウウウウ！

「あらあら、ならお母さんも一緒にちゃいますね？
一人仲間外れは寂しいですから。」

は、ははは、母さんまで。

「何か楽しそうな気配がしたので来てみれば……………」

ふふふ、フォウル君？勿論私も参加するわよ？」

余談ではあるがカテレアは希望どおりにしてやった。
駒は俺の神器により『変異の駒』となった『騎士』だ。
元々『王』クラスの实力を持っていたから『騎士』ひとつでは足り
なかつたのだ。

……俺の眷属は本来何個駒が必要なんだろうなあ。

まあ良いつか

*

翌日俺は昼過ぎ、と言っても殆ど放課後に学校に行った。
リアスさんが大事な話があるから俺に來いと連絡があつたので今更
ながら学校に向かつている。

ん？今まで何をしていたかつて？

……あれからずっとみんなの相手をしてたんだよ！
ミリア、母さん、デイスさん、ゼノヴィアを始めに抱いて寝かせ

たからこの四人は既に学校に来ているが俺はそうもいかず、つい先ほどまでずうううううううううううううううううううううううと！他の連中の相手をしていたんだ！朱乃は気づいたらいなくなっていたので頃合いを見て戻ったのだろう。

あ~~~~~ね~~~~む~~~~い~~~~！

体がだ~~~~る~~~~い~~~~！

ううううう、心なしかフラフラする。

ああああ、皆にいろいろ搾り取られたからか……………。

あれ~~~~？何かお花畑が見える~~~~。
うわあ~~~~い、蝶々だあ~~~~！

フォウルは疲れのあまり壊れています。

あはは、あははと笑いながら歩く俺は何処からどう見ても変態だ。しかし今の俺にはそんなことを気にする余裕はない！

はっきりに言って歩くだけで精一杯だ！

ふふふ、今ならそこらへんの子供にすら負けそうだ……。
疲れて壊れています。

お！ようやく学校に着いた！

あ！母さんが校門で待っていてくれる！

わあ~~~~い！母さんのおっぱい~~~~い！

壊れています。

俺は頼りない足取りで母さんまで走って行きそのまま抱きついた。
おっぱいに顔を埋めて！

「ふふふ、フオウルったらいきなりですね？」

いきなりでも良いのだあ~~~~！

おっぱいがあれば俺は闘える！（何と？）

それにしても母さんのおっぱいは落ち着く……………。

やはり母は偉大だ。

こうしてるだけで寝、む……………く……………く。

「あらあら、寝ちゃいましたか？

しょうがないですね。

とりあえず移動しますか。」

最後に聞こえたのは母さんのそんな声だった。

結局俺はこの日眠り続けリアスさんの話を聞かず気がつけば家のベッドで寝ていた。

又聞きになってしまったがリアスさんの話とはなんとアーちゃんがこの駒王学園の先生として赴任してきたと言ったことだった！

アーちゃんとしてもこの学園には興味の対象が多く、墮天使として総督自ら技術提供の一環としてやってきたらしい。

アーちゃんまで来たのだから今後はさらに退屈せずに過ごせそうでもうすぐ夏休みだし今年の夏は楽しくなりそうだ。

とりあえず今は寝よう。まだまだ疲れが取れていないようだしな。

っーか何故だろうか。寝たはずなのに全然休まった気がしない。

何故俺は裸なのだろうか？

何故下腹部が濡れているのだろうか？

何故……………。

俺は周りを見渡しあるモノを見つけた。

周りと言ってもソレは俺のすぐ脇にあった。と言っかいた。

長い金髪に整った容姿、どこか猫を思わせる瞳。

そして何より我が家においてもなお大きいと表現できるおっぱい！

満足そうに眠っているソレは何も着ていない。

さあ、皆様もお気づきであろう。

俺の疲れが取れない理由は

「フレイヤアアアアアアアア！お前かあああああああ！」

俺の怒声が家中に響き渡ったのだった。

もうすぐ夏休み！霸王龍だって疲れるんだ！（後書き）

どうでしたか？

次回は夏休み辺です！

イツセーが完全なバランスブレイカーになります！

黒歌はどの様になるのか！？

さて、次回に御期待！……………してくれと良いなあ。

グレモリー家へ！ドライグの過去（前書き）

ぐだぐだあです。

纏まりが悪いですがとりあえず読んでみて下さい！

グレモリー家へ！ドライブの過去

夏休み、それは学生にとって、とても楽しみにしているもの。

あるものは海に、あるものは山に。

人により家族だったり、友人だったり、恋人だったり様々ではあるが皆、身も心も開放的になる。

そして現在夏休みで俺が何をしているかと言うと

「シクシクシクシクシクシク」

泣いていた。

何故泣いているかというと

「フオウル様、次はこちらの書類をお願いします。それが終わったら次は

カテレアにより積み上げられていく書類。

これでわかったらどう。

そう、俺は今仕事に忙殺されていた。

この始まりはミリアが一度実家に帰ると言い出してからであった。

ならば一度ちゃんと挨拶をしなければと思いついて行くつもりだったが思わぬ妨害者がいた。

アン、スルト、カテレアだ。

この三名、特にアンとスルトは俺の領地の政務に精通している。カテレアに限って言えば俺の秘書（政務に詳しくだったので任命）だ。

この三名からすれば夏休みの間に貯まった書類を処理して欲しいとの事だった。

いくら代わりの者が普段の政務をこなしているとはいえ、俺が許可を出さなくては進まない物も沢山ある。

故に俺は

「シクシク」ペタン

「シクシク」ペタン

「シクシク」ペタン

「シクシク」……………。

「あの、フォウル様？」

手が止まっていますけどいかがなさいました？」

カテレアが怪訝そうに聞いてきた。
確かに俺の作業は止まっている。

しかしだ！もう何時間ぶっ続けだと思っっている！？

あえて時間で言っつてやる52時間だ！

2日と4時間休みなしだ！

つまり

「もう無理！眠い！だるい！目が霞む！

何よりおっぱいパワーが足りない！

俺が生まれておっぱいを触らない日は無かった！！

あり得ない！おっぱいを触れないなんてあり得ないんだああああ

あああ！！！」

俺は涙を流しながら叫ぶ。これは魂の叫びだ！魂の飢えだ！魂の悲しみなんだああああああ！

普段の俺ではあり得ない変貌ぶりに、まだ付き合いの短いカテレアは驚き硬直していた。

しかし俺にはそれを気にする余裕はない。

俺は発狂寸前だったのだ。

カテリアは休んでいないのか？

……休んでいないのだな。

メイクで上手く隠しているようだが良く見ると目の下に隈が出来ているではないか……………。

「……………カテリアよ、その山で最後なのだな？」

「は、はい。そうです。」

「ならばお前は休め。俺同様寝ていないのだろうか？」

「フオウル様がお休みになられていないのに私だけ休めません！スルトさんやアングルボダさんも休まれていますのに……………。」

「……………そうか、スルトとアンも休んでいないのか。」

「ならば2人にも伝える！今日は休みだ！俺もこれを終わらせて寝る！」

俺はカテリアが抱えている山を指差しそう告げた。

「ですが！」

「良いから休め。」

俺を思うのなら休んでくれ。

上手く隠しているようだが隈が出来ているぞ？
俺はお前に元気でいて欲しいのだ。

すまなかつたな、俺の勘違いでお前達までつきあわせて。」

俺はカテレアに頭を下げた。ここにいない2人にも謝らなくてはな。
「そんなフォウル様が頭を下げる必要はありません！私達が勝手や
つたことなんですから！」

後少しなので、最後までお付き合いします。私はフォウル様の
眷属で秘書なので、

相変わらずカテレアは頑固だな。

だがその心意気やよし！流石は俺の眷属。

「ふふ、ならばさっさと終わらせる！スピードを上げるぞ！」

そして俺はたまっていた仕事を終らせ、やっと休むことが出来た。

今後はこまめにやろう、そう心に誓った。

*

俺の勘違いから始まった政務地獄は終わりをづけ、俺達はまる1日
眠り続けた。

後で知ったことだが母さんやディースさん、フレイヤも仕事を手伝
つてくれていたらしい。流石にこの3人は休みを取りながらだった

ようだが、それでも助かったことには代わりはないので後ほど礼をしなくてはな。

まあともかく目が覚めた俺がまずしたことはおっぱいを触ったことだった。

と言つのも起きたら母さんが俺の頭を抱くように寝ていたのでとりあえず触った。

どうやら母さんはここ数日俺とのスキンシップが無かったので禁断症状一歩手前だったようだ。

俺もおっぱい成分が不足していたのでそのまま楽しんだのは言つまでもないだろ？

母さんとのスキンシップを楽しんだ後シャワーを浴び何か食べようと部屋を出てリビングに向かったところ、いきなりフレイヤとディースさんに襲われた。

おおよそ検討はついていたのでそのまま二人とあはん、うぶん、な事をしているといつの間にか皆集まっついて気がつくとその日が終わっていた。

ちなみにゼノヴィアはミリアと一緒にグレモリー家へ向かった。なんでもリアスさん達も実家に帰郷しているらしく合わせたらしい。

まあミリアとゼノヴィアがいなくて寂しくはあるが俺達も明後日には行く予定なので後少しの辛抱である。

しかしミリア達の実家に行くと言うことはご両親に挨拶をすると言うことになる。

グレモリー卿とは授業参観でお会いしたが義母上とは面会したことは無かったので若干緊張している。

グレモリー卿とお会いした時は父さんと会える嬉しさで緊張など「何それ美味しいの？」状態だったが、改めて面会するとなると緊張するのも無理はないと思う。

842

まあ今から緊張しても仕方がない。
サーゼクスいわく俺に対して悪感情は抱いていないらしいし、あまり気負い過ぎても逆効果になるだろう。ゆえにいつもの俺で行こうと思う。

まあ準備だけは確りして行こう。
お土産は日本の地酒で良いだろうか？
後で皆に相談でもするとしよう。

*

「やあ、僕はフォウルだよ！

あれから2日たって今はグレモリー家にいるんだけど、僕が何をしているのか分かるかい？

分からないのかい？

しょうがないなあ。じゃあヒントをあげよう！「フォウル？何1人でやってんだ？また部長のお母さんに怒られるぞ？今日でもう5回も怒られてるんだからもう少し真面目にやれよ。」……………

……………しかしなイツセーよ、勉強ばかりで飽きてしまったのだ！皆はグレモリー領で観光しているのに、何故俺等は勉強しなくてはいけないのだ！？

もう渡された教科書は覚えたのに何故俺はまだここでお前やミリキヤスと勉強しているのだあああああ！？

キャラ替えして暇つぶしくらいしたくもなるわっ！！」

いきなり失礼した。最初の俺は暇つぶしでした事に過ぎないので気にしないで欲しい。

上記の会話で分かる通り俺はグレモリー領に来ていた。

そしてお土産を持ってミア達のご両親（将来的には俺の義親になるのだが）に挨拶をした所いたく気に入られてしまった。

そして何故か義母になる（予定っーか確定？）ヴェネラナさんに言い付けられイツセー共々勉強させられていたのだ。（ちなみにヴェネラナさんはリアスさんやミアにそっくりな美人っーか美少女だった。）

ん？イツセーにミリキヤス、後授業してくれてる先生が俺を驚きの表情で見ている。

「皆どうした？そんな女のおっぱいだと思っただらデブ男のおっぱいだった様な顔をして？」

「そりゃあ驚くけど例の意味がわかんねえよ！？普通に驚いた顔って言えよ！」

「つかこの教科書覚えたっていつの間にだよ！勉強しはじめたの俺と同じだろ！？」

「イツセーが俺にツツコミながらダメ出しをして更に質問してきた。一気に3つの動作をするとは中々やるな！」

普通にツツコミとダメ出しは同時に行います。

「いつの間にも何も最初に教科書を見たときだが？普通に一回見れば覚えるだろ？」

覚えません

「覚えねえよおおおおお！！」

何のお前？強くてイケメンで女にモテて拳句には頭も良いだど？ずりいいいよおおおおお！！」

「イツセーがまた喚き出したので何か言ってやろうとしたら先に言葉を発した者がいた。」

「イツセー義兄様？男の嫉妬は醜いと言いますよ？」

その様なことは控えた方が良いのでは？」

ミリキヤスだった。

ミリキヤスはサーゼクスとグレイフィアさんの息子で紅髪の可愛らしくも聡明そうな顔立ちをしている。

「ぐはっ！？み、ミリキヤス様？そうは言いますけど！

っーか誰だ！男の嫉妬は醜いとか言い出したのは！？」

「あ、多分それは俺だ。」

「フオウルうううう！お前かあああああああ！

っーかどうい理由で言っただよ！

余計な言葉を作るなよ！」

イツセーがまた俺に突っ掛かってきた。最近イツセーはこんなんばかりだな。まあ良い、答えてやるか。

「そうだな、あれはドライブがまだ子供だった時だ」

「ま、まさかあの話か！？や、やめろおおおおおおお！
父よ頼む！やめてくれ！」

俺が語ろうとするとドライブグが会話に割り込んできたが当然無視だ

「ドライブは乳離れが中々出来なくてそこそこ大きくなっても良くミリアにせがんでいたものだ」

「うわああああ！うわああああ！やめてくれえええええええ！相棒も聞くなあああああ！」

ドライブの衝撃の事実には驚いていた。

口々に「あの赤龍帝が……」や「ドライブぶぶ！」などの声が聞こえる。

ドライブが支離滅裂なことを言っているがやはり無視だ

「でまあそこまではまだ良いのだ。

俺も乳離れ出来てない、むしろする気はないからな！」

「父はしろよ！」

む？何か「しろよ！」とか聞こえた気がするが意味がわかりませ〜ん

「まあともかくドライブは乳離れが出来て無かった。

そしてあれが起きた。」

「うおおおおおん！父よ、頼む！これ以上俺をはずかし」うるさ

い！」「ぎゃぴ！？」あ、相棒おおおおお！」

ドライグがあまりにもうるさいので思わず殴ってしまった。
イツセーをだが。

後からイツセーを殴っても意味ないことに気がついたがまあ良いか
涙目のイツセーを無視して話を続けた。

「あれはドライグが人間で言うところと中学一年生くらいの時だった。

ミリアが他の子に乳をあげているときにそれを妨害しようとしたの
だ。

流石に不味いと思った俺はドライグに問いただした。

何故乳やりを妨害したのか、と。」

「ううううう、死にたい……………」

ドライグは無視

「するとドライグは、母の乳は俺のだ！俺だけにくれれば良い！
」
と言い出したのだ。」

「……………死んだ、俺は終了だ。」
ドライグが沈んでいるが無

視だ

ちなみにイツセーはニヤニヤしてドライグに何か話しかけていて、先生は驚愕の事実にも固まり、ミリキヤスは「お母様のおっぱいは子供皆のですよー?」と可愛らしく首を傾げていた。

「そして俺はドライグに言った。`ミリアの乳は汝だけのものではない!我とミリアの子、汝を含めた皆のものだ!`
一々弟や妹に嫉妬するでないわ!男の嫉妬は醜いぞ?`とな。それが未だに使われていたと言うわけだ。」

俺が語り終えると皆成る程と言いながらもイツセーを、と言うよりドライグを見た。

しかしドライグも言われるだけでは終わらなかった。

「ぬがああああああ!もうヤケクソだ!

父よ!その後俺が`なら母の乳房は俺のだ!`と言ったら`ミリアの乳房は我のものだああああああ!`とか叫びながら俺を殴つただろ!!

あの時は死ぬかと思つたぞ!?!」

ドライグの言葉にイツセーが反応して

「お前だつて嫉妬してんじゃない!?!」
と言ってきた。

むううう、嫉妬ではなく事実なのだが……。
いくら子でもおっぱいは子のものではないぞ？
ミリアのおっぱいは俺と子のものだ。
間違えは治さなくてはならんだろ？

「事実なのだし嫉妬では無いだろ？」

事実、と言う部分にイツセーが反応する。しかし

「事実って何だよ！誰が決めたん「あながち間違えではありませんよ？」……………ヴェネラナ様……………」

ヴェネラナさんの登場で場は静まりかえった。

ふう、イツセーの相手にも疲れていたのでナイスタイミングだ！

「フォウル君はミリアと婚約関係にありますし、前世でも夫婦だったのですから間違えではありません。」

まあ女性の胸を連呼するのはあまり良いとは言えませんが。」

この事実流石にイツセーも黙った。

「それはそうとフォウル君？貴方は勉強はどうしたのですか？「覚

えた」

まったく、ミリアと結婚したいのならこれくらい我慢して覚えなくてどう…え？

おかしいですね、今、覚えた」と聞きましたが？」

どうやら俺の発言が信じられないらしい。
だが覚えたのだから仕方がない。

「むうう、だから覚えたぞ？

信じられないのならテストでもするか？

この教科書一言一句全て答えてやるぞ。」

「なら問題です。この教科書115Pの「悪魔の貴族にも当然階級があり、魔王を筆頭に
（ 手抜き

じゃないよ）、だ。」「……………正解です。」

問題を出される前に115Pの文章を読んでやった。
これならば間違えることはあるまい。

しかしまだヴェネラナさんは信じられないようでこの後も何回も問題を出して来たのだった。

むうう、俺は嘘ついて無いのになあ。

グレモリー家へ！ドライグの過去（後書き）

このお話しドライグは乳離れが出来ていませんでした！
流石に今は違いますよ？

顔合わせ。欲望の対価（前書き）

うわあああゝ。思ってたより長くなったあゝ。
文章がぐだった様な気がします。がとりあえず更新です。

ああ、何発体をかすったことか……。

おかげで体が血だらけだ！流石はサーゼクスやリアスさん、ミリアの母親と言ったところだろうか。

そしてリアスさん達が帰ってきたことで何とか止めてもらい今にいたる訳だ。

おかげで列車に乗ってからの俺はイツセーと二人ですっとおっぱいを連呼している。

普段ならここでリアスさんのお叱りを受けるが幸いこの列車はグレモリー専用車ゆえリアスさんの眷属、ミリアの眷属、俺の眷属以外乗っていない。

故にいくら騒いでも大丈夫なのだ！！

ちなみにカテレアは最初行くのに渋っていたのだが俺が

「お前も俺の大事な眷属（人）なのだからちゃんと皆に紹介させてくれ」

と言ったら頷いてくれた。

さあ、若手上級悪魔達にはどのような者がいるのだろうか。

何気に俺は楽しみだった。

*

ならばサービスをしなくてはなあ！

「では次に俺の家族と仲間を紹介しよう！！

まずは皆もご存知ミア・グレモリーだ！ミアは俺の主にして婚約者だ！そして

」

俺は演説で皆を紹介していた。

大なり小なり様々ではあるが紹介されたものは皆、顔を赤くしていた。

それはそうだろう、何せべた褒めの紹介の仕方だったからな！

観衆達は俺が紹介する度に歓声をあげたり、黄色い悲鳴や、野太い声があがったりと中々の盛り上りをみせていた。

そして最後にはあえて残っていたイツセーだ！

「そしてこれで最後になるがこいつは兵藤一誠！俺の親友のイツセーだ！」

またもや歓声があがるが先ほどまでよりは少ない。

まあイツセーの容姿は悪くはないが特別良いわけではないし、先に紹介した者達は皆アイドルすら裸足で逃げ出すような容姿の者達ゆえ仕方がないだろう。

それでもイツセーは自分の名前を呼ばれ、歓声があがったことに喜んでいようだ。そして期待の目で俺を見ていた。

紹介の時、俺がべた褒めしていたのでそれを期待していたのだろう。

任せろ！俺がお前を的確に紹介してやる！

イツセーにサムズアップをするとイツセーは期待に表情を輝かせた。

「こいつは

」

俺は少しためた。

誰かの喉がなるのが聞こえる。

そして俺は次の言葉を放った。

「変態だあああああああ！……！」

「……………」

広場に静寂が訪れた。そして

「うおおおおおおおおおおおおい……！」

イツセーの声だけが響いた。

「ねえなんで？なんで俺だけそんななの！？

良いこと言っつては言わないからさあ、せめて普通に紹介しろよ！

」

やれやれ、まだ紹介は終わってないと言っつに早とちりしおって。

「そしてっ！！！」

喚いているイツセーを遮るように言うと再び静寂が戻った。
次に俺はこう言った。

「そしてこいつは赤龍帝！我が子、ドライブグを身に宿す者だ！
皆、これからのイツセーを良く見ておけ！
こいつは強くなるぞ！」

またもや広場を静寂が支配するがそれもまた一瞬、次の瞬間には

「！！！！！！わああああああああああああ！！！！！！
！！！！！！」

今までの誰よりも大きな歓声が響いた。

リアスさんや仲間達は誇らしそうな表情をしていたのに当のイツセーは顔どころか体まで真っ赤になっていたのだった。ちなみに俺の演説は警備員が止めに来るまで続いたのだった。

*

演説を終え（止められ）俺達は集合場所に向かっていた。

長い廊下を歩いていると途中で一人の青年に声をかけられた。
リアスさんとミリアに、だが。

「久しぶりだな、リアス、ミリア。」

ガタイの良い青年だった。

そのたたずまいも声の感じも威風堂々としていて俺さえ将来に期待してしまふほどの存在感があった。

こいつは良き王になる、そう確信した。

彼の周りにいた眷属であろう者達も皆良き目をしている。

さぞ自分の主を信頼し、自慢に思っているのだろう。

そして名前を呼ばれたリアスさんとミリアが彼と握手をしながら応えた。

「サイラオーグ！久しぶりね。」

「サイラオーグ兄様、お久しぶりです。」

む？兄様？いったいこのサイラオーグと言う青年とはどのような関係なのだろうか？

多分古くからリアスさんの眷属であった者以外皆同じ感想を持っただろう。

するとリアスさんが皆に彼を紹介した。

「初めての者もいるようだし紹介するわね。彼はサイラオーグ。私達の母方の従兄弟でもあるの。」

「俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期頭主だ。」

ほう、バル家と言えば魔王の次に権力を持つ家系だったはずだ。

成る程、確かにこいつならば大王に相応しいだろう。

それにしてもミリア達姉妹の母方の従兄弟と言うことはヴェネラナさんはバル家出身と言うことか。

グレモリー3兄妹は現魔王と大王家の血筋ってことになる。

ミリアとリアスさんの将来が楽しみではあるがそれと同じくらい恐ろしいな。

む？サイラオーグが俺に近づいてきていきなり膝をつき頭を下げた。彼の眷属も主に続くように同じことをした。

何事？

そしてサイラオーグが口を開いた。

「初めまして、俺はサイラオーグ・バル。

貴方のことは魔王様達との闘い以来尊敬していました。

本日お会いできたことにとても感激しています。

もし貴方がよろしければ今後もよろしくお願いいたします。」

ほう、中々礼儀正しい奴だ。

王の風格があり、自分が認めた相手にはしっかりと礼儀をつくす

ことができる。

うむ、若手とは言え今回は将来有望な者が多いな。

それはそうとサイラオーグには言っておかなくてはいけないことがある。まずは

「サイラオーグ、顔をあげる。

俺を尊敬するも嫌悪するもお前の勝手だが別に畏まる必要はない。

いくら俺が霸王龍であろうともこの身はまだ17歳の若造で悪魔になつてからまだ数ヶ月の新人だ。

むしろ悪魔としてはお前が先輩なのだ。

爵位にしても俺は所詮子爵、お前の方が地位も上なのだから普通に接して構わん。」

するとサイラオーグは切り替えが早いのか直ぐに立ち上がり

「わかった。貴方がそう言うのなら普段通り振る舞わせてもらおう。だが貴方をお前などと呼びたくはない。どの様に呼べば良い？」

「ふむ、なら改めて紹介させてもらう。

俺は霸王龍フォウル。またはフォウル・ドラグニール、ドラグニール領の頭主で子爵だ。

俺のことはフォウルで構わん。

俺もお前のことはサイラオーグと呼ばせてもらう。

俺としてもサイラオーグの様な者と親交を結べることは嬉しく思う故、こちらこそよろしく願います。」

そう言つて俺は手を差し出す。

サイラオーグはその手をしっかりと握り

「ああ、フオウル、よろしく頼む。」

こうして俺はイツセイ達とはまた違う友が出来たのだった。

「で、そろそろ良いかしら？」

サイラオーグ、貴方は何故この様な場所にいたのかしら？」

タイミングを見計らったかのようにリアさんが声をかけてきた。

それに対してサイラオーグは途端に不愉快そうな表情を浮かべながら答えた。

「ああ、くだらんから出てきただけだ」

「くだらない？他のメンバーも来ているの？」

「アガレスもアスタロトも既に来ている。拳句ゼファードルだ。着いた早々ゼファードルとアガレスがやり合い始めてな」

実に嫌そうな表情だ。つーかやり合い始めた、ねえ。いったい何をやり合い始めたのか。

大体想像出来たが一応いろいろ考えていると

ドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！

建物が大きく揺れ破砕音が聞こえてきた。

やはりやり合うとはこのことか。若干呆れながらサイラオーグを見ると俺と同じく呆れた顔をしていた。

結構近くから音が聞こえたことが気になったのかりアスさんが音のしたほう、集合場所の扉に向かって行った。

「まったく、だから開始前の会合などいらないと進言したんだ」
サイラオーグが嘆息しながら自分の眷属を引き連れリアスさんの後に続いた。

とりあえず俺も中に入ることになると他のメンバーも後に続いた。

中に入るとスタボロになった広間と、中央で睨み合う二陣営の悪魔達が入った。

二陣営ともヤル気満々だな。

一方は魔物軍団に一方は比較的普通の連中だ。

何か隅のほうで我関せずと優雅にお茶を飲んでいるやつもいたがこの際無視である。

お？何か言い合い始めたぞ？

ほうほう、あのチャラ男ヤンキーがゼファードルでメガネ美少女がアガレスか。

むう、あのチャラ男ヤンキーは馬鹿か？

処女の開通式？ただのやりたがりではないか。

そりゃああのメガネ美少女もキレるだろ。

俺は周りの様子を見るとサイラオーグが動きだした。

まああいつに任せても問題ないだろうが、ここは俺もいかせてもらおうか。

サイラオーグも俺が動いたのに気がつき一瞬何かを考えるような表情を浮かべるが直ぐに先ほどと同じ表情になり俺に頷いた。

俺達はほぼ同時に彼らのもとまで近づきまずサイラオーグが口を開く。

「アガレス家の姫シークヴァイラ、グラシャラボラス家の凶見ゼフアードル。そこまでにしておけ。」

それに続く様に俺は言葉を発した。

「それ以上やると言うのなら
なろうっ！」

俺等が相手に

「「「「っつ！！」「」「」

部屋にいた全ての者が反応した。

サイラオーグも若手とは思えないほどの中々に良い気迫だったが俺はさらに濃密な気迫を放った。

ただこれは殺気ではなく闘気故、気絶するものはいなかったが
「……………」

戦意を無くすには十分だったようだ。

ただサイラオーグだけはその中でも話すことが出来たようで

「ちなみにいきなりだが、これは最後通告だ。

まあ無理だとは思うが次の言動次第で俺は拳を容赦なく放つ」

やはりサイラオーグは別格だったようだ。

俺の闘気に覆われたこの部屋の中でもしっかりと己の気を放つその
胆力は素晴らしいの一言につきる。

これならもう大丈夫かと思ったので闘気を解いたのだが、馬鹿は馬
鹿のままだった。

「な、何なんだてめえは！それにバル家の無能がしゃしゃってん

ドゴンッ！

良い音をたてゼファードルはぶっ飛んで行った。あちらはサイラオ
ーグに任せるか。

俺はアガレスに近寄り、言った。

「お前はもうやる気はないのだから？」

「は、はい。」

「ならば化粧でも治してこい。」

そのままでも十分に美しいが、その邪悪なものを取っ払ったほうがお前はより美しいだろう。」

「わ、わかりました／＼／＼／＼失礼します／＼／＼」

何故か顔を赤らめアガレスは去って行った。

皆の視線が若干痛い俺が何かしたのだろうか？

まあ良いかと思っただのでサイラオーグをみるとあちらも終わっていたよつで既に部屋の修理要員の手配を終えていた。

イッセーがサイラオーグに憧れに似た視線を送っていたがどうかしたのか？

俺にはジト目だったくせに。

「あ！ドラグニール様！兵藤！」

お？匙もきたようだ。と言うことは

「ごきげんよう、リアス、ミアア、兵藤君、フォウル君。」

どうやらそろったようだ。

*

ボロボロだった広間は有能な修理要員達により瞬く間に治され、若手達の挨拶が行われた。

引つ掻き回す馬鹿がないのでそれはスムーズに進みお偉いさん達のありがた〜い（ぶつちゃけどうでも良かった）話を聞いた。

そして最後に若手の目標を言うことになったのだがいろいろあって若手達でレーティングゲームをすることになった。

ただし俺の場合は例外で若手を潰してしまう可能性があるとかでドラグニール家に限り若手対ドラグニール家という特別混戦ゲームを行うことになった（ミリアは俺と闘いたくないと言って辞退していた）。

ちなみにこのゲームは最後に行く事になったので当分先の話である。

そして順番は残すところ俺とミリアな訳だがミリアの目標にお偉いさんは啞然としていた。

ミリアを知っている者、兄であるサーゼクスやセラフォルーさんなどの魔王達は微笑ましいものを見るような目だった。

ミリアが言ったこと、それは
「いつまでもフォウルや家族といることです」
だそうだ。

ふふふ、やはり考えることは一緒か。

俺も同じことを言おうとしていたので凄く嬉しかった。

そして俺の番が回ってきた。

「最後にフォウル、君の目標を教えてくださいませんか？」

司会進行をしていたサーゼクスが俺を指名したのでミアアと同じ様なことを言おうとしたのだが

「魔王様、霸王龍殿は聞かずともわかるのではないのですかな？」
と言っお偉いさんの発現に遮られた。

「……………どういことですか？」

サーゼクスが怪訝そうに尋ねる。

「どうもごつもありますまい。

彼は『霸王龍』ですぞ？」

『霸王龍』とは星を護る言わば守護神。その彼が悪魔についたのですから悪魔のためにつくしてくるに決まっていますよ。」

あ、今頭の中でプチッと何か切れる音がした！

しかしまだこの程度でキれるのは早計だ、俺はとりあえず我慢をしつつ周囲の様子を見ることにする。

とりあえず俺の性格などを知っている者を見ると大まかに二つに別れた。

一つ目はお偉いさんの発現に呆れている者、ディースさんやフレイヤ、アーちゃん達だ。

二つ目は大多数をしめるが顔が青くなっているもの。

サーゼクスなどは冷や汗をダラダラ流していて魔王の貫禄がまった

く感じられないほどだ。

まあここで終われば良かったのだがお偉いさん、何かお偉いさんと呼ぶのも嫌になったので老害と呼ぶ事にしよう。老害達の戯言は終わらなかつた。

「そうです！せっかく霸王龍殿が私達悪魔の陣営に付いたのですからその力を利よ、つと失礼。力を借りない手はありますまい？」

プチプチ

まゝた何かが切れたなあ。

「つか今お前利用とか言いかけたな？利用って何だ？利用って！」

「それもそうですな！」

霸王龍殿の力があれば私達に怖いものなど無いも同然ですからな！
いつそこの星の頂点に悪魔が立つのも面白いではないですか？」

俺は怒りを抑えるために横にいたミアとディースさんのおっぱいを驚掴みした。

「きゃん！？／／／」「ん！んん／／／」

うむ、実に良き揉み心地だ。二人の声も相まって俺は幸せを感じた。

俺の突然の行動に驚き文句を言おうとした二人であったが俺の顔を見た途端に二人で俺を抱き締めてくれた。

余程酷い顔をしていたのだろう。

自分でも自覚出来るのだからな。

しかしそれでも老害達は止まらなかった。

「おやおや？霸王龍殿はおさかんですなあ。

そうだ！良いことを思いつきましたぞ！

未婚の女悪魔を霸王龍殿に孕ませて貰えば！」

「成る程！その子達は皆悪魔の勢力になる。つまり」

「……霸王龍殿がいなくなっても我等が悪魔の勢力は揺るがない

！」「」「」

ブチンッ！！！

我慢の限界だった……………。

今すぐにでも老害どもを殺してしまいたいそうだったが俺以上に怒ってくれた者達がいた。

俺と親交があった者達だ。

サーゼクスでさえその視線は冷たいものになっていた。

そして特に怒りを露にしていたのが俺の眷属とミリア、ディースさんだ。

だが自分達の妄言に熱中している老害どもは気づいていない。

「しかし霸王龍が生きていた場合、その子達は私達の言うことを聞くのでしょうか？」

『星と生まれ
星を護る』

「貴方達は！魔王を貶めるだけでは飽きたらず、今度は私の主まで貶めるつもりですか！」

「貴方達みたいのがいたから3勢力の間で戦争何てあったんでしょうね……………」。

とりあえず死んでおきなさい！！」

カテレアとフレイヤの魔法が老害どもを襲う。

前々からカテレアは良くは思っていないかったが今回の件で完全に奴等を敵と認識したようだ。

フレイヤにしても普段は飄々としているが頭に來ているらしくその顔は無表情であった。

『流星ことごとくを葬り』

「お母さんを人質にする何て！どついう神経してるの！？」「あんなら馬鹿だねえ」

あの争いを好まないアンまでもが攻撃魔法を放っていて、ディースさんは普段とあまり変わらないように見えるがその身に纏うオーラが違う。

『汝に終わりの始まりを告げようか！！！！』

そしてミリアは特別何かをするでは無かったがただ一言

「私は貴方達がきらいです。」

そう言った。

そして次の瞬間に俺は

『スターダスト・インフィニティ
霸王龍!!!!!!!!!!!!!!』

激しい衝撃と共に龍に『霸王龍』になっていた。

ただしその衝撃で吹き飛ばされたのは老害どもだけ、後の者達は我の加護に護られ吹き飛ばされるところか髪の毛一本すら動いていないであろう。

そして老害どもは何処まで行っても馬鹿ばかりであった。

「お、おおおお！何と力強いお姿！悪魔だと言うのに神々しさすら感じますぞー！」

「霸王龍殿！さあ我等を助けてください！」

この我等に害をなす愚か者どもを駆逐するのですぞー！」

「汝等は何を勘違いしているのだ？」

「「「「え？」「」「」」

「先ほどより聞いていれば我の力を利用するや、我に種馬になれだ、拳句にはミリアを人質に使うだと？」

ふざけるのも大概にしろっつっつっ!!」

我の怒声に大気が揺れた。

老害どもは完全に硬直しているが我は止まる気は無かった。

「我をまるで汝等の所有物の様に話していたが汝等は何様のつもりだっ!!」

「し、しかし霸王龍殿は悪魔に転生したではありませんか!!」

それは悪魔に力を貸すのと同義でしょう!？」

この様に発現をするある意味豪胆なものもいたが

「まずその前提が間違えておるわっ!!」

我が悪魔に転生したのはそこにミリアがいたからにすぎん!

仮にミリアが天使ならば天使に、墮天使ならば墮天使に、人間ならば人間として生活していた!

悪魔に転生したのは偶然にすぎんだ!」

我の言葉に黙った。

しかしまだわからない者もいたようで

「し、しかし貴方は『霸王龍』でしょう?」

ならばこの星の為にも我等の崇高な考えに賛同してくれるのではありませんか!？」

向け

「……………何のつもりだ？」

我はこの老害どもが星の害悪と認定した。

邪魔をするなら汝等であるうとただでは済まさんぞ？」

まず応えたのは『禁手』に至ったイツセーであった。

イツセーはまだ完全に『禁手』を使いこなせていなかったはずだが恐らくアーちゃんの助力により今の状態になったのだろう。

「確かにフォウルが頭にくんのはわかるよ！！俺だってム力ついたけどこの人達を殺すのは違うだろ！？」

これに続くようにアーちゃんが口を開く。

「フーちゃんよお、そりゃあ殺してえだろうよ、俺だって殺してえさ。」

でもな、今それはいろいろと不味いんだよ。

何だかんだでそのジジイどもは有能だからな。

こいつらが今死んだら悪魔社会が崩壊するぜ？」

そしてサーゼクスも言葉を発した。

「イツセー君とアザゼルの言う通りだ。

私としても彼等の言動は許しがたいものがあるが今彼等を失う訳にはいかない。どうか矛を下げて貰えないだろうか？」

彼等の処罰は私が責任を持って行う。

だから、頼むフオウル……………」

サーゼクスが直々に頭を下げた。

それにも関わらず老害どもは喚きたてた。

「魔王よ！処罰とはどういうことですかな！？」

私達が何をしたと言うのです！！」

「そうだ！我等は真に悪魔社会を思つての話をしたまで！

この崇高な考えがわからんのか！！」

ぎゃあぎゃあぎゃあ五月蠅かったので黙らせようとしたのだが

「 黙れ！」

サーゼクスの一喝で静まりかえった。

その一喝は底冷えのするものでサーゼクスが怒っていることを現していた。

「き、貴様！誰に向かって言っている！！我等は現悪魔社会の立役者だぞ！！それを魔王になつたくらいで「黙れと言っている！」

ひっ！！」

「私はね、怒っているのだよ……………」。

悪魔社会のためという大義名分を使い自分達の欲望のままに生きる貴方達にね。

何よりも私の友を貶める発言をしたことに！！

本当なら彼の好きなようにさせてあげたいところではあるが貴方達
のいう悪魔社会のために貴方達の力が必要だったし、私は貴方達に
も生きて欲しかったから私は彼を止めようとした！
それを貴方達は！」

「サーゼクス、もう良い。汝の気持ちは我に伝わった。
全て汝に任せる。」

そう、サーゼクスの気持ちはわかった。
確か焼き鳥の時もそうだったしカテレアの時もだ。

彼は本当に悪魔社会を思っていてそこに住まう者達に生きて欲しい
と思っているのだったな。

「……フォウル、ありがとう。」

サーゼクスは普段通りの声色で我に礼を言ってきた。
どうやらサーゼクスも冷静になったようだ。

「構わん。」

その老害どもには汝が処罰を下すのであろう？
ならばそれで良い。我は汝を信頼しているからな。

それにしても汝は本当に優しいな。」

私の言葉にサーゼクスは照れた様に頬を指でかきながら

「ははは、私はただ皆に生きていて欲しいだけだよ。」

と言った。

まったく、それが優しいと言っに。

そして我は龍化を解いて皆の元に戻ったのだった。

こうしてこの顔合わせは終わりをつけた。

さあ、夏休みはまだ始まったばかりだ！気持ちを切り替えてこの夏を楽しむとしようか！

顔合わせ。欲望の対価（後書き）

今回、悪魔のお偉いさんには完全に道化になっってもらいました。私老害って嫌いなので書いててムカついたし多少すつきりしました。本当は殺しちやおうかなあとか思ったのですが悪魔社会のことやサーゼクスの性格を考えると不味いかなと思いいこの様にしました。ただサーゼクスが感情的になってしまったりフォウルの聞き分けが良すぎたかなあと思わなくもありませんでしたが

まあ良いつか

温泉（前書き）

なんとかメンテナンス前に完成！

今回は温泉ネタ！

良く1時間ちよいで書き終えたな……………。

温泉

老害肅正の後俺達はグレモリー家本邸に戻った。

そして今後の事について話し合いを始めた。話し合いの内容はリアスさん達とソーナさん達のレーティングゲームについてだ。

と言っても既にアーちゃんが各自のトレーニングメニューを考えたらしくほとんど話し合うことは無かった。

明日の朝から各自のトレーニングが開始することになったのだった。

む？俺達？特訓の必要無くないか？

俺はむしろ教える側で特訓と言っても新技開発くらいだ。

基本的に時間があげばいろいろやっているしな。

俺がおっぱいばかり考えていると思ったら大間違いである。

眷属達にしてもまだ伸びる余地はあるが急ぐ必要などないので各々自由に過ごす予定だ。

ただミリアは彼女の希望で特訓をするようだがトレーニングメニューはデイスさんが直々に考えているらしいのでアーちゃんはノータッチだったりする。

まあどちらにせよリアスさん達のゲームが急務であるし俺達ドラグニール眷属のレーティングゲームはまだ当分先の話だ。ミリアのレーティングゲームも何だかんだで1ヶ月以上先なのでその間デイスさんにみっちり鍛えあげられることだろう。

それにミリアには俺とデイスさんがいる。ゲームのルール次第だが、そうそう負けることはないであろうと思う。

ただ気を付けなければいけないのがサイラオーグとリアスさんだ。サイラオーグは彼本人の力もさることながら眷属も中々に良き者達を集めているようだし、リアスさんにしてもそうだ。

リアスさん達は俺が鍛えたのでどの様な攻撃手段があるかは概ね理解しているがそれをどう使ってくるかまではわからない。

真っ向勝負なら負ける気はしないがゲームの特性上攻め方次第では充分に勝利を目指せるのだ。

それはどの者達にも言えることだが飛び抜けて強力なメンバーがいるのがこの二組になる。

気を付けなければいけないことだが彼等が俺達に対してどう戦略をたてるか今から楽しみである。

ん？グレイフィアさんが来た。飯にしてはまだ早いけど、かしたのだろうか？

「皆様、温泉のご用意ができました」

最高の知らせだった。

*

「ああ〜、幸せ〜」。

俺はさっそく温泉に浸かっていた。

他の皆も各々温泉を楽しんでいるようだ。

最初は混浴が無いことに憤慨したが入ってみればこれはこれで良かった。

アーちゃんなんか羽全開で歌まで歌っている。

……………堕天使なのに違和感が無さすぎるだろ。

イツセーと祐斗は並んで浸かっている。先ほど祐斗がイツセーに

「イツセーくん、背中をながそうか？」

と言っていたが祐斗よ、それは男が言って良い言葉ではないぞ？
イツセーなんかドン引きだ。

まあ祐斗なりに親睦を深めようとしたのだろうがな。

む？そういえばギヤスパーがない。

どこにいる？って、いた。入口付近をウロウロしている。

お、イツセーが迎えに行つたようだが何か揉めている。

っ！かギヤスパー、男がバスタオルを胸元で巻くな……………。イツセーに襲われても知らんぞ？

流石にイツセーでもそれはしな

お姫様だっこ!？

ほ、本当にイツセーは欲情し

どぼーん！

………イツセーの奴ギヤスパーを温泉に放り投げやがった。

「いやああああん！あつついよおお！溶けちゃうよおお！イツセー先輩のエツチイイイ！」

ギヤスパーの絶叫が木霊した。

すると隣の女湯から「イツセー、ギヤスパーにセクハラしちゃダメよ？」

リアスさんのからかい声が聞こえ、女子のクスクスという笑い声も聞こえてきた。

恥ずかしかったのかイツセーは温泉に飛び込んだ。

………つーか先ほどからお湯が顔にかかって迷惑なのだが。

まあ良いかとゆっくりしようとしていた俺の視界にあるものが入った！

「ギヤスパーアアアアア！」

「は、はいいいいいいいいい！な、なんですかあああああああ

!？」

「温泉に浸かるのにタオルを巻いたままとは何事かあああああああああ
あああ!！」

「何いいいつ!？」

温泉にタオルを巻いたままなど言語道断!
ちなみに反応したのはアーちゃんである。

「男なら!！」

俺とアーちゃんの目がい、同時に立ち上がり

「「温泉はフルチンだああああ!！」」

腰に片手を当てもう片手はギヤスパーを指差し言い放つ。

漫画なら背景にドーン!と付きそんな感じだ。

「きゃあああああああああああ!

モモモモモモモモンスターアアアアアア!？」

ギヤスパーが俺達を見てそう叫んだ。目を手で隠しているが微妙に
隙間が空いているのがバレバレである。

「あんたは何をしてんだあああああああ!つてぎやああああ
あああ!相変わらずでけえええええええええええ!？」

先生も可笑的いだろっ!？」

っ!か腰をつき出すなああああああ!！」

イツセーが俺達にツツコミを入れた。

そうか、デカイか。自慢の息子だ

「つーかあんたらは本当に人かつ!?でがすぎんだろ!」

「人ではありません!」

「そうだったあああああ!人じゃなかったああああ!つーか腰を振るなああああああ!」

イツセーのツツコミが冴え渡るな!

いや~~~~~本日は平和である。

*

俺達は再び温泉に浸かっていた。

祐斗とギヤスパーは我関せずと隅っこでゆったりしているが、アーちゃんはイツセーにおっぱいの可能性について語っている。

乳首が玄関のブザーとはよく言ったものである。

それにしてもアーちゃんはおっぱいにハマって墮ちたのか。
流星はアーちゃんと言いたい所だが

神よ！それくらい良いではないか！

何か人間に教えまくったかららしいがおっぱいに勝るものなしだ！！

ん？隣から艶っぽい声が聞こえる。

どうやら女子は女子で盛り上がっているようだ。

それにしてもよくあの大人数で入れたものだ。

リアスさんにミリア、その眷属に母さんまでいる。

全員で12人だ。

まあ男湯でこれだけ広いのだから女湯もかなり広いのだろう。

あ~~~~、あっちに行きたい。

どうしよ、行こっかなあ。でもあっちにはリアスさん達もいるし
自重しよう。

そう結論づけてゆっくりしようとしていたのだがアーちゃんの行動
で気が変わった！

「男なら混浴だぞ、イツセー！」

イツセー宙を舞った！そしてそのまま壁を越え

ドッポオオオオオオオオッ！

先ほどギヤスパーが投げ込まれた時とは比べ物にならない音が響いた！

「つか待て！あそこには！

「おいつ！アーちゃん！」

「お？何怒ってんだ？」

「あつちには俺の女もいるのだぞ！」

「あ、スマン忘れてた」

「忘れてた、では無いわ！
くっ！こうしては居れん！」

俺は地を蹴り壁を越える。

飛んで時に

「おゝい、あつちにはリアス達もいるぞ〜」
と聞こえたがこの際無視だ！

ドッポオオオオオオオオンッ！

勢い良く温泉に突っ込み前を見るとそこには桃源郷が広がっていた！

何故だろうか、普段見慣れたものでも流石はおっぱい！
見慣れても見飽きることが無い！

むしろ温泉とおっぱいの相乗効果で威力倍増である！

「あら、フオウルまでアザゼルに投げ込まれた……………訳無いわね。
大方イツセーが投げ込まれたのを見て慌ててこちらまで来たのかし
ら？」

「リアスさん、良くわかったな。」

そう言っつてリアスさんの方を見ると

「……………おっぱいサンドイッチ、いえ〜い」

リアスさんと朱乃に挟まれ死にそうな、そして幸せそうな表情をし
ていた。

ちょっと羨ましいと思ったのは内緒である。

それにしてもここにいる女性は皆オープンだな。誰一人悲鳴をあげ
ないとは。

まったく、お前達に羞恥心はないのか！
最高です！

「……………ぬはっほ」

あ、イツセーが逝った。

「イツセーくん！」「イツセー！」

リアスさんと朱乃が慌てふためくがイツセーの表情は幸せそうだった。

その気持ちは良くわかる。おっぱいに挟まれ逝く、乳道を歩む者として最高の逝き際だ！

そしてイツセーはリアスさんとアーシア、朱乃に運び出された。運び出す際朱乃がこちらを見て口パクで俺に伝えてきた。

「今夜遊びにいきます」と。

どうやら今夜も眠れなさそうだ

しかし意外だ。なんせ

「小猫、行かなくて良いのか？」

乱入して何だがお前は見られて平気なのか？」

「……先輩なら別に良いです。それに温泉は落ち着きますから……」

嬉しいことを言ってくれるな。

しかし普段とあまり変わらないように見えるがどこかボーとしているように見える。

一応気にかけておこう。

ともかく今は

「ではゆったりしようか。せっかくの温泉だ。」

「珍しいですね。普段のフオウルなら有無を言わずに飛び付いてくるのよ。」

ミリアに言われる。確かにいつもならそうだ。だが

「稀には良いだろ？先ほども言ったが今はゆったりしよう。」

まあ、今は、だがな

こうして俺は温泉を楽しみ、ほにやららも楽しんだのであったが
「……………／＼／＼」
小猫にばっちり見られていたのだった。

うわあ、見られちゃったよ……………

ちゃんちゃん

余談ではあるが後日、何とは言わないが汚れた温泉を見たヴェネラ
ナさんに「つっぴどく叱られたのは言うまでもないだろ？」

温泉（後書き）

温泉サイコーオオオオオオオオオオ！

私もあんな経験したい！おっぱいサンドイッチってなんぞやあああ
ああああ！

墮天使登場！ついでに神器調査（前書き）

サリエルの名前をスリエルに変えました。

理由は原作の裏設定を見て天使側にサリエルの名前があったからです。

今さらキャラ自体を変えるのは億劫だったのでサリエルの別の呼び方でスリエルとさせて頂きました。

墮天使登場！ついでに神器調査

「なあアーちゃん」

カタカタとキーボードを叩く音が部屋に響く。

「ん？何だ〜？」

所々に電線のような太いケーブルがありどこかの研究所を思わせる。
事実研究所、臨時の研究室と言っべきだろう。

「俺は何をすれば良いのだ？先ほど体に何か取り付けた後から何も
しないで座っているだけでないか。

今日は神器の調査をするのであろう？」

場所はグレモリー家の一室を借り、そこにアーちゃんが持って来させた
機材を運び込み使用している。

「まあちよいと待ってって。そろそろ準備が終わるからよお。」

時刻は午前8時。朝食を取り、直ぐに連れて来られた。

いつもならヴェネラナさんによる強制勉強タイム突入なのだが以前の
からの約束ということで本日の勉強は無しである。

「むう、そうか。」

そういえば調べると言っても具体的には何を調べるのだ？」

「あゝ、特に決まってねえな。反応を見たり、数値の変化を見たり。まあ色々だ」

決まってるのかよー！

結構テキトー何だな。

「はあ、あまり時間はかけなくて。飽きておっぱいをさわりたいなってしまっ……」

「あゝ、安心しろや。そう言うと思って一人飛びきりの連れて来てっからよ。」

「おゝい、スリエル！入ってこいやー！」
マジか！流石アーちゃん！わかっている！

「失礼する。アザゼル、いきなり説明無しに妾を連れ出しよって何をさせる気じゃー！」

部屋に一人の堕天使が入って来ていきなり文句をアーちゃんに言うがそんな事はどうでも良かった！

「んゝ、いやな、お前にフーちゃんの相手して貰おうと思ってよ。ほら、お前《霸王龍》に会いたいって言ってたろ？」

「それはそうじゃが、それと何か関係……まさか霸王龍様がおるのかやっ！？」

やべえ〜、超愛でたい！何あれ？何あれ！？
髪は俺と同じ銀髪のロングだ。

「おう、そこにいるぞ。つーか眼帯外せよ。見たいんだろ？」

「し、しかしじゃな！」

そう眼帯で両目を隠している。だがその顔が愛らしいだろうと思うのは何故だ？彼女の雰囲気がそうさせるのだろうか。

「しかしもかかしもねえよ。多分フーちゃんなら大丈夫だろ？俺も平気だしよ。」

「じゃが万が一と言うこともあるじゃろ！妾の《邪眼》イービル・アイは見たものを殺すのじゃぞ！そのせいで墮天したのはアザゼルも知っておろう！」

身長は低い、大体140センチくらいか？だが

「それで霸王龍様を死なせてしまったら妾は「ビバおっぱい！！！！」
！」「ひっつっ！！」

そうおっぱいだ！！

あの身長でかなり凶悪なものをこのスリエルと言う墮天使は持っている！

いや、サイズ自体は普通だ。だがあの身長がヤバイ！

神よ！お前はわかっているな！ロリ巨乳の素晴らしさを！！
小さい分そのおっぱいが強調されるのだ！

そしてもう1つ重要なことがある。
それは彼女の《邪眼》である。

これは見た者を殺す力があり大抵の者は死んでしまうようなのだ。

この2つの要因が原因でスリエルは墮とされたのだ。

つまりスリエルは未だに無き神に忠誠を誓っていたようだ。

(アーちゃん談)

とはいえ墮天使になり今まで好きな様に生きてきた故に天使程の堅物ではないようだ。

墮天使より天使に近い墮天使と言った所であろう。

容姿についてだが先ほど軽く触れたが改めて説明しよう。

身長140センチ程で俺と同じ銀髪のロングヘア。顔の目元を眼帯で隠しておりどこぞの反英雄のようである。

まああの反英雄は身長が高いし髪は紫だがな。

そして俺が大好きなおっぱい！

あの身長で推定（ほぼ確定）84のEカップ！

……………素晴らしい！

あのロリと言われてもおかしくない身長で巨乳！アンバランスのよ

うだがそれがまた良い！

俺、新たな性癖に目覚めたようだ。

ロリ巨乳、マジで良い……………。

ととと、危ない危ない、思考が飛びかけた。

まあそのスリエルなのだが現在俺の膝の上で

「ん〜 お前はちみつこいなあ〜

おいアーちゃん！俺は丸一日でも付き合っぞ！スリエルがいれば！」

「お！マジか！スリエル連れて来て良かったぜ！

じゃあとことん調べさせて貰う！」

「この霸王龍様？妾は何も喜んで良いのかや？

ひたすら霸王龍様に頭を撫でられているだけではないかのお。」

俺に愛でられている。

しかし仕方がない。この暇な状況に現れた天使（墮）！しかもロリ巨乳！本当はおっぱい触りたいけど許可なく触るのは俺の沽券に關わる！

だから撫でるだけ。

だがそれでも満足出来る！故に撫でる！

だがもし触って良いと言われたら……

「おう霸王龍様？」

霸王龍様はおなごの乳が好きなのじゃろ？

何故妾のを触らんのかや。自分で言うのもなんじゃが中々の物じゃぞ？

てつきり触られると思つとつた。まあ妾は構わないの「良いんだな！」「え？今なん、ひゃああっ！！？」

勿論触るがな

まずはおっぱい全体を揉みほぐす様にゆっくり大きくそして優しいように適度に力強くもみもみ〜と

「んっ、い、いきなりじゃな。ま、あ良いと、言ったひう！のは、わら、わじゃがな／＼／＼」

ふむふむ、やはり良いおっぱいだ！これなら何時間でもいられるぞ！

だから覚悟しろよ。ただひたすらおっぱいを揉みまくってやるからな

「な！は、はげし！妾は妾はあああああああ！」

しばらくスリエルの艶声が部屋に響いたのだった。

*

「よし！とりあえずこんなもんか！

ふうふう、疲れた。でも有意義な時間だったぜ！」

アーちゃんが体を伸ばしながら作業の終わりを告げた。

開始から既に10時間としてはスリエルのおっぱいを揉み続けて8時間以上が経つ。

そのスリエルはと言うと

「あつ！ダメじゃ！また、またいつ！あああああああああ
！！！！」

現在進行形で俺の餌食である。

む？俺か？俺は大変満足だ！満足なんだが

「はあはあはあ。ん！霸王龍様！？あ、あああああれが妾の
臀部に！あ、あたああ当たっておるぞよ！？」

である。

つまりだな T A C H I M A S H I T A ! ! ! である。

まあおっぱいを触っただけで満足としよう。流石にこれ以上を求め
るのは酷であろうしな。(8時間揉み続けるのも十分に酷です。)

「そうか、終わったのだな。」

何か新しい事はわかったか？」

「え！？妾の事は無視かや！？ひゃん！！ま、まだ揉むのかや！？
妾はもうきつやんっ！あ、あ、あ」

当然おっぱいを揉みながらアーちゃんに聞いた。

「ん〜そうだなあ。とりあえず二つほどわかったことがあるんだが
「アザゼルも無視するのかやっ！！」あるんだ「無視するのかや！
ある「無視かや！？」あ「無視かや？」……………スリエル少し
黙れ！フーちゃん！手の動きレベルアップ！！」

「ラジャーー！！」アーちゃんの命令だ！後何回極楽地獄になるか
知らんが恨むなよ

オラオラオラオラオラオラああああああ！！！！

「ひゃ！今までよ、り激、しい！やんっ！な、何か手が振動して！
ああああ！お、かしいの、じゃ！？揉まれ、てるのに、小刻みに
ゆ、ゆれて！ひっ、またじゃ！またき、きたの、じゃあああああ
ああああああ！！！！？？？」

「ん、余計うるさくなっただか？まあ邪魔されないだけましか。」

「で？何がわかったのだ？」 揉みながら

「大方は前にフーちゃんから聞いた通りなんだがな、調べてみたら
この神器よくわからん空間とつながってるみたいだよ、そこに造っ
た物を貯蔵出来るみたいなんだわ」

「ほお！「ひゃいん！」すまん、驚いて乳首を摘まんでしまった。
んでそれはどうやって使える様になるのだ？」

「……驚きで乳首摘まむってどんだけだよ。まあ良いけどよ。
使い方はまだわからんが、とりあえずそんな能力もあるって考えて
おけ。」

後もう1つだがこの神器、もうすぐで至るぞ。」

至る？至るってまさか

「禁手か！？「ひいああああああああ！！」おおう、ス
リエルも至ったか」

「おう、結構頻繁に使ってたのか心情に劇的な変化があったのかは知らんがこの反応は禁手に近いから間違いないとおもっぞ。つーかスリエルは至ったつーか逝っただろ。」

「ん、確かに頻繁に使ってたな。鍋造ったり、お玉造ったり、フライパン造ったり、服造ったり。心情の変化と言っても猫好きが発覚したりロリ巨乳が素晴らしいと思ったくらいだな。」

はて？どれがあてはまるのやら。

「……………結構くだらねえ事に使ってんなあ、勿体ねえ。まあ良いけどよ。」

何か進展あったら教えてくれや。今度はここまで時間はかからんだろっしょ。

後空間についてだけ、あるって考えながら神器の力を開放してみろ。認識してるのとしてないのは大分違うからな。」

ほう、認識した今なら使えるかもしれんと言っことか。

どれ、試しに

俺は目を閉じ意識を神器に向ける。

ふむ、いつもと同じ俺とは別の、それでいて同じ力の塊があるな。懐かしい感覚がする。当たり前だ、この神器の元は、我なのだか

ら。

さて、今はそんなことよりも空間を開く事が出来るかだ。

確か空間を認識しながら力を開放するだったな。

俺はより一層に集中し神器に力を注ぎ

「はあっ！！」

一気に開放した。

「ぎにやあああああああ！！？
な、なんじゃコレは！？」

黒い何かが目の前にいいいいいい？？」
む、サリエルがしがみついて来た。うむ、おっぱいの感触が俺の胸に当たって心地よい

「いきなりやりやがったな！まあ流石と言ったところか。」
アーちゃんの驚いたような呆れたような声も聞こえる。

どうやら成功したようである。

目を開けてみるとしがみついてもしつかりと前を見るスリエルと興味深く、それをみるアーちゃん。そして黒い、闇より黒くこの世の何よりも黒い裂け目が空間にあった。

何かに惹かれる様に俺は立ち上がり、それに手を伸ばす。

、それに触れると何の抵抗も無く俺の手は埋まっていき理解した。

「のう霸王龍様？何も異変はないのかや？」

スリエルが何も言わない俺に問いかける。ちなみにスリエルは俺に抱き抱えられている。

「問題無い。これは俺が知る物だからな」

「フーちゃんわかるのか！！」

アーちゃんが少々興奮した様に聞く。

「ああ、これは俺、そしてこの星が生まれた空間につながっている。そうだな、始まりの場所とも言っておくか。」

正確には星と俺の意識が生まれた場所だがな。

「マジか！フーちゃんの生まれた場所ってどこにあんだ？次元の狭間か？」

「そうだな。何処にでもあつて何処にも無いな。

何せ始まりの場所だからな。感覚的に言うとな、天界のさらに上であり冥界の最下層よりさらに下であり狭間を越えた先とも言っておくか。」

「とりあえずスゲー場所にあるって訳だ。まあこの世界の生まれた

場所なら納得出来るがな。

「

そういう事である。俺とて神器が無ければ触れるどころか見ることも出来ないのだからな。

「よし、また楽しみが増えた！とりあえず今日は終了！後は好きにしてくれ！」

「わかった。

それはそうとイッセー達は何をしているのだ？リアスさん達はともかくあいつを含めた数名を最近見ないのだが」

「ああ、あいつらは修行中だ。

イッセーならタンニーンに追いかけて回されてんじゃないの？」

ほう！タンニーンが！楽しそうだな。明日にでも行ってみるか。

「それはどうでやっている？」

「行くのか？」

じゃあ後で場所教えるわ。俺は今から調べた結果を纏めるからよ」

「了解した。では俺はひとまず休むとするか。では失礼す
」

部屋を出ようとするとか何か服を引っ張られる感じがして振り向くと

「む？どうしたのだ、スリエルよ。」

スリエルが顔を赤くして服の袖を握っていた。

やばい、持って帰りたい！

この様な事を考えているとスリエルは意を決した様な表情で俺に告げる。

「妾をこの様にして放置するとは何事じゃ。し、しっかり責任を取
つてくれなくては困るのじゃ／＼／＼」

それを聞いた俺の行動は早かった。

「中途半端ではこま、のおおおっ！？」

俺はスリエルを横抱き、いわゆるお姫様抱っこで抱き上げ

「はっはーーーーー！行くぞこらあ！新たな世界に導いてやる
」

走り出す！

まさかスリエルから言ってくれるとはな！ロリ巨乳、味わってくれる！

「は、霸王龍様！？いたい何処に向かっておるのじゃ！
は、速い！景色が見えんじやと！？」

「俺の部屋に決まっている！
後俺のことはフォウルで良い！」

「良いのかや？妾が名前で呼んでも。」

「構わん！むしろ今から抱く女に霸王龍と呼ばれるほうが嫌だ！」

「わ、わかったのじゃ。ふ、フォウル！これで良いかや？」

「ああ！」

では行くぞ！新世界へ！！」

この日、俺の部屋から艶声が止むことは無かったのだった。

「ごちそうさまです！大変美味でございました！」

墮天使登場！ついでに神器調査（後書き）

次の更新は多分正義の味方が四巻を終えてからになると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273u/>

ハイスクールD×D 始まりの龍

2011年9月28日06時32分発行